

アフィリエーション・ネットワーク・モデルを用いた大学同窓会の構造と機能についての定量分析

津曲, 達也

<https://doi.org/10.15017/2534514>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

アフィリエーション・ネットワーク・モデルを用いた
大学同窓会の構造と機能についての定量分析

学籍番号 3GS15014P
氏名 津曲達也

目次

序論	1
1. 研究背景	
2. 大学同窓会に関する先行研究レビュー	
3. 本論文の目的	
4. 本論文の構成	
第1部 大学同窓会誌を情報源としたネットワーク・データ抽出方法の検討	
第1章 序論	10
1.1 研究背景	
1.2 大学同窓会に関する先行研究レビュー	
1.3 定量的なネットワーク分析	
1.4 本研究の対象とする大学同窓会「早稲田大学校友会」	
第2章 大学同窓会誌情報のネットワーク・データへの応用可能性に関する一考察	24
2.1 大学同窓会誌について	
2.2 問題関心	
2.3 対象とする大学同窓会誌『早稲田学報』について	
2.4 『早稲田学報』の雑誌編成分析	
2.5 『早稲田学報』会合記録の内容分析	
2.6 会合記録からのネットワーク・データ抽出の意義	
第3章 「会合記録」からアフィリエーション・ネットワーク・データを抽出する方法の検討	46
3.1 アフィリエーション・ネットワーク	
3.2 会合記録データからの抽出における問題点	
3.3 会合記録からの個人・組織情報抽出に向けて	
3.4 会合記録からのアフィリエーション・ネットワーク・データ生成	
3.5 会合記録からのアフィリエーション・ネットワーク・データ抽出例	
3.6 本手法についてのまとめと今後の課題	
第4章 第1部の総括	58
4.1 第1部の成果のまとめ	
4.2 大学同窓会の定量的なネットワーク分析	
4.3 アフィリエーション・ネットワーク・モデルの拡張	

第2部 大学同窓会の構造と機能についての定量分析	
第5章 序論	63
5.1 研究背景	
5.2 先行研究レビューと第2部の目的	
5.3 早稲田大学創立八十周年記念事業について	
第6章 卒業生の大学への寄付行動の定量分析	70
6.1 導入	
6.2 アフィリエーション・ネットワークとグラフについて	
6.3 アフィリエーション・ネットワーク上の大学関係者と卒業生の位置関係	
6.4 大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動・寄付金額	
6.5 本章のまとめ	
第7章 大学卒業生と大学との紐帯の強さの定式化と定量分析	96
7.1 導入	
7.2 大学同窓会参加者間の紐帯の強さの定式化	
7.3 定量分析に向けた準備	
7.4 大学関係者と卒業生の紐帯の強さの定義と定量分析	
7.5 大学関係者と卒業生の紐帯の強さと寄付行動・寄付金額	
7.6 本章のまとめ	
第8章 第2部の総括	121
結論	135
1. 研究成果のまとめ	
2. 今後の課題	
参考文献	138
資料	
資料1 大学および大学同窓会、大学同窓会誌一覧	
資料2 雑誌編成分析の各コードの具体的な内容	
資料3 アフィリエーション・ネットワーク・データ抽出 (R言語)	

序論

1. 研究背景

近年、日本の大学を取り巻く状況が変化し、大学が大学同窓会に注目する動きが強まってきた。

少子化が進み、国内における大学進学者の減少が見込まれ、また、グローバル化や国内における大学の増加を原因として、国境を越えた大学間の学生獲得競争が行われるといったこともあり、大学進学者の減少が大学経営に直接影響を与えようとしている。また、独立法人化により国立大学は国からの援助が減少しており、私立大学においても私立大学等経常費補助金予算額は減少し続けている。これに加えて、私立大学では経常的経費が増大しており、このため、最高で大学予算の30%を支えていた補助率は10%にまで減少している。これらの事情によって大学の経営環境は悪化している。

これらの事情を背景として、独立法人化以降、全学同窓会を設置する国立大学が増加しており(高田 2014)、また、インターネットを利用した卒業生間、加えて現役の学生、教職員、スタッフのネットワーキングを支援するシステムの開発(Hongmei, Edward and Lakshmi 2012)が進められるなど、大学は卒業生のネットワークの維持や発展させる方法を模索している。この理由としては、資金援助や在学生への学習・就職支援、地域事業への関与(原 2016; 大川ほか 2015)といった面で大学が大学同窓会への期待を高めており、これらを実現するためには濃密なネットワークが重要であると考えられているためである(喜多村 1990)。

従って、大学同窓会のネットワークがどのようなものであるか理解すべきであろうが、これまでの理解は関係が希薄になっていると逸話的に語られてきた程度であり、実証的には研究されてこなかった。大学同窓会にはクラス、学年、地域、職業など共通する属性を基盤とした様々な団体が存在する(矢澤 1990; 磯崎 1990)が、こうした多様な団体からなる大学同窓会がどのようなネットワーク構造を持つものかは、厳密なレベルではほとんどわかっていないのが現状である。

大学同窓会とは卒業生個々の主体的な行動によってつくられるネットワークである。大学同窓会に対する期待を現実化していくためには、ネットワークとしての大学同窓会の構造や機能を緻密に理解することが望まれ、そのためには、人々(卒業生)のミクロな視点での行動に着目し、ネットワークの構造やダイナミクスを定量的に記述していくことが必要である。またそのことは、大学同窓会の維持や発展に向けた課題解決への手掛かりを得ることも可能にすると考えられる。

大学同窓会のネットワークを定量的に理解していくことはその振る舞いを明らかにしていくために重要であろうが、上で述べたように、従来は直感的で、逸話的にしか語られなかったのであった。何故だろうか。理由は2つのことが考えられる。一つは、大学同窓会が最近まで研究対象とみなされていなかったことによる。日本の大学同窓会は明治時代から存在しているにもかかわらず、社会学などの研究で着目されやすいのは、卒業生のキャリアパ

スや地域との関係などの文化資本を蓄積した卒業生らの動向であった。また、大学同窓会が、大学から軽視されていたこともある。大学同窓会は、大学設立初期である明治期・大正期において大学を社会的・財政的に支える存在であった。それが、学生増加による大学の経営安定と共に大学から重視されなくなったのである（天野 2000）。そうした理由から大学同窓会への注目度が低くなり、研究の対象になりにくいという状況があった。

また仮に研究対象にした場合でも、次の障壁によってその進行が妨げられることになる。すなわち、日本の大学同窓会は、個人情報保護の関係で、その内部の会員にまで立ち入った調査研究は極めて困難なことである。研究者は社会調査の住民基本台帳と同様の働きをする会員名簿など、大学同窓会や卒業生の調査するために必要な個人情報を研究目的で利用することができない。そのため、大学同窓会の内部に立ち入ってその活動や参加者らのミクロな行動の観察、もしくは会員を対象としたアンケート調査を行うことが難しい。

これら2つの理由もあり、大学同窓会のネットワークについての理解は表層的なレベルに留まっていたものと考えられる。しかしながら、近年は大学同窓会への注目度は高くなっており、そのネットワーク構造の深い理解が望まれている。ただし、これまで、大学同窓会のネットワークを定量的に観察する方法が存在しなかった。大学同窓会の理解を深めるには、大学同窓会のネットワークを定量的に観察する方法を検討する必要がある。この方法が確立されることで、実際に大学同窓会のネットワークがどのような構造になっているのか、さらにそれと大学の期待との関係を明らかにしていくことが可能となる。

以上、大学同窓会のネットワーク研究には2つの研究課題が存在している。第1の課題は、これまで逸話的に語られてきた大学同窓会のネットワーク構造やネットワーク構造と卒業生の行動の関連を定量的なレベルで明らかにすることである。そして第2の課題は、第1の課題を達成するために、大学同窓会ネットワークを定量的に観察する新たな一般的方法を開発することである。

2. 大学同窓会に関する先行研究レビュー

2.1 大学同窓会ネットワークに関する先行研究

天野（2000）によれば、日本の大学同窓会は、大学創立と同時期である明治初期に卒業生の親睦を深めることを目的に結成された。しかしながら当時の大学の多くは、国によって地位を保証されていた旧帝国大学を除き、社会的地位や経営基盤が確立していない状況にあった。当時の大学の資金源は授業料のみであったことから、大学同窓会は主に資金面を中心にそれを支えるために存在していた。大学の社会的ないし経営的基盤を確立していくために「闘う」同窓会であった。大学を支援するための集団として、一橋大学の如水会のように、他大学との合併という大学存亡の危機がきっかけとなって、大学同窓会が結成された事例もある（酒井 2011）。この時代の大学同窓会は大学の成長と発展に向け、大学と密接な関係にあった。

創立初期である明治時代から大正時代にかけて、大学同窓会はその役割から4つに分類

される（天野 2000）。4つの役割とは

- ・ 支援団体としての役割、
- ・ 設置運営主体としての役割、
- ・ 専門家ないし同業者団体としての役割、
- ・ 啓蒙団体や学術団体としての役割

である。特に専門家ないし同業者団体としての役割と啓蒙団体や学術団体としての役割の2つを通じて、同じ職業・分野に進んだ卒業生のネットワークが形成されていた。しかし、原（2016）は「校友会は、多様な卒業生が集う人脈形成の場で」（原 2016：169）あり、様々な職業・分野の人々がネットワークも形成していたことを指摘している。また、原は加えてこのような卒業生の団結の背後に大学側が同窓会運営・活動に協力や校友会事務所の場所の提供があったことを明らかにした。すなわち、創立期では、同窓会によって職業やその分野の視点からネットワークの様相に違いがあること、またその維持に大学が関与していることから大学同窓会に参加することは同時に大学と関係を持ちやすかったといえる。

このような創立期の大学同窓会と大学の関係は、大正7年の大学令の発令によって転機が訪れる（天野 2000）。大学令によって、当時専門学校であったどの大学にも「正規の大学」への道が開かれることになった。ただし、「正規の大学」と認められるためには莫大な資金が必要であった。必要資金は大学同窓会の支えだけでは不十分であったため、大学はこの必要な資金獲得のために学生増加の手段をとった。大学にとって学生の増加は資金獲得のための唯一の手段ではあった。しかし、この選択により、大学と大学同窓会との関係や卒業生間の関係は疎遠となっていった。この原因として、学生の増加に伴う卒業生の増加を天野は指摘する。

戦後、大学は進学率の上昇、官立大学の合併を経て、大学の社会的地位や経営基盤が安定した。大学同窓会の支援が必要ではなくなった大学にとっての大学同窓会は、卒業生に交流の場を提供することが目的となった。このような流れから、卒業生間の親睦を主とする団体へと性質が変化していった。その後、進学率の上昇による卒業生の増加により、さらに卒業生同士の絆、卒業生と母校との絆は弱まっていくこととなる¹⁾。また、東京学芸大学の同窓会のように同窓会への参加資格が卒業後教員になった卒業生のみであるという状況もあった（腰越・池田 2006）。

近年では、関係の希薄化の認識をふまえ、特に国立大学では、独立法人化後、大学の取り組みとして大学同窓会の設立が進められている（高田 2014）。こうした動きは、これまで卒業生に対し何もしてこなかった大学の反省であり、大学と卒業生のつながりや卒業生間のつながりの維持・発展のための事業が行わるようになった（大川ほか 2015）。こうした動きの根底には、卒業生に対する期待としての資金援助や在学生への学習・就職支援、地域事業への関与など、卒業生の密なつながりが重要であるとの大学の認識が背景にある。

2.2 卒業生の行動に関する研究（寄付行動）

大学の卒業生に対する期待として資金援助や在学生への学習・就職支援、地域事業への関与がある。この中で、卒業生の行動に関する研究として、海外の研究では卒業生の寄付行動の研究が盛んである。

卒業生の大学へ寄付する割合は30%から40%である（Holmes 2009）が、大学に集まる寄付金額の大半は、1%の割合の卒業生である（Clotfelter 2001）ことが知られている。Hoyt（2004）によれば、卒業生の寄付行動の要因に関する分析は、5つの視点（1. 心理的要因、2. 教育・雇用、3. 大学参加・寄付勧誘、4. 外部環境、5. 人口統計）から行われている。3以外の視点に関しては第2部5章にて詳細を述べることにして、ここでは、ネットワークに関する「3. 参加・寄付勧誘」について確認しておきたい。これについては、次のような結果が得られている。

卒業後、大学に卒業生として関わっている卒業生は寄付率が高く、寄付金額も高い（Taylor and Martin 1995）。また、卒業生が学生との交流を持つことにより、卒業生が大学への寄付に協力的になりやすいことを Singer and Hughey（2002）が指摘している。卒業生とのコミュニケーションツールとして、Facebookなどのソーシャルネットワーク、手紙や大学同窓会誌を発行することは卒業生の寄付意欲を高める（Lertputtarak and Supitchayangkool 2013）。さらに、大学同窓会誌など、卒業生の出版物を読んでいることも寄付率を高める要因となる（Taylor and Martin 1995）。

同窓会会員である卒業生は寄付率が高く、寄付金額が高い。同窓会会員の中でも終身会員は特に寄付率、寄付金額ともに高かった（Newman 2009）。同窓会への参加行動に着目すると、同窓会へ一度でも参加している人は寄付率が高い（Holmes 2009）。同窓会団体に着目すると、クラス同窓会に着目した Willemain, Goyal, Van and Thukral（1994）は25年目、50年目といった節目に寄付の規模、寄付率が高くなることを明らかにしている。

寄付勧誘では、寄付募集が計画的である場合は卒業生の寄付率は高くなるが、目標金額の設定によって寄付率が変化することはない（Harrison, Mitchell and Peterson 1995）。

「3. 参加・寄付勧誘」の視点での卒業生の寄付行動については、以上の結果が先行研究において得られている。ネットワーク以外の要因も見られるが、これらの研究結果から、ネットワークも卒業生の寄付行動に関係ある要因の1つとなっていることがわかる。なお、これらの研究で調査されたネットワークは、卒業生らの主観に基づいたデータであったことに注意しておく。このため、これらの調査範囲は直接的な関係のみに限定されている。またそれに加えて、被調査者への質問は関係の有無の2択を尋ねるだけで、人々のミクロな関係や関係の強度までは観察出来ていなかった。この点が、これらの調査の課題である。

2.3 先行研究における大学同窓会の調査方法について

卒業生個人への調査において、最も有効な方法は大学による電話調査である（Pearson 1999）。出身大学による調査であることを被調査者にあらかじめ伝えることが前提条件とな

る。そうすることで、伝えない場合よりも多くの被調査者からの回答が期待され、回答への偏りが低減できる。しかし、一般の研究者の場合、こうした調査は難しい。また仮に出身大学の研究者であっても、研究者という立場では調査にかなりの困難が伴うことが予想される。

先行研究においては、卒業生や大学同窓会について他にどのような調査方法を用いられていたのか確認しておきたい。

海外の研究で主流の調査方法は卒業生個人へのアンケート調査、大学のデータベースの利用である (Holmes 2009)。日本では、IRなどで大学同窓会や卒業生を対象としたアンケート調査が行われており、腰越・池田 (2006) が卒業生個人を対象としたアンケートを利用して分析を行っている。日本では卒業生個人を対象として分析できた研究は腰越・池田のみである。卒業生個人は難しいが、大学同窓会を対象としたアンケート調査であれば日本でも研究が行われている (大川ほか 2012; 高田 2015)。ただし、回答者は大学同窓会の同窓会事務局である。海外のような大学のデータベースの利用も個人情報保護の観点から日本では難しく、またアンケートによる調査も会員情報が利用することができず、卒業生個人を対象とした調査に限界があるのが現状である。

大学同窓会内の様子を知るために、日本では資料調査が方法として採用されている。例えば、大学の中期目標・中期計画 (高田 2012)、会員名簿 (大森 2014; 高木・森 2015; 井上 2008)、大学同窓会の定款 (天野 2000) が用いられる。これらは利用範囲 (時期) が限られており、分析可能な時期が限定されたものとなる。

この他に入手可能な資料として大学同窓会誌がある。

戸村 (2011a; 2011b) は、慶應義塾大学同窓会の三田会が出版する『三田評論』、早稲田大学校友会が出版する『早稲田学報』に掲載されている財務資料と寄附者名簿を参照し、経営学的な視点から寄附と大学経営との関係や寄附申込者の全体的・個別的な特徴を明らかにしている。また、大川 (2015) や原 (2016) は研究対象期間における大学同窓会誌やホームページ内で大学同窓会の状況に関して会合中に言及した個人の言説を引用し、大学同窓会の様相やネットワークについて定性的に分析し、考察を行っている。さらに、原 (2016) は大学同窓会の活動についてもホームページから情報を得ている。同窓会内だけでなく、地域との関係を分析するために大学同窓会誌が利用される場合がある。岡本 (2013) は東アジアの地域で行われた同窓会活動記録を整理し、日本と東アジアの地域の交流について考察を行っている。さらには個人の記述に着目し、国家間の交流を分析した研究がある。佐藤 (2016) は中国の大学の大学同窓会誌の個人 (相田秀方氏) の記述に着目し、戦時および戦後直後の日中の卒業生の関係の分析及び考察を行った。

大学同窓会誌には、卒業生個人に関する情報が重要視され掲載されているが、大学のニュース等についても掲載されている (Shaw 1922)。情報収集や読み物として発行されているものであり、大学同窓会誌は研究目的として編集された雑誌ではない。しかし、大学同窓会誌は大学同窓会の実態を表す一次資料 (原 2016) として貴重であり、アンケート調査など

が難しい日本の大学同窓会研究において大学同窓会誌は貴重な情報源であるといえるだろう。しかしながら、大学同窓会のネットワーク研究の視点で大学同窓会誌に着目した研究は現在までに存在していない。調査目的で編集されたものでない資料（大学同窓会誌）から、ネットワーク研究に向けて具体的にどのような情報を読み取ることができるかはまだ何も明らかにされていない。

3. 本論文の目的

大学同窓会のネットワークに関する先行研究では、日本国内においては定性的なものがほとんどであった。また、海外の研究においても調査されるネットワークは、被調査者への質問が関係の有無の2択を尋ねるだけで、人々のミクロな関係の観察、さらには関係（つながり）の強さまで調査した研究は見当たらない。

卒業生の中には異なる複数の同窓会の会合に参加することがある（志垣 2011）。そうした人物の存在が、同一同窓会内だけでなく異なる同窓会間において人々の間接的な関係を生成している。事実、中国での大学同窓会にて戦時および戦後すぐの日中の卒業生間の橋渡しとして、相田秀方氏が貢献していたことが発見されている（佐藤 2016）。こうした事実を考慮すると従来の調査のように卒業生の主観的なネットワークのみならず、大学同窓会内の人々のミクロな関係を定量的に観察する必要がある。このため本研究は、大学同窓会内のミクロな動きに着目し、大学同窓会のネットワーク構造、そしてその構造と卒業生の行動との関連について定量的に明らかにすることを目的とする。特に、大学同窓会研究において関心の高い、大学同窓会のネットワークとして大学関係者と卒業生の関係を、そして卒業生の行動として寄付行動を明らかにする。

本論文では具体事例として1960年代の早稲田大学同窓会を扱う。この時期、1960年代は大学大衆化の過渡期にあった。この時期は、天野（2000）が指摘したように、大学と卒業生、卒業生間の関係は希薄となり、大学同窓会は親睦団体としての性質を持っていた。本研究の観察対象とした早稲田大学は、当時の卒業生が20万人であり、1961年から1967年にかけて、法人や卒業生等に対し20億円規模の寄付事業を計画し（『早稲田学報』1961年1月号）、それを達成している（『早稲田学報』1967年4月号；井原 2006）。現在の大学同窓会と類似の性質を持ち、大学と卒業生との関係もすでに希薄となっていた時期に、計画した募金を達成した早稲田大学の同窓会は、卒業生による資金援助を考えていく上でのモデルケースとして興味深い調査対象である。

上記目的を達成するためには、方法論として大学同窓会のネットワークを定量的に分析する方法を開発する必要がある。これまでわが国において大学同窓会のネットワークの定量的な分析を行った研究は見当たらない。理由は、定量的な分析が必要でなかったのではなく、先に触れたように、個人情報保護の関係もあり、同窓会の外部に位置する研究者が同窓会の内部に入ってアンケートやインタビュー調査を組織的に行うことができず、定量的なネットワーク・データを収集する方法がなかったからである。この難点から抜け出るには、

外部に公開されている情報だけを頼りに必要なデータを構築していく (Keith and Gary 2007) 方法を見出す必要がある。本論文では公開されている大学同窓会誌に着目した。

大学同窓会誌は、大学同窓会や卒業生に関して知る上で1次資料となる。しかし、2.3で述べたように、基本的に研究を志向して編集されてきたものでもない大学同窓会誌の中に具体的にどのような情報が掲載されているか、組織的に分析されたことはない。従って、大学同窓会誌において、大学同窓会や卒業生についてどういった情報が掲載されているのか組織的にかつ綿密な調査が必要である。調査の結果、大学同窓会誌からネットワーク・データに必要な情報が抽出できることが明らかになれば、従来困難であった大学同窓会ネットワークの定量研究という新たな道を研究者一般に開くことができるはずである。この実現のために、本論文のもう1つの目的は、大学同窓会ネットワークの定量的研究を実現するために、一般公開されている大学同窓会誌に着目し、これから定量的なネットワーク・データを抽出する方法を確立することである。

4. 本論文の構成

本論文では、2つの目的をもつため、2部構成とする。

第1部では、大学同窓会ネットワークの定量的研究を実現するため、大学同窓会誌から定量的なネットワーク・データを抽出する方法を検討する。

第1部2章で、大学同窓会誌に具体的に大学同窓会や卒業生についてどのような情報が掲載されているのか明らかにし、定量的なネットワーク・データとしての応用可能性を検討する。

第1部3章では、大学同窓会誌から得られる情報を用いたネットワーク・データの抽出方法を議論し、大学同窓会のネットワークを定量的に観察する方法を提案する。詳細は第1部3章で述べるが、提案する方法は、アフィリエーション・ネットワーク (金光 2003; Breiger 1974) のモデルを用い、同窓会の会合への参加行動を情報源とした精度の高いネットワーク・データを抽出するものである。

第2部では、第1部によって得られた方法を用いて、1960年代の早稲田大学の同窓会を事例に、大学同窓会のネットワーク構造および、その構造と卒業生の行動との関連を検討する。

第2部6章では、アフィリエーション・ネットワーク上における大学関係者と卒業生の位置関係に注目して分析した結果を述べる。大学関係者と卒業生との直接的、間接的つながりの全てを抽出し、関係の距離に応じて両者の位置関係を分類し、位置関係と卒業生の寄付行動の関連を明らかにする。具体的には、早稲田大学の創立八十周年記念事業が行われた最初の年である1961年を対象とする。

第2部7章では、第1部で得られた会合への参加行動から得られるアフィリエーション・ネットワークと Granovetter (1973)の紐帯の強さの概念を用いた大学と卒業生の関係に着目する。具体的には、アフィリエーション・ネットワーク上の大学関係者と卒業生の会合が

行われた時点を加味した両者のつながり（＝紐帯の強さ）を定量化し、その紐帯の強さの推移および値と卒業生の寄付行動との関係を明らかにする。具体的な分析は、長期にわたり大学同窓会誌の会合記録が欠損なく掲載されていた1960年代の早稲田大学の一同窓会を対象にする。

【注】

- 1) ただし、卒業生間、卒業生と大学の関係が希薄となったという天野（2000）の指摘は大学、卒業生間のネットワークを実際に調査して観察されたものではなく、卒業生の増加、大学の経営安定化の状況から推測したものである。

第1部 大学同窓会誌を情報源としたネットワーク・データ抽出方法の検討

第1章 序論

1.1 研究背景

近年、大学同窓会が注目されてきている。

同窓会というと、同じ学校を卒業した人々が当時を振り返るために集まるイベント的な懇親会を思い浮かべるであろう。しかし、同窓会とは、一過性の会合だけでなく、同じ学校を卒業した人たちが何らかの意図をもって組織する団体も該当する(天野 2000)。例えば、そうした団体としては、同じ大学を卒業して同業種(ホテル業とか金融業とか)となった卒業生が集まって作る団体などがそれにあたる。本論文は、大学の卒業生が集まって組織する恒常的な「団体・組織」(江原 2009) = 大学同窓会を対象とし、これまで知られていなかった大学同窓会のネットワーク構造を研究対象としたものである。

同窓会が生まれたのはアメリカやカナダであった。これらの国では、卒業生・同窓生のことをラテン語 *alumnus* の複数形から転じた、*Alumni* と呼んでいる(喜多村 1990)。これは、もともと里子のことを意味していたが、その後、ある機関や学校に在籍していた生徒を意味するようになった。同窓会は *Alumni Association* と表現される。一方、日本においては大学同窓会の名称は統一されていない。校友会という名称が使用されたり、また上智大学ではソフィア会と独自の名称で呼ばれているなど、大学同窓会やその下位の同窓会団体によって名称は様々である。

日本における大学同窓会は、現状において不透明な団体である。その理由は2つ挙げられる。一つは、大学同窓会が最近まで研究対象とみなされていなかったことによる。研究において着目されやすいのはキャリアパスや地域との関係などの文化資本を蓄積した卒業生らの動向であって、大学同窓会の団体そのものではなかった。大学同窓会は、大学設立初期である明治期・大正期において大学を支える存在であったが、大学の経営安定化と共に大学から軽視されるようになっていた(天野 2000)。そうしたこともあり大学同窓会は研究の対象とにくかった。またもう一つの理由は、日本の大学同窓会はその内部の会員にまで立ち入った調査が困難なことにある。大学同窓会は、大学同窓会が運営するホームページや大学同窓会がテーマとなった雑誌で紹介されていることから、クラス、学年、地域など共通する属性を基盤とした様々な同窓会が存在することを表面的には把握できる。しかし、その内部に立ち入って大学同窓会の活動や参加者らのミクロな行動の観察、もしくは会員を対象としたアンケート調査することはできない。なぜなら、研究者は社会調査の住民基本台帳と同様の働きをする会員名簿など、調査するために必要な個人情報を利用することができないからである¹⁾。高校同窓会は黄(2007)や永井(2009)らが会員への調査を行っているが、大学においてはその前例はない。なお、永井の調査については会員への調査において同窓会についてではなく、地域とのかかわりが目的であったことを追記しておく。

ところが近年になって、日本の大学を取り巻く現状が変わってきた。少子化が進み国内での大学進学者の減少が見込まれ、また、グローバル化や国内における大学の増加を原因とし

て、国境を越えた大学間の学生獲得競争が行われるといったこともあり、大学進学者の減少が大学経営に直接影響を与えようとしている。また、独立法人化により国立大学は国からの援助が減少しており、私立大学においても私立大学等経常費補助金予算額は減少し続けている。これに加えて、私立大学では経常的経費が増大しており、このため、最高で大学予算の30%を支えていた補助率は10%にまで減少している。このような状況のもと大学の経営環境の悪化が指摘されている。これらの状況変化を背景に、大学は、大学同窓会への意識を改め、独立法人化以降、全学同窓会を設立する国立大学が増えている（高田 2014）。大学の経営を支えるための存在として、学校・大学教育の向上といった理由から、卒業生に対する寄付戦略などの大学行政の分野において注目を帯びはじめたのである。2018年に文部科学省に認可されている大学における同窓会設置状況は、筆者の調査によれば、図1-1に示すとおりであり、国立大学では86校中86校、私立大学では603校中566校、公立大学では89校中84校に何らかの同窓会がある。ほぼすべての大学に同窓会が存在している。

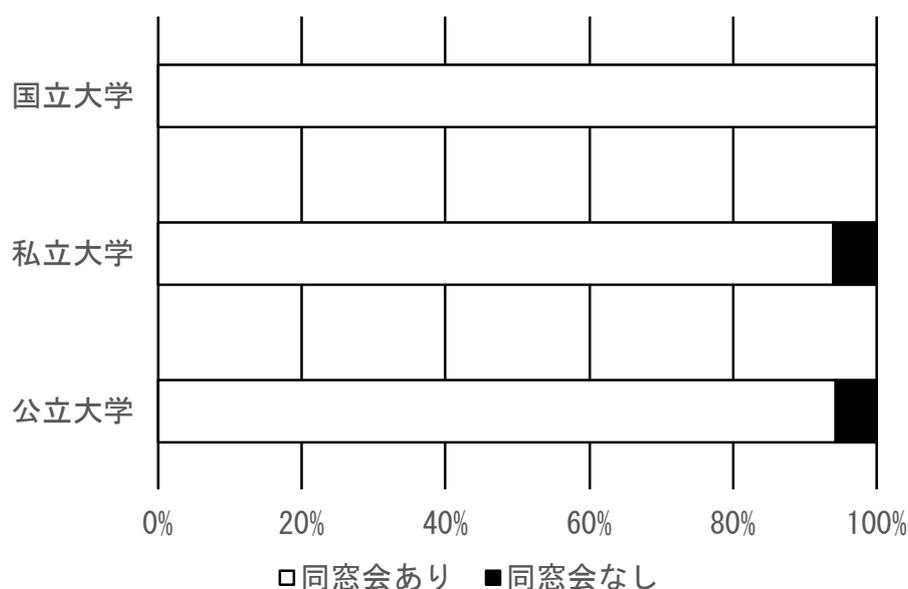


図 1-1 全国大学の同窓会設立状況（2018年時点）

現在、インターネットを利用した卒業生間、加えて現役の学生、教職員、スタッフのネットワークキングを支援するシステムの開発（Hongmei, Edward and Lakshmi 2012）が進められているなど、大学は卒業生のネットワークの維持や発展させる方法を常に模索している。この理由としては、資金援助や在学生への学習・就職支援、地域事業への関与（原 2016；大川ほか 2015）といった面で大学同窓会への期待を高めており、これらを実現するためには密なネットワークが重要であると考えられているためである（喜多村 1990）。

しかしながら、卒業生のどのようなネットワークが、例えば大学の期待にそれがどのよう

に影響を与えているのか、定量的な研究はほとんどない。ひとつの理由として、個人情報保護の問題で、外部者が大学同窓会研究のために同窓会の内部データを入手することが極めて困難なことがある。そうしたこともあって、これまで、大学同窓会のネットワークは質的な理解に留まっていた。実際に大学同窓会がどのような構造になっているのか、さらにそれと大学の期待との関係を明らかにしていくには、ネットワークの定量的観察が必要となる。しかしながら、現状ではそのための方法が確立されていない。

ここで、大学同窓会のネットワークは、大学の経営の理由以外にも以下の3点で大学同窓会のネットワークは興味深い研究対象であることを述べておきたい。そのひとつは、大学同窓会は卒業生の自発的な参加によって成立する団体である。また、大学同窓会はその活動費を卒業生の会費に大きく依存する (Newman and Petrosko 2011) ため、大学同窓会は設立後も大学同窓会に多くの卒業生を集めるためにはどうすればよいか、関心を持ってもらうためにはどうすればよいかといった問題が継続的に議論されている。大学同窓会とは、こうした議論などを含め継続した努力によって存在を維持してきた団体であり、人々の行動に基づく社会ネットワークである。研究の視点から見ても純粋に興味深い対象である。第2に、大学同窓会には、クラス、学年のみならず、部活、サークル、地域や企業、職種などを基盤としたさまざまな団体がある (矢澤 1990; 磯崎 1990)。クラス、学年、部活、サークルと異なり、地域、企業、職種に関しては卒業後得た属性を共通点としている。多様な同窓会が多様な個人のつながりを実現している点で興味深い。第3に、同窓会は同窓会会員のみならず、会員でない人々も活動に参加し、ネットワークを築いているという点である。高校の同窓会については、卒業生でない人々とも同窓会を通じてつながり、活動を行っていることが知られている (黄 2007)。大学同窓会でも同様のことが想定されることから、どのような社会とつながっているのか、またそれはどのような関係であるのか興味深い。

大学同窓会とは、自発的な参加で作られる人々の行動に基づく社会ネットワークである。これまでそれについては定性的な理解にとどまっていた。大学同窓会ネットワークを定量的に理解するための方法論が必要である。

1.2 大学同窓会のデータ収集に関する先行研究レビュー

大学同窓会について国内外でこれまでどのような研究があるのかレビューし、それらの先行研究と1.1で述べた大学同窓会に対する近年の興味とを踏まえ、本論文第1部における研究目的を述べる。

Pearson(1999)によれば卒業生個人の調査で最も有効な方法は、大学による電話調査である。出身大学による調査であることを被調査者にあらかじめ伝えることが条件となるが、伝えない場合よりも多くの回答が期待される。この方法は、被調査者の回答への偏りも無視できるため、効果的であると Pearson は主張している。日本でも IR などの分野で大学同窓会や卒業生を対象としてアンケート調査が行われており、腰越・池田 (2006) は所属大学が実施した卒業生を対象としたアンケートを利用して分析を行っている。ただし、調査内容は研

研究者が設計したものではないため、分析にかなりの制約がある。日本では腰越・池田(2006)を除き、卒業生個人を対象としたアンケート調査による研究はほぼみられない。ただし、海外では卒業生研究が盛んなこと(江原 2009)もあり、海外においてはアンケート調査や大学のデータベースの提供をうけて研究が行われている(Holmes 2009)。

同窓会組織を対象とした調査では、大川ほか(2012)や高田(2015)は大学同窓会事務局を対象にアンケート調査を行っている。この調査で、彼らは、同窓会事務局が認識している大学同窓会についての情報を得ている。しかしながら、数が増えつつある同窓会を同窓会事務局が把握することは難しく(金子 1990)、卒業生 1 人ひとりについての情報入手は困難であり、この調査は本論文の目的であるネットワークの分析には不向きである。

卒業生個人を対象とするとき、調査対象者を抽出するためには、会員名簿のような卒業生のデータベース(社会調査においては住民基本台帳のようなデータベース)が必要となるだろう。このデータベースは、前述した通り、大学外の研究者が利用できないため、卒業生を対象とした外部研究者によるアンケート調査は不可能である。大学が実施したアンケートを利用することも考えられるが、この場合もその大学に所属していない研究者が利用することは困難であり、調査の実現は難しい。

インタビュー調査についても同様である。大川ほか(2015)は大学同窓会事務局にてインタビューを行っている。しかしその調査で卒業生 1 人ひとりからの情報が得られるわけではない。そうした中、ジャーナリストの田中(2017)が、慶應義塾大学の同窓会である三田会の会長や会員へのインタビューを行い、同窓会内部に入り、三田会の実態を探った興味深い報告がある。しかしながら、それは同窓会の構造を解明するための組織的な研究活動を目的としたものではなく、ジャーナリスト的視点で一般向けの記事を提供するのに留まっている。

大学同窓会の構造を明らかにしていくには、ネットワーク内で様々な位置にいる卒業生個人々人を対象にした観察が必要である。しかしながら、そのためにはアンケート調査のための基礎資料としての大学同窓会会員名簿が必要となる。先の述べた通り、名簿入手は一般には不可能であり、この方法での調査は難しい。調査者の足で地道に対象者を探し、調査することも考えられるが、許容できないほどの時間を要するものと思われる。他の手段を考える必要がある。

他の手段として、資料調査という可能性が考えられる。わが国の大学同窓会においては、大学や大学同窓会の関係、大学同窓会内の人々の関係を質的に明らかにできる資料がいくつ也存在する。

例えば、高田(2012)は国立大学の中期目標・中期計画に着目した。中期計画は第 1 期、第 2 期があり、これに記載されている同窓会の項目数、および項目内容を分析した。その結果、独立法人化後の国立大学で組織された大学同窓会は、より積極的に大学運営に位置付けられていることが明らかにしている。また、同資料から、国立大学の同窓会に期待する活動分野が、学生への支援から国際交流、運営体制の見直し、財務支援に変化していることも明

らかにした。これは、大学運営の視点からみた大学の大学同窓会とのかかわりを明らかにするうえで有用な資料である。また、天野（2000）は、大学同窓会の定款を用いて、その設立目的や性質の分析を行っている。ただ、これらの調査・分析は、組織的な視点からみたものであり、卒業生個々のミクロな動きまで観察したものではない。

ところで、会員名簿を利用した研究も存在する。大森（2014）は大正期の早稲田大学の会員名簿を利用して地方出身者が就職する地域を観察している。早稲田大学の図書館では、高木・森（2015）が早稲田大学の清国の留学生について『早稲田学報』や『早稲田大学中国留学生同窓録』をもとに入学・卒業時の進路や、どの学科に在籍していたかなどの資料作りが行われている。高校の同窓会では、井上（2008）が明治期の高学歴の女子高等学校においてどのような職業の卒業生が同窓会会員になっているかについて『学籍簿』と『学級台帳』を用いて分析を行った。こうした研究が可能だったのは、対象時期が明治・大正期だからである。大学同窓会の会員名簿は、ある一定の期間を経て更新され、そのたびに新しい名簿が出版される。不要となった古いものは全て破棄されるわけではなく、記録として保存され公開されている場合がある。国立図書館デジタルコレクション²⁾の早稲田大学校友会の会員名簿をみると、閲覧可能なものは大正4年、大正14年、昭和2年、昭和3年、昭和10年の5冊であり、2019年現在において閲覧可能なものは80年以上も前のものに限られる。昭和2年の会員名簿には、定款（同窓会規則）、同窓会支部役員氏名、会員氏名、職業、現住所が掲載されており、これらを活用した分析であれば可能である。

会員名簿は、分析目的での利用範囲（時期）はかなり限定されている。そこで着目されたのが大学同窓会誌である。戸村（2011a; 2011b）は、慶應義塾大学同窓会の三田会が出版する『三田評論』、早稲田大学校友会が出版する『早稲田学報』に掲載されている財務資料と寄附者名簿を参照し、経営学的な視点から寄附と大学経営との関係や寄附申込者の全体的・個別的な特徴を明らかにしている。また、大川（2015）や原（2016）は研究対象期間における大学同窓会誌やホームページ内で大学同窓会の状況に関して会合中に言及した個人の言説を引用し、大学同窓会の様相やネットワークについて定性的に分析し、考察を行っている。さらに、原（2016）は大学同窓会の活動についてもホームページから情報を得ている。同窓会内だけでなく、地域との関係を分析するために大学同窓会誌が利用される場合がある。岡本（2013）は東アジアの地域で行われた同窓会活動記録を整理し、日本と東アジアの地域の交流について考察を行っている。さらには個人の記述に着目し、国家間の交流を分析した研究がある。佐藤（2016）は中国の大学の大学同窓会誌の個人（相田秀方氏）の記述に着目し、戦時および戦後直後の日中の卒業生の関係の分析及び考察を行った。

以上述べた先行研究にて、大学同窓会が調査・分析されてきたが、それらの多くで、大学同窓会の発展や卒業生の行動の要因として、ネットワークの重要性が指摘されている。その観察の必要性が当然のように語られてきた卒業生のネットワークであるが、これまでの研究のほとんどは人々の言説を活用した定性的な理解にとどまっていた。大学同窓会のネットワークの性質をとらえるためには、定量的にネットワークを把握し、卒業生の行動と結び

つけ分析する必要がある。しかし、これまでわが国において大学同窓会のネットワークの定量的な分析は見当たらない。その理由は、定量的な分析が必要でなかったのではなく、先にも触れたように、個人情報保護の関係もあり、同窓会の外部に位置する研究者が同窓会の内部に入ってアンケートやインタビュー調査を組織的に行うことができず、定量的なネットワーク・データを収集する方法がなかったからである。この難点から抜け出るには、外部に公開されている情報だけを頼りに必要なデータを構築していく (Keith and Gary 2007) 方法を見出す必要がある。

そこで改めて注目したのが、大学同窓会の公開情報のひとつである大学同窓会誌である。例えば、早稲田大学だと『早稲田学報』、慶應大学では『三田評論』といった大学同窓会誌があり、これらは、大学同窓会の外側に位置する研究者であっても、大学同窓会の動きを知るための貴重な情報源である。これは、先行研究でも着目はされていたのであるが、大学同窓会のネットワーク研究に向けたデータとしての価値はこれまで見逃されてきた。大学同窓会誌は、卒業生個々人の情報や大学に関する情報が掲載されており、そして定期的に発行されており (Shaw 1922)、定量的なネットワーク分析のための貴重な情報源となり得る。

大学同窓会誌は卒業生に対し、大学や同窓会、卒業生の情報を共有するために発行されており、大学同窓会の歴史とともにある。そのことから、大学同窓会誌は大学同窓会の実態を表す一次資料 (原 2016) と指摘されている。しかしながら、同窓会誌は研究目的に編纂されたものではないため、そこから、大学同窓会研究に向けてどのような情報を読み取ることができるかについてはこれまでまだ誰も明らかにしていない。大学同窓会誌が、大学同窓会や卒業生に関して掲載していた情報について正確な調査が必要である。調査の結果、大学同窓会誌からネットワーク・データに必要な情報が抽出できることが明らかになれば、従来困難であった大学同窓会ネットワークの定量研究という新たな道を切り開くことができる。

本論文第 1 部の目的は、大学同窓会ネットワークの定量的研究を実現するために、一般公開されている大学同窓会誌に着目し、この記録資料から定量的なネットワーク・データを抽出する方法を確立することである。第 1 部 2 章で、大学同窓会誌に大学同窓会や卒業生についてどのような情報が掲載されているのかを明らかにし、定量的なネットワーク・データとしての応用可能性を検討する。そして、第 1 部 3 章で、大学同窓会誌から得られる情報を用いたネットワーク・データ抽出方法を議論し、大学同窓会のネットワークを定量的に観察する方法を提案する。

1.3 定量的なネットワーク分析

1.3.1 定量的なネットワーク表現

ネットワークを定量的に分析する方法として社会ネットワーク分析がある。社会ネットワーク分析とは、「社会行為を行う複数の行為者の「関係」を定量的に測定し、数値としてとらえた行為者間の関係とその特徴から、個々の行為を分析しようとするアプローチであ

る」(安田 1994; 32)。行為者は人に限定されず、組織もあるだろう。行為者を設定し、いかに行為者間の関係をとらえるかが重要となる。

安田(1997)によれば、人々のネットワークを把握するため方法として2つのアプローチがある。1つは、エゴセントリック・ネットワークとよばれるアプローチで特定の行為者に着目し、この行為者の周囲のネットワークを明らかにするものである。もう1つは、ソシオセントリック・ネットワークとよばれるアプローチで複数の行為者を集団ととらえ、行為者間の関係構造を明らかにするものである。前者は後者が捉えられない集団の外の関係までとらえることができる一方で、後者は前者が捉えられない集団内のすべての行為者間の関係をとらえることができる。

ネットワーク分析では行為者間の関係をグラフに変換して分析する。ここでいうグラフはグラフ理論が扱うもので、点の集合およびそれらの点の関係を示す線の集合によって定義されるものである(鈴木 2009)。点はノードや頂点、線は辺やリンクなどと呼ばれることもある。ネットワークの概要を視覚的に知るためにはグラフを利用するのがよいが、実際には定量的にグラフの特徴を知るために、隣接行列に変換する。隣接行列は行為者間の関係の有無を表し、関係がある場合は1、関係がない場合は0として行列要素を表現する。

このモデルを基本として、様々なネットワークを表現することができる。さらに複雑な社会関係をとらえるため、モデルの拡張が試みられた。金光(2003)によれば5つの方向への拡大が試みられている。第1の拡張は関係の値である。行為者間の関係は関係があれば1、関係がなければ0と記すが、これを連続値による関係の強度、実数値を用いず質的な値による結合の性格をモデル化されている。第2の拡張は複数の関係の同時表現である。行為者間の関係は様々な定義ができる。例えば、同窓生の関係、仕事の関係など別々に行為者間の関係として表現されるが、この複数の関係を集合の形式で複合化する。これはグラフ理論では多重グラフと呼ばれる。第3の拡張はダイナミック化である。このダイナミック化というのはネットワークの変化を離散的なものとして扱うことである。メンバーの入れ替わりなど複雑になりやすい特徴がある。第4の拡張はモードの追加である。モードとは「それを利用してとらえられる社会空間の「座標」であり、何によって社会ネットワークが定義されているかを表す参照軸」(金光 2003; 24)である。例えば、個人が集団に所属する場合、個人という1つモードに加え、集団というもう1つのモードが存在する。このとき、社会ネットワークは個人と集団は2つのモードのアフィリエーション(所属)を表す。このモデルは通常2部グラフで表される。第5の拡張は、社会関係のカテゴリー化である。カテゴリーとは「それによって個人が分類されるような個人の共通な属性」(金光 2003; 25)であり、カテゴリー化することで、社会ネットワークが属性によって組織される様式がモデル化される。

以上のモデルの拡張は、ネットワークをより現実に、具体的にとらえるための手段である。これらのモデルを利用するためには、ネットワーク・データを収集する必要がある。どのような収集方法があるのか、次項で確認したい。

1.3.2 ネットワーク・データの収集方法と性質

ネットワーク・データを得るために様々な収集方法があるが、収集方法によって、データには性質の違いが生じる。山口（2003）によれば、ネットワーク・データの収集には3つの方法が存在する。大学同窓会誌から得られるデータは、どのような性質のデータとみなすべきだろうか。ネットワーク・データへの応用を考える上で重要であるので、ここで入手方法とデータの性質の関係を整理しておきたい。

1つ目の入手方法は、調査票・質問紙を用いて当事者に報告を求める方法である（この方法で得られるデータを以後「報告データ」と記す）。この方法には大きくわけて2つのやり方がある。1つは人物リストや人物カードを用いて、そこに書かれている人々との関係を報告してもらう方法（認知法）である。集団内の互いの関係を把握することができるのが利点である。ただし、集団に属する人々全員のリストを作成できること、被調査者にリスト全員分について答えてもらう負担を考慮すると、小規模の集団に対象が限られる。加えて実名のリストを用いるため、プライバシーの問題も伴う方法である。もう1つはリストやカードを用意せず、人物を想起させる方法（想起法）である。これは大規模集団を想定した方法である。例えば「職業を探すときに誰を頼ったか」（氏名列挙）、「何人の人とあいさつを交わすか」（人数推定法）のような質問がされる。ただし、調査対象となる集団のリストやカードがないことからデータの質が問題となる。例えばある質問に対して被調査者にとって対象となる人物がいたと仮定して、その挙げるべき人物を上げ忘れることがある。

2つ目の入手方法は、研究者・調査員が当事者達の相互行為を観察する方法（観察法）である（この方法で得られるデータを以後「観察データ」と記す）。観察法には参与観察や調査員による行動観察がある。この方法は調査者が被調査者の日常を直接観察しつづけることが前提であり、調査者の目の届く小規模の集団のみ可能である。また、継続的観察が難しいことが欠点となる。

3つ目の方法は既存の文献資料・記録を利用する方法である（この方法で得られるデータは以後「記録データ」と記す）。代表的な例として経営学のネットワーク研究の企業の役員（取締役）兼任がよく知られている。ほかにも年賀状や論文の引用、電気通信機器に残される交信記録を利用されている。この方法の問題点としては、探ることのできる社会ネットワークが記録の形式や内容に強く依存することである。

これら3つの方法で得られるデータは性質が異なる。報告データは被調査者の主観（認知）に頼ったデータであり、一方、観察データや記録データは被調査者の行動に基づく客観的なデータである。性質が異なるため、同じ被調査者から得られるデータであっても報告データと観察データおよび記録データは一致せず、何を調査したいかで使い分ける必要がある。

報告データは、人物のリストアップが不完全（挙げ忘れなどのため）であり、客観性は劣るものの、強い紐帯（親密さに関する当事者の主観的な判断）を明らかにすることに長けている。主観的なネットワーク・データを調べたい場合にはこうした不正確性は問題視されないため、そうした場合は報告データが用いられる。報告データは、こうした性質を持つゆえ

に、弱い紐帯の把握が苦手である。そうした場合には、観察データや記録データが必要になる。ただ、報告データから弱い紐帯を把握する方法も研究は進んでいる。例えば、三隅(2014)の関係基盤の多様性を用いて調べることが可能となっている。

観察データ・記録データの強みは客観的な事実即ちデータが取れることである。しかしながら、報告データの強みである個々人の認識的なネットワークの把握は難しいとされる。十分な期間の観察データ・記録データを取ることで認識的なネットワークに近いデータを導くことは可能であるが、非常にコストがかかるという問題がある。

コストの問題もあって、社会調査では調査を質問紙調査(報告データ)に頼る傾向にある(森岡 1998)。ところで、被調査者にデータ提供を依頼することは、今まで気にしてこなかった個々人のネットワークを意識させることになる。このことは、個々人の形成するネットワークを変容させる危険性があることが指摘されている(安田 1997)。報告データは、観察データや記録データに比べそうした危険性を孕んでいる。

以上がネットワーク・データの収集方法およびそこから得られるデータの性質についての概要である。本研究での大学同窓会誌を用いる方法は、「記録データ」に該当し、客観的なネットワーク・データを得ることが期待される。記録データは、長期にわたって安定して記録を入手できることが前提となるが、大学同窓会誌は一般にその条件を満たすものである。特に本研究で対象とした「早稲田大学校友会」では同窓会設立時期の1890年代から安定して資料を入手できる。また、記録資料からのデータ収集は、コストがかかるものの集団に影響を与えないという点においては優れているという特徴を持っている。

1.4 本研究の対象とする大学同窓会「早稲田大学校友会」

1.4.1 早稲田大学校友会について

定量的研究に向けた具体的検討のために、本研究では調査対象を「早稲田大学校友会」とした。

早稲田大学校友会は、『早稲田大学百年史 別巻Ⅱ』『早稲田大学校友会 125年小史』にその歴史の記録が残されている。

早稲田大学の前身である東京専門学校は1882年に創設され、1884年には11人を、次の年には67人の卒業生を世に出した。ここで卒業生が互いに親交を深めるとともに、母校との関係を密にし、母校の将来の発展に向けて、校友会の設立が考えられるようになった。校友会発会は富士見軒で行われ、同行の教員と共に卒業生50余名が会に参加した。校友会発足時の規約は、9条から成る簡単なものであった。こうして1885年12月13日に早稲田大学校友会は誕生した。

この大学は同窓会誌『早稲田学報』を同窓会誕生の初期、1897年から定期的に発行している。『早稲田学報』は、外部の人間でも入手できる状態にある。記録としての大学同窓会誌を社会ネットワークの定量的研究へと応用することを目的としている本研究において、こうした特徴を持つ早稲田大学校友会は対象として優れている。また、早稲田大学は歴史が

古く、多くの卒業生を輩出している我が国を代表する大学である。この大学同窓会のネットワーク構造の定量的な研究は、我が国の大学同窓会についての歴史的動態を明らかにしていくことにもつながるであろう。これらの理由から、本研究では、早稲田大学校友会を研究の対象とした。

大学同窓会誌からの情報抽出の検討のために、本研究を進めるベースとなる早稲田大学校友会の活動・組織、会費の歴史を予備知識として次で確認しておきたい。

1.4.2 活動

(1) 大会

明治期において、校友会大会は年2回（1月と7月）に開催された。春の校友大会は孝明天皇祭りをもって開かれ、また秋の校友大会は7月の卒業式の後に開かれ、秋の校友大会には新卒業生（卒業生＝校友）も参加できた。これらの大会には国会議員当選者、高等官、弁護士試験合格者、洋行者、帰朝者、あるいは上京校友などが招待された。このほかにも大学内の事情や社会情勢に応じて臨時校友会が開催されている。例えば、校友の逡信次官栄任を祝すもの、大学創立の節目となる年を祝すもの、また日清戦争における物資支援など議題とした大会が臨時で行われた。臨時校友大会の中には継続的に行われるようになったものもある。それは1896年11月に大隈庭園内にて開催された観菊会である。この大会の内容は大隈重信の演説などであったが、毎年この会は続けられるようになり、後の秋季大会（明治42年より命名）となる。

大正期に入ると、春の校友大会は大正14年より卒業式の翌日（3月）に、秋の校友大会は10月第4日曜と定められた。ただし、秋の校友大会のみ様々な事情で年により開催日が異なる。大会参加者は平均して300人ほどであったが、大隈総長80の寿宴の際に開催された臨時全国校友大会では、約1,300人もの参加者が集まった。また、この時期に地方で行われる大会にも校友会から出向いて参加することが決められ、校友会と地方校友との意思の疎通が図られた。

昭和期に入ると、春の校友大会は4月3日の神武天皇祭に行われ、秋の大会は10月の第3あるいは第4日曜日に行われた。春の校友大会は卒業式と同じ日である。秋の校友大会は一大イベントである早慶戦と同じ日となったり、日中戦争などの理由で11月に行われることもあった。総会にて香川県支部から校友大会に毎年2人の代表を参加させることが決議され、1935年の春の校友大会から参加している。このことが大会中に触れられ、各府県、韓国や満州などからの地方校友の参加が期待された。この時期の大会の内容は戦争突入前ということもあり、戦争に関するものが多い。例えば、1937年の会務報告は、陸海軍への献金、出征校友留守宅への会長慰問状、戦傷校友への見舞状・見舞品、戦死校友への弔詞・花立捧呈、凱旋校友への記念品贈呈等があった。また、1943年には京浜および近地出征校友遺家族の慰安会が開催され、過去最大の4,000人超が参加した。第二次大戦の激化や敗戦後の混乱を理由に1948年まで校友大会は開催されなかった。

1970年になると、1961年より度々議論が交わされていたが、大学主催により大学と校友を強く結びつけることを目的としてホームカミングデーが開催された。ホームカミングデーでは卒業後25年目に当たるOBを順に招待し、それ以前の卒業生については明治年間、あるいは大正のある時期と区切り、順を追って招待することが決められた。1982年には母校創立百周年を迎え、ホームカミングデーとともに開催され、約2,000人が参集した。

(2) 大会以外の活動

早稲田大学校友会は地方に在住する校友に対して、積極的にその声に耳を傾けた。

明治期では、明治26年より、地方校友の要請に応じて、各地で学校主催の「地方巡回講話」が行われた。また、地方校友が上京したときに、自由に他の校友と語ることでできるよう、慶應義塾大学の交詢社に習い、大学の支援を経て校友倶楽部が創立した。大正期に入ると、1923年より全国組織の大校友会として発展させるため、校友会幹事が全国の地方支部を歴訪し、各支部の意見を徴した。その中で決定された事項の中には、東京に特約旅館を設けて地方校友上京の際の便に供すること、出版された学報紙上には絶えず地方校友会の消息を記載することといった事項がある。

第二次世界大戦の激化や敗戦後の混乱を理由に同窓会活動が停止することになる。自分たちの力で同窓会を復活させていたが、この中で静岡県岳南稲門会（稲門会＝同窓会）のように新たに結成される同窓会もあった。この時期も大学は総長を筆頭に常務理事や教授らが関西や九州など各地の地方校友会に復興と同時に参加した。創立七十周年記念事業時には、校友のために社交室、地方校友の宿泊室や校友会本部事務所を収容するための校友会館の建設が計画され、1955年に校友会館落成式が行われている。

卒業生が増加すると、大学は母校と校友会の更なる関係強化に動いた。ホームカミングデー等の大学と校友を結ぶ行事が計画され、その先駆けとして大学と校友会共催のもと全国支部長会が開かれた。さらに1964年には職域代表者会が大学と校友会の共催により開催された。これは東京において職場単位の稲門会を中心に組織を強化するものである。この全国支部長会と職域代表者会は大学と校友の関係を深めるものとして2018年現在まで続いている。

平成期では、同窓会結成が活発となった。東京都内稲門会の有志と校友会事務局の働きかけで未結成の地域でも稲門会が結成され、東京23区すべてに稲門会ができた。登録稲門会数は増えていき、1999年には900弱あり、2001年に1,000を超えた。また、この時期に1998年には校友連携強化員が設けられ、地域の支部・稲門会の大会等に参加し、その情報を大学・校友会に提供した。これは大学と校友との絆をより一層強くし、校友組織の強化を図ることを目的としており、また担当者は情報の累積と人間関係の継続などを理由として割り当てられた地域で活動を行うこととなっている。支部や稲門会数の増加に伴い様々な代表者会が行われるようになった。昭和時代から行われている全国支部長会、職域稲門会長会、東京都稲門会長会に加え、2000年には幹事長会が初めて開催された。また、海外の大

学や同窓会との交流にも力が入れている。2009年にはイェール大学の同窓会組織が来日したときに交流会が行われた。また、海外での大学の活動に海外稲門会が参加するといった事例もある。

学生との交流の機会も設けられた。1990年に「早稲田カード推進特別委員会」が設置され、会員5万人を目標に勧誘を進めた。1996年には早稲田カード奨学生、校友会給付奨学生といった校友関連の奨学生と校友会の代表者が集う校友代表者・学生懇談会が行われた。

さらに卒業生が増加する中で、校友の関係維持について以下の政策がなされた。1つは同じ年に卒業した校友の同窓会の強化である。1997年には年次委員制度が実施されることとなり、年ごとの卒業生から100人の年次委員を募り、同期生の面倒をみてもらうこととなった。1999年には学部別年次稲門会の設立が提案された。2001年には、卒業後25年時に参加するホームカミングデーのほかに「年次稲門会十年祭」が企画された。また、校友会は大学の外から大学を後援してきたが、卒業生の増加により校友に関する情報の整備と組織化をより一層強固に再構築することが必要となったため、1993年より大学の組織に編入されることとなった。1996年には大学本部事務組織機構改革により総長室に改組され、秘書課、秘書課、募金課の3課が置かれた。

交流の場の提供のみならず、卒業生個人に対する援助も行っている。例えば就職関係についてみると、昭和期では、相談職業相談委員が設けられ、幹事から4人選出された。これは校友の就職に関する相談事務を担当する主事で、職を失った校友のために全国に協議員を選任して助力を得ようとした。

ただし、卒業生からの協力を大学側が拒んだ事例がある。それは学園紛争である。1965年に起きた学園紛争により大学は荒れた。校友国会議員が調停に乗りだしたが効果はなかった。このような状況のなか、校友らは学園紛争の解決に協力する姿勢であったが、大学側の要望で校友の介入はなかった。学園紛争は大学と学生の問題であるから声援のみで静観してほしいとの要望であるが、大学側が校友の協力を拒むのはこの件のみである。この事件に関しては大学同窓会誌『早稲田学報』に詳しい経緯や状況が詳細に書かれたものが発行され、校友や学生父兄に配送されている。また、この時期の『早稲田学報』には多数の校友の学生や大学に対する声が寄せられ、掲載されている。

1.4.3 組織

(1) 会員

同窓会は卒業生が会員である。しかし、早稲田大学校友会は明治25年から卒業生でなくとも母校に在籍していたもので学識や名望において著しい成績があるものは会員20名以上の連署を以て会員に加える制度を設けた。この制度は「推選校友」と呼ばれ、これにより会員の増加がはかられた。さらに早稲田大学に在籍していない講義録の送付を受けて勉学した人たちに対して、校外生試験に及第した者は「準校友」とみなされ、校友会への参加が認められた。1910年には推薦校友は早稲田中学校、早稲田実業学校に学籍を有した者に拡大

され、また準校友についても幹事会の選考を経て推薦校友になることができるようになった。

創立期から校友会は会員のデータをまとめる『会員名簿』を発刊していた。しかし、1943年8月に発刊後、戦争のため1951年12月まで途絶えたが、それ以降は3,4年ごとに刊行し、1969年度版を出した後は、母校創立百周年記念の1981年度版まで中断、1985年に校友会設立百周年を記念して発刊された。

平成期になると、現存校友数が50万人を超え、校友会で管理していた卒業生のデータを大学に管理することとなった。そこで着目されたのがインターネットである。一度は失敗に終わったが、努力が続けられ、新入生などに講習などを行うことで、卒業後の大学とのつながりができるようなシステムを作り上げた。

(2) 役員（幹事・評議員・商議員）

早稲田大学校友会は校友会の組織運営に関わる幹事、大学の運営に関わる評議員・商議員制度がある。任期は現在4年となっている。私立大学の特徴でもあるが、早稲田大学では、これらを卒業生からも選出しているおり、校友会の運営はもちろんのこと、大学の運営に関しても卒業生の声を取り入れている。細かい人数等は省略するが、卒業生の増加に伴い、これらの選出人数も増えていった。

当初は東京に在住の卒業生に限られたが、明治時代にはすでに地方校友会からも選出できるようになった。地方校友会からの選出人数は、最初は会員数に応じて決められていたが、その後、会員数から在住の維持費納入会員数の比率で算出することになった。

平成期に入ると、1990年に幹事は代議員に改称され、幹事会も代議員会と改められた。1994年には1200人に増員され、常任幹事もこれまで2人だったのを5人に増員した。ただし、幹事の制度は残っており、各委員会の業務を担っている。

1.4.4 会費・寄付

校友会の財政基盤は主に寄付で支えられた。1898年の春季大会にて、毎年作成する名簿の印刷費へ50銭以上1円程度の寄付が決められたが、その翌年には校友会の維持費（同窓会会費のこと）として年額50銭以上2円以下の維持費を徴収することが決議された。その後、維持費の増額は続き、1903年に年額1円以上、1906年に年額2円以上となった。これらの会費は大会が行われる時に徴収された。この時期の維持費は13%（卒業生6,000人中800人）しか徴収できておらず、維持費を多くの人に払ってもらうにはどうしたらよいかといった議題が大会で挙がっている。

維持費は時代によって、変更されたが、物価に応じて下がることなく、上がり続けている。また、1973年には終身維持費が設けられ、納入者数も順調に伸ばしている。

平成期に入ると、納入に関しては安定した収入が見込めるように在学中に集める「校友会費四年次納入制度」が導入された。また、終身維持費の制度が導入されていたが、その納入

者数を上げるため様々な工夫がなされてきた。例えば、1987年には会員資格を得た後40年を経過した会員についてはその額を半額にしたり、1989年には「傷害保険付終身維持費分納制度」が導入された。しかしながら、金利ゼロという時代にそぐわず2001年度で終身維持費の制度は終わることとなった。

早稲田大学校友会では、大学等を支援するための寄付事業も行われてきた。これには日常的・恒常的に行われる一般募金、周年等で行われる大規模募金がある。特に大規模募金は特別に早稲田大学の設備を拡大するために行われ、これまで11回行われている。目標金額が設定され、募金が行われるが、過去11回の達成率は61%から130%であり、平均達成率は95.7%であった。

早稲田大学校友会は、『早稲田学報』を継続して発行している。この『早稲田学報』によって、卒業生らはどのような情報を共有していたのか。そして、そこにあるどのような情報がネットワーク・データに活用できるのかを次章ではみていきたい。

第2章 大学同窓会誌のネットワーク・データへの応用可能性に関する検討

大学同窓会誌から得られる情報のネットワーク・データへの応用可能性について

2.1 大学同窓会誌について

大学同窓会誌の発行に卒業生らは力を注いできた。Shaw(1921)によれば、1892年にアメリカで最初にエール大学で大学同窓会誌が創刊され、これに続く形で1893年にハーバード大学、1894年にミシガン大学でも大学同窓会が創刊された。アメリカでは1821年にウィリアムズ・カレッジに同窓会が設立されており、大学同窓会誌登場まで少し期間がある。大学同窓会誌の発行頻度は週や月など様々であった。また、大学同窓会誌の内容で最も重視された項目は卒業生個々人に関する情報であったが、大学のニュース等についても掲載されていた(Shaw 1921)。

日本の大学同窓会では定款・会則・規約に卒業生との情報共有を目的として会報を発行することを多くが明記している。発行は紙媒体で行われてきたが、メディアの進化に伴って会報を電子メールで発行する大学、またはホームページを活用して情報を共有している大学も存在する。ただし、紙媒体の「大学同窓会誌」³⁾は現在でも大学と卒業生の情報共有のための主要なメディアである。

日本の大学同窓会はどの程度の団体で会報を発行しているのだろうか。2017年12月に文部科学省が設置認可していた780の大学のホームページで紹介されている1,126の大学同窓会を対象とし、2017年12月時の大学同窓会誌・会報の発行の有無について調査を行った。ただし、この調査では、卒業生のもとに届ける大学同窓会誌やメールマガジンを会報とし、卒業生が能動的に情報を取りにいかねばならないホームページやブログは会報ではないとみなした。会報を発行しているとの判断は大学同窓会のホームページに掲載される定款・会則・規約に会報発行の記載があること、もしくは大学同窓会誌の現物の確認できるものどちらかの条件を満たす場合とした。会報を発行している大学の比率は図2-1に示す結果であった⁴⁾。

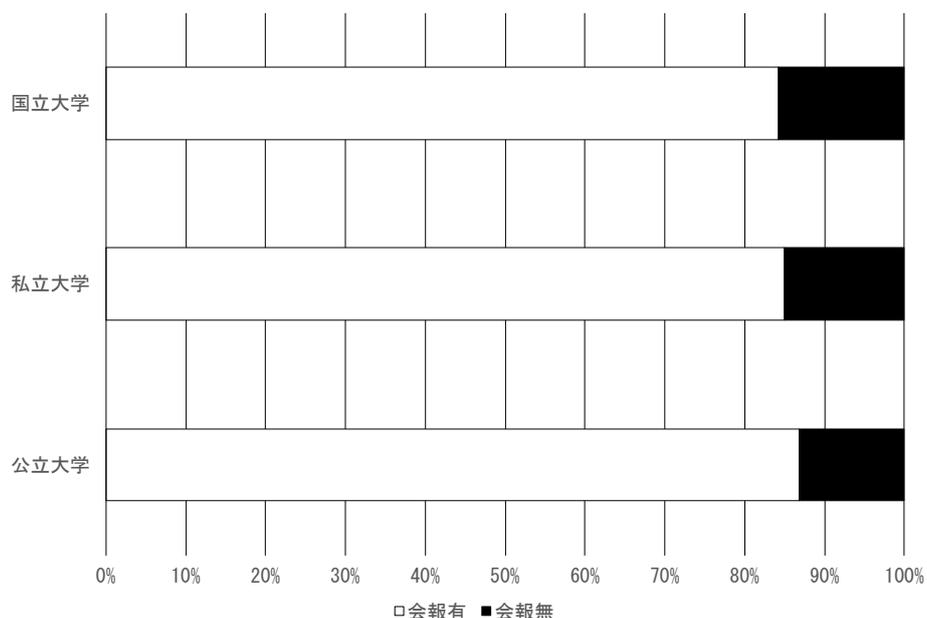


図 2-1 大学同窓会会報の発行の有無

ほとんどの大学同窓会は会報を発行していた。不明であった 169 の大学同窓会を除き、962 の大学同窓会の中で、817 の大学同窓会が会報を発行している。国立大学の大学同窓会は、84% (224/273)、私立大学は 85% (507/597)、公立大学は 86% (86/99) が会報を発行している。大学同窓会にとって会報を発行することは活動の中で重要な位置を占めていることがわかる。

これらの会報はいつから発行されているのだろうか。会報を発行している 817 の大学同窓会のなかで創刊号⁵⁾が明らかである 21 の創刊年を調べた結果が図 2-2 である。ここで図 2-2 は、20 年ごとに区切った度数分布表である。創刊年が 2000 年以降に集中していることがわかる。ほとんどの大学で、大学自体の創設時期はそれよりはるかに古いわけであるから、この事実はかなり驚くべき結果であろう。こうした事態となったのは、国立大学において、独立行政法人化後に全学同窓会（同窓会連合もしくは校友会）を設置する大学が増えた（高田 2015）ことが要因の 1 つであると想定される。

調査で確認できた最古の大学同窓会誌は 1888 年発行の専修大学校友会であった。また、一橋大学の如水会や奈良女子大学の佐保会といった明治、大正期から創刊され現在まで継続して 100 年以上発行され続けている大学同窓会誌も存在する。日本の大学同窓会が結成されはじめたのが明治時代であるため、如水会や佐保会のような一部の大学同窓会は設立されたあたりから発行されている会報があることになる。

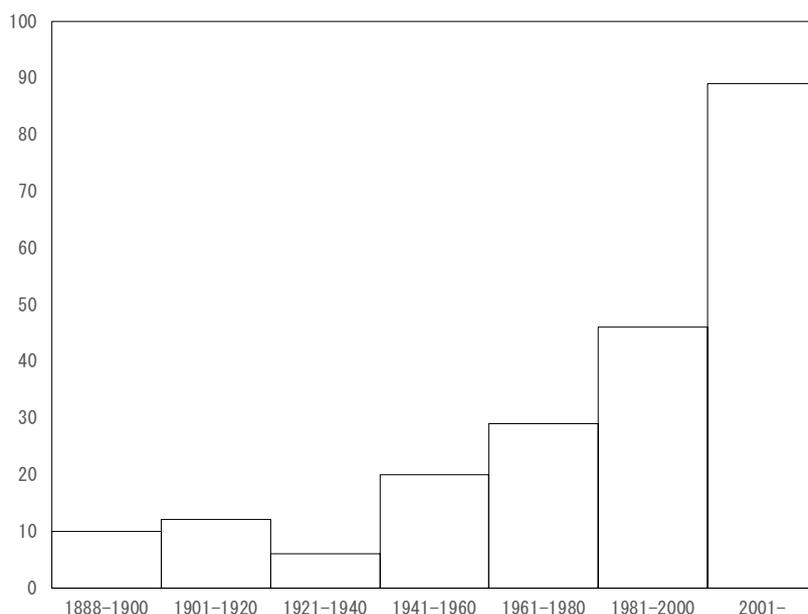


図 2-2 同窓会誌創刊号発行年の分布

2.2 問題関心

日本の大学同窓会研究において、大学同窓会内の様相を観察する方法は大学同窓会誌などの記録の活用が大半を占めている。分析事例としては、個人の発言の引用や寄付情報を活用したものがある。外から観察することが困難な情報が大学同窓会誌に内在していることが想定される。それでは、大学同窓会誌からどのような情報を得ることができるのだろうか。そして、大学同窓会のネットワーク・データとして活用可能な情報が存在するのであろうか。

同窓会誌の雑誌構成について触れた先行研究をみてみよう。川村（2003、2015）は故郷の物語の言説分析に七浦小学校の同窓会誌の故郷に関する記事を活用しており、そのなかで同窓会誌の雑誌構成に関して述べている。川村（2015）によると、対象とした七浦小学校の同窓会誌『同窓会誌しつら』は 1904 年に同窓会設立後、1914 年に同窓会誌が発行された。目的は相互の消息を共有するためであり、年 1 回程度の発刊（年 2 回や 10 年休刊）とのことである。同窓会誌には、初号では「会員による評論や紀行文、文芸活動」（p.151）が掲載され、戦後では「項目名は変わったり細分化されたりするが、評論、エッセー、文芸活動（詩、短歌、俳句、紀行文）、便りなど」（p.152）が掲載された。戦後の記事では特徴的な企画として座談会があった。また、高度経済成長期以後になると、同窓会支部が関東や関西に設立され、同窓会の様子が報告された。川村は、同窓会誌の雑誌編成に言及しているが、卒業生らが記した故郷に関する記事を取り上げており、同窓会の実態に関する記事には触れていない。この研究は「故郷」というテーでみる際の同窓会誌を取り上げる意義を 3 つ挙げている。1 つは、「大正から平成までの継続的な語りを集約する場」であったこと、1 つは、「都市に住まう出郷者ではなく、故郷の側が中心となって発信してきた」こと、1 つは、「座談会のような直接的な場と紙面上の往還の両面で、離郷者と地元の対話や交渉の軌跡

が示されていた」ことである。大学同窓会誌の利用は故郷観について、その成立と展開を検証することともにその物語を支える発話者がどのような位置にいるのか問いなおすことにつながり（川村 2003）、出郷者たちの視点を観察できる（川村 2015）という点で有用である。

長谷川・雨宮・吉田（1995）は攻玉社とよばれる明治時代の先覚者近藤真琴の開いた蘭学塾から変遷した学校の同窓会誌の記事構成の調査を行っている。長谷川ほかは明治 24 年 6 月に発行された『同窓會誌』9号を取り上げており、同窓会誌の構成は本会記事、演説、寄書、講義、叢話が掲載されていることを示した。本会記事には同窓会の会合内容や会員の消息がまとめられている。長谷川ほかは寄書に着目し、ここに掲載される「新知識の紹介、計算法や理論の開設、工事に関する計画書・仕様書・報告書、セメント・木材その他の材料に関する基準・仕様書・試験方法」（p.347）が卒業生のみならず一般の人々にも実技的な知識を提供していたこと、また当時の人々の関心ある分野や求めていた知識をみることができると述べている。そして、長谷川・内川（1996）は攻玉社の同窓会誌の寄書に掲載される測量に関する特異な記事を取り上げ、アカデミックに偏らず現場ならではの特異な情報が交換されていることを示し、卒業生のみならず、卒業生以外の中堅土木技術者にも同窓会誌が親しまれていたことを示した。

同窓会誌は卒業生らに親しまれるものであり、また卒業生の協力のもと雑誌が構成されている。先行研究では当時の卒業生らの言説、知識の情報として同窓会誌を利用している。同窓会誌は発行当時の人々の社会などに対する雑感や意見が集約されており、また卒業生という固定された集団の社会問題や母校、故郷に関する言説や動きの変遷を観察できるという点で一般的にも同窓会誌は有用である。しかし一方で、「同窓会誌」との名前の通り、同窓会誌には同窓会に関する記事があることは明らかではあるものの、読者である卒業生との共有のため、どのような情報が掲載されていたのかについては明らかにされていない。

アメリカでは校友行政研究、卒業生研究が盛んである（江原 2009）が、その研究方法ではアンケートや組織調査が主流であり、管見の限り、大学同窓会誌にどのような情報、分析可能なデータが潜在するか明らかにされていない。川村が対象とした同窓会誌は時代によって雑誌編成が変化していたが、故郷というテーマに関する記事を追うことで故郷に住む人々の故郷に対する認識を明らかにすることが可能であった。2.1 で述べたように、大学同窓会誌には 100 年以上継続して発行されているものもある。大学同窓会誌から得られる情報やデータが明らかになることで、1冊の同窓会誌にとどまらず、特定のテーマについて複数の同窓会誌を活用した調査や、定量的な調査、さらには時系列の調査を行うことが可能となることが期待される。

少し話が逸れるが、現在は、欲しい情報、例えば学会で発表された論文や学会開催日などを知りたいとき、図書館やインターネットを通じて容易に検索できる。しかし、以前は研究会の場所や日程等を確認するにも図書館の図書館員を頼らなければならなかった。学会などから発行される雑誌・書誌には様々な形態があり（殿崎 1976）、1970 年代ではその書誌

管理、情報管理が問題視された。実際に依頼され情報を探さなければならない図書館員にとって依頼者の欲しい情報がどの情報誌に存在するか把握しておくことは重要なことであった(高野 1974)。特に、主要でない地域で開催される学会日程や学会会議の情報となると、その情報を探しだすことが困難であったことから、どの情報誌にどのような情報がどこまで記載されているのか情報誌の特徴を整理し、データの場所を明らかにしておく必要があった。「参考図書の状態でない資料に注目し「普通の雑誌・本」の内容を分析し、その特徴をつかむことによって一冊の図書は、ただ利用者を待って書架の上にあるだけでなく、図書館員のためにも多くの答を提供する参考資料となるだろう」と指摘する(高野 1974: 218)。これは研究目的で作成されていない大学同窓会誌にも当てはまることである。大学同窓会誌は大学同窓会に関する 1 次資料として、大学同窓会に関する情報が書かれていることは自明である。しかし、具体的にどのような情報が掲載されているか明らかにされていない。この点を明らかにすることは、眠っているデータへのアクセスを可能となり、データの新たな活用を促すことにつながるため、大学同窓会の研究発展に寄与するものとなる。

したがって、本章では、大学同窓会誌が卒業生と大学や卒業生に関してどのような情報を共有していたかを明らかにする。そして、大学同窓会のネットワーク・データとして活用できる情報を明らかにすることを目的とする。具体的には早稲田大学校友会を対象として、この同窓会が発行している『早稲田学報』を対象に、目次や記事の見出しに着目した雑誌編成分析およびその内容分析を行う。雑誌編成分析は一般的に目次を対象とする(中川 2015)が、同窓会誌に関しては目次で「本会記事」として一括りにされている(長谷川ほか 1995)ことが想定されるため、目次だけでは大学や大学同窓会についてどのような記事が掲載されているか明らかにできない可能性がある。したがって、同窓会誌の編成分析に関しては目次に加え、見出しにも着目する。

2.3 対象とする大学同窓会誌『早稲田学報』について

本研究では大学同窓会として「早稲田大学校友会」を対象とすることを述べた。この同窓会が発行しているのが『早稲田学報』である。『早稲田学報』からどのような情報を抽出できるか、内容分析した結果を述べる。

2.3.1 『早稲田学報』の歴史的経緯

『早稲田校友会 125 年小史』と丹尾ほか(1960)によれば、早稲田大学で初めて学報として出版されたのは、『中央学術雑誌』(1885-1887 年)である。この雑誌は各教授の論説発表機関紙であった。学術雑誌であった『中央学術雑誌』は経営上の問題のため 2 年で廃刊する。その後、『中央時論』と改名され 1896 年 2 月まで出版された。2 度の廃刊の反省から、学内に早稲田学会を立ち上げ、学理と実際の調和をはかり、学校と校友との関係をもっと密にするという内容で 1897 年 3 月から『早稲田学報』が出版された。これは当時の校友会会長であった高田早苗の意見が大いに組み込まれているとのことである。

1900年7月の『早稲田学報』第45号から全校友に義務購読させることとなり、学術雑誌から学内記事、校友動静を詳しく記載した120頁もの機関紙へと変化した。当時は、維持費納入者のみ『早稲田学報』を配布していた。しかし、卒業生6,000人に対し、維持費納入者は800人であり、早稲田大学と校友会の実情を『早稲田学報』を通じて知ることができる卒業生は5分の1にも満たなかった。そのため、全校友に配布できるように論説その他を省略した24頁に縮小し、また内容についても地方に在住しながらにして母校の状況、校友、学生の動静を知ることができるように工夫されたものへと変わった。その工夫の一例として、当時編集を担当していた院生が地方に足を運び、その地域の卒業生に取材を行っていたとのことである（『早稲田学報』1960年4月号）。そして、明治42年から大学から事業補助費として毎年1,000円、出版部から300円補助を得ながら、『早稲田学報』の発行が校友会の事業として発行されることとなった。これを期に各地で行われていた校友の会合などの情報は、全校友に認識されるようになった。

ただし、継続的に発行できていたわけではない。昭和期の戦争中、特に第二次世界大戦後の激化や敗戦後の混乱を理由として、『早稲田学報』は1944年1月号を最後に休刊となり、大学・校友会本部と校友とのパイプが途絶えていた。『早稲田学報』は発行できなかったが、全国8万人の校友と連絡を図るために1947年に『早稲田彙報』を創刊、校友会支部宛に一括発送し、無料配布した。その後1948年に『早稲田学報』は復刊し、現在まで継続して発行されている。2019年現在の最新刊は1,232号である。

『早稲田学報』は卒業生限定に配布されることはなく、学生や学外の一般の人々も購読することが可能であった。現在も早稲田大学生協で販売されている。

2.3.2 雑誌編成分析及び内容分析に用いる『早稲田学報』

『早稲田学報』は現在まで1,200号を超えており、1944年から1948年の休刊期間はあったものの、継続的に発刊されてきた。本章では『早稲田学報』通算第1号（1897年3月号）を基準に、国会図書館で閲覧可能な1897年から2017年までの『早稲田学報』を20年ごとに区切って調査を行った。対象とする『早稲田学報』の号は、区切った期間において最初に発行された号とした（表2-1）。その号について記事内容の分析を行った。ただし、1917年と1937年については国会図書館で閲覧できなかったため、その翌年1918年と1938年に発行された号を対象とした。加えて1918年と1938年については、1918年の1月号が特別号（大隈重信生誕）であり大学同窓会誌の構成が全く異なることが想定されるため、そして1938年は4月号まで国会図書館に存在しなかったため、1918年は2月号、1938年は5月号を対象とした。

これらの『早稲田学報』からどのような情報を読むことができるのか。大学と卒業生の情報に焦点を当て次節以降で検討する。

表 2-1 雑誌編成分析及び内容分析の対象とした『早稲田学報』

西暦	元号	年	通号	月号	発行日
1897	明治	30	1	3	3月20日
1918	大正	7	276	2	2月10日
1938	昭和	13	519	5	5月10日
1957	昭和	32	667	1	1月15日
1977	昭和	52	868	1	1月15日
1997	平成	9	1069	1	1月15日
2017	平成	29	1221	2	1月16日

2.4 『早稲田学報』の雑誌編成分析

『早稲田学報』はもともと学会誌として論説を中心にした雑誌で、これに大学や大学同窓会に関する情報を加え、大学と卒業生や卒業生同士の情報共有することを目的としてつくられた。大学同窓会誌を通じて大学や卒業生のどのような情報を共有していたのかを明らかにするため、表 2-1 に示す 20 年ごとの『早稲田学報』に掲載された記事について、その内容に着目し、分類を行った。まず、『早稲田学報』で書かれている見出しを列挙し、その記事の内容を「大学」、「卒業生」、「その他」に分類する。そして、「大学」、「卒業生」で分類された記事について、さらに読み取れる情報からコード化を行った。結果は図 2-3 に示す。

年代	1897年	1918年	1938年	1957年	1977年	1997年	2017年
大 学	案内					案内	案内
	紹介	紹介	紹介			紹介	紹介
	行事	行事	行事		行事	行事	
	講義	講義					
	スポーツ	スポーツ				スポーツ	スポーツ
	イベント					イベント	イベント
	講演会	講演会					
	人事	人事	人事		人事	人事	
	動静	動静	動静	動静			
	表彰		表彰	表彰	表彰	表彰	表彰
	会合	会合	会合	会合			
	会計	会計					
	図書館	図書館					
卒 業 生	案内		案内	案内		案内	案内
	紹介				紹介		紹介
	イベント					イベント	イベント
	人事	人事			人事	人事	
	表彰		表彰	表彰	表彰	表彰	表彰
	動静	動静	動静	動静	動静	動静	
	選挙				選挙		選挙
	会合						
	寄付	寄付	寄付	寄付	寄付		
	終身維持費				終身維持費		

図 2-3 『早稲田学報』の記事構成の変遷

「大学」や「卒業生」で分類された見出しでさらに読み取れる情報は、「大学」と「卒業生」で共通する7つ（案内、紹介、イベント、人事、表彰、動静、会合）のカテゴリー、「大学」に特化した6つ（行事、講義、スポーツ、講演会、会計、図書館）のカテゴリー、「卒業生」だけに特化した3つ（選挙、寄付、終身維持費）のカテゴリーであった。内容はそれぞれ以下の通りである。また、カテゴリーごとの具体的な内容についてまとめたものは資料2として巻末に掲載する。

【「大学」「卒業生」に共通する「共通カテゴリー」】

案内：大学や同窓会による卒業生や一般に向けた告知

例) 早稲田 UC カードの案内、同窓会の周年記念会の案内

紹介：大学に所属する人々や卒業生に関する活動紹介

例) 留学している教諭や講師からの近況報告、地域の同窓会の歴史的経緯や普段の活動

イベント：大学、卒業生や同窓会らが主催するイベント、お祭り

例) ホームカミングデー・早稲田駅伝、稲門祭の様子

人事：教員の新任や異動、同窓会の役員の選出に関する内容

例) 教授の嘱任・異動、商議員の就任

動静：大学に所属する人々や卒業生の現状に関する内容

例) 大学教員の訃報、卒業生の職業・消息

表彰：表彰受賞に関する内容

例) 小野梓賞受賞者、秋の叙勲・褒賞

会合：大学・同窓会における人々の会合の報告

例) 教授会・教員懇談会、同窓会の会合報告

【「大学」にのみ表れる「大学カテゴリー」】

行事：大学で定期的に行われる式典などに関する内容

例) 入学式、暦

講義：大学で行われる講義に関する内容

例) 講義を受講する学生数、懸賞論文問題

スポーツ：大学に所属学生らのスポーツに関する内容

例) 剣道部や柔道部の寒稽古、スポーツの成績

講演会：大学に所属する教員の大学外で行う講演会

例) 栃木県の中学校における講演会

会計：大学の財務状況に関する内容

例) 大学の収入および支出に関する詳細な報告

図書館：大学の図書館に関する内容

例) 分野ごとの本の入荷数、貸出数

【「卒業生」にのみ表れる「卒業生カテゴリー」】

選挙：衆議院議員などの選挙に関する内容

例) 衆議院議員選挙での当選した卒業生、市長・町長選

寄付：卒業生らが行う寄付集計に関する内容

例) 大学御大典記念事業資金、教育振興協力金

終身維持費：会費納入に関する内容

例) 終身維持費の納入者

大学同窓会誌では、大学と卒業生に対し様々な情報を共有していたが、時代によってその内容が変化していることが読み取れる。

大学カテゴリーに着目すると、1957年までにかけて、大学の講義、行事や会合、大学教員の動静など大学教員視点の情報と学生らが組織する団体(研究会)の会合やスポーツなど学生視点の情報の2つの内容が掲載されていた。大学の講義内容や試験問題などの学習内容や研究活動が共有されていた。しかし、大学教員視点の内容は2017年にはなくなっており、学生の活動(スポーツや紹介)など学生視点の情報が中心となっている。ただし、学生が組織する団体(研究会)の会合情報は1957年以降みられず、私生活を含めた大学生活内容へと変化している。

卒業生カテゴリーに着目すると、創刊号から卒業生個々人の動静について詳細に掲載されていたが、1997年以降掲載されなくなった。また、一方で1977年以降には同窓会や卒業生の活動に関する紹介や卒業生・同窓会主催のイベント、選挙の結果が掲載されている。卒業生カテゴリーに関する情報の1つの会合はすべての時期でその内容を確認することができる。様々な同窓会が行う会合の情報は大学同窓会誌にとって共有されるべき情報として時代に関係なく重視されている。

大学同窓会誌の掲載内容は時代によって変化するが、この調査から唯一卒業生の会合のみが継続して掲載されていることが明らかとなった。会合の項目は100年以上継続して掲載されている大学同窓会誌にとって、重要な項目であったことがいえる。では、具体的にどのような情報が会合の記事に記載されていたのであろうか。次項では会合の具体的な記事内容から得られる情報について詳しくみていきたい。

2.5 『早稲田学報』の会合記事内容分析

2.5.1 『早稲田学報』の会合記事内容分析に向けた準備

本節では、『早稲田学報』各号に掲載される卒業生の会合(以下会合記録)に着目し、ここから抽出できる情報を概観する。各号比較のため、雑誌の中で初めて掲載された会合記録に注目した。会合記録はその掲載順に規則性はないため、選出する会合記録に偏りはない。

掲載される会合数は、存在する団体数と比較して少ないが、会合記録は常に卒業生に募集されていることから、アクティブな団体は報告していると想定される。会合を行ったにもか

かわらず会合記録がない場合もあるかもしれないが、これを確かめることは不可能である。

本論では、それぞれの年代の会合記録を手を加えずそのままの内容で抜粋して見ていくが、以下の3点については、記事を加工した。1点目は会合記録が縦書きであるため、例えば文中に「左の通り」などの表現が記載されることがある。それをそのまま横書きにすると矛盾が生じるので、「左」については「次」、「右」については「前」と修正した。2点目は、人名や同窓会名が記載されている場合である。それらは個人情報となるため、人名は●●、同窓会名は□□と変換し、また4人以上の人名が羅列されている場合は(中略:○人)として、○に記載されていた人名数を書いて省略した。3点目は、1918年2月号の会合記録で筆者が読み取ることのできなかつた漢字が2文字存在した。この2文字については「?」文字を使用した。

以上の変換規則の下で、記事を具体的に見ていく。

2.5.2 『早稲田学報』の年代別の記事内容

表2-1に示した『早稲田学報』からの会合記録の記事について詳しく見ていく。

(1) 1897年3月号

1897年3月号に掲載された記事(「校友会」『早稲田学報1897年3月号』p.123)は以下の内容であった。

□□

二月十五日午後六時より神田今川小路玉川亭に於て本會□□を開き、大會の準備及推選校友、校友選出本校評議員、●●会長議長当選祝宴、●●氏洋行送別會、●●氏帰朝の宴会其他種々協議する所あり、出席者は●●、●●、●●、●●氏等の幹事を始め●●氏祝宴紀念品贈呈の件に付き●●、●●、●●の三氏も列席せり

『早稲田学報』に記載された会合記録は100字程度の情報量である。会合記録からは「同窓会名」(□□)、「会合日時」(二月十五日午後六時)、「会合場所」(神田今川小路玉川亭)、「会合内容」(大會の準備及推選校友、校友選出本校評議員、祝宴・送別会・宴会其他種々協議)、そして「人名」(●●)の情報がわかる。

「人名」が記載される部分に着目すると、2、3行目にあるように、「●●会長議長」「●●氏等の幹事」とあり、その人物の「同窓会役職」情報を読み取ることができる。さらに同じ行では「当選祝宴」、「洋行送別会」、「帰朝の宴会」と記載され、人名を対象とした「会合の議題」情報を読み取ることができる。さらに、3行目、4行目では「出席者」、「列席」と記載されており、「出席者」と「列席」挟む文中に記載される8人の中で「●●氏祝宴紀念品贈呈」の1人を除く7人についてこれらの人物は「会合参加者」として読み取ることがで

きる。

(2) 1918年2月号

1918年2月号に掲載された記事(「校友會報」『早稲田学報1918年2月号』p.12)は以下であった。

□□

一月二十八日午後三時永楽倶楽部に於て開会。次の諸氏出席

●●理事 ●●理事 ●● (中略:5人) ●●

協議決定したる事項左の如し。

一、大正六年度決算報告の件

一、推選校友銓衡の件

一、□□規則改正の件

□□規則第三条(二)号中早稲田実業学校の下に「早稲田工手学校」の七字を加ふること

(備考)

早稲田工手学校卒業生中には社会に出て相当の地位を占むる者あり特に工手学校々長より推薦あるときは之に推選校友たる資格を与ふること

一、早稲田工手学校の記事を学報に掲載の件

早稲田工手学校の記事を毎年二回早稲田学報に掲載し之を早稲田工手学校卒業生に配布すること

但し其費用は□□に於て之を??せざること

この会合記録は300字程度の情報量である。会合記録からは「同窓会名」(□□)、「会合日時」(一月二十八日午後三時)、「会合場所」(永楽倶楽部)、「会合内容」(協議決定したる事項)、そして「人名」(●●)の情報が記載されている。

「人名」が記載される部分に着目すると、3行目に「●●理事」と記載されており、人名の「大学役職」情報を読み取ることができる。また、2行目に「次の諸氏出席」と記載されており、羅列されている9人について「会合参加」として読み取ることができる。

(3) 1938年5月号

1938年5月号に掲載された記事(「會報」『早稲田学報1938年5月号』p.29)は以下である。

□□

殉國の英靈四千五百三十三柱をとこしへに神鎮め参らせる招魂祭の行はれたる四月二十四日計らずも日を同じうし本月の例会を兼ね臨時校友大會を開催す。

時恰も新緑春暖の好シーズン、●●、●●、●●の各先輩を初めとし、途中より態々校友大蔵參與官●●君も馳せ参ぜられ集る者二十名、一同京阪電車にて八幡驛下車、同所より八幡在住本會幹事●●君の案内により「ケーブルカー」にて山頂に達し、先づ石清水八幡宮にて参拝、國威宣揚竝に出征校友將士の武運長久を祈願し徒歩にて下山、八幡在唯一の舊蹟圓福寺に向ふ。同寺に少憩の後の中一同焼香を終り晝食は同寺腕自慢の精進料理に僧侶の手酌は一同を好奇談笑裡に満腹せしめた。晝食を終つて●●君の時局談あり會員一同今更ら時局に對する認識を深め感銘を與へられたることは寔に喜びとする所である。

尚此の席上に於て評議員の改選を計り、萬場一致を以て●●君（再任）、●●君（新任）に決定、次で●●君の□□の経過報告あり、終つて僧侶の案内にて國寶聖徳太子自作の達磨を初め貴重なる寶物を拝觀、殊に有栖川宮家御下賜の御殿は同寺の由緒深きを物語るものとして驚異の眼を見張らせた。

歸途國寶松花茶席竝に八角院寶物を拝觀し●●幹事の御盡力を多謝して一同歸路に就けり、時に午後四時三十分。（●●記）

出席者（順序不同）

●● （中略：18人） ●●

この会合記録は 600 字程度の情報量である。会合記録からは「同窓会名」（□□）、「会合日時」（四月二十四日）、「会合場所」（石清水八幡宮など）、「参加人数」（馳せ参ぜられ集る者二十名）、「会合内容」（石清水八幡宮参拝など、評議員改選）、そして「人名」（●●）の情報が記載されている。

「同窓会名」に記載される部分に着目すると、13 行目に「□□の経過報告」とある。この同窓会名は「会合開催」（1 行目）の同窓会名と異なるもので、この記載から「同窓会間情報共有」を読み取ることができる。

「人名」が記載される部分に着目すると、4 行目に 3 人の人名の後「先輩」と記載されており、人名の「筆者との関係」を読み取れる。5 行目には「大蔵參與官」と記載され、人名の「職業」情報が読み取れる。6、12、16、17 行目には「幹事」、「評議員」、「幹事」、「●●記」と記載されており、人名の「同窓会役職」情報が読み取れる。6、10 行目には「●●君の案内」、「●●君の時局談」とあり、その人名による「会合での活動」情報が読み取れる。最後に、5、18 行目には「馳せ参ぜられ集る」、「出席者（順序不同）」と記載され、「馳せ参ぜられ集る」の前の 4 人、「出席者（順序不同）」以後の 20 人について「会合参加」とし

て読み取ることができる。

(4) 1957年1月号

1957年1月号に掲載された記事(「学園ニュース」『早稲田学報 1957年1月号』p.36)は以下である。

□□

—松山にて—

十一月三十日夜、關西汽船で大阪を發った●●總長一行は、十二月一日朝八時四國高濱港におり立ち、●●□□支部長ら多數校友の出迎えを受けた。一行は午前中●●氏が學長の松山商科大學および愛媛大學を訪問見學した。

午後一時から松山市伊豫銀行ホールにおいて□□主催の講演會が行われ、つめかけた四百餘の熱心な市民聴衆に、●●理事は”世界の動きと日本經濟”と題した●●總長は”當局と大衆”と題してそれぞれ講演を行い深い感銘を與えた。

講演會を終つて三時から、同所において□□を開催、在學生と父兄を交えた校友約百名の参加をみた。總長はじめ一行各氏の母校近況報告について校友および父兄から、様々な質問があり總長らがこれに答え説明をするなど活潑な意見の交換が行われ、三時間にわたり熱心に問題が話合われた。

また同夜六時から市内「桃太樓」において盛大な歓迎懇親會が催されたが、●●、(中略：7人)、●●の各氏等約七十名が集い歡談に時を過した。

この会合記録は400字程度の情報量である。会合記録からは「同窓会名」(□□)、「会合日時」(十二月一日)、「会合場所」(四國高濱港など)、「参加人数」(つめかけた四百餘、約百名の参加、約七十名が集い)、「会合内容」(大學を訪問、講演會)、そして「人名」(●●)の情報が記載されている。

「人名」が記載される部分に着目すると、3、7、8行目に「總長」、「理事」と記載されており、人名の「大学役職」が読み取れる。4行目には「□□支部長」と記載され、「同窓会役職」が読み取れる。5行目には「●●氏が學長」と記載され、「職業」情報が読み取れる。8行目には「講演を行い深い感銘を與えた」と記載され、人名による「会合での活動」情報が読み取れる。そして、14行目には「各氏等約七十名が集い」とあり、その前に羅列されている9人について「会合参加」として読み取ることができるが、全員分の人名は明らかにできない。「約七十名」とあることから、記録者は誰が参加していたのか詳細には把握していない可能性がある。また、この9人はいずれも文中の人名と一致しなかった。

(5) 1977年1月号

1977年1月号に掲載された記事(「ニュース NEWS」『早稲田学報 1977年1月号』p.52)は以下である。

第十二回□□

十一月十二日午後六時より校友会館三階一号室において第十二回□□が開かれた。

会は●●庶務課長の司会で始まり、最初に●●常任理事が「多忙のなか多数の出席を得て感謝している。夏以来、●●総長が体調をそこね、現在、良好な状態まで回復を見ているが、夜分の会合のため欠席させていただいたのでご了承を得たい。今回、招待状は三百十社に発送し、六十三社から出席の返事を得ている。□□からは常任幹事、総務委員、大学側からは理事、監事、学部長、本部部課長が出席させていただいている。この会は大学の近況をいろいろと申し上げるとともに、□□代表者の方々と大学の今後の問題等についても語り合うということを考えて催されている」とあいさつし、新学部長を順次紹介、五十一年の入試状況、予算等について述べ、「企業が能力開発というか、社員教育の面で使っている費用が約六千億円とうかがい驚いたが、これは全私立大学の予算の約七千億円と見合っており、大学は何をしているんだということを反省させられている。これまでの百年を振り返り、これからの百年を考えると大学はもう少し社会の中での知的創造活動のセンターとしての役割を果たさなければならないと思う。現在、学部長の先生方とも相談して、百周年記念事業計画等について案を練りつつある。早稲田大学は講義録で社会教育の先鞭をつけたが、ここらでその辺のことをもう一度振り返って考えてみたい。今後ともみなさんのご協力を得たい」と結んだ。

招待者を代表して●●佐藤工業常務・東京支店長が「本日のお招きを感謝している。大東亜戦争の勃発した年に卒業したが、そんなわれわれの時代でもストライキはやってもまだおっとりしていた。現在の大学当局の苦勞は大変なものと思うが、教育はいつの時代でも必要かつ大切なものであり、教えることはむつかしいことであるが、早稲田大学の発展は日本の発展であり、日本の発展は世界の発展につながる。大いに頑張っしてほしい。校友として百周年記念事業については協力を惜しまない」と謝辞を述べた。

ついで●●□□常任幹事が校友会維持費について、職域関係の一括納入など、理解ある協力方を要請し、乾杯の音頭をとった。

午後八時前まで歓談、校歌を合唱して散会した。

出席者

□□代表者 ●●(安藤建設) ●●(岩崎通信機) ●●(オリジン電気) ●●(岡三証券) ●●(共同印刷) ●●(金商又一) ●●(国際電電) ●●(サンケン電気) ●● ●●(佐藤工業) ●●(清水建設) ●●(主婦の友) ●●(商工中金) ●●(大東京火災) ●●(高島屋) ●●(トーメン) ●● ●●(東京不動産) ●●

(東京生命) ●● (東京都民銀行) ●● (日産生命) ●● (日本化薬) ●● (日本開発銀行) ●● (日本酸素) ●● (日本信号) ●● ●● (日本製粉) ●● (日本電電公社) ●● (日本飛行機) ●● (日本放送協会) ●● (菱光倉庫) ●● (富士銀行) ●● (藤倉電線) ●● (文化放送) ●● (北辰電機) ●● (本州製紙) ●● (松井建設) ●● (丸井) ●● (丸紅) ●● ●● (明治生命) ●● (明通) ●● (安田火災) ●● (山種証券)

□□ ●● 常任幹事、●● ●● ●● ●● 各総務委員

大学 ●● (中略: 2人) ●● 各常任理事 ●● (中略: 2人) ●● 各理事 ●● 監事 ●● 一文学部長 ●● 二文学部長 ●● 教育学部長 ●● 理工学部長 ●● 社会科学部長 ●● 教務部長 ●● 就職部長 ●● 人事部長 ●● 経理部長 ●● 施設部長 ●● 調度部長 ●● 文書課長 ●● 庶務課長 ●● 秘書課長

この会合記録は 1,400 字程度の情報量である。会合記録からは「同窓会名」(□□)、「会合日時」(十一月十二日午後六時)、「会合場所」(校友会館三階一号室)、「参加団体数」(六十三社から出席の返事)、「会合内容」(協力方を要請)、そして「人名」(●●)の情報が記載されている。

同窓会名に着目すると、複数の種類の同窓会名が会合記録に記載されているが、2行目に「□□が開かれた」とあり、「開催した同窓会」の情報が読み取れる。また、同じ2行目に「第十二回□□」と記載されており、「同窓会が開催された回数」が読み取れる。また、28行目に「出席者」とあり、その後羅列されている中に同窓会名(29、40行目)がある。したがって、ここから「参加した同窓会」についての情報を読み取ることができる。

次に、「人名」が記載される部分に着目すると、3、4、40~43行目に「庶務課長」、「常任理事」、「総長」などが記載されており、人名の「大学役職」が読み取れる。19、29~38行目には「佐藤工業常務・東京支店長」などが記載されており、人名の「職業」情報が読み取れる。26行目には「□□常任幹事」が記載されており、「同窓会役職」情報が読み取れる。18、25行目には「と結んだ」、「謝辞を述べた」と記載され、人名による「会合での活動」情報が読み取れる。そして、28行目に「出席者」とあり、その後の羅列されている72人について「会合参加者」として読み取れる。

(6) 1997年1月号

1997年1月号に掲載された記事(「会合だより」『早稲田学報1997年1月号』p.57)は以下である。

□□
6月8日午後4時30分、平成8年□□が、130余名の参加を得てアモール・エテルノ・リ

オ（三島）において開催された。今年は□□が主管し、12年ぶりに□□が幹事役となった。

□□は●●（31 教）□□幹事長の司会、●●（24 法）□□会長の開会の辞で幕を開け、●●（18 文）□□長のあいさつ、●●（30 文）□□幹事長の会務報告、●●（32 商）代議員の□□報告と続いた。

●●総長の記念講演では「グローバルな視野に立って大学改革を進めなければならない」と重点課題を力説された。

また、□□を代表して●●常任幹事が「早稲田カード奨学金、校友会給付奨学金を前進させるために校友各位の日頃の支援協力が不可欠」と呼び掛けられた。最期に次年度大会開催地区を代表して●●（33 商）□□副会長の閉会の辞で終了した。

午後6時、懇親会が、●●（38 商・40 商研）□□幹事の司会、●●（36 政経）幹事の開会あいさつ、●●（31 文）大会実行委員長、●●総長らのあいさつの後、●●（22 専商）評議員の乾杯の音頭で和やかに始まった。会場では●●（矢田部巳宮司・33 文）の夏祭りの華といわれる静岡県無形文化財の三島囃子が三島シャギリ保存会の有志によって賑やかに演奏された。

●●（36 政経）元応援団長の指揮のもと、声高らかに母校にエールを贈り、●●（37 法）幹事の中締めで午後8時、散会した。

<出席者>（カッコ内は所属稲門会）●●総長、●●常任幹事、●●秘書、●●校友課員、（□□）●●、（中略：11人）、●●、（□□）●●、●●、（□□）●●、（□□）●●、（□□）●●、（□□）●●、●●、●●、（□□）●●、（中略：3人）、●●、（□□）●●、（中略：7人）、●●、（□□）●●、（中略：4人）、●●、（□□）●●、（中略：21人）、●●、（□□）●●、●●、（□□）●●、（中略：2人）、●●、（□□）●●、●●、●●、（□□）●●、（中略：36人）、●●

この会合記録は700字程度の情報量である。会合記録からは「同窓会名」（□□）、「会合日時」（6月8日）、「会合場所」（アモール・エテルノ・リオ（三島））、「参加人数」（130余名の参加）、「会合内容」（会務報告、講演会）、そして「人名」（●●）の情報が記載されている。

同窓会名に着目すると、会合記録には複数の同窓会名が記載されており、3行目には「今年は□□が主管し、12年ぶりに□□が幹事役となった。」とあり「同窓会間の役職」が読み取れる。また、19行目に「<出席者>（カッコ内は所属稲門会）」と記載されており、「会合参加」の情報が読み取れる。

次に、人名に着目すると、5、6、12～15、17、18行目に「(31 教)」と記載されている。これは昭和31年教育学部を卒業したという意味で、人名について「卒業した年」および「卒業した学部」の情報が読み取れる。5、6、7、10、12～15、17～19行目に「□□幹事長」、「会長」などが記載されており、「同窓会役職」の情報が読み取れる。8、10、14、19行目には「総長」、「常任幹事」などが記載されており、「大学役職」の情報が読

み取れる。5～18行目には「記念講演（中略）力説された」などが記載されており、人名による「会合での活動」情報が読み取れる。そして、19行目では「＜出席者＞（カッコ内は所属稲門会）」が記載され、これ以降の115人について「会合参加」として読み取ることができる。さらに、羅列されている氏名の隣に「同窓会名」が記載されており、個人の「所属同窓会」についても読み取れる。

（7）2017年2月号

2017年2月号に掲載された記事（「WASEDA TOPICS」『早稲田学報2017年2月号』p. 7）は以下である。

第8回□□ゴルフ大会

2016年11月4日（金）、恒例の□□ゴルフ大会が埼玉県・久邇カントリークラブで開催されました。今年は47団体198人が参加。好評のフルショットガン方式を今回も採用し、大いに盛り上がりました。ホールアウト後のパーティーでは冒頭で●●代表幹事があいさつ。□□会長で□□推薦校友である●●氏が乾杯の音頭をとり、続いて各賞の表彰が行われました。締めくくりの校歌斉唱の後、●●事業委員長による2017年の案内と閉会の辞によって締めくくられました。

参加団体

□□（中略：45団体） □□

団体優勝 □□

個人優勝 □□ ●●氏

この会合記録は200字程度の情報量である。会合記録からは「同窓会名」（□□）、「会合日時」（2016年11月4日）、「会合場所」（埼玉県・久邇カントリークラブ）、「参加団体数」（47団体198人が参加）、「参加人数」（47団体198人が参加）、「会合内容」（ゴルフ大会）、そして「人名」（●●）の情報が記載されている。

同窓会名に着目すると、8行目に「参加団体」と記載されており、以下47の同窓会について「会合参加」の情報が読み取れる。

人名に着目すると、4、5、6行目に「代表幹事」、「会長」、「事業委員長」と記載されており、「同窓会役職」の情報が読み取れる。5行目には「推薦校友」と記載されており、「校友情報」に関する情報が読み取れる。また、4～6行目に「あいさつ」、「乾杯の音頭」、「閉会の辞」が記載されており、人名による「会合での活動」が読み取れる。同時にこの活動を行った人名について「会合参加者」とみなすことができる。ただし、参加人数198人に対し、人名は4人分しか確認できない。この4人は会合で、中心的な活動を行った人々であ

ることが「会合内容」から読み取れる。この事例から「会合内容」の中に「会合参加者」が記載される場合があることが明らかである。

2.5.3 『早稲田学報』の会合記録から読み取れる情報の変遷

年代別に会合記録からの読み取れる情報について、雑誌の初めに掲載された会合記録を参照し、細かくみてきた。読み取れる情報は時代によって異なるのだろうか。前項で分析したものを時系列に沿ってまとめたものが図2-4となる。

各年代の会合記録で必ず読み取ることのできる情報は「同窓会名 - 会合開催」、「人名-会合参加」、「会合日時」、「会合場所」、「会合内容」である。ただし、「人名-会合参加」については1957年や2017年の会合記録のように、会合に参加した全ての人名が明らかではない場合がある。2017年2月号の「稲門だより投稿のお願い」(p.105)には「出席者数は50名までの掲載」と記載されており、近年の多人数が参加する同窓会の会合の場合、その記録には人名が全員ではなく、一部のみ記載される可能性が高い。ただし、「人名-会合参加」が一部のみ記載される場合は、必ず「参加人数」が記載されている。そのため、会合に参加したが記載されなかった人名の数は把握できるが、その個人の特定はできない。

常に読み取れる5つの情報の他にも興味深い情報が読み取ることができる。「同窓会名」に着目すると、1977年の会合記録から「会合参加」した団体として同窓会名が記載されている。同窓会の交流は1938年の「同窓会間の情報共有」として行われていたことが確認できるが、明確に会合に参加した同窓会として明記されるようになったのは1977年以降となる。1977年以降は、同窓会間の交流以降は同窓会としての会合での「役職」も確認できる。

次に、「人名」に着目すると、会合には少なくとも1人はその人物に関する属性情報「同窓会役職」、「大学役職」、「職業」、「筆者との関係」、「卒業年」、「卒業学部」が記載されている。特に「同窓会役職」は1918年の対象とした会合記録を除いて全ての年の会合記録で記載されている。また、1918年までは同窓会の集団で行った「活動内容」のみが記載されていたが、1938年から「活動内容」に加えて個人の「会合での活動」が記載されるようになり、個人の行動も一部読み取ることができるようになっている。

120年以上もの間発行され続けてきた『早稲田学報』において継続的に掲載されてきた会合記録では、創刊年から現在まで読み取ることのできる基本的な情報にほぼ変化はない。どの同窓会がいつ何をしていたかという、創刊号から情報共有のためにあった記載形式は今も受け継がれており、この情報こそが大学同窓会にとって卒業生と常に共有する情報であったことがいえるだろう。

2.6 会合記録からのネットワーク・データ抽出の意義

2.6.1 『早稲田学報』から抽出可能な情報

本章は、大学同窓会誌が卒業生と大学や卒業生に関してどのような情報を共有していたかを早稲田大学校友会が発行している『早稲田学報』を対象に、目次や記事の見出しに着目した雑誌編成分析およびその内容分析を行った。

雑誌編成分析では、『早稲田学報』に掲載された記事について、その内容に着目し、分類を行った。まず、『早稲田学報』で書かれている見出しを列挙し、その記事の内容を「大学」、「卒業生」、「その他」に分類する。そして、「大学」、「卒業生」で分類された記事について、さらに読み取れる情報からコード化を行った。

大学に関する記事では、1957年までにかけて、大学の講義、行事や会合、大学教員の動静など大学教員視点の情報と学生らが組織する団体（研究会）の会合やスポーツなど学生視点の情報の2つの内容が掲載されていた。大学の講義内容など学業や研究などの大学教員視点の内容が大学同窓会誌発行初期から掲載されていたが、時代経つにつれてこの内容はなくなり、学生の私生活を含めた大学生活内容へと変化している。卒業生に関する記事では、創刊号から卒業生個々人の動静について詳細に掲載されていたが、1997年以降掲載されなくなった。また、一方で1977年以降には同窓会や卒業生の活動に関する紹介や卒業生・同窓会主催のイベント、選挙の結果が掲載されている。卒業生カテゴリーに関する情報の1つの会合はすべての時期でその内容を確認することができる。様々な同窓会が行う会合の情報は大学同窓会誌にとって共有されるべき情報として時代に関係なく重視されていた。

続いて時代に関係なく常に情報が共有されていた会合記録についてどのような情報が読み取れるのか具体的な事例を取り上げて内容分析を行った。

各年代の会合記録で必ず読み取ることのできる情報は「同窓会名 - 会合開催」、「人名 - 会合参加」、「会合日時」、「会合場所」、「会合内容」であった。120年以上もの間、発行され続けてきた『早稲田学報』において継続的に掲載されてきた会合記録では、創刊年から現在まで読み取ることのできる基本的な情報にほぼ変化はない。どの同窓会がいつ何をしていたかという、創刊号から情報共有のために使用された記載形式は現在まで受け継がれており、この情報こそが大学同窓会にとって卒業生と常に共有する情報であった。

地方にいながら大学や卒業生に関する情報を共有することを目的として発行された大学同窓会誌はその役目を絶やすことなく、特に同窓会の会合の情報をほぼ変わらない形式で掲載しつづけているのである。

2.6.2 大学同窓会ネットワークを捉える新たな視点

海外の大学同窓会における調査では、調査票を用いる方法が一般的であった。調査票を用いてネットワークを調査する場合、得られるネットワーク・データは被調査者を中心としたネットワーク（エゴセントリック・ネットワーク）である。例えば、先行研究で、同窓会に参加したことはあるか（Holmes 2009）、大学に卒業生として関わっているか（Taylor and

Martin 1995) などの調査票を使った調査が行われている。調査票による調査は、被調査者の主観に頼るため、被調査者と他の卒業生個人との詳しいつながりを見ることは難しく、卒業生集団との直接的なつながりだけの観察になることが多い。大学同窓会のネットワークについて研究するときにはこの点が課題になる。

大学同窓会には、クラス、学年、地域、職業など共通する属性を基盤とした様々な団体が存在している。卒業生は自分の持つ属性に一致するようであれば、その属性を基盤とする団体に所属することができる。このため、複数の団体に参加する卒業生が確認されており(志垣 2011)、その結果、卒業生個々の間に様々なつながりが生じていることが想像される。こうしたつながりは、「集まりを構成するすべての主体間の関係によって構成される全体ネットワーク」(三隅 2015:66)として捉えることが有効である(ソシオセントリック・ネットワーク)。しかし、そうした同窓会内のすべての個人の複雑な関係を把握するには、上記の問題から調査票による方法は現実的ではない。

本章で述べたように、大学同窓会誌に掲載される会合記録は、活動のあった同窓会団体によって報告されており、どの時代でもその記録を確認することができる。そして、会合記録から「同窓会名・会合開催」、「人名・会合参加」、「会合日時」、「会合場所」、「会合内容」の5つの情報が安定して読み取ることができた。会合記録から安定して得られる情報を用いることで、個々人がどの会合に参加していたのか整理することができる。大学同窓会内の個々の動きを把握することができるため、大学同窓会をソシオセントリック・ネットワークとして捉えることが可能となる。大学同窓会誌に掲載される会合記録は、従来、エゴセントリック・ネットワークとしてだけ捉えられていた大学同窓会研究に新たにソシオセントリック・ネットワークの視点を提供するものとなる。

次章では、会合記録を用いて定量的なネットワーク・データの生成方法について検討を行う。

第3章 「会合記録」からアフィリエーション・ネットワーク・データを抽出する方法の検討

3.1 アフィリエーション・ネットワーク

安田 (1997) によると、数学的にネットワークを表すには、ネットワークを構成する行為者と、行為者間の関係が明らかである必要がある。行為者は点、行為者間の関係は線で表されるグラフをソシオグラムと呼ぶ。また、これらの情報は行列を用いて表すこともできる。一般的には、行為者は個人のみなど1種類の対象を指すが、このモデルを拡張して2種類以上の行為者を定義することもできる。そのひとつとして個人と組織の関係を数学的に表すアフィリエーション・ネットワーク (金光 2003; Breiger 1974) がある。

アフィリエーション・ネットワークとは個人と組織の関係を数学的に表した Breiger の”membership network analysis”のことを指し、ソシオセントリック・ネットワークの構造特性を捉えるための道具の1つである (三隅 2015)。Breiger は社会学でそれまで記述的に語られてきた個人と社会の関係を数学的に表現することに初めて成功した。グラフ論ではアクターが2種類あるネットワークを2モード・ネットワークと呼称するが、Breiger 本人が”Duality of persons & Groups”の表現を使っているように、個人と組織の所属関係を表していることから、金光はアフィリエーション・ネットワーク (以下 AN) という表現が適切であると指摘した。

標準的ネットワークは点集合と点を結ぶ線の集合の組とで定義される。一方、AN の場合は、点集合が2分割され、一方の点集合の要素である点は他の点集合の要素であるいずれかの点と結合するのみで、それぞれの集合内では点の結合はないという特徴がある。金光によれば、実はこのモデルの有用性が認識され始めるのは近年の話である。その理由として社会理論においてマイクロ-マクロ・リンクが重要なテーマとなっており、個人と組織の関係について計量的にとらえる必要がでてきたこと、中心性モデルなど他分野からの方法が2モード・グラフに適用できることが明らかになり、分析道具が増えたこと、さらには、社会関係資本に関する議論が台頭してきたことが挙げられる。AN を用いたモデルは、現在、社会ネットワーク分析において一定の地位を築いている。

AN データの生成には個人と個人が所属する集団・組織の情報が必要である。社会学の分野ではネットワーク・データの収集は調査票の手法を用いることが多い (森岡 1998)。しかしながら、AN データのように、データの対象とする集団・組織内の個人すべての情報が必要となるネットワーク・データは調査対象の増加に伴い調査コストが膨大なものとなる (平松ほか 2010)。集団内の個人すべての情報を取得する方法として、近年では電子データを利用する事例も増えている。例えば、SNS の1つである mixi の情報 (松尾・安田 2007) や WEB で検索できる情報 (松尾ほか 2005) を活用し、個人間のネットワーク・データ抽出が行われている。電子データの活用は、被調査者と直接的に関わらなくても大量の情報が手に入るという点で非常に魅力的である。しかも社会調査と比べると低コストである。しかしながら、この方法では電子データとして存在する情報しか扱えず、対象は限定されたものになる。

以上が現時点においては AN データ作成のための方法であるが、本章では、集団・組織によって作成されている「会合記録」に着目し、これをネットワーク分析のための新たな AN データ生成源として提案する。前章でみたように、大学同窓会誌は、研究資料として発行されたわけではなく、卒業生の情報共有や大学の思想を大学外の人々に伝えることが発行の目的であった。しかし、大学同窓会誌に掲載されている会合記録に注目すると、これから継続的に会合と会合参加者の情報を読み取ることができるのである。

会合記録は、従来見落とされていたが、貴重な情報源である。本章では会合記録から AN データを抽出する方法を検討する。ただし、記録を扱うがゆえの問題が存在する。この問題について次節で整理を行う。なお、本章では具体的検討のために、継続して発行され一般に公開されている早稲田大学同窓会誌『早稲田学報』に掲載された「会合記録」を事例として用いる。

3.2 会合記録データからの抽出における問題点

複数の情報源を扱う場合、その情報源から読み取れる情報の扱いに問題が生じる。例えば、ある年の同窓会誌に記載されている氏名とその 2 か月後に発刊された同窓会誌の会合記録に記載されている氏名が同一の人物を指しているかを考える必要がある。このような「単一あるいは複数の情報源にまたがるレコード集合の中から、同一の実体を参照するペアまたはグループを識別する問題」(相澤ほか 2005:576) は情報工学分野では「レコード同定」と呼ばれる。同定問題は特定の分野の問題ではない。医学分野では医療品取り違えミスを防止するための薬品の同定(大谷ほか 2006)、情報学では大学における生涯 ID を付与するための学生・卒業生の同定(太田ほか 2010) など様々な分野で取り上げられており、その記録の特徴を活用した方法が検討されている。

記録からネットワーク・データを抽出する場合には、氏名データの同定が問題となる。この問題には「記載のばらつき」(港・相澤 2010) と「同姓同名」の 2 つがある。「記載のばらつき」が生じる原因の 1 つとして「異体字」がある。「異体字」は、「正字」と呼ばれる漢字と意味は同じではあるが、異なる文字形態を持つ。我々は「異体字」を知識や経験からごく自然に「正字」と同一視しており、戸籍や日常など様々な場面で「異体字」を使用している(小熊ほか 2000)。そのため、異なる文字列をした 2 個人が同一人物である可能性がある。もう一つが同姓同名の問題である(松尾ほか 2005; 高久ほか 2009)。これは 2 個人が同じ文字列であっても、両者は別人物の可能性があり得る。ただし、これは、社会調査や電子データでも生じる問題でもある。そこでは議論された形跡がほとんど見られないが、本来、解決しておくべき課題である。

こうした問題の多くは、松尾ほかのように会合に関係する個々人全てを識別できるデータベース(以下、「会員情報 DB」と記す)が明らかであれば解消できる。しかし、一般には外部の参照データは入手できないことが多い。会員情報 DB が不明の場合、記録内の氏名等のデータは、たとえ同じ氏名であっても当初はすべて異なるものであるとしておく必要が

ある。その上で、何らかの手段を使って氏名 a と氏名 b は同じ人物なのか否かを判断することになる。これは会合名 A と会合名 B についても同様である。こうした作業は特に社会ネットワークの分析の場合には重要である。個人の同定作業の失敗は観察すべきネットワークと異なるものとなり、例えば「弱い紐帯」(Granovetter 1973) を見逃すことにつながる。

こうした問題の存在を踏まえ、本章では、会員情報 DB のような外部参照データが入手できない場合でも、会合記録内の情報を組織的に活用することで、信頼度の高い AN データを生成する方法を検討する。

3.3 会合記録からの個人・組織情報抽出に向けて

3.3.1 同窓会会合記録からの情報の切り出し

AN データ抽出には、会合記録からの個人・組織情報を切り出すが必要になる。『早稲田学報』の場合、会合記録は図 3-1 の形式で掲載され、そこに「同窓会名・会合名」、「会合内容」がある。「会合内容」は、会合日時、会合場所をはじめとして、その会合がどのような会合であったのかについての報告である。報告の最後にはその会合に参加した「会合出席者」の名簿がある。AN データのアクターとなる個人及び組織とは、それぞれここでの「会合出席者」及び「同窓会名・会合名」の情報が該当する。ところで、AN では個人・組織情報という表現を一般に使うことが多いが、この事例における組織とは、会合記録のある同窓会の会合が対応する。このため、以降では AN における一般表現である「個人・組織」ではなく、「個人・会合」と表記する。

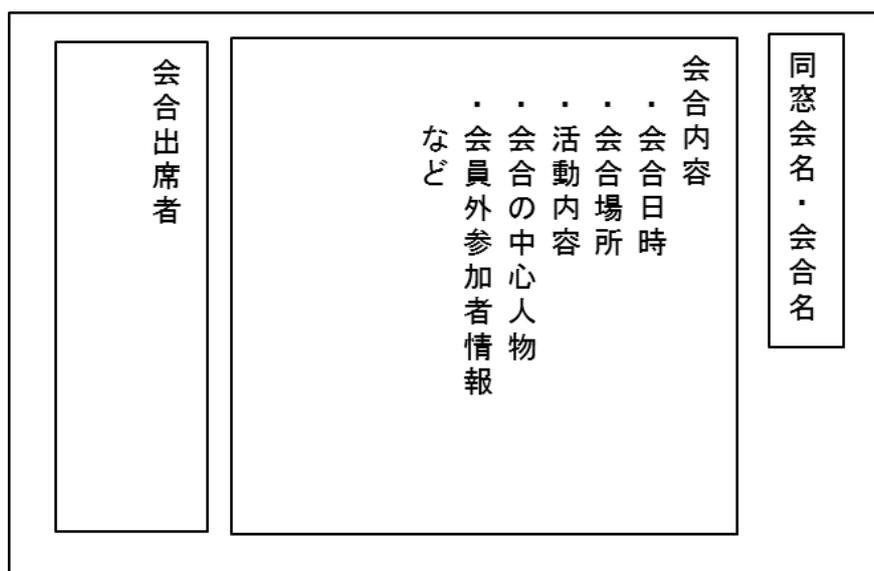


図 3-1 同窓会会誌会合記録の記載形式

会合記録の記載には次の2つの例外パターンがある。一つは、切り出す対象である「会合出席者」「同窓会名・会合名」が「会合内容」に含まれている場合である。こうした場合には、機械的に情報を切り出すと欠損が起こってしまう。しかしながら、会合内容に出現する氏名をただ拾うことは会合出席者の氏名と重なる場合もあり、文脈を把握した切り出しが必要となる。もう一つは、「会合出席者」の欄に別の情報が付加されている場合である。例えば、会合において同窓会の役員改選が行われると新役員が「会合出席者」の後に紹介されている場合がある。この場合、会合記録に氏名の情報があったとしても、それが参加者なのかどうか判断しなければならない。この場合も機械的な切り出しは難しい。同様な問題は「同窓会・会合名」においても生じる。こうしたことから、会合記録からの情報切り出し作業は、現状では、文脈を把握できる人手に大きく依存する。

3.3.2 同窓会会合記録の個人・会合情報の特徴

同窓会会合記録から切り出した個人や会合の情報には、記載のばらつきが含まれている。会合の活動記録は、会合参加者が記録を行い、それを全学同窓会の事務局が受け取って職員等の手で転記される。情報が複数の人物を経由するため、誤りが混入しやすい状況となっている。

今後の作業のため、個人と会合それぞれを規定する氏名と会合名について、先行研究で明らかにされているものを含め、記載のばらつきについて分類しておく。

まず、個人を規定する氏名（の文字列）のばらつきについては2つに分類できる。一つは「記載ミス」である。記載ミスにはパターン化されているものとそうでないものがある。前者は異体字であり、後者は間違いやすい漢字、記録者の勘違いによるものなど様々である。もう一つは、表現の違いによる記載のばらつき（以下、「表現のばらつき」と呼ぶ）である。氏名の後に属性、例えば「教授」、あるいは「妻」「子息」といった付加情報が表記されている場合が表現のばらつきとなる。同窓会会合の出席者は同窓会会員が原則であるが、当然ながら会員外からの参加もある。会員外の人物を明確にすることを目的に付加情報を表記している場合が多い。

さらに、表現のばらつきには「属性の付加のされ方の違い」と「表現の違い」がある。まず、属性の付加のされ方については、付加される場所と付加する氏名について違いがある。前者は氏名の姓の後ろに付加されるもの、氏名の最後に付加される場合がある。付加情報は、「教授」のように本人の属性を示す場合もあれば、「妻」「子息」のように出席者との関係を示す場合もある。後者は本人でない人物を表現している。次に、表現の違いについては2つのパターンがある。一つは「教授」、「募金委員」といった同じ個人を指すものであっても異なる表現を用いている場合である。もう一つは「妻」、「夫人」といった同義語を使っている場合である。

会合（組織）を規定する会合名についても同様の問題がある。これには記載のばらつきとして表現のばらつきが存在し、2つのパターンが確認された。一つは、同窓会を指す言葉と

して、「校友会」、「支部」、「稲門会」などの表現の違いである。もう一つは表現の省略で、「昭和」を「昭」のように省略するパターンである。

3.4 会合記録からのアフィリエイト・ネットワーク・データ生成

3.4.1 AN データ生成のための処理手順

前節では同窓会誌『早稲田学報』を事例に記載のばらつきについて述べた。この問題を解決するために、港・相澤（2010）による「1字違いまでの記載のばらつきを含む同一個人の特定化の方法」を参考に、個人の属性情報を付加することで問題の解決を試みる。なお、港・相澤の場合は、特徴素としての記載のばらつきを探るための作業が目的であったので、属性情報付加による1字違いのペアが本当に同一人物であるかについてまで考慮した議論でないことを言及しておく。

異なる人物を誤って同一視することを可能な限り回避するため、港・相澤の1字違いまでに着目する視点を適用しつつ、会合記録から取り出せる属性情報を活用する方法を考える。これは、外部情報である会員情報データベース（本稿ではこれを「会員情報DB」と記している）が存在しない場合に取得可能な最善の方法であると考えられる。この方針のもとで、AN データ抽出を次の5つのステップに分けて行う。

ステップⅠ

同窓会会合記録から、氏名及び組織名データに加えて、これらの特定に必要な属性情報データも取り出す。

ステップⅡ

切り出したデータを異体字と表現のばらつきに関する処理を行い、統一した表現に置き換える。

ステップⅢ

次のステップⅣの個人特定化の前処理として、ステップⅡで整形処理し統一化したデータ群から同姓同名及び1字違い氏名ペアを抽出し、リスト化する。

ステップⅣ

ステップⅢで抽出したリスト化したデータを属性情報を用いて特定化する作業を行う。

ステップⅤ

抽出した個人とその個人が参加したグループのデータからAN データを生成する。

以下、各ステップについて詳しく説明する。

3.4.2 ステップⅠ（会合記録からのデータ切り出し）

AN データ生成には、個人と会合への参加情報が必要である。ここでは、個人を会合記録

から入手できる属性情報を付加した次の集合族

$$\text{個人} : P_i = \{N_i, O_i, G_i, T_i\} \quad (1 \leq i \leq n)$$

として定義する。個人を複数要素で記述するのは、これらを組み合わせることで、誤って記録されている可能性のある情報から個人を特定するためである。ここで N_i は氏名データ、 O_i はこの個人が参加した同窓会の下位グループ（以下、「同窓会グループ」と略す）の情報、 G_i はゲスト情報、 T_i は参加した会合の日時情報である、 n は会合記録から取り出された個人の総数である。 O_i 、 G_i 、 T_i はそれぞれが集合であるが、それらの各要素はそれぞれ一つの会合記録に対応した内容である。ゲスト情報 G_i は参加した個人が参加した会合においてその同窓会グループの会員か否かを表し、会員であれば0、会員でなければ1とした。

切り出したデータには記載のばらつきが含まれている。会員情報 DB のように正解情報がない中で個人を特定していく必要があるが、特定するための情報（会合情報、日時情報、ゲスト情報）にも記載のばらつきの存在を考えなければならない。ここで扱った事例ではそれらについても対応した。

3.4.3 ステップⅡ（全データに共通する記載のばらつきへの対処）とステップⅢ

氏名データ N_i に関し、異体字と表現のばらつきという 2 種類の記載のばらつきへの対処法について述べる。

異体字は、異体字と正字の組み合わせデータベースを用いて処理した。データベースは、『漢字データベース』による「異体字データベース」の「人名用漢字」「常用漢字表異体字」を用いた⁶⁾。「人名用漢字」は 2010 年において「法務省・人名漢字表の別表 2 の 1 で同一の字種とされる漢字および人名漢字表別表 2 の 2 で規定される異体字」であり、「常用漢字表異体字」は 2010 年の「文科省・常用漢字表に記載された異体字」である。これらから正字と異体字を、

{亜、 亞}

のペアで表現する。すべての漢字において、ペアに該当する漢字は、正字によって統一する。例えば、以下の作業を行う。

(例 1) 亜細亜→処理（修正候補文字：亜 ⇒ 統一文字：亜）→亜細亜

(例 2) 亞細亞→処理（修正候補文字：亞 ⇒ 統一文字：亜）→亜細亜

表現のばらつきは次のように処理した。会合名データについては、「昭和」「昭」のような年号の表記がばらついていたり、「校友会」「支部」「稲門会」のように会合名について表記が

混在している。これらを機械的に処理するために、異体字の統一表と同様に統一表(変換表)を作成の上、機械的に全データの表記の統一処理を行った。氏名データ N_i に関しても同様に処理して、統一化を行った。

統一化されたデータ群には同姓同名や1字違い氏名が存在している。これらが同一人物であるかどうかの判断は、ネットワーク分析を行う上で非常に重要である。その作業をステップIVで行うが、そのための前処理として、ステップIIIで、データ群から同姓同名や1字違い氏名ペアを抽出し、それらの個人データをリスト化する。

3.4.4 ステップIV(個人同定作業)

ステップIIIで抽出したリストの個人データ群について、それらが同一の個人かどうかの判断を以下の(1)(2)の方法で行う。

(1) 同姓同名に対する対処

2個人 P_i と P_j において、 $N_i = N_j(i \neq j)$ の時、常識的には両者は同じ人物と判断するであろうが、同姓同名の異なる個人の可能性もあり得る。これをどのように判断するかは、それらの個人が同じ空間と時間を共有していたかどうかで判断できるだろう。

両者が異なる時間に現れるとき、即ち、 $T_i \cap T_j = \emptyset(i \neq j)$ のとき、 P_i と P_j は同一人物であるとみなす。もちろん、この判断は完全に正しいものではない。しかし、判断時点での参照情報がこれ以上ない中では、他者であると判断するよりは同一人物と判断するのが妥当である。この時、以下のように両データを1つにマージする。

$$P_i + P_j \rightarrow P_i = \{N_i, O_i + O_j, G_i + G_j, T_i + T_j\} \quad \dots\dots (1)$$

ここで、マージ後の要素数はそれぞれ $|O_i + O_j| = |G_i + G_j| = |T_i + T_j|$ と同一になるが、 $\{O_i + O_j, G_i + G_j, T_i + T_j\}$ の各要素はマージした会合全ての情報を含むことを注意しておく。さらに注意しておきたいのは、前述したように、 $T_i \cap T_j = \emptyset$ は同一人物として判定する十分条件ではないということである。例えば、 P_i と P_j について $T_i \cap T_j = \emptyset$ から $P_i = P_j$ 判定していた時に $N_i = N_j = N_k(i \neq j \neq k)$ なる3人目の個人 P_k が存在し、 $T_i \cap T_k \neq \emptyset$ であったとしよう。この時 $T_i \cap T_k \neq \emptyset$ ゆえに P_i と P_k については $P_i = P_k$ と判定される。この状況で、 $T_j \cap T_k = \emptyset$ であったとすると、 $P_j = P_k$ と判定することになるが、そうすると3者の関係に数学的矛盾が生じる。この矛盾は先の条件が十分条件でないことから来ており、判定が誤っていることを示唆している。こうしたことから、本稿では同じ氏名データを持つ複数の個人の組み合わせの中に、1組でも別人物と判定がされるものがあった場合、それら個人すべてを別人物と見なし、上記マージ作業は取り消す。

(2) 氏名データが1文字異なる場合の対処

2個人における1字違いの氏名データの対処の方法について述べる。この方法は、同窓会グループへの参加の有無とそれへの参加日時、そしてゲスト情報を利用して両者が別人物かどうか判定するものである。まず2個人についての判定プロセスを述べる。その次に3個人以上が関わる場合の同定問題について論じる。

2個人については、 $i \neq j$ の個人 P_i と P_j が別人物であるかどうか、同窓会グループ情報 (O_i, O_j) 、ゲスト情報 (G_i, G_j) と参加した会合日時 (T_i, T_j) の関係から判定していく。両者が共通に参加した会合 $(= O_i \cap O_j)$ において、両者が別人物かどうかの同定パターンは表3-1のようにまとめることができる。表3-1の組合せ3の「両者とも会員外で同じ会合に参加していない2個人」の場合、両者が同一人物である根拠をここで用いている情報の範囲では同定できないため、別人物として扱った。

表3-1 同一会合参加個人のゲスト及び会合日時情報による同定パターン

組合せ	$G_i + G_j$	$T_i \cap T_j$	判定
1	0	$= \emptyset$	同一人物の可能性
2	1	$= \emptyset$	別人物
3	2	$= \emptyset$	別人物
4	0	$\neq \emptyset$	別人物
5	1	$\neq \emptyset$	別人物
6	2	$\neq \emptyset$	別人物

表3-1によって同一人物と判定した場合、両者は式(1)で示した形式でマージする。ただし、この場合、氏名データは1字異なる文字情報双方を含めて保持しておく必要があり、この点が先とは異なる。

次に3個人 $P_i (i = 1, 2, 3)$ の場合を検討する。3個人では2個人にはなかった問題が発生する。例えば、

$$N_1 = \text{日本太郎}、N_2 = \text{日木太郎}、N_3 = \text{日本太郎}$$

のケースを考えよう。 N_2 と N_3 は N_1 とそれぞれ1文字違いの氏名データである。この3個人を表3-1の方法だけで判定をすると、 $P_1 = P_2、P_1 = P_3$ の時に $P_2 \neq P_3$ と数学的には矛盾した結果が得られてしまう可能性がある。これは3個人の時に現れる固有の問題である。3個人について取りえるパターンは、表2のように整理できる。

表3-2は、2個人の判定結果に応じた3個人についての妥当な判定のパターンを整理したものである。1文字異なる3個人の関係(P_1 と $P_2、P_2$ と $P_3、P_3$ と P_1)それぞれについて表3-1で別人物かどうかの判定を行い、その結果から表2のパターンで3個人の判定を行えばよ

い。4 個人以上は 3 個人に分解できるため、表 3-2 によって同様に処理できる。

表 3-2 3 個人についての同定パターン

P_1 と P_2	P_2 と P_3	P_3 と P_1	判定
同一	同一	同一	$P_1 = P_2 = P_3$
同一	別人物	別人物	$P_1 = P_2 \neq P_3$
別人物	同一	別人物	$P_2 = P_3 \neq P_1$
別人物	別人物	同一	$P_3 = P_1 \neq P_2$
同一	同一	別人物	$P_1 \neq P_2 \neq P_3$
同一	別人物	同一	$P_1 \neq P_2 \neq P_3$
別人物	同一	同一	$P_1 \neq P_2 \neq P_3$
別人物	別人物	別人物	$P_1 \neq P_2 \neq P_3$

3.4.5 ステップV（アフィリエーション・ネットワーク・データの生成）

ステップIVまでで、同姓同名問題、記載のばらつきの問題を処理し、形式を整え個人データ群 $P_i (1 \leq i \leq n')$ が完成する（統合後のデータ数 n' は $n' \leq n$ ）。これらのデータは外部情報である会員情報 DB を用いず、会合記録の公開情報だけを使って生成したものであることを注意しておきたい。

個人データ P_i から AN データを生成するには、次のようにする。 $P_i (1 \leq i \leq n')$ における O_i と T_i から全ての個人が参加した同窓会グループの会合 $M_i (1 \leq i \leq m)$ を求める。ある個人が参加した会合の情報を行ベクトル、ある会合に参加している個人の情報を列ベクトルとする行例を考え、全個人 P_i に対し、 P_i が参加した会合のセルには数値 1 をそうでない場合は 0 をおいていくことで、AN データは生成される。

3.5 会合記録からのアフィリエーション・ネットワーク・データ抽出例

3.5.1 AN データの抽出

前節までの処理を一貫したアルゴリズムで記述し、R 言語でプログラムを作成した（巻末資料 3 を参照）。そのプログラムによって 1961 年から 1964 年の『早稲田学報』から得られる 1961 年から 1963 年の 3 年間分の AN データを生成した。1961 年から 1963 年で会合記録数は 255、これらから切り出した会合への参加者数は 11,388 人であった。この記録に対し、本稿の処理手法を適用したところ会合への参加者数は 7,493 人となった。その中で、異体字を除く記載のばらつき等があった個人データを表 3-3 に示す。参考までに、会合情報を掲載していた同窓会のグループ数は 154 であった。

表 3-3 記載のばらつきを含む個人数と同姓同名者を別人物と判定したペア数

表現の ばらつき	1 字違いの 氏名データ	同姓同名者の 別人物判定ペア数
85 人	125 人	3 組

3.5.2 抽出したアフィリエイト・ネットワーク・データの検証

事例として用いた早稲田大学の 154 の同窓会グループの中で、1961 年以前の『会員名簿』を利用し、ある 1 つの学年で結成された同窓会グループについてのみ正解データとしての会員情報 DB を作成できた。この同窓会グループを対象に、前項で生成した 1961 年から 1963 年の 3 年間分を抽出した AN データの誤りがどの程度低減できたかについて、正解データである会員情報 DB の氏名データを用いて確認を行った。ただし、正解データである会員情報 DB についても異体字の処理は施した。

誤りの確認作業は 2 種類行った。一つは抽出した 3 年間分の AN データの正しさの検証である。ゲストである個人を除き、処理せずに取り出した個人データと処理した後の個人データについて、会員情報 DB と単純に比較した。結果を表 3-4 に示す。記載のばらつきの存在により誤ってカウントするため、参加会員数は正しい数値よりも増加することになるが、本稿の手法によって、その増加を半分程度に抑えていることを確認できる。

表 3-4 同定処理の有無による会合参加者数の差異

同定処理	参加会員数	正解との不一致数 (参加者数に対する比率)
無し	176 人	53 人 (30.1%)
有り	152 人	29 人 (19.1%)

もう一つは、本来、別人物である個人をどの程度同一人物として誤って同定してしまうかの検証である。この場合 1 字違いの個人 22 名と同姓同名の個人 100 名が存在していた。これらについて、正解データを用いて別人物と誤って判断した例を調べたところ双方共にゼロであった。

同定処理の効果を示すために、同定処理の前後の AN グラフの違いを表したのが図 3-2 である。ただし、検証の対象とした同窓会グループの全体を扱うとグラフが複雑であるため、ここではこのグループ内の同定処理を行ったある 2 個人についての事例を示している。図 3-2 左が同定処理前、右が同定処理を行った後の AN グラフである。丸 (○) と三角 (△) はそれぞれ異なる 2 個人を表している。黒の四角 (■) は会合である。同定処理後同一人物と判断された 2 個人 (○と△) は、同定前は図 3-2 左の複数の丸 (○) と三角 (△) にそれ

それぞれ対応している。本来、2 個人しか存在しないはずが、同定処理を行わなかった場合 6 個人存在しているものとしてネットワークをみることになる。このように、同定処理を行わないと実際の AN ネットワークとは随分と異なるネットワークを観察してしまう危険性がある。

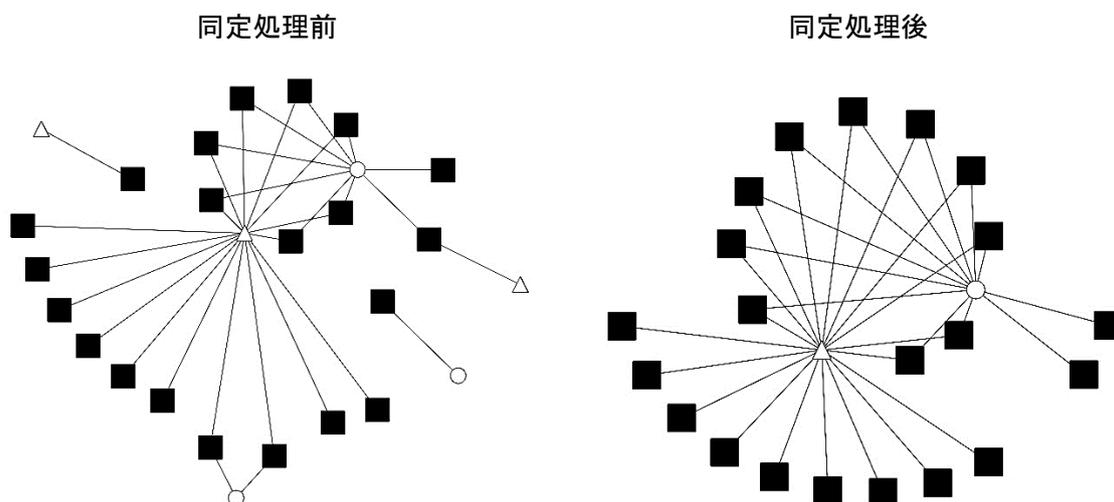


図 3-2 ある同窓会グループの 2 個人に着目した AN グラフ

会員情報 DB という正解のない中で、限界は存在するが、本稿の方法にて、入手できる会合記録情報だけから誤りを低減できることを示した。どのような社会調査データでも誤りの混入は避けられないが、会合記録の場合、記録内の情報を組織的に組み合わせることで、より精度の高い AN データを生成することが可能である。

3.6 本手法についてのまとめと今後の課題

本章では、集団・組織についてのネットワーク分析のために、社会調査やネット上の電子データ以外に、組織的に残されてきた会合記録に着目することを提案した。これまで注目されていなかったが、雑誌媒体等に記された会合記録もネットワーク分析にとって重要な情報源であり、これらから個人の情報を切り出すことによって、参加という人々の行為の視点での AN データを生成できる。さらに、この AN データを構成するそれぞれの会合については開催された日時がわかっており、この時の AN データは時系列データとしての性質を持っている。それゆえ、このデータによって集団・組織内の動的なネットワーク変化の観察に応用していくことも期待できる。

また、ここでは、誤りを含む会合記録に対し、記録内の情報だけを使って誤りを低減する方法を検討した。この方法は、外部の参照データに依存せず、会合記録だけで誤りの修復を完結し、一般性を持つものである。会合記録一般について、その情報の範囲内で信頼度の高い AN データを生成するのに活用していけるだろう。

なお、本稿では議論できなかったが、会合記録からの情報の「切り出し・取り出し」においていくつか課題がある。会合記録は、情報が不規則に記録されているため、切り出すルールを見出すのが難しく、現状では切り出しは人手に頼らざるを得ない。今後は「会合記録」を用いた分析の事例が増えて情報の切り出しについてのルールを発見していければ、会合記録を活用したネットワーク分析はさらに容易になるものと思われる。

第4章 第1部の総括

4.1 第1部の成果のまとめ

大学同窓会の研究において、従来、大学と卒業生そして卒業生間のネットワークの重要性について言及されてきた。しかしそれらは定性なレベルに留まっていた。定量的にネットワークを研究する方法がなかったからである。この解決のために、第1部では、記録データとしての大学同窓会誌に着目し、早稲田大学校友会が発行する大学同窓会誌『早稲田学報』を対象に、大学同窓会についての定量研究を可能するアフィリエーション・ネットワーク・データ抽出方法を開発した。

第1部で得られた結果は以下の通りである。

第1部2章では、大学同窓会誌にどのような情報が掲載されているかについて、年代別に区切った期間において代表的な7冊の『早稲田学報』（1897年3月号、1918年2月号、1938年5月号、1957年1月号、1977年1月号、1997年1月号、2017年2月号）を取り上げ、そこに掲載された記事について内容分析を行った。1897年から2017年でサンプリングした大学同窓会誌には大学や卒業生の情報が掲載されており、それらの情報を詳しく調べると、どの年代にも「卒業生の会合」に関する情報が掲載されていることがわかった。これらは卒業生が結成する同窓会の活動内容についての記事であり、会合を行った同窓会がその内容を同窓会誌事務局に寄稿し、掲載されたものである。集団の行動に関するこうした記録は、それによって卒業生らの参加情報が得られるという意味でネットワーク研究における行動データとして応用できる価値の高いものである。

さらに、同窓会誌内の会合記録について各号の最初に掲載されている会合記録を対象に、これから抽出できる情報を詳細に調べた。その結果、会合記録からは、同窓会を開催した「同窓会名」、「会合参加者の氏名」、「会合の日時」、「会合場所」、「会合の内容」といった5つの情報を必ず抽出できることがわかった。これらの情報から卒業生個々人の参加情報、そしてどういった人々がそこに参加していたかを明らかにできるため、会合記録は卒業生の客観的な行動データとして用いることが可能である。『早稲田学報』の場合は、こうした記録が120年間も掲載されている。長期にわたって発行されている同窓会誌は、長期間の時系列変化を読み取るネットワーク・データとしての利用も期待できる。

この結果を受けて、第1部3章において、大学同窓会のネットワークを定量的に把握するために、会合記録からアフィリエーション・ネットワーク (Breiger 1974; 金光 2003) ・データを抽出する方法を述べた。これによって、卒業生の大学同窓会への参加行動を数学的に表現することが可能になる。しかしながら、大学同窓会の会合記録からネットワーク・データを生成する場合、いくつかの問題があった。会合に参加している人々を同定するための外部情報としての会員データベースが入手できない集団であるため、会合記録にある情報のみから、異字体などの「記載のばらつき」や「同姓同名」といった2つの問題に対処する必要がある。第1部3章では、外部情報が利用できない場合でも、「氏名」、「個人が参加した会合の同窓会」、「参加した会合の同窓会の会員か否か」、「会合の日時情報」といった会合記

録にある情報だけを用いて、これら2つの問題に対処し、信頼度の高いアフィリエーション・ネットワーク・データを生成する方法を述べた。これによって、外部情報としての会員データベースがなくても、内部情報を組み合わせることで、高品質のネットワーク・データを生成できることを示した。

本研究の特徴としては、大学同窓会の定量的なネットワーク・データを収集する方法を開発したこと、アフィリエーション・ネットワーク・モデルを拡張したことが挙げられる。この2点について以下にまとめる。

4.2 大学同窓会の定量的なネットワーク分析

大学同窓会では卒業生のネットワークが重視される。大学同窓会の維持や発展、大学への寄付行動、在校生支援等の要因となるからである。ところが、ネットワークが重視される一方で、従来は、定性的な理解にとどまっていた。経験的にネットワークが重要であることが認識されながらも、大学同窓会のネットワークへの言及は逸話的なレベルを超えることができなかったのは、分析のための方法が欠如していたためである。また、個人情報保護が壁となり、大学を介した卒業生への調査が行えず、それが逸話的なレベルから先に研究を進ませることを難しくしていた。

本研究では、外部研究者であっても大学同窓会について定量的なネットワーク分析を行う一般的方法を確立するために、多くの大学同窓会で発行されている大学同窓会誌に着目した。大学同窓会誌は卒業生間での情報共有を目的に発行されている。本分析で対象とした『早稲田学報』は100年以上発行されつづけており、1,200冊以上蓄積された同窓会誌は、膨大な1次資料とみなせる。その内容分析の結果、掲載情報は時代によって変化していたものの、100年以上継続して掲載されている情報として会合記録が存在していた。大学同窓会は、会誌を通じて全卒業生に対し様々な同窓会団体を募集している。同窓会誌には、そうした同窓会団体の中でアクティブに活動し、同窓会事務局に情報提供している団体の会合が記録として掲載されている。全卒業生に周知した中で、アクティブに活動する団体が抽出されているのが同窓会誌の会合記録である。

本論文では、会合記録に掲載されている情報を最大限に利用して定量的なネットワーク・データの抽出方法を提示した。利用したデータは『早稲田学報』に限らず大学同窓会誌であれば一般に掲載されているデータであり、他大学においても応用可能である。また、調査表による調査や直接調査員が同窓会の中に入り込む調査のように大学同窓会のネットワークに影響を与えることもない。大学同窓会に影響を与えず、同窓会誌を発行している大学一般においてネットワーク・データを定量的に把握することが可能となった。この意味で、大学同窓会誌に着目した本研究の方法は、定量的な同窓会研究のための一般的方法を提案したと言えるだろう。

ところで、第1部2章で示したように、大学同窓会誌には寄付、個人動静等様々な情報が存在している。これらと組み合わせることで、大学同窓会のネットワークについての多様

な実証的研究を今後展開していくこともできる。本研究は、それらの今後の研究に向けた基礎的研究としても位置付けることができるとも考えられる。

記録データの利用が社会調査として重要であることに簡単に触れておきたい。本研究の目的から少し逸れるが、大学同窓会誌という記録データを組織的に活用した本研究は、社会調査としての記録データの有用性を示す事例になっている。

4.3 アフィリエーション・ネットワーク・モデルの拡張

本分析では、大学同窓会を、大学同窓会誌に掲載された会合記録を利用し、行為者を個人と会合、行為者間の関係を参加という形でアフィリエーション・ネットワーク・モデルとして表現した。本論文で表現したネットワーク・モデルは従来のアフィリエーション・ネットワーク・モデルを次の点で拡張している。

本稿のネットワーク・モデルにおけるノードは、例えば、個人の定義において複数属性を持たせたわけであるが、副産物として、属性によってノードをカテゴリー化することが可能となる。これまで無色のノードから成るネットワークにカテゴリーという色を付与することになり、カテゴリーを利用することで、それまで捉えることのできなかつたネットワークも観察できるようになった。このことは例えば第2部6章で詳しく述べる分析において活かした本手法のひとつの特徴になっている。

ただし、もっとも重要な拡張は、会合記録から、行為者（個人、会合）間の関係を参加という行為で記述したことで、集団内の個人や会合の動的な変化を捉えられるようになったことである。本来、アフィリエーション・ネットワーク・モデルにおける行為者間の関係は「企業の役員」のような所属関係であり、時間という概念はそこには含まれていない。静的な状態を捉えたものであった。ところが、今回は、モデル化において参加という行為に着目した方法を提案しており、これによって時間軸に沿った行為者間の関係性を観察することが可能になり、これは、近年挑戦が始まりつつある動的ネットワークの研究へと展開できるものである。

動的ネットワークが近年着目されはじめた理由として、インターネットの普及から、入手可能なネットワーク・データに変化が起きたことが挙げられる。ソーシャルメディアを活用して、これまで観察することのできなかつた政治家の個々の関係や動きから、政治家間のデータを入手したり（Weaver et al. 2018）、オンライン上での人々の質問・回答のデータを利用することで（Stadtfeld and Geyer-Schulz 2011）、対話など、人々の行為をもとにしたネットワーク・データが得られるようになった。これらはそれぞれの分野の関心から探索的な研究が進められている。これらと並行して、静的なネットワーク・モデルの研究の代表的な指標である中心性を動的なネットワーク・モデルに適用しようとする動き（Falzon et al. 2018）や動的なネットワーク独自の中心性の指標をみつけようとする動き（Evertt et al. 2018）も近年あり、動的ネットワークについての議論が始まっている。

大学同窓会誌のような会合記録からのネットワーク・データの抽出のための1次資料は、

先に述べたように、1 大学だけでも 1,200 冊以上存在する。抽出には膨大な作業量を要するが、本稿で述べた方法を用いることで、人々の参加行動に基づくアフィリエーション・ネットワークについても動的に観察することが可能となった。

以上、第 1 部では、大学同窓会誌を情報源に、アフィリエーション・ネットワークによって大学同窓会ネットワークをモデル化する方法を述べた。第 2 部では、この方法を応用し、大学同窓会ネットワークの構造や機能について定量的な分析を試みた事例を述べる。

【注】

- 1) 例えば早稲田大学校友会は個人情報の利用を以下の4点に限定している。
第1に早稲田大学および早稲田大学校友会の業務で必要とする場合。第2に同窓会活動および稲門会活動の活動支援で利用する場合。第3に個人情報を適切に管理するように契約等により義務付けた業務委託先に対し、必要な業務を委託する目的で個人情報を提供する場合。第4に本人の同意を得た上で個人情報を開示または利用する場合。
早稲田大学校友会, 2019, 「個人情報取り扱い」, 早稲田大学 校友会,
(2017年12月5日取得, <http://www.wasedaalumni.jp/info/security.html#usage>)
- 2) 国立国会図書館, 2019, 「国会図書館デジタルコレクション」, National Diet Library Digital Collections 国立国会図書館デジタルコレクション, (2016年6月4日取得, <http://dl.ndl.go.jp/>)
- 3) 大学同窓会誌は紙媒体のみと、インターネットから閲覧できるよう電子版も作成されている。
- 4) ここでは、国立大学・私立大学・公立大学に分けているが、より詳細な大学の大学同窓会および大学同窓会誌に関するデータは資料に掲載する。資料の大学同窓会誌名は最新号のものである。
- 5) 大学同窓会誌は名称が変わることもある。大学によっては名称が古い大学同窓会誌を紹介していないケースもあるため、厳密には個々の大学同窓会を詳細に調べる必要がある。
- 6) 漢字データベース, 2010, 「異体字データベース」, 漢字データベース,
(2016年6月4日取得, <http://kanji-database.sourceforge.net/variants/variants.html>)

第2部 大学同窓会ネットワークの構造と機能についての定量分析

第5章 序論

5.1 研究背景

第1部にて大学同窓会の概要を述べた。第2部の議論の準備としてその一部振り返っておく。

天野(2000)によれば、日本の大学同窓会は、大学創立と同時期、明治初期には卒業生の親睦を深めることを目的に結成された。しかしながら当時の大学の多くは、国によって地位を保証されていた旧帝国大学を除き、社会的地位や経営基盤が確立していない状況にあった。当時の大学の資金源は授業料のみであったことから、大学同窓会は主に資金面を中心にそれを支えるために存在していた。大学の社会的ないし経営的基盤を確立していくために「闘う」同窓会であった。大学を支援するための集団として、一橋大学の如水会のように、他大学との合併という大学存亡の危機がきっかけとなって、大学同窓会が結成された事例もある(酒井 2011)。この時代の大学同窓会は大学の成長と発展に向け、大学と密接な関係にあった。

この関係は、大正7年の大学令の発令によって転機が訪れる。大学令によって当時専門学校であったどの大学にも「正規の大学」への道が開かれることになった。ただし、「正規の大学」と認められるためには莫大な資金が必要であった。必要資金は大学同窓会の支えだけでは不十分であったため、大学はこの必要な資金獲得のために学生増加の手段をとった。大学にとって学生の増加は資金獲得のための唯一の手段ではあった。しかし、この選択により、大学の学生数が増え、同時に卒業生の数も増えたことで、自ずと大学同窓会との関係は疎遠となっていった。

戦後、大学は進学率の上昇、官立大学の合併を経て、大学の社会的地位や経営基盤が安定した。大学同窓会の支援が必要ではなくなった大学にとっての大学同窓会は、卒業生に交流の場を提供することが目的となった。このような流れから、卒業生間の親睦を主とする団体へと性質が変化していった。その後、進学率の上昇による卒業生の増加により、さらに卒業生同士の絆、卒業生と母校との絆は弱まっていくこととなる。

それが近年になって大学が大学同窓会に注目する動きが強まってきている。特にガバナンスの視点から着目されており(鳥居 2013)、事実、国立大学では独立法人化以降、大学の中期目標・中期計画において同窓会の内容が増えていることが確認されている(高田 2012)。この背景として、少子化による学生獲得競争、国からの補助金の減少などをきっかけとした経営環境の悪化がある。大学は、経営環境の悪化から資金援助や在学生への学習・就職支援、地域事業への関与(原 2016; 大川ほか 2015)といった面で大学同窓会に期待を高めているのである。これらの期待を具体化するために大学と卒業生のネットワークづくりが注目されている(喜多村 1999; 大川 2016)。

このように、近年になって、卒業生間および卒業生とのネットワークづくりに関する大学の取り組みに注目が集まるようになってきた。しかしながら、大学同窓会のネットワーク構

造がどのようになっているのか、これまでは逸話的で表層的なレベルでしか語られてこなかった。そのため、現在まで、大学同窓会がどのようなネットワーク構造を持つものなのか、ほとんどわかっていない。大学同窓会に対する期待を現実化していくためには、その構造や機能についての深い理解が必要であろう。

大学同窓会は卒業生個々の主体的な行動によってつくられるネットワークである。そうしたネットワークで作られる大学同窓会の詳細な理解のためには、ミクロな視点で人々（卒業生）の行動に着目し、これを基礎としたネットワークの構造やダイナミクスを明らかにする必要がある。卒業生の行動とネットワーク構造との関連を明らかにしていくことで大学同窓会を定量的に理解することが可能となるのと同時に、大学同窓会の維持や発展における課題解決への手掛かりとなる知見を得ることができると考えられる。

5.2 先行研究レビューと第2部の目的

前節で、大学同窓会についての研究は、これまでは定性的な議論に終始し、そのネットワーク構造は逸話的に語られる程度であったと述べた。先行研究では日本の大学同窓会ネットワークをどのように捉えてきたのかを確認しておきたい。

日本の大学同窓会の歴史研究を行った天野（2000）によれば、大学同窓会は創立初期である明治時代から大正時代にかけて、その役割を4つに分類できると述べている。ここで、4つの役割とは

- ・ 支援団体としての役割、
- ・ 設置運営主体としての役割、
- ・ 専門家ないし同業者団体としての役割、
- ・ 啓蒙団体や学術団体としての役割

である。特に専門家ないし同業者団体としての役割と啓蒙団体や学術団体としての役割の2つを通じて、同じ職業・分野に進んだ卒業生のネットワークが形成されていた。しかし、原（2016）は戦前の関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学を対象とした研究で、「校友会は、多様な卒業生が集う人脈形成の場であった」（原 2016：169）と指摘しており、様々な職業・分野の人々がネットワークも形成していたことがわかる。また原は加えてこのような卒業生の団結の背後に大学側が同窓会運営・活動に協力や校友会事務所の場所の提供があったことを明らかにした。すなわち、創立期では、同窓会によって職業やその分野の視点からネットワークの様相に違いがあること、またその維持に大学が関与していることから大学同窓会に参加することは同時に大学と関係を持ちやすかったといえる。

しかしながら、その後の進学率の増加による卒業生の増加、大学の経営安定化を理由として大学と卒業生、卒業生間のつながりは希薄化していく。経営が安定していった大学は、大学同窓会への関心が薄くなり、活動の場の提供程度にとどまっていった。官制大学の統合に起因し、部局同窓会として学部ごとに組織される大学や社団法人東京学芸大学同窓会（腰越・池田 2006）などのように、ある特定の人々のみが参加可能な同窓会しか持たない大学

もあった。大学同窓会は、それへの参加で卒業生同士の関係維持にはつながってはいても、大学同窓会を介して卒業生が大学と関係を持つことは少なくなっていたのである。

その後、大学経営悪化を起因とし、大学同窓会は再び注目されるようになり、国立大学では、独立法人化後、大学の取り組みとして全学同窓会の設立が進んでいった（高田 2014）。こうした動きは、これまで卒業生に対し何もしてこなかった大学の反省であり、大学と卒業生のつながりや卒業生間のつながりの維持・発展のための事業が行われるようになった。こうした動きの根底には、卒業生に対する期待として大学への財政支援（寄付）や在学生への学習・就職支援、地域事業への関与などのために、卒業生との密なつながりが重要であるとの大学の認識がある。

日本の大学同窓会に関する以上の先行研究において、大学同窓会ネットワークについては、大学の大量化後、大学と卒業生のつながりは希薄であったと記述する程度にとどまっており定量的な研究は行われていない。また、大学の卒業生への期待のひとつである寄付行動についての研究もほとんど見当たらない。卒業生の寄付行動の要因を理解することは興味深いことである。これについての日本国内の研究は見当たらないが、海外では卒業生研究の1つとして調査が行われている。

寄付行動についての海外の研究事例をここでみておきたい。大学へ寄付する卒業生は30%から40%であるが（Holmes 2009）、大学への寄付金総額の半数を占めるのは卒業生の1%である（Clotfelter 2001）。Hoyt（2004）によれば、卒業生の寄付行動の要因に関する研究は5つの視点（1. 心理的要因、2. 教育・雇用、3. 大学参加・寄付勧誘、4. 外部環境、5. 人口統計）から行われている。各視点において、先行研究では寄付行動に対する要因として以下のような結果が得られている。

（1）心理的要因

卒業生が他の団体・非営利団体に対して寄付するような利他的行動をしている場合、大学にも寄付する傾向にある（McDearmon and Shirley 2009）。利他行動には収入が関係しており、収入が高い卒業生ほど慈善活動を行っている（Clotfelter 2001）。また、大学への財政的な支援が必要であると考え人ほど寄付率が高く、寄付金額も高い（Taylor and Martin 1995）。

在学時の大学生活の満足度も重要である。学生生活に満足している卒業生は寄付率が高い結果が得られている（Clotfelter 2001；McDearmon and Shirley 2009）。しかし、友人や教員との交流の満足度は寄付意欲と関連がなかった研究結果もある（Lertputtarak and Supitchayangkool 2014）。

（2）教育・卒業後の進路

教育面では、教員の質の高さ、新入生のためのオリエンテーションや質の高い講義が寄付意欲を高める（Lertputtarak and Supitchayangkool 2014）。学生の生活面でいえば、学生寮

に住んでいた卒業生は寄付率が高く、部活やサークルに入っている人は寄付金額が高い (Taylor and Martin 1995)。

進学では、大学院への進学した卒業生は寄付率が低く、寄付したとしても寄付金額が低くなる傾向にあった (Taylor and Martin 1995)。また、卒業後の職業に関しては、民間企業に勤める卒業生が寄付しやすく (Clotfelter 2001)、特に、銀行や金融、コンピュータ、テクノロジー、政府、公共事業、非営利の分野で働いている卒業生が寄付する傾向にある (Holmes 2009)。

奨学金の返済も寄付行動と関係があり、返済し終わっている卒業生は寄付者になる傾向があった (McDearmon and Shirley 2009)。

(3) 大学との関わり・寄付勧誘

卒業後、大学に卒業生として関わっている卒業生は寄付率が高く、寄付金額も高い (Taylor・Martin 1995)。また、学生との交流を持つことにより、大学への財政支援 (寄付) について卒業生の理解が得られやすいことを Singer and Hughey (2002) は指摘している。卒業生とのコミュニケーションツールとして、Facebook などのソーシャルネットワーク、手紙や大学同窓会誌を発行することは卒業生の寄付意欲を高める (Lertputtarak and Supitchayangkool 2014)。また、大学同窓会誌など、卒業生の出版物を読んでいることも寄付率を高める要因となる (Taylor and Martin 1995)。

同窓会会員である卒業生は寄付率が高く、寄付金額が高い。同窓会会員の中でも終身会員は特に寄付率、寄付金額ともに高かった (Newman 2009)。同窓会への参加行動に着目すると、同窓会へ一度でも参加している人は寄付率が高い (Holmes 2009)。同窓会団体に着目すると、クラス同窓会に着目した Willemain, Goyal, Van and Thukral (1994) は 25 年、50 年目の節目に寄付の規模、寄付率が高くなることを明らかにしている。

寄付勧誘では、寄付募集が計画的である場合は卒業生の寄付率は高くなるが、目標金額の設定によって寄付率が変化することはない (Harrison, Mitchell and Peterson 1995)。

(4) 外部環境

大学が国立、公立、もしくは私立であるかどうかは寄付行動に違いはないが、校友行政に高い資金をかけているほど卒業生の寄付行動に関係があった (Harrison et al. 1995)。また、大学の運動競技に関する評判の向上は寄付率向上に影響があった、学術的な評判の向上は寄付率向上に影響がなかった (Homels 2009)。

卒業生もしくは在学生に親戚、兄弟、姉妹がいる場合、寄付率が高い傾向にある (Harrison et al. 1995 ; Holmes 2009)。

(5) 人口統計

年齢が高いほど、世帯収入が多いほど寄付行動を行う (Willemain et al. 1994 ; Clotfelter

2001)。また、卒業した大学と同じ地区に住む卒業生は寄付率が高く (McDearmon and Shirley 2009)、特に既婚の女性の寄付率が高い (Holmes 2009)。

以上、寄付行動には様々な要因があることがわかる。その中で、(3) 大学との関わり・寄付勧誘の先行研究でみられるように、ネットワークが卒業生の寄付行動に関係する一要因となっていることがわかる。ただし、これらの先行研究では、観察をそこからさらに踏み込んで、ミクロな関係の観察、さらには関係(つながり)の強さまでの研究は見当たらない。日本国内になると、これまで述べてきた通り、大学同窓会についての研究のほとんどは定性的なものであり、大学と卒業生とのつながりの強さが卒業生の例えば寄付行為といった行動にどういった影響を与えているのかは不明であった。しかしながら、第1部で述べた方法を用いれば、つながりについての定量的な観察が可能になる。

第2部では、第1部の手法を応用し、1960年代の早稲田大学同窓会を事例にして、定量的な観察を行った。この時期、早稲田大学は大規模な募金活動を行っている。1960年代は大学大衆化の過渡期にあった。この時代の大学同窓会は天野が指摘する大学と卒業生、卒業生間の関係が希薄な親睦団体としての性質を持っていた。本研究の観察対象とした早稲田大学は、当時の卒業生が20万人であり、1961年から1967年にかけて、法人や卒業生等に対し20億円規模の寄付事業を計画し(『早稲田学報』1961年1月号)、それを達成した(『早稲田学報』1967年4月号;井原2006)。現在の大学同窓会と類似の性質を持ち、大学と卒業生との関係もすでに希薄となっていた時期に、計画した募金を達成した早稲田大学の同窓会は、卒業生による資金援助を考えていく上でのモデルケースとして興味深い調査対象である。

希薄な関係は、閉鎖的な構造を作り出すのを難しくする。しかしそうした状況下であっても、大学と卒業生とを媒介する別の卒業生によって、何らかのネットワークを生成している可能性があり、そうしたネットワークが卒業生の行動に影響を与えていた可能性がある。黄(2007)が高校の同窓会で指摘したように、大学同窓会のネットワークにおいても柔軟に閉鎖的および構造的空隙を上手く使いこなしていると考えられる。また、佐藤(2016)は中国での大学同窓会にて戦時および戦後すぐの日中の卒業生間の結節点に相田秀方氏が貢献していたことを発見している。日本でも卒業生の中には異なる複数の同窓会の会合に参加することがあり(志垣2011)、そうした人物の存在が、同一同窓会内だけでなく異なる同窓会間において大学と卒業生の間接的な関係を生成していることも考えられる。大学と卒業生の直接的なつながりだけでなく、間接的なつながりにも注目する必要がある。

第2部では、1960年代の早稲田大学を事例にして、従来は定性的に語るしかなかった大学同窓会ネットワーク構造と卒業生の寄付行動との関連について定量的な分析を試みた結果を述べる。第2部6章では、第1部で述べた会合への参加行動から得られるアフィリエーション・ネットワークを用い、アフィリエーション・ネットワーク上における大学関係者と卒業生の位置関係に注目した分析を行った結果を述べる。同窓会の会合を媒介とする大

学関係者と卒業生との直接的、間接的つながりの全てを抽出し、関係の距離に応じて両者の位置関係を分類し、位置関係と卒業生の寄付行動の関連を明らかにした。具体的には、早稲田大学の創立八十周年記念事業が行われた最初の年である 1961 年を対象とし、その年に行われた会合について大学同窓会誌『早稲田学報』に掲載される会合記録を利用して分析を行う。

第 2 部 7 章では、第 1 部で得られた会合への参加行動から得られるアフィリエーション・ネットワークと Granovetter (1973)の紐帯の強さの概念を用いた大学と卒業生の関係に着目する。具体的には、アフィリエーション・ネットワーク上の大学関係者と卒業生の会合が行われた時点を加味した両者のつながり (=紐帯の強さ) を定量化し、その紐帯の強さの推移および卒業生の寄付行動との関係を明らかにする。具体的な分析は、長期にわたり大学同窓会誌の会合記録が欠損なく掲載されていた 1960 年代の早稲田大学の一同窓会を対象にする。

5.3 早稲田大学創立八十周年記念事業について

ここでは、早稲田大学創立八十周年記念事業について概観し、早稲田大学の状況を確認しておく。創立八十周年記念事業での記念事業計画大要を図 5-1 に示す。

・所要資金	三十億円
内	
募集金額	二十億円
自己資金	十億円
・建設計画	
※理工学部および付置研究所の 拡充建設および設置	二十億円 (第一期工事計画十三億円)
※法文系学部の拡充	
建物	七億九千三百万円 (第一期工事計画 五億円)
※学生会館の建設	
建物	一億三千万円
※募金経費	七千七百万円

図 5-1 創立八十周年記念事業計画大要 (『早稲田学報』1961 年 1 月 : 12-13)

当時の早稲田大学では、医学部、文理学部等新学部の設置など案として挙がっていたが、記念事業計画において組織された委員会における熟議や評議委員会の議を経て、新学部の設置よりも既存の学部の充実をはかることが優先的な事柄であるとの結論が出ている。こ

の結果、全学部共通の施設および各々の学部の施設の建設が計画された。

共通の施設では、中央図書館の拡張、第二共通教室の建築、第二学生会館の建設等が計画された。中央図書館は閲覧室の不足や書庫の圧迫、大教室の不足、課外活動の場の不足が問題となっており、これらはいずれも学生数の増加が原因である。特に第二学生会館の建設には以下の2つの問題解消が期待された。一つは、外国からの学生と日本人学生との交流である。日本人の学生だけでなく、外国からの学生も増えていた。大学は外国の学生に対しては大学側が支援する必要があるとの考えを持っており、日本の文化の理解や日本の学生との交際を促進させるための施設が必要であった。もう一つは早稲田大学では研究会やサークルといった課外活動が活発であり、100を超えるグループが存在した。大学はこれらの活動は学生生活を豊かにし、教養を高める上で効果的であるばかりでなく、人格形成に利するところが大きいと見なしていた。そのため、これらの活動が活発に行えるような場を提供する必要があった。

個々の学部では、理工学部を戸山ヶ原の新校地への移転が挙げられる。科学技術の飛躍的な進歩と経済の急進の膨張に伴い、科学技術者の大量養成と産学共同の必要が痛感されていた。このような時代に応じて原子工学、電子工学といった新分野についても体制を強化する必要があった。つまりは、学生定員の大幅増員と、施設設備の拡充、機構の改編、研究および教育体制の刷新強化である。それまでの施設では改革を阻んでしまうため、付置研究所との関連をも考慮に入れて総合計画の下に、施設を建設することが有利であるとの結論に至った。

これらの事業を達成するために創立八十周年記念事業募金で設定された目標額は20億円である。この目標額は貨幣価値の変動を計算に入れても過去最大のものであった。ただし、この募金目標は決して過大すぎるものではない。この時代の卒業生数は12万人、学生数は3万人を超えており、仮にすべての卒業生と学生の父兄が1人平均年額2000円寄付してくれることで、10数億円集まる計算となる。したがって、20億円という数字は現実的な目標でもあった。また、企業・法人の寄付については、当時の大蔵大臣より免税の措置、すなわちこれを損金として処理することが許可されていた。

この記念事業の後援会会長であった足立正(1961)は、私立大学は平素の経費を税金によって国立大学とは違い、全部授業料によってまかなっており、特別に規模の拡張する場合は卒業生らの援助に頼らざるを得ない状況であることを指摘している。学生の増加によって日常的な経営が安定した大学であっても、その増加する学生のために規模を大きくする必要があり、卒業生に頼る必要があった。1961年から開始された記念事業寄付は1967年まで行われ、最終的には20億1,478万8,161円(内卒業生2億8,320万1,954円)(『早稲田学報』1967年4月号)集まった。

大学と大学同窓会との関係は希薄であったと指摘されている時期の大学同窓会のネットワーク構造はどのようになっており、どのような構造が寄付行動と関係していたのだろうか。次章よりこのことをみていきたい。

第6章 大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動の定量分析

6.1 導入

本章では、同窓会会合を媒介にして作られる大学同窓会ネットワークにおいて、大学関係者と卒業生との位置関係に着目し、その構造を明らかにする。そして、この構造を踏まえ、位置関係の違いが卒業生の寄付行動にどのように影響しているか分析する。

喜多村(1990)は卒業生の協力を得るためのひとつの条件として、卒業生との密なコミュニケーションを挙げている。卒業生が参加するための全学同窓会の設置が増えている(高田2014)状況にあることは、この条件を整備し卒業生の協力を得ようという期待が込められていると言える。一般には密なコミュニケーションによって卒業生と大学との関係が強くなるほど、大学の期待のひとつである卒業生の寄付行動は促進されると考えられるだろう。なお、大学との関係と述べたが、大学という抽象的な対象について定量的な議論を展開するために、ここでは、卒業生と大学との距離を卒業生と大学関係者との接触によって表現することにする。卒業生と大学関係者との接触のあり方は、卒業生と大学との親密度に強く影響し、それが卒業生の寄付行動に影響を与えることが予想される。

本章では、卒業生と大学関係者との接触の場として、同窓会会合に着目する。これらの会合を介したネットワークを観察の対象とする。ネットワーク構造の2個人の位置関係を観察する概念として距離概念がある。卒業生と大学関係者が同じ会合に参加する場合一方、参加していない場合もある。しかし、大学関係者と同じ会合に参加していない卒業生についても他の卒業生を介した位置にあることも想定される。後述するが、ネットワーク構造について詳しい分析を行った結果、卒業生と大学関係者との会合を介した関係性について、いくつかの質的な違いが存在し、それは両者の位置関係のパターンの違いとして分類できた。こうしたネットワーク構造の距離によって卒業生と大学関係者の関係をとらえたときに、この近さと寄付行動はどのような関係にあるのか、本章で明らかにしていきたい。

本章では、早稲田大学創立八十周年記念事業を具体事例とし、この事業が行われた最初の年である1961年の寄付行動を対象とし、ここで卒業生と大学関係者が会合を介した位置関係を明らかにし、卒業生との寄付関係を明らかにする。さらに特異なケースについては、全体ネットワーク構造の位置や特殊性を調査し、理解を深める。

分析は、1961年に行われた同窓会会合について、早稲田大学校友会の会誌『早稲田学報』に掲載された会合記録のデータを利用する。このデータを用いて、第1部で提示した方法を使ってアフィリエーション・ネットワークを生成する。そして、卒業生の大学関係者との位置関係を、このアフィリエーション・ネットワークおよびネットワーク・グラフの測地線・距離概念を用いネットワーク分析を行う。なお、具体的な分析作業を進める前の準備として、次節でこれ以降必要となる基本概念を述べる。

以下、本文中で混乱しないと思われるところでは、アフィリエーション・ネットワークのことを「AN」と略記する。また、具体的な分析に入る前に、分析に必要な基本概念について次節で説明しておく。

6.2 アフィリエーション・ネットワークとグラフについて

6.2.1 アフィリエーション・ネットワーク

アフィリエーション・ネットワーク (AN) モデルがここでの分析における中心概念となるが、これは次のように表現されるものである。

AN とは図 6-1 に示すように、個人と組織をまとめて表現する行列である。具体的には、個人を i 、組織を j とした時の AN を表す接続行列 A_{ij} において、ある i と j について、もし個人が組織に所属していれば 1、所属していなければ 0 と記す (図 6-1 左)。また A_{ij} と行と列を入れ替えた行列 (転置行列) A_{ji} の積をとることで、個人間誘導ネットワーク P (図 6-1 右上) と組織間誘導ネットワーク G (図 6-1 右下) といったノードが個人のみ、組織のみのネットワークを導くことができる。個人数が p 、組織数が q のとき、所属行列 A_{ij} は p 行 q 列の行列であり、またこれから導かれる P を表すイベント重複行列 P_{ij} は p 行 p 列の行列となり、 G を表す共通成員行列 G_{ij} は q 行 q 列の行列となる。

個人間誘導ネットワーク、組織間誘導ネットワークは個人、組織それぞれのネットワークとなり、分析を容易にするものであり、一般的によく用いられる。しかし、AN とは異なるネットワークを指していることを注意しなければならない。個人、組織の 1 モードに変換したネットワークは 2 モードに存在する情報が失われている (Faust 1997; Latapy, Magnien and Vecchio 2008)。また、個人間誘導ネットワークの値 P_{ij} は共有した会合の数を表し、組織間誘導ネットワーク G_{ij} は共有している人数となり、AN で定義した個人と組織のエッジの意味が変化する。したがって、目的に応じて 1 モード変換、もしくは 2 部グラフの隣接行列 (Wilson 1982) $\begin{bmatrix} 0 & A_{ij} \\ A_{ji} & 0 \end{bmatrix}$ など 2 モードのままモデルを扱うことが必要である。

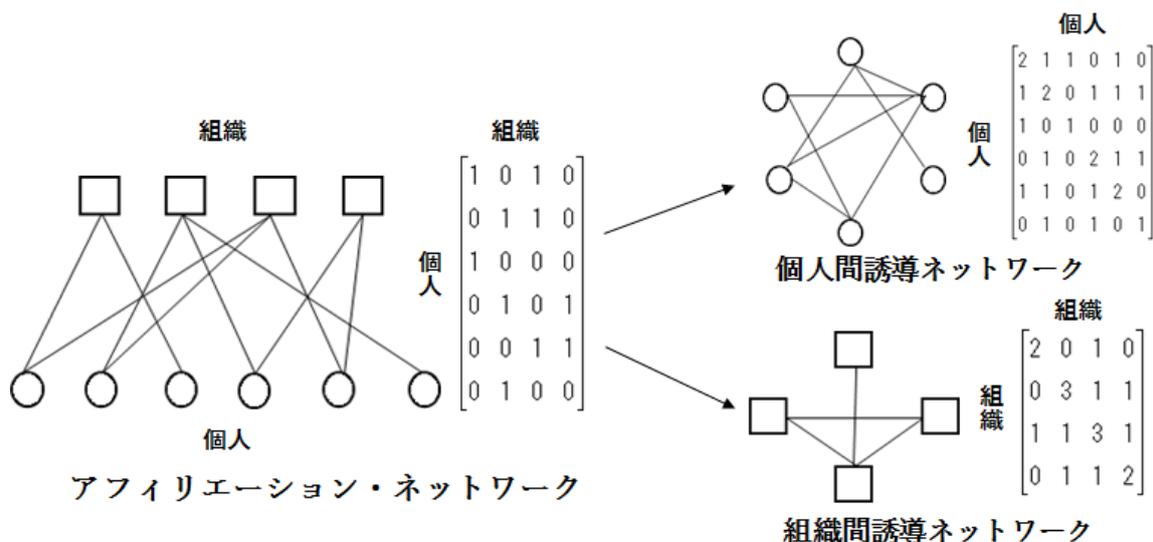


図 6-1 アフィリエーション・ネットワークと個人又は組織に着目したネットワーク (Breiger(1974:182)Figure1、金光 (2003:178) 図 7-2 を参考に筆者作成)

6.2.2 測地線、距離（ネットワーク）

ネットワーク・グラフの基本的概念に測地線と距離がある。これはノード間のグラフ上の位置関係を示すものである。あるグラフ上の到達可能な2つのノードについて、ノードとエッジとを連続して通るルートのなかで、同じノードを通らないものをパス（道）と呼ぶ。また、パスにおいて出現するエッジの数を長さと呼び、特に長さが2つのノード間のパスにおいて最小であるパスを測地線、長さを距離と呼ぶ。例えば図6-2においてn1からn3に到達するパスは、 $S1 = \{n1, n2, n3\}$ と $S2 = \{n1, n2, n5, n6, n3\}$ の2つ存在する。この2つのパスにおいて長さはS1が2、S2が5である。n1とn3測地線は長さが最小であるのはS1であり、距離は2となる。ただし、測地線は複数存在する場合もある。図6-2のn2からn6に到達するパスは、 $S3 = \{n2, n3, n6\}$ と $S4 = \{n2, n5, n6\}$ の2つ存在するが、どちらも距離は2である。そのため、S3、S4はどちらも測地線となる。また、グラフ上の2つのノードについて、到達不可能な場合は同時にパスがないことを指し、距離は ∞ となる。測地線および距離の考え方はネットワーク・グラフの基本的な指標である媒介中心性を求めるために利用されている。

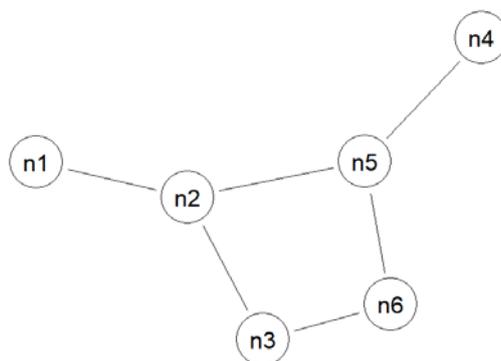


図6-2 ネットワーク・グラフ

6.2.3 アフィリエーション・ネットワーク上の組織の属性に着目した測地線

組織の属性に着目した場合、ANにおける個人を表す2つのノードの測地線はどのように表現されるだろうか。ここで、個人数4（A, B, C, D）、組織数3（1, 2, 3）のANを考える（図6-3）。到達可能な2個人（AとC, BとD）を考えると、それぞれ測地線は $S(A, C) = \{A, 1, B, 2, C\}$ 、 $S(B, D) = \{B, 2, C, 3, D\}$ となる。パスの順番は{個人, 組織, 個人, 組織, 個人}と個人のノードと組織のノードが交互に現れているのが特徴である。そのため、個人のノード間の距離を算出すると、一番距離の近い2個人の距離は組織が間に一つ入るため、エッジを2つ通ることになり、2となる。そのため、個人のノード間の距離は2の倍数となることがわかるだろう。例に挙げた $S(A, C)$ と $S(B, D)$

は1人の個人を介して到達しているため、距離は4となる。

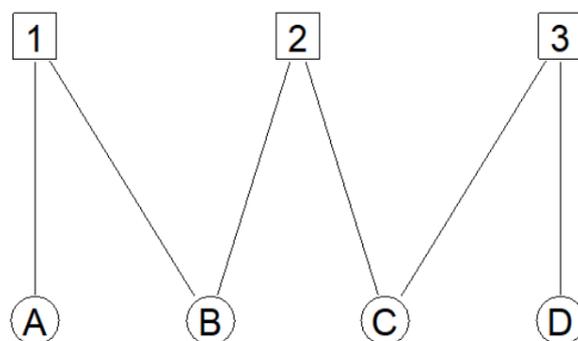


図 6-3 アフィリエーション・ネットワーク

続いて、測地線 $S(A, C)$ と $S(B, D)$ に関して、組織 (1, 2, 3) のうち組織 (1, 2) が同質な組織であると仮定して観察する。このとき、 $S(A, C)$ はそのパスにおいて2番目のノード：組織 (1) と4番目のノード：組織 (2) があることから同質な組織を通っていることがわかる。また一方で $S(B, D)$ は2番目のノード：組織 (2) と4番目のノード：組織 (3) を通っていることから異質な組織を通っていることがわかる。以上から $S(A, C)$ と $S(B, D)$ の2個人の測地線は同じ距離4でつながりを持つものの、組織の属性に着目することで「同質および異質な組織を通る」という質的な特徴を追加することができる。ただし、行列演算やブール演算を用いて2個人の距離や測地線の数演算できると異なり、組織の属性に着目した測地線の特徴を明らかにするには測地線を明らかにしたうえで、先ほどの例で $S(A, C)$ と $S(B, D)$ の2番目と4番目のノードを取り出して比較したように、そのパスに含まれる組織ノードの比較作業が必要となる。

6.3 アフィリエーション・ネットワーク上の大学関係者と卒業生の位置関係

6.3.1 分析対象とした大学同窓会団体

大学と卒業生との関係が希薄であるといわれた時期に該当する1961年の早稲田大学校友会を分析の対象とする。この時期は創立八十周年記念事業が行われていた時期で、1961年は記念事業のうち寄付事業が行われた最初の年である。この時期の大学同窓会を観察するため、大学同窓会誌を活用する(原 2016)。第1部2章で述べたように、大学同窓会誌は大学、卒業生の情報を共有することを目的として出版されており、大学や卒業生の情報としては、主に大学での出来事、卒業生によるコラム、同窓会での決定事項、同窓会の会合、財務状況から寄付状況まで詳細な情報が掲載されている。そのため、大学同窓会の直接的な観察は難しいものの、大学同窓会誌という記録を通じて同窓会の様相をとらえることができる。

早稲田大学校友会は大学同窓会誌『早稲田学報』を1897年に創刊し、2019年現在も継続

して発行している。『早稲田学報』では、同窓会の会合に関する記事が「会合・催・その他」を中心に掲載されている。これは様々な雑誌編集者らが各同窓会を取材し、記録したものである。『早稲田学報』では常に同窓会団体の活動記録を募集しており、同窓会誌に掲載されていた会合はアクティブな団体であったことがいえる。本章で扱う同窓会団体は全てこうしたアクティブな団体であることを注意しておきたい。

本章では1961年から1962年に発行された『早稲田学報』（1961年1月号、2・3月号、4月号、5月号、6月号、7・8月号、9月号、10月号、11月号、12月号、1962年1月号、3月号、4月号）に掲載された同窓会の「会合記録」を情報源とし、参加者が明らかなものである記録を情報源とした。

『早稲田学報』1961年4月号によると、1961年4月時点において、卒業生数は140,548人おり、早稲田大学校友会には校友会支部が54、地方校友会が163、職域校友会及稲門会が157、海外が11団体登録されていた。本節で情報源とした『早稲田学報』には、1961年に開催された117の会合が報告されていたが、参加者が明らかな会合は98であった。参加者が不明であった19の会合のうち、3つの報告が同じ同窓会（地域稲門会）であり、そのほかの16の会合はいずれも異なる同窓会の報告であり、1961年に会合の報告は一度のみであった。参加者が明らかである98の会合は、78の団体が開催しており、複数の会合を13の団体が行っていた。これらの同窓会について早稲田大学の分類を参考に整理したものが表6-1となる。稲門会とは早稲田大学独自の同窓会団体を意味する名称である。この分類では、大学にかかわる組織の項目を追加している。報告数は地域稲門会が一番多く、次に学部・学科・研究科稲門会が多かった。

表 6-1 早稲田大学の分類した同窓会ごとの『早稲田学報』に掲載された
1961年の会合数（括弧内の数字は参加者数が不明の会合数）

分類	会合数	分類	会合数
早稲田大学校友会本部	5	学部・学科・研究科稲門会	39 (4)
大学と関わる組織	2	年次稲門会	7
有志稲門会	4 (4)	職域稲門会	10 (4)
サークル稲門会	0	海外稲門会	6 (1)
体育各部稲門会	2 (1)	地域稲門会	42 (5)
ゼミ稲門会	0	計	117 (19)

各月の会合数は図6-4の通りとなる。報告数が多かった月は5月の15の会合であり、続いて10月の12の会合が多かった。また、8月の2つの会合のみの報告であり、次いで7月が4つの会合の報告であったことから、夏の期間の会合報告数は少なかった。参加者総数

では、11月の1,044人が一番多く、次いで4月の732人が多かった。4月と11月は全卒業生を対象とした大会（春季校友大会、秋季校友大会）が開かれているため、多くの会合参加者を観測することができる。

以上が本節で観察する同窓会の特徴となる。この1961年に報告された会合を対象に、会合から抽出できるANの観察を行っていききたい。

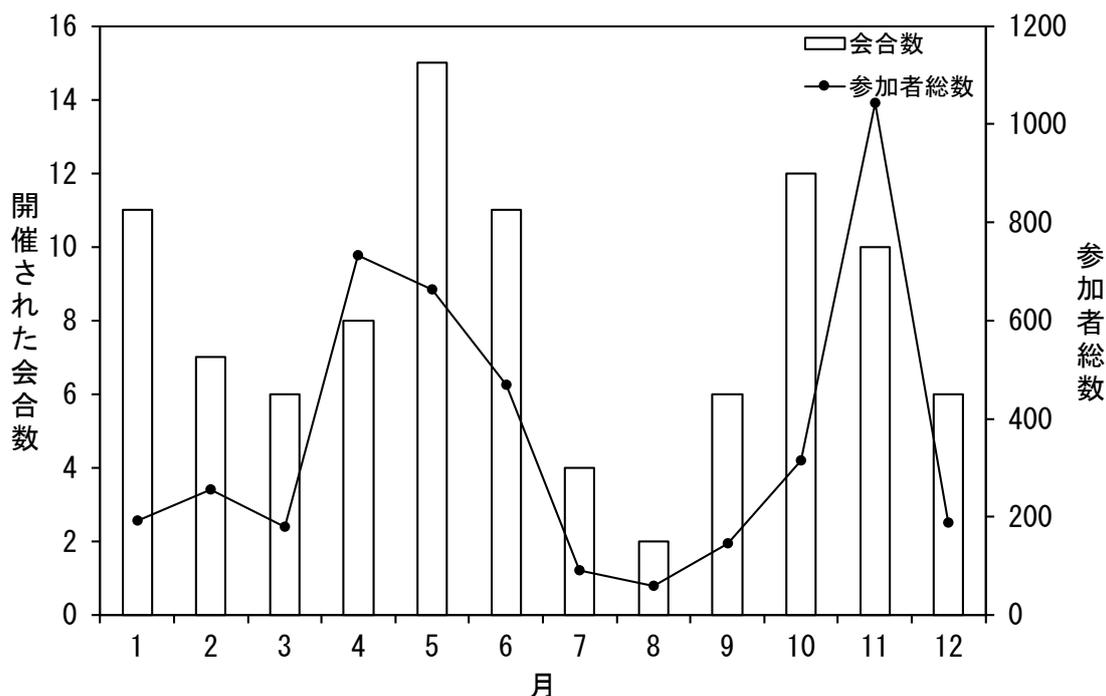


図 6-4 各月の会合数（棒グラフ：左軸）と総参加者数（折れ線グラフ：右軸）

6.3.2 大学同窓会アフィリエーション・ネットワーク

大学同窓会アフィリエーション・ネットワーク (AN) データの生成のため、『早稲田学報』に掲載される「会合記録」を利用する。会合記録には同窓会名・会合名に始まり、会合内容に会合日時、会合場所、活動内容、会員外参加者情報などが記載され、最後には会合出席者が記載されている。会合記録を情報源としたANのノードとなる個人および組織は「会合出席者」と「同窓会名・会合名」の情報が該当する。本稿の大学同窓会ANは2種類のノード（個人、会合）、エッジ（参加）で定義し、生成する。

会合記録からANデータを生成するためには処理すべきいくつかの問題がある。会合記録は寄稿されたものを大学同窓会事務が転記しているが、この過程で記録にミスが生じる。このため記録者・転記者の文字の記載ミスにより生じる「記載のばらつき」(港・相澤 2010)への対処が必要となり、さらに「同姓同名問題」(松尾ほか 2005)にも対処する必要がある。『早稲田学報』における「記載のばらつき」は2つに分類される。一つは記載ミスによるものである。これは異体字や間違いやすい漢字、記録者の勘違いによるものなど様々である。

もう一つは表現のばらつきで、会合記録には氏名や会合に情報が付加される場合があり、この表現の揺れがこのばらつきに該当する。例えば、氏名の後に「教授」や「先生」といった情報が付加される。付加のされ方は名字の後の場合や、名前の後の場合がある。

これらの問題については第1部3章で詳述した方法を用いて対処した。第1部3章では個人に関する情報の付加によって1字違いの以内の氏名を同一視する方法を基本とし、会合記録に含まれる氏名情報、同窓会情報に加え、「分析対象である同窓会の会員か否か（ゲスト情報）」、「参加した会合日時の情報」の2つの会合記録から得られる情報を用いて問題に対処している。上記の方法を用いて、大学同窓会 AN データを生成した。その結果として、会合への参加者数 3,568 人、98 の会合（同窓会数 78）による大学同窓会 AN を得られた（図 6-5）。基本統計量は表 6-2 となる。この図から、多くの会合は独立して存在していない様子を観察できる。この複雑なネットワーク構造の中で、個々人間の多様なつながりが生成されている。

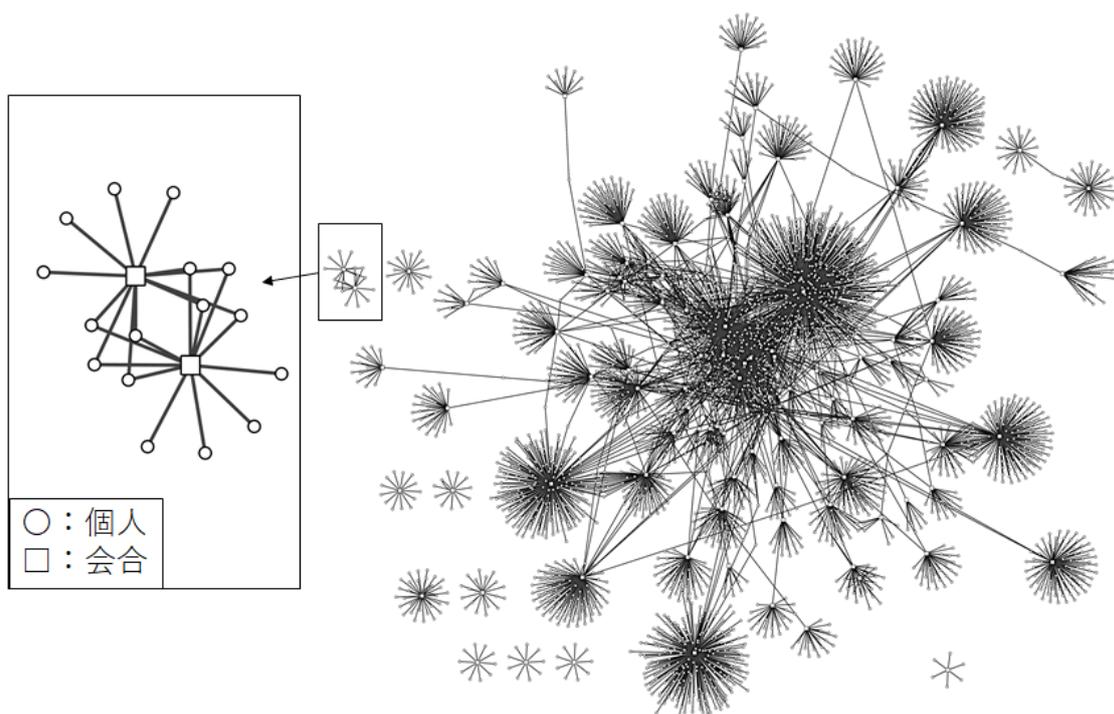


図 6-5 大学同窓会アフィリエーション・ネットワーク

表 6-2 基本統計量

基本統計量	
ノード数	3,666
エッジ数	4,283

ここで基本的な確認として、2種類のノード（個人・会合）の次数分布を、個人のノードの次数分布については図 6-6、会合のノードの次数分布については図 6-7 に示した。次数は個人の場合は、参加した会合の数を表し、会合の場合は参加した個人の人数に対応する。

グラフをみると、個人と会合のノードの次数は共通して次数の大きいものほど頻度が低い傾向にあることがわかる。個人のノードの最大次数は 34 で最小次数は 1 であり、この中で頻度の高かった次数は 1 であり、頻度は 0.89 であった。会合のノードの最大次数は 651 で最小次数は 6 であり、この中で頻度の高かった次数は 10、11 で頻度は 0.06 であった。

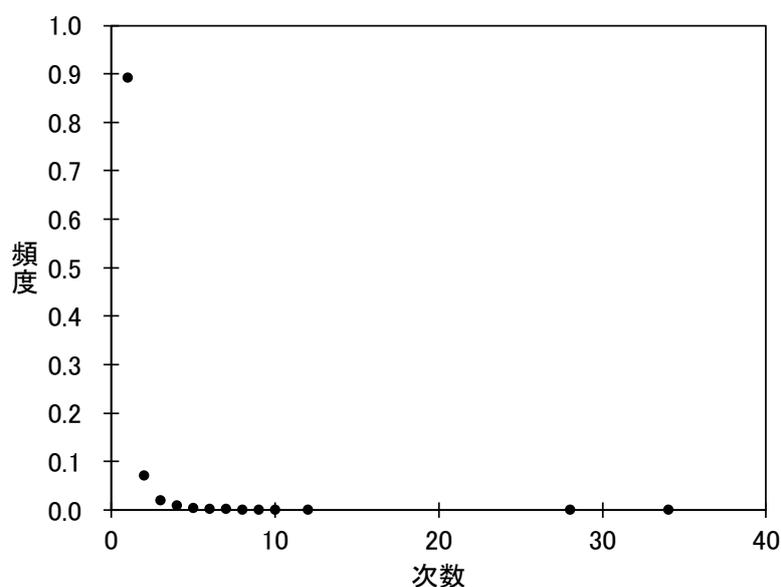


図 6-6 ノード（個人）の次数分布 (n = 3,568)

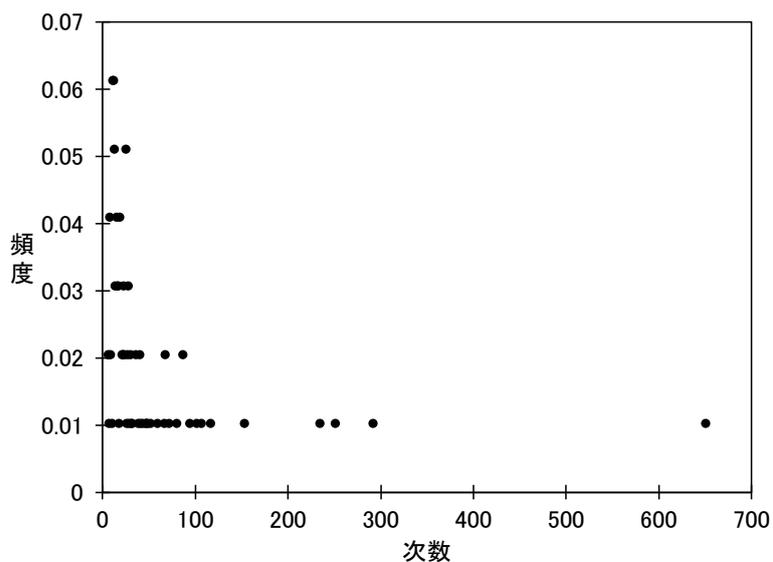


図 6-7 ノード（会合）次数分布 (n = 98)

6.3.3 大学関係者と卒業生の位置関係

『早稲田学報』に掲載される「会合記録」には参加者について来賓、親族など情報が付与されて記載されるものがある。しかしながら、大学関係者は参加した同窓会会合の会員である場合があり、その人物が大学関係者であるかどうか不明な場合がある。参加者が大学関係者であるか否か判断するため、本稿では『早稲田学報』1961年号の「募金実行委員 学内」(pp.32-35)に掲載される510人のリストを参照し、その氏名と一致する個人を「大学関係者」と定義する。また、そのリストと一致しなかった個人を「卒業生」と定義する。1961年の会合に参加していた大学関係者は103人、卒業生は3,465人であった。

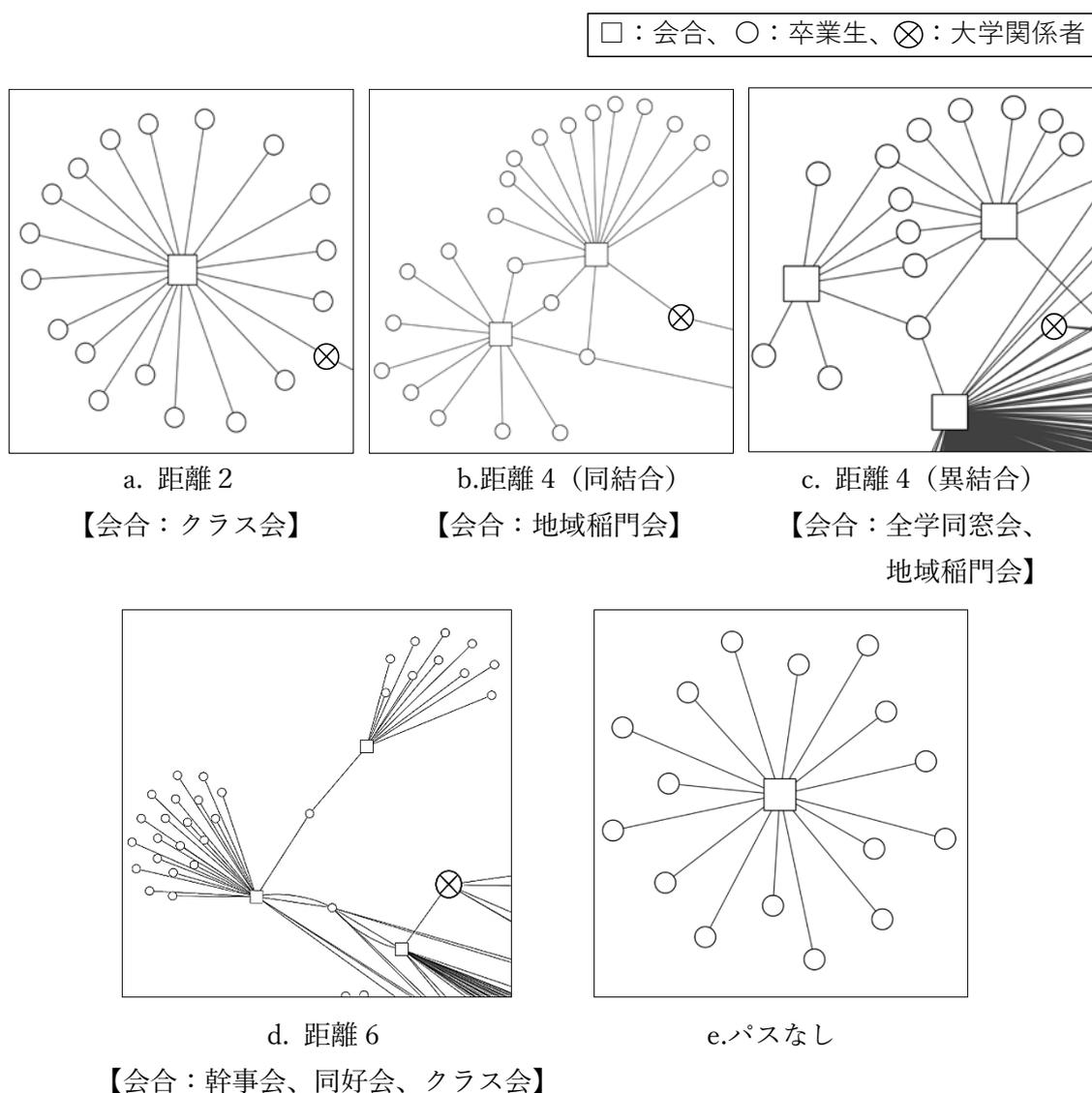


図 6-8 大学関係者と卒業生の位置関係 (グラフは図 6-5 から切り出したもの)
【会合は測地線に出現する順番】

1961年の大学同窓会AN上の大学関係者と卒業生の位置関係をみていく。大学関係者と卒業生の測地線は $S(\text{大学関係者、卒業生}) = \{\text{大学関係者、会合、卒業生、会合、卒業生、}\dots、\text{会合、卒業生}\}$ という形で、大学関係者と卒業生の間に会合が挟まる。この中で大学関係者と距離2の測地線を持つ卒業生の数は2,920人、そして距離4は423人、距離6は10人、そしてパスなしが112人であった。また距離4の測地線において会合を開催した同窓会に関して比較した結果、同じ同窓会が開催した会合を連続して通るパターン（以下これを「同結合」と呼ぶ）が22人、異なる同窓会が開催した会合を連続して通るパターン（以下これを「異結合」と呼ぶ）が401人観察された。これらを実際のネットワーク・グラフを用いてまとめたものを図6-8に示す。図6-8の各グラフは図6-5から該当するグラフを切り出した。

1961年に行われた大学同窓会の会合において大半の卒業生は直接大学関係者と接触している。また、間接的につながっている卒業生も多く存在した。距離4の測地線を通る会合を開催した同窓会に着目したとき、同結合のパターンは少なかった。同結合が現れるパターンは発生しにくいと言える。いずれにせよこの時期における大学関係者は会合で多くの卒業生と接触する機会があった。ただし、必ず大学関係者は参加しているわけではなく、卒業生だけの会合も一定数観察された。

6.3.4 位置関係の観察結果についての解釈

会合記録を活用して卒業生と大学関係者の位置関係を観察した結果、大多数の卒業生が大学関係者と会合を介して接していることがわかった。このことは早稲田大学校友大会など、出席者の多い会合には大学関係者が必ず参加していることを意味する。また、クラスや学年といった同窓会は恩師である大学関係者を迎えて開催することが多いため、大学同窓会AN上の大学関係者と卒業生の位置関係は距離2が多くなるのだと言える。一方、距離4の位置関係も一定数みられた。

距離4が一定数存在するのはどのようなことが考えられるだろうか。早稲田大学の同窓会において、幹事、商議員、評議員という制度がある。まず、幹事は大学同窓会運営、商議員および評議員は大学の運営に関わるものである。選出人数や選出方法は時代によって変化するが、これらの一部は必ず卒業生から数百名程度選出される。また、大学関係者も選出され、卒業生とともに活動を行っている。すなわち、これらの会合、幹事会、商議員会、評議員会には必ず大学関係者が出席する。これらに参加する卒業生は同時に自分の所属同窓会にも参加している。したがって、これらの卒業生が結節者となって、異なる同窓会が開催する会合を介したパスが生まれていると考えられる。これが距離4（異結合）の位置関係が一定数存在している理由であろう。もちろん、幹事会、商議員会、評議員会ではない地域の同窓会など複数の同窓会に参加する卒業生が、ある同窓会の会合で来賓や会員として参加した大学関係者と他方の同窓会の会合に参加した卒業生を結節している場合もあると考えられる。

逆に同じ同窓会が開催する会合を介する場合、大学関係者が同窓会の会員であるか、来賓として大学関係者が同窓会の会合に参加している必要がある。そして、同窓会が複数回会合を開催していることが条件である。幹事会、商議員会、評議員会などは毎回大学関係者が参加していることが想定されるため、距離4（同結合）の位置関係が生まれにくい。該当者数が少なかった要因はこれらの条件を満たすことが難しいからであると考えられる。なお、これらの条件が満たされなかった場合は、パスなしの位置関係となる。

6.4 大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動・寄付金額

6.4.1 創立八十周年記念事業資金の寄付者記録について

前節では大学関係者と卒業生の位置関係を観察した。本節では、寄付行動のデータを加えて、大学関係者と卒業生の位置関係との関係を見ていくことにする。

先に述べたように1961年の早稲田大学は創立八十周年記念事業資金の募集が開始された年である。第1部2章2.3.3でみたように、卒業生の寄付があった際、同窓会誌である『早稲田学報』に記載される。この記念事業における寄付者についても1961年4月号から1967年4月号の『早稲田学報』「早稲田大学創立八十周年記念事業資金 寄付者芳名」（以下、寄付者記録と記す）のに記載された。寄付者は1号にまとめて掲載されたわけではなく、各号に分けて掲載されている。例えば1962年1月号では1961年11月11日から1961年12月10日の1ヶ月の間寄付した者をまとめており、合併号である1962年3月号では1961年12月11日から1962年2月10日までに寄付した人々がまとめられている。『早稲田学報』によると、寄付者は集計期間内において受理した月日により取り扱われ、集計期間内の寄付者記録に掲載される。掲載は、金額順の五十音順で整理されている。寄付者記録の最後には、寄付金額の合計およびその号までの累計が掲載されている。加えて、1962年10月号からは、寄付者記録の初めのページに「法人、校友、父兄、その他」の寄付金額の集計が掲載されている。

1961年の会合記録に対応する寄付状況は、『早稲田学報』の1961年4月号、5月号、6月号、7・8月号、9月号、10月号、11月号、12月号、1962年1月号、3月号である。合併号が1961年7・8月号、1962年3月号となり、これらの2号のみ寄付期間が2か月である（表6-3）。

表 6-3 1961 年寄付者の掲載号と寄付集計期間

掲載号	寄付集計回	寄付集計開始日	寄付集計終了日	寄付集計期間
1961 年 4 月号	1	-	1961.3.15	-
1961 年 5 月号	2	1961.3.16	1961.4.10	1 ヶ月
1961 年 6 月号	3	1961.4.11	1961.5.10	1 ヶ月
1961 年 7-8 月号	4	1961.5.11	1961.6.10	1 ヶ月
1961 年 9 月号	5	1961.6.11	1961.8.10	2 ヶ月
1961 年 10 月号	6	1961.8.11	1961.9.10	1 ヶ月
1961 年 11 月号	7	1961.9.11	1961.10.10	1 ヶ月
1961 年 12 月号	8	1961.10.11	1961.11.10	1 ヶ月
1962 年 1 月号	9	1961.11.11	1961.12.10	1 ヶ月
1962 年 3 月号	10	1961.12.11	1962.2.10	2 ヶ月

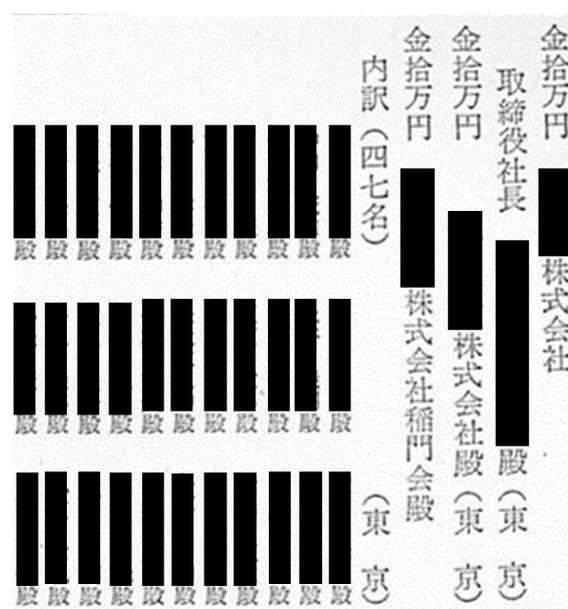


図 6-9 寄付者記録 (氏名や企業名は黒塗りしている)

寄付者は図 6-9 のように掲載され、記載される情報は次の通りである。寄付者について 1 人の個人が寄付した場合、「寄付金額・氏名・地名」、「寄付金額・(企業名、同窓会を含む団体名)・役職名・氏名・地名」のいずれかの形で記載される。「役職名」が付記される場合、「企業名、同窓会を含む団体名」の社長や代表など、一番高い役職の名称が記載されていた。また、個人が複数回寄付した場合、その寄付者記録には「氏名」の後、「追加」などの情報が付記される。さらに複数の人物が共同で寄付した場合、「寄付金額・(企業名、同窓会を含む団体名)・地名」、「寄付金額・複数の氏名・地名」、「寄付金額・(企業名、同窓会を含む団体名)・複数の氏名・地名」のいずれかの形で記載される。ただし、その内訳として「寄付

金額・氏名」もしくは「氏名」が別の場所に記載される場合がある。その一方で「複数氏名」が記載される場合、寄付金額の合計のみが記載され、詳細の内訳がなく、個々人がどのくらい寄付したのか不明なものもある。寄付者記録の掲載には以上の特徴があるが、基本的には一部寄付金額が不明な寄付者がいるものの、寄付者に関してはほぼ掲載されている。

会合記録から抽出したアフィリエーション・ネットワークにおいて、個々人は「氏名、個人が参加した同窓会グループの情報、ゲスト情報、参加した会合の日時」の情報があり、寄付者記録から得られる情報を共通する情報は「氏名」のみとなる。したがって、本稿では会合記録から AN データを生成するうえで修正を行った「氏名」と寄付者記録に掲載される「氏名」を比較し、文字列が一致する場合を本人とみなす。

6.4.2 寄付者記録参照の際の問題点とその処理

大学関係者と位置関係と寄付行動・寄付金額を見ていく上で会合記録と寄付者記録を扱うに当たって3つの問題がある。これらについてはそれぞれ以下のように処理した。

1つ目の問題は寄付行動についてである。会合記録に記載される個人の氏名に関し、表現のばらつきにより「田中教授」「田中太郎夫人」などのように、個人もしくは、個人と関連ある他の個人の氏名に属性がついている場合がある。AN データ生成時に個人の同定を行い、可能な限り氏名の統一を行っているものの、情報の不足から個人の氏名を特定できないものもある。氏名が特定できない場合、寄付者記録と氏名を比較しても、一致することはないため、寄付を行ったかどうか判別できない。したがって、寄付行動、寄付金額を分析するうえで本人の氏名が特定できないものについては分析から除外する。

2つ目の問題は個人の寄付金額についてである。複数の人物がまとめて寄付を行ったとき、寄付金額の合計のみが明らかであり、個々人の内訳が不明な場合がある。そのため、この情報からは該当する個人が寄付を行ったということのみしか明らかとならない。したがって、寄付金額について分析を行う上で、寄付金額が不明な寄付者については分析からは除外する。

最後に、3つ目の問題は企業・団体の寄付金額についてである。本稿では AN データを構成する個々人の氏名と寄付者記録の氏名の一致により両者を紐づけて、寄付者記録に掲載される氏名以外の情報を活用する。しかし、寄付者記録には卒業生のみが掲載されているわけではない。創立八十周年記念事業資金では卒業生に加え、大学関係者、法人や在学生保護者らが寄付している。しかし、寄付者記録には、その区分が掲載されていないため、これらを区別することは不可能である。企業や団体の寄付の場合、個人の寄付と比較してその額が大きなものになることが想定されるため、分析に影響を与えることが考えられる。そのため、個人の寄付と分けて分析することが妥当だろう。ただしその一方で、寄付者名簿に企業名、役職名に加え、個人名が記載されていることについて、企業、団体の社長、代表が意思決定し、寄付を行ったと読み取ることもできる。そのため、寄付金額の分析について、本稿では「氏名」情報がある場合の「企業名」、「同窓会名」、「団体名」の有無に着目し、その内訳が

ない場合に、これは集団としての寄付の可能性があるとし、寄付者が集団の場合とそうでない場合の2通りで考えることにする。

6.4.3 位置関係と寄付行動

本章6.3.3で分類した5つの位置関係〔距離2、距離4{ 距離4（同結合）、距離4（異結合）}、距離6、パスなし〕と寄付行動・寄付金額の関係について分析する。本章が扱ったデータは、ほぼすべてのアクティブな団体の情報を扱っているため、この関係の比較には寄付行動、寄付金額に関する各位置関係の比較をグラフや数値の比較を行う。

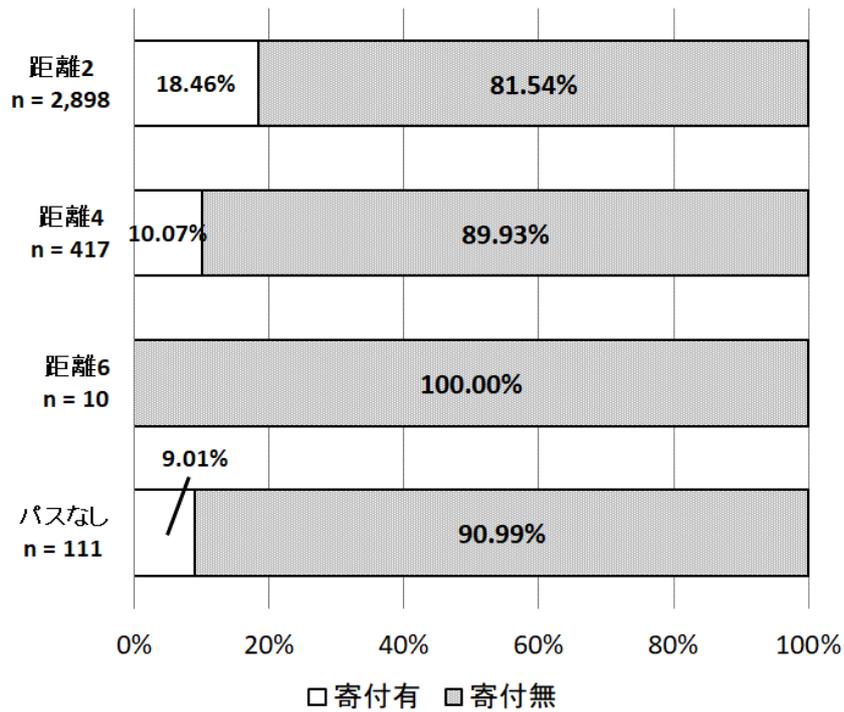
まず、データの除外処理の対象となる寄付者名簿の氏名と特定不可能な卒業生の数を確認しておきたい。寄付行動において、寄付者名簿の氏名と特定不可能な卒業生は29人存在した。位置関係ごとにみていくと、距離2が22人、距離4が6人（同結合0人、異結合6人）、距離6が0人、パスなしが1人である。

これら特定不可能な卒業生を除いた同窓会会合への参加者3,539人（内大学関係者103人）の中で、寄付行動が確認された人数は672人であり、全体の19%であった。このうち、卒業生の寄付者数は587人であり、卒業生全体の17%が寄付を行っていた。

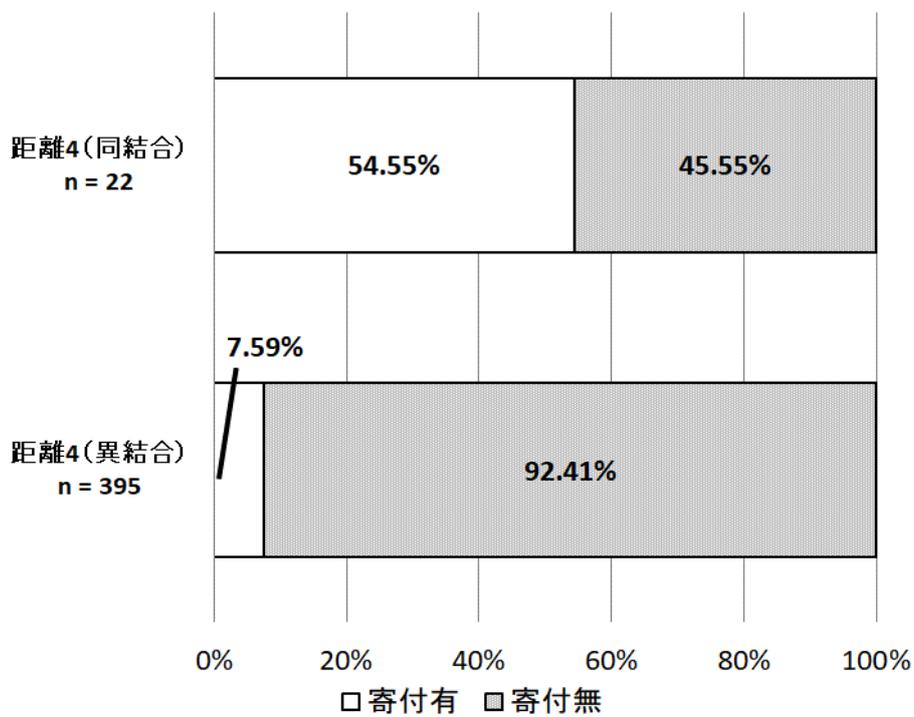
位置関係における寄付行動のパターンをみていこう。大学関係者と位置関係〔距離2、距離4{ 距離4（同結合）、距離4（異結合）}、距離6、パスなし〕である卒業生の寄付行動については図6-10の結果が得られた。

図6-10(a)は位置関係と寄付行動の関係を示している。最も寄付行動しやすい位置関係は距離2の18.46%（2,898人中535人）であり、続いて距離4の10.07%（417人中42人）、パスなしの8.93%（111人中10人）、距離6の0%（10人中0人）という結果となった¹⁾。距離が一番近い距離2の位置関係にある卒業生らの寄付率が一番高く、距離が遠い位置関係は寄付率が低くなっていた。先行研究で逸話的に語られていた大学と卒業生の直接的な関係が重要であるという指摘を支持するものである。

ところで図6-10(b)を見ると様子が異なる。これは位置関係が距離4であるもので、会合を開催した同窓会が同じ（同結合）か異なる（異結合）かで分類したものと寄付行動についてみたものである。距離4（同結合）が54.55%（22人中12人）、距離4（異結合）が7.59%（395人中30人）であった²⁾。距離4（同結合）については全体で一番高い距離2（18.46%）と比較しても大きく寄付率を上回っている。常識的な見方とは異なる距離4（同結合）という大学への寄付行動がより促進される位置関係の存在が発見された。



a) 位置関係と寄付行動



b) 距離4 (同結合) と距離4 (異結合) の場合
 図 6-10 大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動

6.4.4 位置関係と寄付金額

6.4.4.1 位置関係による寄付金額の内訳

寄付金額、およびデータの除外処理の対象となる寄付金額について確認できない卒業生の数、また個人の寄付行動と区別して考える企業・団体の数を確認する。寄付金額について、寄付行動が確認されたが寄付金額が確認できなかった卒業生は59人存在した。創立八十周年記念事業募金の1961年の寄付金総額は、650,427,855円であり、1961年の会合参加者3,539人（内大学関係者103人）の寄付金総額は54,621,623円であった。そして、大学関係者を除いた卒業生の寄付金総額は48,266,623円である。このなかで、寄付金額について確認できない卒業生は59人存在した。また企業・団体による寄付と考えられる対象数は32存在し、その寄付金額は24,797,362円であった。位置関係に対応した内訳について以下まとめる。

(1) 距離2

距離2の位置関係にある卒業生2,898人において、寄付を行った535人の寄付金総額は46,622,366円であった。このなかで、寄付金額が確認できない卒業生は48人存在した。また企業・団体による寄付と考えられる対象数は30存在し、その寄付金額は24,297,362円であった。

(2) 距離4

距離4の位置関係にある卒業生417人（同結合22人、異結合395人）において、寄付を行った42人（同結合12人、異結合30人）の寄付金額は1,497,257円（同結合85,000円、異結合1,412,257円）であった。このなかで、寄付金額が確認できない卒業生は6人（同結合4人、異結合2人）存在した。また企業・団体による寄付と考えられる対象数は2（同結合0、異結合2）存在し、その寄付金額は500,000円（同結合0円、異結合500,000円）であった。

(3) 距離6

距離6の位置関係にある卒業生10人において、寄付金額は0円であった。このなかで、寄付金額が確認できない卒業生は0人、また企業・団体による寄付と考えられる対象は存在しなかった。

(4) パスなし

パスなしの位置関係にある卒業生111人において、寄付を行った10人の寄付金額は147,000円であった。このなかで寄付金額が確認できなかった卒業生は5人、また企業・団体による寄付と考えられる対象は存在しなかった。

ここで寄付金額について2つの視点から分析を行う。一つは大学関係者との位置関係による卒業生の寄付金額の期待値である。距離ごとに寄付金額の総額をその距離に位置する卒業生の人数で割ったものである。もう一つは大学関係者とある位置関係にある卒業生の

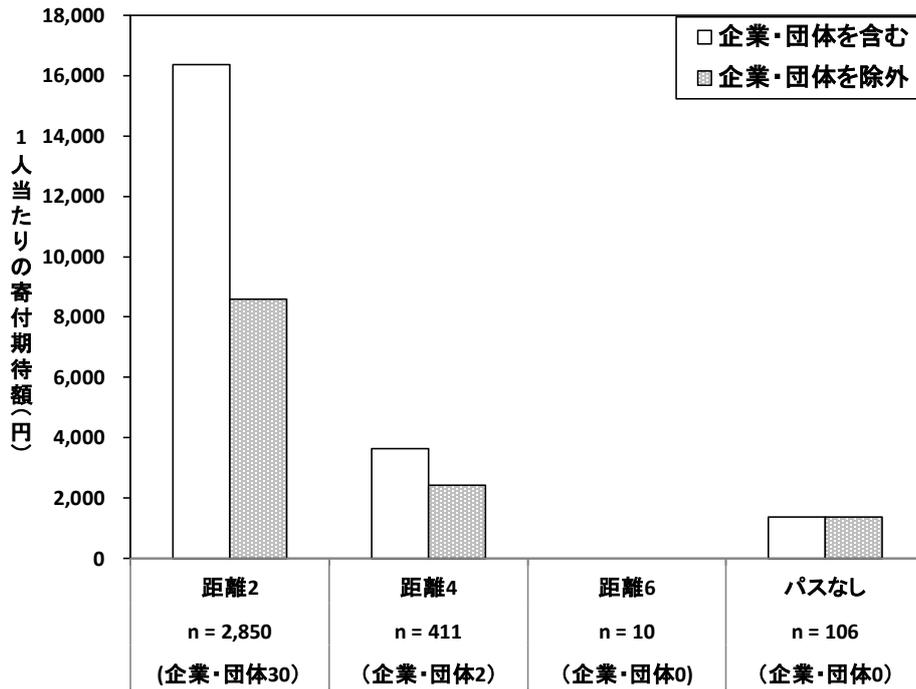
中で寄付行動を行った卒業生を対象とした期待値である。これは距離ごとに寄付金額の総額をその距離に位置する寄付者の人数で割ったものとなる。前者は位置関係によって 1 人当たりどれくらい寄付してくれるのか、後者は寄付行動を行った卒業生を対象に位置関係によって 1 人当たりどれくらい寄付してくれるのかに着目するものである。ただし、後者については距離 6 が 1 人も寄付者がいなかったため、距離 6 は分析対象から除く。以下、結果を示す。

6.4.4.2 位置関係と 1 人当たりの寄付金額

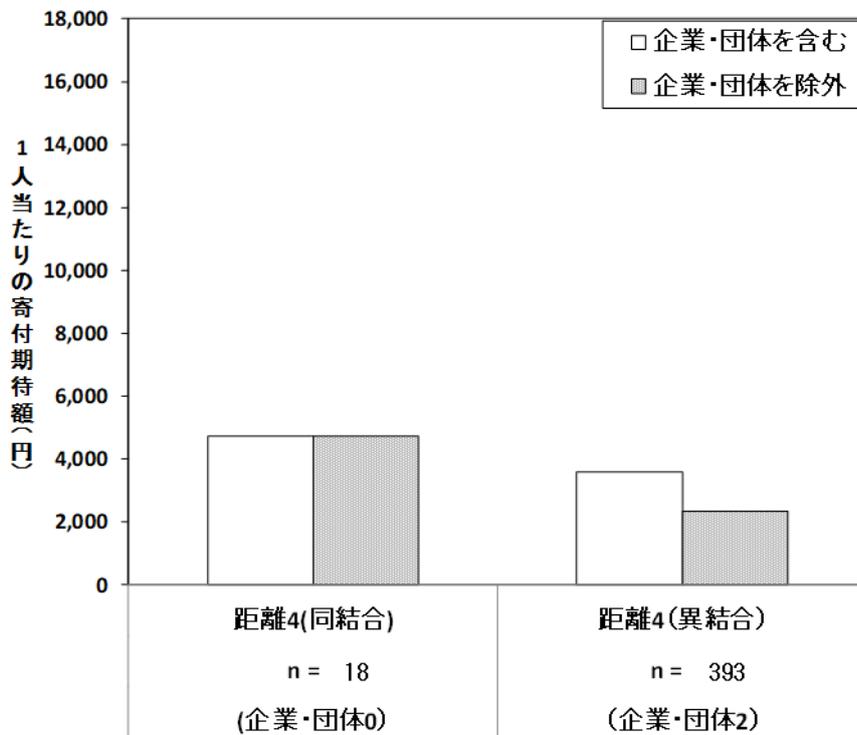
大学関係者との位置関係[距離 2、距離 4 {距離 4 (同結合)、距離 4 (異結合)}、距離 6、パスなし]による卒業生の 1 人当たりの寄付金額を図 6-11 に示す。図 6-11 中の各位置関係において、左の縦棒(白色)は企業・団体と考えられる対象を含んだ卒業生 1 人当たりの寄付金額であり、右の縦棒(灰色)は企業・団体と考えられる対象を除外した卒業生 1 人当たりの寄付金額を表している。

図 6-11(a)は位置関係と 1 人当たりの寄付金額を示している。企業・団体と考えられる対象を含む場合、1 人当たりの寄付金額が最も高かったのは、距離 2 の 16,359 円、続いて距離 4 の 3,643 円、パスなしの 1,387 円、距離 6 の 0 円との結果となった³⁾。また、企業・団体と考えられる対象を除外した場合、1 人当たりの寄付金額が最も高かったのは、距離 2 の 8,598 円、続いて距離 4 の 2,438 円、パスなしの 1,387 円、距離 6 の 0 円との結果となった⁴⁾。企業・団体と考えられる対象を除くことで、寄付金額が下がってはいるものの、順位はどちらも変わらなかった。特に大学関係者と会合で接している卒業生は一人当たり距離 4 の 4~5 倍、パスなしの 8~16 倍寄付しており、創立八十周年記念事業募金の寄付達成に大いに貢献していたことがわかる。

次に図 6-11(b)の距離 4 (同結合)、距離 4 (異結合)についてみていく。企業・団体と考えられる対象を含む場合、1 人当たりの寄付金額は距離 4 (同結合)が 4,722 円、距離 4 (異結合) 3,594 円となり⁵⁾、企業・団体と考えられる対象を除く場合、1 人当たりの寄付金額は距離 4 (同結合)が 4,722 円、距離 4 (異結合) 2,333 円となった⁶⁾。この結果から、同じ距離 4 ではあるが、距離 4 (同結合)の 1 人当たりの寄付金額は距離 4 (異結合)の 1 人当たりの寄付金額よりも高い。しかし、いずれも距離 2 の寄付金額を超えず、またパスなしの寄付金額を下回ることもなかった。



a)位置関係と寄付金額



b) 距離4（同結合）と距離4（異結合）の場合

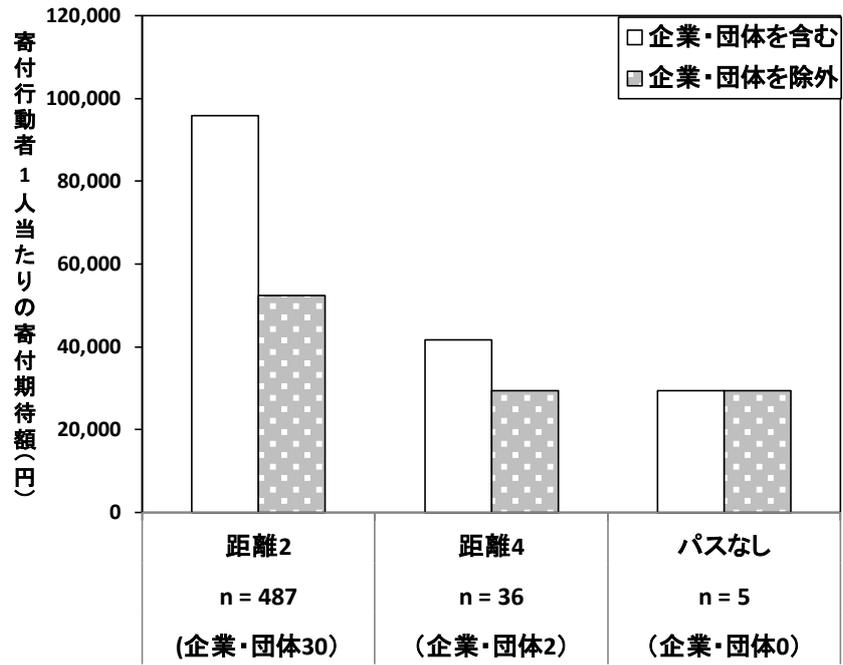
図 6-11 卒業生 1 人当たりの寄付金額

6.4.4.3 位置関係と寄付者 1 人当たりの寄付金額

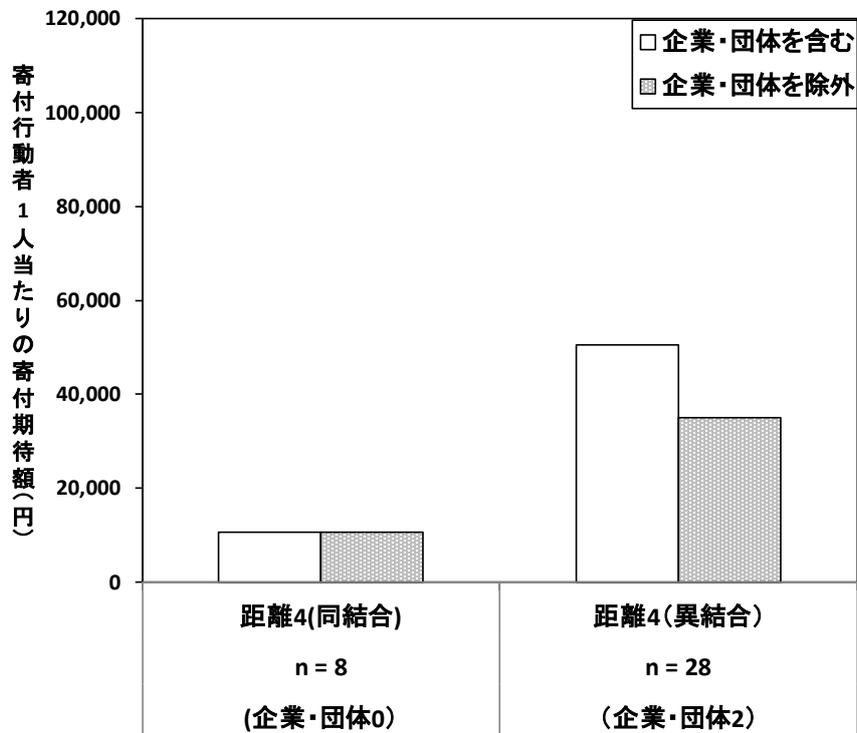
次に、大学関係者との位置関係[距離 2、距離 4 {距離 4 (同結合)、距離 4 (異結合)}、パスなし]による寄付者 1 人当たりの寄付金額を図 6-12 に示す。距離 6 は寄付者が存在しなかったため分析対象から除いている。図 6-12 の各位置関係における左右の縦棒の意味は図 6-11 と同様で、左の縦棒が企業・団体と考えられる対象を含んだ寄付者 1 人当たりの寄付金額、右は企業・団体と考えられる対象を除外した寄付者 1 人当たりの寄付金額を表している。

図 6-12(a)は位置関係と寄付した卒業生 1 人当たりの寄付金額を示している。企業・団体と考えられる対象を含む場合、最も寄付者 1 人当たりの寄付金額が高かったのは、距離 2 の 95,734 円であり、続いて距離 4 の 41,590 円、パスなしの 29,400 円との結果となった⁷⁾。また、企業・団体と考える対象を除外した場合、最も寄付者 1 人当たりの寄付額が高かったのは、距離 2 の 52,478 円、続いてパスなしの 29,400 円、距離 4 の 29,331 円という結果となった⁸⁾。企業・団体と考えられる対象を含むか含まないかに関わらず距離 2 が最も寄付額が高かったが、距離 4 とパスなしは順位が逆転した。ただし、企業・団体と考えられる対象を除外した場合は、69 円しか違いがなくほぼ差はないとも考えられる。したがって、ここまでの分析で明らかになったことは、大学関係者と距離 2 の位置関係にある寄付者は他の位置関係の寄付者よりも寄付額が多いということであった。

次に、距離 4 (同結合) と距離 4 (異結合) とを比較した図 6-12(b)を見てみる。企業・団体と考えられる対象を含む場合、寄付者 1 人当たりの寄付金額は距離 4 (同結合) が 10,625 円、距離 4 (異結合) が 50,438 円となり⁹⁾、企業・団体と考えられる対象を除く場合、寄付者 1 人当たりの寄付金額は距離 4 (同結合) が 10,625 円、距離 4 (異結合) が 35,087 円という結果となった¹⁰⁾。距離 4 (同結合) は、距離 4 (異結合) と比較して、企業・団体と考えられる対象を含んで 5 倍、除いても 3 倍ほど寄付額が低いことがわかる。全体と比較しても、距離 4 (同結合) は一番低い結果であった。ただし、この距離 4 (同結合) を除いて考えれば、寄付者 1 人当たりの寄付金額は位置関係が近くなるほど大きくなる。図 6-12(b) から、距離 4 (同結合) という位置関係にある卒業生の寄付額はこの性質から外れており、距離 4 (同結合) には通常では働かない何らかのメカニズムが内在していることを示唆している。



a)位置関係と寄付金額の関係



b) 距離4 (同結合) と距離4 (異結合)

図 6-12 寄付した卒業生 1 人当たりの寄付金額

6.4.4.4 特殊な動きをみせた位置関係と寄付行動について

これまで、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動と寄付金額（1人当たりの寄付額、寄付者1人当たりの寄付額）をみてきた。距離4の位置関係については測地線に含まれる2つの会合を開催した同窓会に着目し、同じ同窓会が開催する場合（同結合）と異なる同窓会が開催する場合（異結合）に分けて観察を行った。会合を開催する同窓会の種別を考慮せずに位置関係をみた場合、概ね大学関係者と卒業生の位置関係が近いほど卒業生の寄付行動は促進され、かつ寄付金額も大きくなる傾向がみられた。しかしながら、距離4（同結合）、距離4（異結合）の視点を加えて分析を行ったところ、寄付行動、寄付者1人あたりの金額について上記の傾向と異なる現象がみられた。特に距離4（同結合）は非常に高い割合で寄付行動を行っていることが観察された。ただし、一方で、寄付者1人あたりの金額は全体でみて一番低い結果であった。本節では、この特異な現象がみられた距離4（同結合）に着目し、この測地線を通る大学関係者、卒業生、会合を対象として、ネットワークの代表的な指標をもとに探求していきたい。

距離4（同結合）に位置した卒業生は22人存在し、この位置関係を生んだ会合を開催した同窓会は3つの団体である。3つのうち2つが地域稲門会であり、1つが年次稲門会であった。距離4（同結合）の測地線に現れる5つのノードを{大学関係者、会合1、卒業生1、会合2、卒業生2}としたとき、3つの団体別の情報をまとめたものが表6-4となる。地域稲門会1、地域稲門会2はいずれも1人の大学関係者を3人の卒業生が1つ会合を介しており、年次稲門会は6人の大学関係者と6人の卒業生を8人の卒業生が2つの会合を介していた。地域稲門会はいずれも年次稲門会と比較して、測地線の数が少ないものの、卒業生2の寄付行動率は高かった。

表 6-4 同結合がみられた同窓会について

同窓会	測地線数 (同結合)	卒業生 2 (人数)	測地線に含まれる			寄付 行動者
			大学関係者 (人数)	卒業生 1 (人数)	会合 1	
地域稲門会 1	16 (3)	8	1	3	1	6
地域稲門会 2	85 (3)	7	1	3	1	4
年次稲門会	171 (50)	6	6	8	6	1

これらの距離4（同結合）の測地線に現れる大学関係者と距離4（同結合）に位置する卒業生（卒業生2）およびこの卒業生が参加した会合（会合2）について、次の3つの方法から特徴を捉える。1つはネットワーク指標（次数中心性、固有ベクトル中心性、媒介中心性）を用いる。次に、構造同値を調査し、そして最後に大学関係者が参加した会合（会合1）、大学関係者が参加しなかった会合（会合2）については会合内容を観察する。

6.4.4.4.1 距離4（同結合）測地線に含まれるノードの特徴

（1）中心性

全体のネットワークの位置を探るため、3つの代表的な指標である中心性（次数中心性、固有ベクトル中心性、媒介中心性）を求めた。第2部6章6.2.1で述べたように、ANを1モードに変換し、中心性を算出することが一般的であるが、1モードへの変換したネットワークは観察するネットワークとは異なる。そのため、Faust（1997）に習い、ANを2部グラフの隣接行列（Wilson 1982）に整理して中心性を算出した。算出した中心性の値をもとに、個人については、個人内の順位、会合については会合内の順位を調べた。大学関係者と距離4（同結合）に位置する卒業生（卒業生2）およびこの卒業生が参加した会合（会合2）についてみていこう。

まず、会合2（地域稲門会1：1、地域稲門会2：1、年次稲門会：1）に関する中心性の順位を整理したものは表6-5となる。順位に関する特徴として、いずれの中心性も全体に対する順位は低い。しかし、次数中心性と媒介中心性の2つの中心性を比較したときに、寄付率の高い地域稲門会1、地域稲門会2の会合2の媒介中心性は次数中心性よりも高い。

表6-5 距離4（同結合）に位置する卒業生の参加した会合の中心性の順位

		中心性の順位（98 会合）		
		次数中心性	固有ベクトル 中心性	媒介 中心性
各中心性最下位		97	70	98
地域稲門会 1	会合 2A	72	52	65
地域稲門会 2	会合 2B	83	70	69
年次稲門会	会合 2C	69	52	77

卒業生2に関する中心性の順位を整理したものは表6-6である。いずれも順位は変わらず、すべて最下位であった。すなわち、いずれも会合2のみしか参加していないことがいえる。

表6-6 距離4（同結合）に位置する卒業生の中心性順位

		中心性の順位（3,568 人）		
		次数中心性	固有ベクトル 中心性	媒介 中心性
各中心性最下位		389	1,452	389
地域稲門会 1	卒業生 2A	389	1,452	389
地域稲門会 2	卒業生 2B	389	1,452	389
年次稲門会	卒業生 2C	389	1,452	389

以上、大学関係者と距離4（同結合）に位置する卒業生およびこの卒業生が参加した会合のノードの中心性（次数中心性、固有ベクトル中心性、媒介中心性）の順位についてみてきた。ノードの中心性についての着目点は、会合の次数中心性と媒介中心性の順位の比較である。距離4（同結合）で特に寄付行動率が高かった地域稲門会1、地域稲門会2に関しては、次数中心性よりも媒介中心性の順位が高いノードが多いことが明らかとなった。

（2）構造同値

次に、ネットワーク上の似た構造に位置する指標として構造同値を利用する。ここでは、ANを2部グラフの隣接行列で表し、ユークリッド距離を用いて、ノード間の距離が0となる組み合わせを探索した。地域稲門会1、地域稲門会2、年次稲門会の団体ごとにまとめた結果は表6-7、表6-8、表6-9である。卒業生2に関しては、地域稲門会1、地域稲門会2、年次稲門会いずれも卒業生2全員が構造同値であった。

表6-7 構造同値のノードの組み合わせ（地域稲門会1）

ノード	構造同値
卒業生2	{卒業生2A 全員}

表6-8 構造同値のノードの組み合わせ（地域稲門会2）

ノード	構造同値
卒業生2	{卒業生2B 全員}

表6-9 構造同値のノードの組み合わせ（年次稲門会）

ノード	構造同値
卒業生2	{卒業生2C 全員}

（3）会合内容

最後に、大学関係者が参加した会合（会合1）、大学関係者が参加しなかった会合（会合2）の会合内容を分析する。「母校八〇周年記念事業募金」という視点でみたときに、会合1、会合2でこの話題が出たかどうかに関してまとめたものが表6-10となる。会合1について地域稲門会1、地域稲門会2はともに募金の話題があったが、年次稲門会については必ずしも募金の話題があるわけではなかった。次に会合2については地域稲門会1、地域稲門会2の2つの団体では会合内容に「母校八〇周年記念事業募金」の話題があった。年次稲門会では大学関係者が参加している場合でも募金に関する話題がない場合がある。このときの会合1では、来賓である参加者に関する話題が会合内容であった。

表 6-10 募金に関する会合内容の有無

団体	会合	募金に関する会合内容
地域稲門会 1	会合 1A	○
	会合 2A	○
地域稲門会 2	会合 1B	○
	会合 2B	○
年次稲門会	会合 1C	×
	会合 1D	○
	会合 1E	○
	会合 1F	×
	会合 1G	×
	会合 1H	×
	会合 2C	×

6.4.4.4.3 距離 4（同結合）のまとめ

距離 4（同結合）が存在した 3 つの団体（地域稲門会 1、地域稲門会 2、年次稲門会）について詳細な観察を行った。3 つのうち 2 つの団体が特に距離 4（同結合）に位置する卒業生の寄付率が高かった。この 2 つの団体は、もう 1 つの団体と比較して測地線数が少ない特徴をもつ。距離 4（同結合）について理解するため、大学関係者と距離 4（同結合）に位置する卒業生およびこの卒業生が参加した会合について中心性、構造同値、会合内容の 3 つの手順からその特徴を観察した。

まず中心性についてであるが、特に寄付行動率の特に高かった地域稲門会 1、地域稲門会 2 の会合 2 の中心性の順位に着目すると、次数中心性の順位よりも媒介中心性の順位が高い傾向にあることがわかった。

3 つの団体の卒業生 2 はいずれも構造同値であった。構造同値の関係は競争原理が働きやすい（安田 1997）。距離 4（同結合）に該当する卒業生 2 が 1 つの会合を通じてつながっているのは卒業生 1 であるため、大学に対してというよりは参加した同窓会に対して協力をしたとみることができるのではないかと考えられる。特に、寄付行動率が高かった地域稲門会 1、地域稲門会 2 については、卒業生 1 についてもほぼ全員が構造同値であった。卒業生 1 についても競争原理が働き、卒業生 2 の寄付行動への働きかけとして機能していたものと考えられる。

しかし、これだけでは寄付者一人当たりの金額が低かったことは説明できない。会合内容でみたように、大学関係者が参加していない会合 2 でも地域稲門会 1、地域稲門会 2 どちらも会合内容に募金について含まれていた。このことを考慮すると、考えられるもうひとつの

メカニズムとして、この距離4（同結合）にいる卒業生は消極的な協力の状態にあった可能性も考えられる。この現象は「お互いさま」、「お世話になったから」などの“遠慮がちな”ソーシャル・キャピタル（今村・園田・金子 2010）と呼ばれるものである。この消極的な協力は決して否定的なものではなく、むしろよりよい同窓会団体へつなげていくために貢献するものである。距離4についての詳しい観察から、距離4（同結合）については寄付行動と寄付者1人当たりの寄付金額について低い現象が見られた。大学同窓会では位置関係に応じ、“遠慮がちな”ソーシャル・キャピタルや強い自発性のあるソーシャル・キャピタルが機能していたと考えられる。しかし、本稿ではそこにどういったメカニズムが存在しているのかまで踏み込むには至らなかった。今後、明らかにしていくべき課題であると考えられる。

6.5 本章のまとめ

本章では大学同窓会の会合参加者のミクロな動きから生まれる大学同窓会ネットワークについて、大学関係者と卒業生の位置関係に着目した構造を明らかにし、その構造と卒業生の寄付行動との関連をみてきた。大学と卒業生の関係が希薄であると指摘されていた時期である1961年の早稲田大学同窓会を具体的な対象とし、早稲田大学校友会が出版する大学同窓会誌『早稲田学報』に掲載された会合記録を活用し、そこから生成されるANを観察した。大学同窓会AN上における位置関係では、距離2、距離4、距離6、パスなしの4通りが確認され、さらには会合を開催した同窓会に着目することで、距離4（同結合）、距離4（異結合）の位置関係が存在していることを発見できた。卒業生の多くは距離2の位置関係にあるものが圧倒的に多く、距離が近いほど該当する卒業生は多かった。位置関係と寄付行動・寄付金額について分析を行ったところ、寄付行動については距離4（同結合）に位置する卒業生が半数以上の割合で寄付を行っており、距離2の寄付率18.46%を大きく上回っていた。しかしながら、寄付者1人当たりの寄付額については、距離4（同結合）が一番低い値であった。すなわち、距離4（同結合）については寄付行動率が高い一方で、寄付額が低いという特徴的な行動を示すことを見出した。この距離4（同結合）を除いたとき、距離が近いほど、寄付行動率、1人当たりの寄付額、寄付者1人当たりの寄付額が高い結果となり、卒業生の行動は常識的なものであったことが今回の研究により初めて実証的に確認された。一方、距離4（同結合）の位置関係にある卒業生は常識的な行動とは異なる振る舞いをしており、これらは本研究で得た新しい知見のひとつである。

これらの結果は、本章においては、測地線、距離概念を用いてAN上における大学関係者と卒業生の位置関係の概念を用いて明らかにしたものである。しかしながら、これらの概念のみでは距離4（同結合）についての特徴的な振舞いの理由は明らかにすることはできなかった。本研究で明らかにできたのはここまでであり、今後の課題としては、高い寄付行動につながっている距離4（同結合）の位置関係にある卒業生の行動のメカニズムの理解が求められる。その解明には、ネットワーク構造については第2部6章6.4.4.4.3で触れたソーシ

ヤル・キャピタルの概念を取り入れた分析を進めていくことが必要になるだろう。

第7章 大学卒業生と大学との紐帯の強さの定式化と定量分析

7.1 導入

第2部6章では、卒業生と大学関係者とをネットワーク・グラフ上の位置関係でとらえ、その構造と寄付行動との関係を明らかにした。大学関係者と位置関係が近い卒業生ほど寄付行動を行っており、また寄付金額も多いという結果が得られた。ところで、喜多村(1990)は卒業生の協力を得るための1つに、卒業生との密なコミュニケーションを挙げた。そうであれば、寄付行動を行った卒業生は大学関係者と密な関係であったということになるが、果たしてそうだろうか。第2部6章で明らかにした位置関係において、距離2という一番近い距離にいる卒業生は、観察した卒業生において多数を占めていた。これらの卒業生が大学関係者と密な関係であったとすると、1960年代、大学と卒業生の関係は希薄であったと主張されてきた説(天野 2000)と矛盾する。このことは、別の尺度での卒業生の観察を要請している。

第2部6章で述べた位置関係には、大学関係者と卒業生の接触する以前の会合参加については何ら考慮していなかった。継続的な関係を捉える視点が不足していた。そこで本章では、2者の過去の接触行動によって関係の強さを捉える紐帯の強さ(Granovetter 1973)の概念を用い、関係の強弱を紐帯の強さで表現し、その視点からの卒業生の寄付行動を明らかにする。

大学同窓会ネットワークのデータは会合記録から得られるアフィリエーション・ネットワーク・データであるため、アフィリエーション・ネットワーク上で紐帯の強さを定義する必要がある。そのため、まず、アフィリエーション・ネットワーク上の2者の会合が行われた時点を加味した両者の紐帯の強さを定式化する。そして、これを用いて卒業生と大学関係者の紐帯の強さの推移および値と卒業生の寄付行動との関係を明らかにする。ここでは、具体的なデータとして、長期にわたり大学同窓会誌の会合記録が欠損なく掲載されていた1960年代の早稲田大学の一同窓会を選定した。

7.2 大学同窓会参加者間の紐帯の強さの定式化

7.2.1 定式化の概要

本章では、大学と卒業生とのつながりの強さを大学同窓会の参加者間のつながりの強さを使って定式化する。前者のつながりの強さを計算するには、後者のつながりの強さが定量的に評価できなければならない。本章では、「紐帯の強さ(Granovetter 1973)」の概念を導入し、これを使って参加者同士のつながりの強さを定義する。紐帯の強さの計算には、第1部で述べた大学同窓会誌に掲載された会合記録情報を活用する。ただし、紐帯の強さは、会合の参加者情報から直接的に算出することはできない。このため、本稿では、会合記録情報を、一旦アフィリエーション・ネットワーク(Breiger 1974)のデータに変換し、そのデータに会合開催時点の情報を加え作成したグラフ上で紐帯の強さを定義する方法を採った。以下、アフィリエーション・ネットワークは本章でも「AN」と略記する。

7.2.2 紐帯の強さの算出方法

(1) AN データの生成

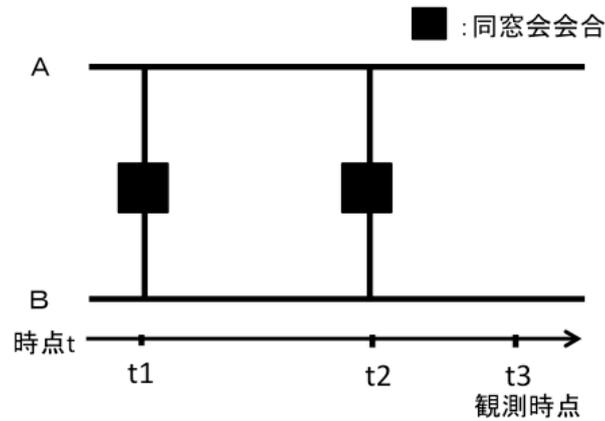
AN とは、社会ネットワーク分析において個人と組織の二重性、相互規定性メカニズムの解明に向けたリンケージ型モデル化（金光 2003）の 1 つであった。ここでは、会合記録に記載される個々人の参加情報を統合することを目的としてこのモデルを採用した。ノードを個人と会合、エッジを参加と定義した AN データを生成する。

なお、会合記録からの AN データ生成には処理すべき問題がある。第 1 部で述べたように、各々の会合記録は個別に寄稿され、それを大学同窓会誌編集者が会誌に記載しているため、記録者の記載ミスから生まれる「記載のぼらつき」（港・相澤 2010）と「同姓同名問題」という問題が避けられない。「記載のぼらつき」とは、例えば、同一人物であるにも関わらず「齋藤太郎」「斉藤太郎」のように異なる表記で記載されているケースが該当する。本章では、第 1 部で述べた方法を用いてこの問題に対処した。

(2) 紐帯の強さの算出

Granovetter によれば、紐帯の強さは「ともに過ごす時間量、情緒的な強度、親密さ（秘密を打ち明け合うこと）、助け合いの程度、という 4 次元を（おそらく線形的に）組み合わせたものである」（Granovetter 1973 大岡訳 2006：125）。しかしながら、多義的であるがゆえに、4 次元で扱うことは理論の一貫性を損なう可能性が指摘されている（盛山 1985）。Granovetter も転職・就職情報獲得の実証研究において、紐帯の強さのカテゴリーを「接触頻度」のみ使用して定義している。本稿においても、前述した Granovetter の「時間量」の操作的定義を参考に 1 次元に限定し、AN 上で幾何学的に紐帯の強さを定義する。紐帯の強さは、2 個人が接触した時点（接触時点）をいつの時点で観測するかで変化する。接触した直後でそれを見れば紐帯は強いだろうし、遠い過去の接触であれば弱いものになる。したがって、本論文では、2 個人が会合で接触した時点（接触時点）の情報と 2 個人が接触した会合数（接触回数）を勘案し、紐帯の強さを算出することにした。AN グラフを使ってこのことを以下で具体的に説明する。

図 7-1 は増田（2012）の時間の情報を組み込んだネットワーク・グラフを参考に、2 個人の接触状況を幾何学的に表現した AN グラフである。図 7-1 では 2 個人 A と B が時点 t_1 と t_2 で共に会合に参加している。図 7-1 で、A の t_1 時点（以下 $A[t_1]$ と記す）と $B[t_1]$ を結んだ線分と、 $A[t_2]$ と $B[t_2]$ を結んだ線分の長さは等しいものとする。すなわち、どの会合も接触の程度に差はなく同等のものと仮定する。また、観測時点 t_3 の B から対象とする接触時点 t_2 の A への距離を考える際、具体的には $B[t_3] \rightarrow B[t_2] \rightarrow A[t_2]$ という経路の長さで考えるが、経路は、対象とする接触時点の会合のパスを通る最短経路で考えるものとする。



出典 増田 (2012) 図 1 を参考に作成

図 7-1 時間軸を加えた AN グラフ

Granovetterによれば観測時点と対象とする接触時点の時間差が長くなるほど紐帯は弱くなる。したがって、紐帯の強さは観測時点（始点）と対象の接触時点（終点）とを結ぶ直線の長さ L に直接的に関係するであろう。ここで、図 7-1 において、ひとつの会合での 2 個人の接触の長さを 1、また時間軸について観測時点と接触時点の時間差を Δt としたとき、 L に相当する 2 個人間の距離 D を次の無次元量で定義する。

$$D = \sqrt{1 + 3(\Delta t/T)^2} \quad \dots\dots (1)$$

ここで T は、紐帯の強さが半減する時間として定めるものである。次節で具体的な事例についての計算結果を述べるが、そこでは時間を月単位で表現している。その際、便宜的に、紐帯の強さが半減する期間を 6 ヶ月として、 $T = 6$ と定めた。

以上より、観測時点 t_o からみた接触時点 $t_c (= t_o - \Delta t)$ の会合を介し接触する 2 個人の紐帯の強さ Tie は

$$Tie = 1/\sqrt{1 + 3\{(t_o - t_c)/T\}^2} \quad \dots\dots (2)$$

と定義する。紐帯の強さは距離 D が長くなるほど弱くなるが、その値が 0 にならない。なぜならば、紐帯の強さが 0 であることは一度も会ったことがないことを指すためである。したがって、紐帯の強さの定義において距離 D の逆数を採用した。

ここで、もう一度図 7-1 に着目しよう。A と B は 2 度の会合で接触している。この時の 2 個人の紐帯の強さを得るためには、観測時点までの 2 個人の接触回数を考慮し、各接触時点で得た紐帯の強さを合計する必要がある。2 個人の n 回目の接触時点を $t_{c,n} (1 \leq n \leq N)$ とし、観測時点 t_o 前の直近の接触時点が $n = M (\leq N)$ であるとき、2 個人の紐帯の強さは個別の紐帯の強さの総和として次式で表される。

$$Tie = \sum_{n=1}^M 1/\sqrt{1 + 3\{(t_o - t_{c,n})/T\}^2} \dots\dots (3)$$

ただし、観測時点以前に接触がない場合は紐帯の強さは0と定義する。

この定義を、AN データと連関させて任意の個人間についての紐帯の強さを求めていくことになる。ただし、AN データには、観測時点以後のデータも含まれているため、観測時点前の2個人がともに参加している会合の情報を抽出し、定義式(3)を適用することになる。

7.3 定量分析に向けた準備

7.3.1 分析対象とした同窓会と時期

分析対象となる大学同窓会は、分析する期間に亘って会合記録の欠損がないことが条件になる。これは、本分析手法が、会合記録情報を手掛かりにAN データを生成するためである。この理由から、1957年12月から1967年8月までの約10年間における早稲田大学の1同窓会「同窓会A」を分析の対象とした。

同窓会Aは卒業年が同じ卒業生によって設立された同窓会で、連続した2つの卒業年の卒業生による合同の同窓会である。同窓会Aから抽出した約10年間分の記録は、同窓会Aに所属する卒業生らの卒業後30~40年にあたる。同窓会Aの正確な会員数は不明である。明らかなのはこの2つの卒業年の卒業生数は合計で1,505人であったということである。

データの抽出には同窓会誌『早稲田学報』1958年1月号から1967年8月号の「催・会合・その他」に掲載された会合記録を利用した。会合記録には、開催日時、会合の内容、参加者氏名などの情報がある。同窓会Aの対象期間における会合及び参加人数推移を図7-2に示す。会合は基本的には月に1回の頻度で、計98回行われていた。ただし、2つの会合(1958年3月、1958年4月)は参加人数および参加氏名について記載されていない。この2つの会合を除く96回の会合の総参加人数は385人であり、1回の会合における参加人数は最大97人、最小8人であった。また、1回の会合あたりの参加人数の平均は24人であった。図7-2において参加人数が突出している会合は会員や同窓会に関する祝賀会である。

同窓会Aでは、会合への参加は強制されるものではなく、各々が好きな時に参加していた。1966年5月11日の会合記録において、参加状況に関して次のような記述がある。「毎月この日、この時、この場所に来れば誰かに会えるというのが魅力であろう。来会者の予定数を知るため毎回往復葉書で回答を求めているが、忘却の年令に達した会員が多いせい、成績は至極不良である。然し毎回半数が無断出席者であるから矢張集会日時・場所を一定した方法は効果があると思う。」(『早稲田学報』1966年7・8月号 p.65)。どの会員もいつでも参加してもいいような、参加しやすいような工夫が行ってきたのであろう。

それでは、実際の個々人の参加状況をみてみよう。10年間において1回でも参加した人の参加回数について、10回ごとに区分し集計したものが図7-3となる。大多数は10回未満

であった。この中で 195 人は 1 回のみの参加であった。参加回数が多いものに着目すると、全 96 回で一番多い参加回数は 94 回であり、ほぼすべての会合に参加している。該当者は同窓会 A の設立当初から幹事を担っており、観察を行った 10 年間も幹事をしている。次に多かった参加回数は 59 回であった。大多数は 10 回未満の参加であった。

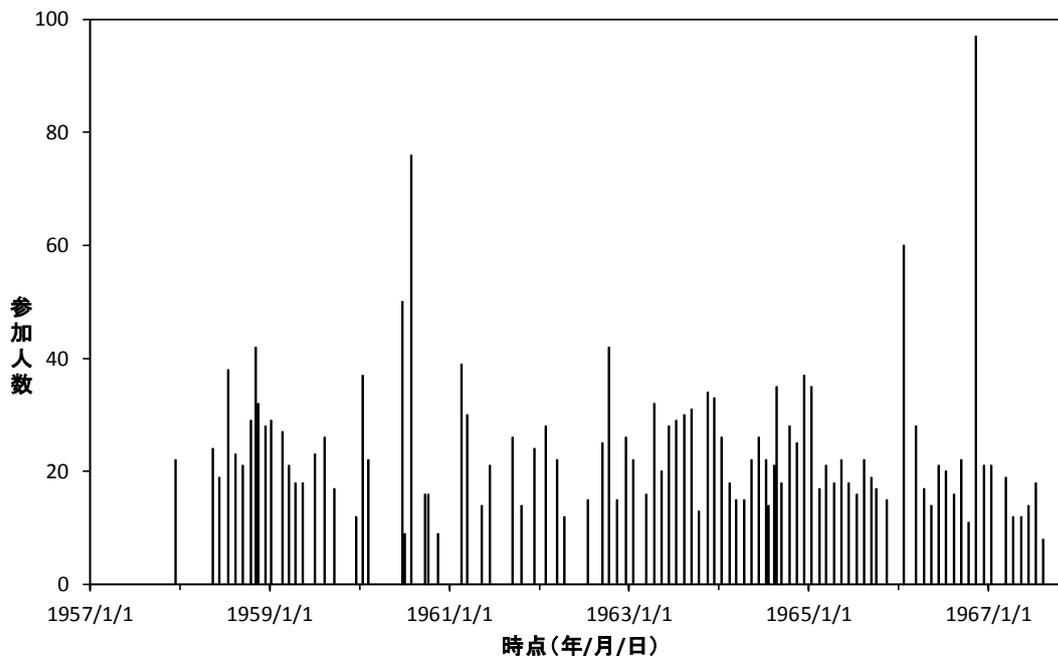


図 7-2 同窓会 A の会合および参加人数推移 (1957 年 12 月~1967 年 8 月)

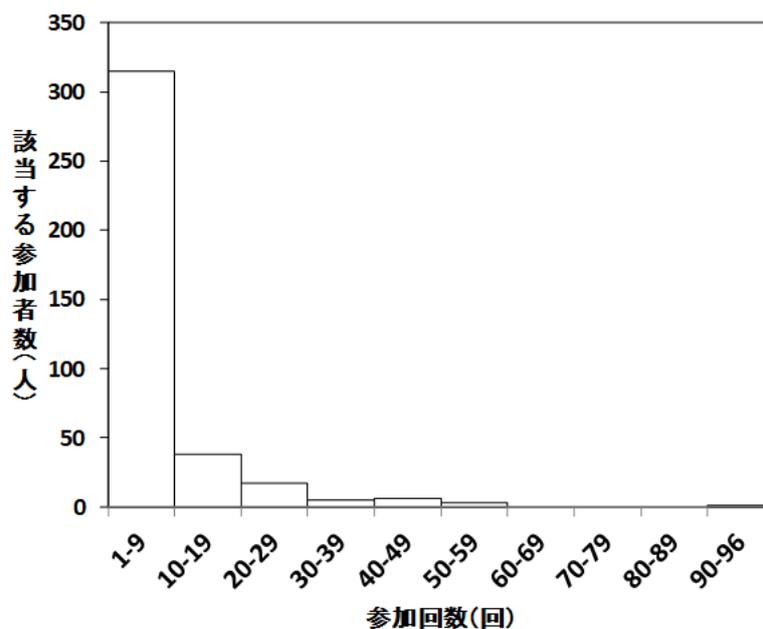


図 7-3 1958 年から 1967 年の会合 (96 回) に参加した回数と該当する卒業生数

続いて、卒業生個々人の参加状況の経年変化を確認するため、観察対象期間を5区分(2年ごと){1957年12月~1959年12月、1960年1月~1961年12月、1962年1月~1963年12月、1964年1月~1965年12月、1966年1月~1967年8月}に分け、参加状況のクロス表を作成した。ただし、図7-2でみたように、年によって会合の頻度も異なるため、会合回数に占める参加回数の割合に変換し、これを20%ごとに分けて集計している(表7-1~表7-4)。

どの時期も、90%は2年間に開催された会合の2割未満の参加状況であった。8割以上10割以下の参加状況であった個人は多くて2人(1957~1959年、1966年~1967年)であった。1回以上参加した人数は、1957~1959年165人、1960~1961年166人、1962~1963年148人、1964~1965年141人、1966~1967年167人である。

参加割合別に着目してみよう。まず、参加割合が2割未満である場合に着目する。この場合、次の2年間もほぼ参加割合が2割未満である。また、次の2年間で参加割合が8割以上になる個人はいなかった。少数であるが、参加割合が2割以上8割未満となる人々は存在した。参加割合2割以上6割未満はどの区間も存在した。6割以上8割未満については{1957~1959年、1960年~1961年}と{1960~1961年と1962~1963年}の区間に存在した。

次に参加割合が2割以上4割未満の場合に着目する。この場合、次の2年間では参加割合はばらつきがあるが、傾向としては参加割合が2割未満になる場合が多かった。この場合のみが唯一次の2年間で参加割合が8割以上になる人が現れている{1960~1961年、1962~1963年}。

次に参加割合が4割以上6割未満、6割以上8割未満の場合に着目する。この場合は次の2年間では、参加割合8割以上にならないが、参加割合8割未満になりうる。突然参加しなくなることもあれば、同程度の参加を続ける個人も存在している。

参加が強制されておらず、参加したいときにできる同窓会であり、この同窓会の特徴ともいえる。

表 7-1 1957-1959 年、1960 年-1961 年の参加状況に関するクロス表

		1960-1961年					合計	
		0-20%	21-40%	41-60%	61-80%	81-100%		
1957- 1959年	0-20%	度数	336	7	2	1	0	346
		前2年の%	97.1%	2.0%	0.6%	0.3%	0.0%	100.0%
	21-40%	度数	13	5	4	1	0	23
		前2年の%	56.5%	21.7%	17.4%	4.3%	0.0%	100.0%
	41-60%	度数	2	1	7	1	0	11
		前2年の%	18.2%	9.1%	63.6%	9.1%	0.0%	100.0%
	61-80%	度数	1	2	0	0	0	3
		前2年の%	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	81-100%	度数	0	1	0	0	1	2
		前2年の%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	100.0%
	合計	度数	352	16	13	3	1	385
		前2年の%	91.4%	4.2%	3.4%	0.8%	0.3%	100.0%

表 7-2 1960-1961 年、1962-1963 年の参加状況に関するクロス表

		1962-1963年					合計	
		0-20%	21-40%	41-60%	61-80%	81-100%		
1960- 1961年	0-20%	度数	331	17	1	3	0	352
		前2年の%	94.0%	4.8%	0.3%	0.9%	0.0%	100.0%
	21-40%	度数	9	6	0	0	1	16
		前2年の%	56.3%	37.5%	0.0%	0.0%	6.3%	100.0%
	41-60%	度数	3	3	3	4	0	13
		前2年の%	23.1%	23.1%	23.1%	30.8%	0.0%	100.0%
	61-80%	度数	0	0	2	1	0	3
		前2年の%	0.0%	0.0%	66.7%	33.3%	0.0%	100.0%
	81-100%	度数	0	0	0	0	1	1
		前2年の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
	合計	度数	343	26	6	8	2	385
		前2年の%	89.1%	6.8%	1.6%	2.1%	0.5%	100.0%

表 7-3 1962-1963 年、1964-1965 年の参加状況に関するクロス表

		1964-1965年					合計	
		0-20%	21-40%	41-60%	61-80%	81-100%		
1962- 1963年	0-20%	度数	332	10	1	0	0	343
		前2年の%	96.8%	2.9%	0.3%	0.0%	0.0%	100.0%
	21-40%	度数	21	2	3	0	0	26
		前2年の%	80.8%	7.7%	11.5%	0.0%	0.0%	100.0%
	41-60%	度数	1	1	3	1	0	6
		前2年の%	16.7%	16.7%	50.0%	16.7%	0.0%	100.0%
	61-80%	度数	1	4	1	2	0	8
		前2年の%	12.5%	50.0%	12.5%	25.0%	0.0%	100.0%
	81-100%	度数	0	0	0	1	1	2
		前2年の%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	100.0%
	合計	度数	355	17	8	4	1	385
		前2年の%	92.2%	4.4%	2.1%	1.0%	0.3%	100.0%

表 7-4 1964-1965 年、1966-1967 年の参加状況に関するクロス表

		1966-1967年					合計	
		0-20%	21-40%	41-60%	61-80%	81-100%		
1964- 1965年	0-20%	度数	339	15	1	0	0	355
		前2年の%	95.5%	4.2%	0.3%	0.0%	0.0%	100.0%
	21-40%	度数	8	7	1	1	0	17
		前2年の%	47.1%	41.2%	5.9%	5.9%	0.0%	100.0%
	41-60%	度数	1	3	2	2	0	8
		前2年の%	12.5%	37.5%	25.0%	25.0%	0.0%	100.0%
	61-80%	度数	1	0	1	2	0	4
		前2年の%	25.0%	0.0%	25.0%	50.0%	0.0%	100.0%
	81-100%	度数	0	0	0	0	1	1
		前2年の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
	合計	度数	349	25	5	5	1	385
		前2年の%	90.6%	6.5%	1.3%	1.3%	0.3%	100.0%

3.3.2 本分析で扱う変数の定義

『早稲田学報』には、役員名簿や会合記録などが掲載されている。役員名簿では大学の教員等の情報、会合記録からは、開催日時、会合の内容、参加者氏名などの情報を読み取ることができる。本稿で用いる変数「大学関係者」「卒業生」「紐帯の強さ」は『早稲田学報』に掲載される情報を用いて次の通り定義する。

(1) 大学関係者

『早稲田学報』1961年1月号の「募金実行委員 学内」(pp.32-36)に掲載された550人のリストを参照し、その氏名と一致する個人を「大学関係者」と定義する。該当者は32人であった。なお、大学関係者には、同窓生会員である卒業生も含まれている。このため、大学関係者として、同窓会会員である人物を「大学関係者(会員)」、また同窓会に来賓として参加する人物を「大学関係者(来賓)」として区別した。

① 大学関係者(会員)

『早稲田学報』の同窓会Aに関する会合記録の会合内容または出席者情報に参加者についての来賓情報が記載されており、この情報をもとに判断する。ただし、会合内容が同窓会や会員に関する祝賀会である場合、会員が来賓として扱われる場合がある。そのため、本分析では観察する96の会合において大学関係者が一度でも会員として参加が確認された場合、該当する大学関係者を大学関係者(会員)と定義する。該当者は19人であった。

② 大学関係者(来賓)

会合記録の会合内容または出席者情報すべてに来賓情報が記載されている場合、大学関係者(来賓)と定義する。該当者は13人であった。

(2) 卒業生

大学関係者の条件を満たさない個人を卒業生と定義する。該当者は353人であった。

(3) 紐帯の強さ

個人間の紐帯の強さは前節で述べた方法により算出する。

7.3.3 抽出データの観測開始点問題

同窓会Aから約10年分抽出した会合記録のデータは、最初の会合が1957年12月14日であった。紐帯の強さを計算する際、データ開始点についての処理方法が課題となる。人々は、データの抽出開始時点前から会合には参加していたと想定される。例えば1957年12月14日を観測時点とした場合、それより前の会合の記録が欠落しているため、妥当な紐帯の強さを計算することができない。そのため、ここでは次のようにしてこの問題を回避した。

Granovetterは「年に1回以下」会う場合を紐帯の強さのもっとも弱いカテゴリーとして定義している。これを次のように解釈する。データ開始点問題に対し、1年以上会わない場合、紐帯の強さを0とみなせるとする。このように考えることで、開始点の1年後1958年12月15日の会合から観測を開始すれば、1957年12月14日前のデータが欠落している問題はおおよそ回避できる。

7.3.4 紐帯の強さの値について

本分析において、大学関係者と卒業生の紐帯の強さの観察の補助にGranovetterの「接触頻度」に基づく定義を利用する。Granovetterは、「頻繁に会う」は週2回以上、「ときどき

会う」が年に2回以上かつ週2回未満、「めったに会わない」が年に1回以下と、接触頻度を3つの区分で定義している。これらの接触頻度を本稿で定義した紐帯の強さの定義式(3)で算出した値と3区分との関係を表7-5に示す。本稿では、「頻繁に会う」下限値と「ときどき会う」の上限値を「頻繁に会う」区分内で算出できるもっとも弱い紐帯の値とし、「ときどき会う」の下限値と「めったに会わない」の上限値を「ときどき会う」区分内で算出できるもっとも弱い紐帯の値としている。

Granovetterは、紐帯の強さのカテゴリーとして、「頻繁に会う」を「強い紐帯」、「ときどき会う」と「めったに会わない」を「弱い紐帯」としている。

表 7-5 接触頻度区分と数値範囲

接触頻度の区分	上限値	下限値
頻繁に会う	—	28.02
ときどき会う	28.02	0.28
めったに会わない	0.28	0

7.4 大学関係者と卒業生の紐帯の強さの定義と定量分析

大学の卒業生に対する期待として、大学への資金援助、在学生への学習・就職支援、卒業生を通じた産業・地域事業との関わりなどがある。卒業生の同窓会への参加行動がどのような水準にある時に、こうした期待に該当する行動へと転換していくのか、その構造を明らかにしていくことは興味深いことである。このため本稿では、卒業生全体ではなく、同窓会に参加する卒業生に注目し、その紐帯の強さを検討する。

以上より、本稿では、対象期間内において大学同窓会会合に参加する卒業生を対象に大学関係者との間の紐帯の強さを考え、それを定義式(3)によって計算する。そして、大学と卒業生の紐帯の強さは、観測時点で得られるその会合に参加していた大学関係者と卒業生との間の紐帯の強さの平均値として定義する。

この定義のもと、前節で述べた同窓会Aについて1958年12月から1967年8月までの大学と卒業生との紐帯の強さの推移を求めたのが図7-4である。これは同窓会会合が開かれた時点を観測時点として、会合に参加した卒業生と大学関係者との間の紐帯の強さの平均値を○と■印でプロットしている。なお、○印は「大学関係者(会員)」、■印は「大学関係者(来賓)」との間の紐帯の強さの平均値を表している。参考として表7-5で示したGranovetterの3区分でもっとも弱い紐帯に相当する上限値(0.28)も図7-4上に点線で示した。

対象とした同窓会Aでは、大学と卒業生の紐帯の強さを58時点で観測できた。この中で、紐帯の強さの最大値は1962年4月13日の2.02であり、全ての値がGranovetterの3区分定義「頻繁に会う」の下限値(28.02)を大きく下回っており、紐帯の強さは最大値2.02、最小値0の間に分布する弱い水準にあった。大学と卒業生との関係が希薄化していたと定

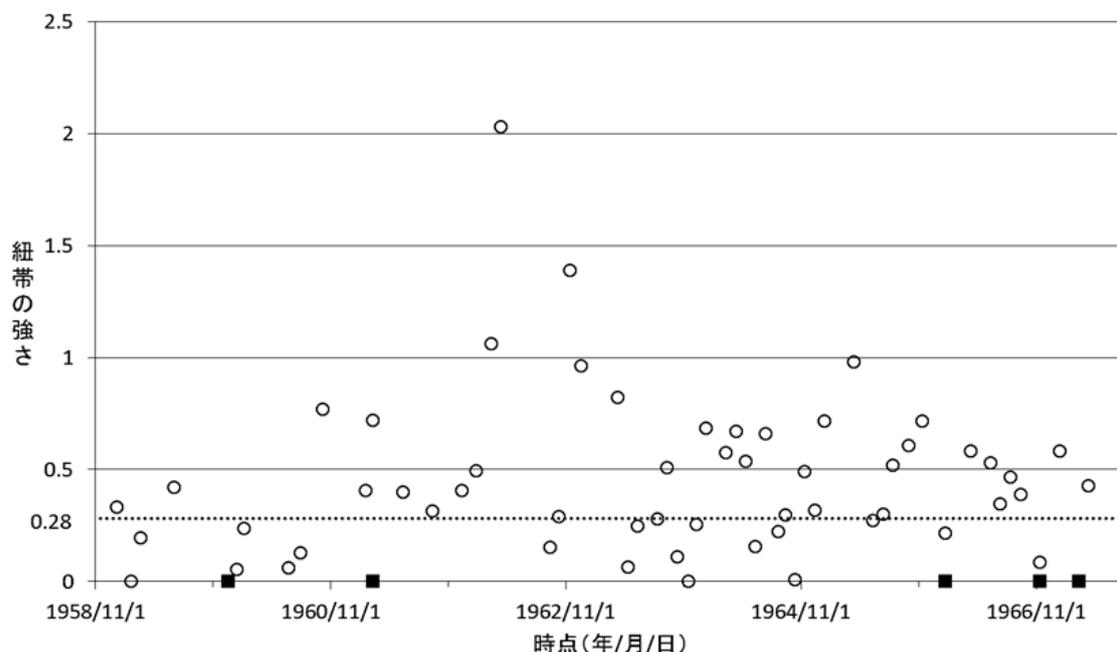


図 7-4 大学関係者と卒業生の紐帯の強さの推移 (1958 年 12 月~1967 年 8 月)

性的には認識されていたが、その水準は、弱い紐帯と Granovetter が呼ぶカテゴリーの上限値から 1 桁も下の領域に分布する極めて弱い関係にあったことが本分析から明らかになった。

次に、大学関係者（会員）及び大学関係者（来賓）についてそれぞれ個別にみる。まず、大学関係者（会員）と卒業生の紐帯の強さは 56 時点で観測できた。56 時点において値は最大値 2.02、最小値 0 の区間に分布している。Granovetter の 3 区分「めったに会わない」の上限値である 0.28 を基準に観察すると、56 時点中 37 時点が「めったに会わない」の上限値を超えていた。これより、大学関係者（会員）は「めったに会わない」の上限値を少し超えた紐帯の強さで卒業生との関係が維持されていることが明らかとなった。

続いて、大学関係者（来賓）と卒業生の紐帯の強さは 5 時点で観測できた。5 時点全てにおいて値は 0 であり、これは Granovetter の 3 区分の「めったに会わない」の下限値と同一であった。これは、大学関係者（来賓）は各々初めてその会合に参加し、その後同窓会に訪れることはないということの意味する。すなわち、大学関係者（来賓）と卒業生は、紐帯を強くしていくような関係にはなっていなかったことがわかる。

7.5 大学関係者と卒業生の紐帯の強さと寄付行動・寄付金額

卒業生と大学関係者の関係について、アフィリエーション・ネットワーク・モデル、紐帯の強さを用いて定量的に観察した。紐帯の強さの程度は、卒業生の大学に対する行動の変化として現れるものと予想される。

本節では、観察された紐帯の強さと卒業生の寄付行動の関係について分析を行う。

7.5.1 創立八十周年記念事業資金の寄付者記録とデータ処理

早稲田大学創立八十周年記念事業として募金活動が1961年から1967年に行われた。この時期の寄付者については各号の大学同窓会誌の「早稲田大学創立八十周年記念事業資金寄付者芳名」（以下、簡単に「寄付者記録」と記す）に掲載されている。寄付者記録からは第2部6章6.4.1で述べたように寄付を行った日時は不明であるが、寄付者については『早稲田学報』の発行に合わせて集計されるため、おおよその時期を把握することができる。寄付の集計期間は『早稲田学報』の発行に応じて、1ヶ月の場合と2ヶ月の場合の2つのパターンが存在している。

会合記録からANデータ生成する上で、修正を行った「氏名」と寄付者記録に掲載される「氏名」を比較し、文字列が一致する場合を両者は同一人物とみなした。ただし、ANデータ内の個人と寄付者名簿の照合における3つの問題（氏名を特定できない場合、個々人の寄付金額が不明な場合、企業・団体の寄付の場合）については第2部6章6.4.2と同様の処理を行った。ただし、同姓同名と判断された異なる人物については、実際に誰が寄付したのかを明らかにできないため、同姓同名の者は分析対象外とした。

7.5.2 卒業生の寄付行動

寄付行動の定量分析に入る前に、対象外となるデータ（寄付者名簿）について確認しておく。寄付者名簿から特定できない卒業生数が353人中16人、そして同姓同名と判断される卒業生は353人中41人であった。

上記57人の卒業生を除き、さらに特定不可能および同姓同名と判断される卒業生を除き、寄付者名簿で確認できた同窓会会合参加者296人の中で寄付行動が観察されたのは83人であった。寄付行動者数の時系列推移を図7-5に示す。

寄付受付は1961年から1967年までであった。ただし、ここで観察している同窓会については1965年4月が寄付期間内での最後の寄付であった。寄付期間においてほとんどの卒業生の寄付行動は1回だけであったが、寄付行動した83人中9人が2回、また1人が3回寄付を行っていた。

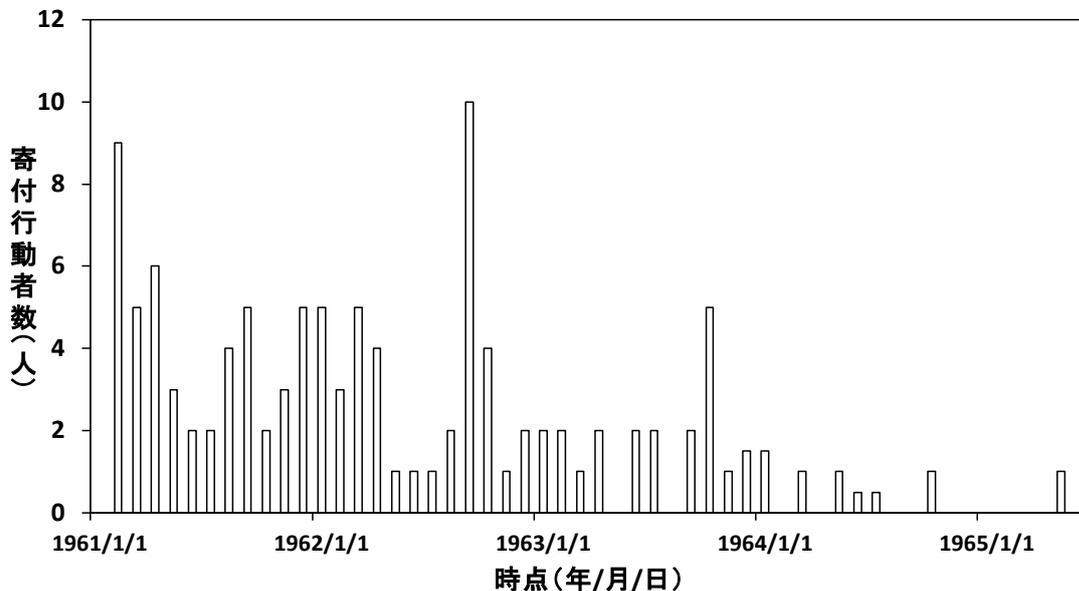


図 7-5 寄付行動者数の推移

7.5.3 紐帯の強さと寄付行動

7.5.3.1 全体の紐帯の強さと寄付行動

卒業生の大学への寄付行動は卒業生の自発的な協力による。黄 (2007) は、そうした協力には、関係性が形成されている必要があると述べている。またさらに、高田(2006)は、強い関係を持つネットワークを形成している場合、自発的協力が生み出されやすいとも指摘している。卒業生全員と大学との紐帯の強さが強い関係であるならば、自発的協力が生み出されやすい状況であることが予想される。

本稿では、図 7-4 に大学と卒業生の紐帯の強さの推移、図 7-5 で寄付行動者の推移を示した。この 2 つのデータを利用して全体の紐帯の強さと寄付行動の関係についてみてみよう。図 7-6 は、年度ごとの紐帯の強さと寄付行動者数の散布図である。紐帯の強さは年度内に観察される紐帯の強さの値の平均値をとり、寄付行動者数は年度内の合計値をとっている。

紐帯の強さと寄付行動者数についての相関係数は 0.19 であり、t 検定を行ったところ有意ではなかった ($p = 0.76 > 0.05$)。全体の紐帯の強さと寄付行動は相関がないといえる。したがって、紐帯の強さに応じて寄付行動の生じやすさが変化するとはいえない。ただし、全体の紐帯の強さと寄付行動からは、紐帯の強さと寄付行動の動的な関係を明らかにできていない。例えば、卒業生と大学の紐帯が強くなっていく過程で寄付行動が生じているかは図 7-6 からは読み取ることはできない。そのため、卒業生個人と大学との紐帯の強さについて焦点を当てて、分析を試みる。

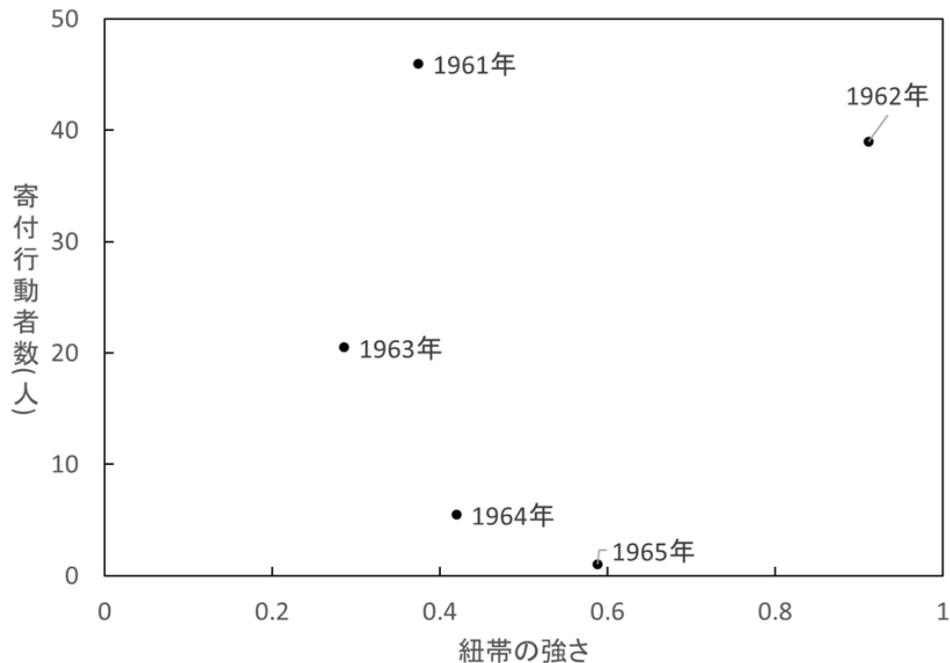


図 7-6 紐帯の強さと寄付行動数の散布図

7.5.3.2 卒業生個々の紐帯の強さと寄付行動

自発的協力は強い関係を持つネットワークが形成される際に促進される（高田 2006）。卒業生個々人に焦点を当てると、同窓会会合に参加した卒業生は、そこでの大学との関係性を形成することによって自発的協力としての寄付行動につながりやすく、そしてその行動は強い紐帯の時により促進されるものと予想される。この点を確認するために、会合参加直後に寄付を行った卒業生に注目し、紐帯の強さとの関係を調べた。

なお、収集できる寄付者に関するデータは、先に述べたように、集計期間として1ヶ月の場合と2ヶ月の場合の2通りが混在している。2ヵ月という集計期間のデータが存在するため、1ヵ月単位で寄付行動を観察することはできない。従って、ここでは、会合の開催後「2か月以内」に寄付行動を行ったかどうかを統一して観察を行う。寄付行動が観察された83人の中で、同窓会会合開催後2か月以内に寄付行動をとったのは16人観察された。

2つの視点で卒業生個々の紐帯の強さと寄付行動の関係を観察する。一つは紐帯の強さの推移に着目し、寄付行動が生じるのは紐帯の強さがどういった変化をしているときかという視点である。もう一つは紐帯の強さの値に着目し、どういった強さになると寄付行動が生じるのかという視点で観察を行った。

7.5.3.2.1 個々の紐帯の推移と寄付行動

同窓会会合開催後2か月以内を目安にして、この期間内に寄付行動をとった卒業生16人について、時系列に沿った紐帯の強さを計算した。そして、その紐帯の強さのグラフ上に各

卒業生の会合から2カ月以内の寄付行動の有無を重ね合わせた結果が図7-7から図7-23である。便宜上、これらの卒業生をAからPまでの英字で表記した。図7-7から図7-23は横軸が図7-4と同様の時間軸であり、縦軸が紐帯の強さを示す。グラフ内の○印は同窓会会合が開催された時期であり、その卒業生と大学関係者との紐帯の強さが定義できた時点となる。なお、複数の大学関係者が1つの会合に参加していた場合は、これまで同様、紐帯の強さは卒業生と複数の大学関係者の値の平均値としている。グラフ内の●印は、内容は○印と同じであるが、異なるのは、その会合から2カ月以内にその卒業生が寄付行動を起こした時の会合であることを示している点である。2カ月以内という条件のため1回の寄付行動が複数の連続した会合に対応することにあるが、その場合は該当する会合すべてを●印で表している。ただし、この場合は2つの●を結ぶグラフの線分は二重線で表現した。

卒業生の大学への寄付行動には卒業生の自発的な協力が必要である。その自発的協力を引き出すための条件として強い関係を持つ必要がある(高田 2006)。ここでは、強い紐帯の時に寄付行動が起こりやすいとの先の予想を確認するため、寄付行動が生じた時の紐帯の強さを、3つのパターンに分けて説明する。以下、その3つのパターンである。該当する全ての卒業生の客観的な観察結果から、当初の予想に反し、紐帯の強いときにより多くの寄付行動が起こりやすいということはないことがわかる。

(1) パターン1：紐帯の強さが最も強いときに寄付行動をとる(5人)

このパターンに該当するのは5人の卒業生である(図7-7～図7-11)。紐帯の強さの推移の形状に共通性はない。しかし、いずれも1961年から1965年6月にかけて大学関係者との紐帯の強さが最大となっているときに寄付行動を起こしている。ただし、紐帯の強さはそれぞれケース1から0.44、(0.61-1.33)、0.11、(2.86-3.52)、0.42であり、Granovetterが定義したもっとも弱い紐帯に位置するものもあれば、その値を超えているケースも存在した。客観的な紐帯の強さの区分は意味をなさないが、このパターンの卒業生は、卒業生個人と大学関係者との紐帯の強さが最も強いときに寄付行動を起こすようである。

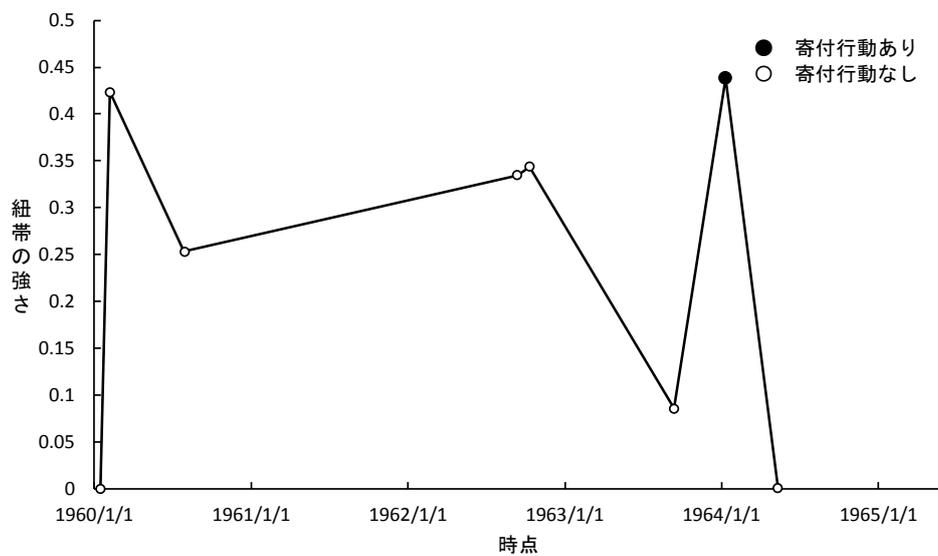


図 7-7 卒業生 A の寄付行動 (パターン 1)

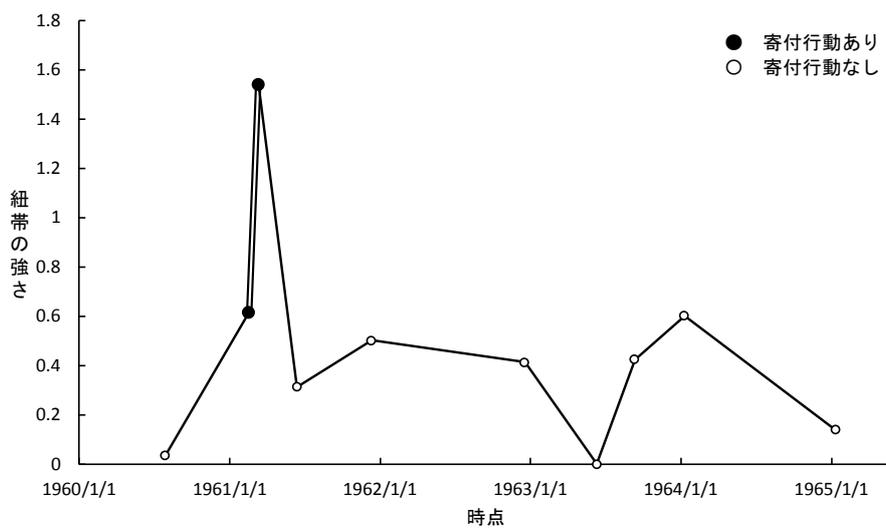


図 7-8 卒業生 B の寄付行動 (パターン 1)

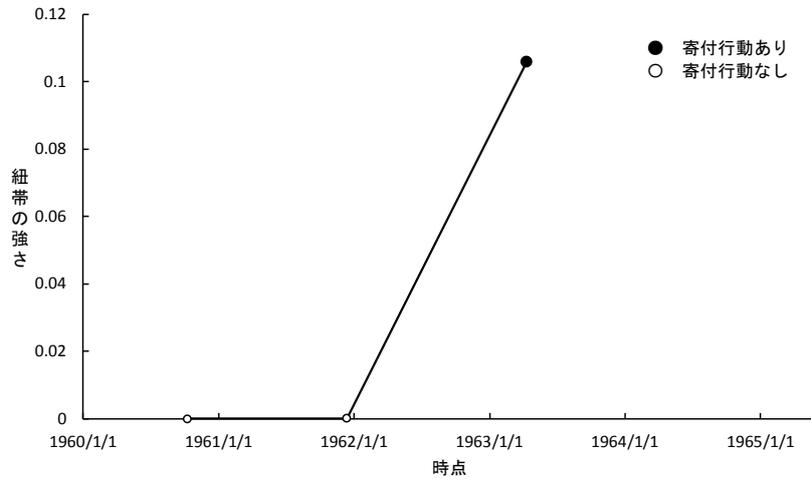


図 7-9 卒業生 C の寄付行動 (パターン 1)

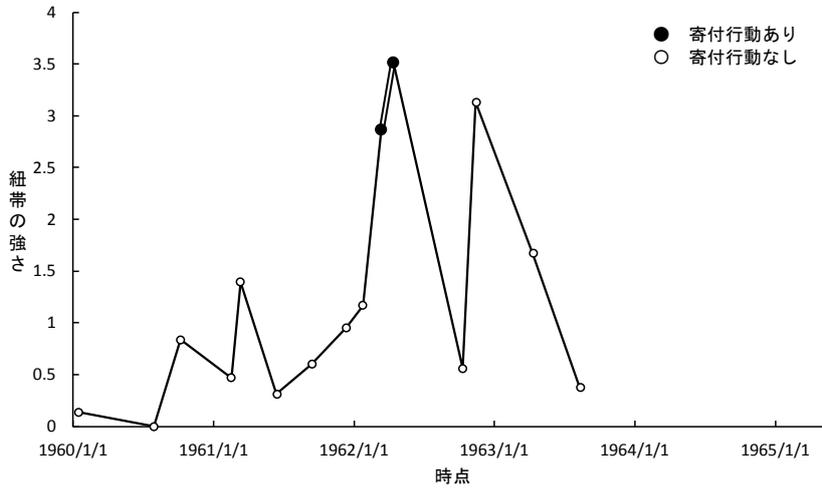


図 7-10 卒業生 D の寄付行動 (パターン 1)

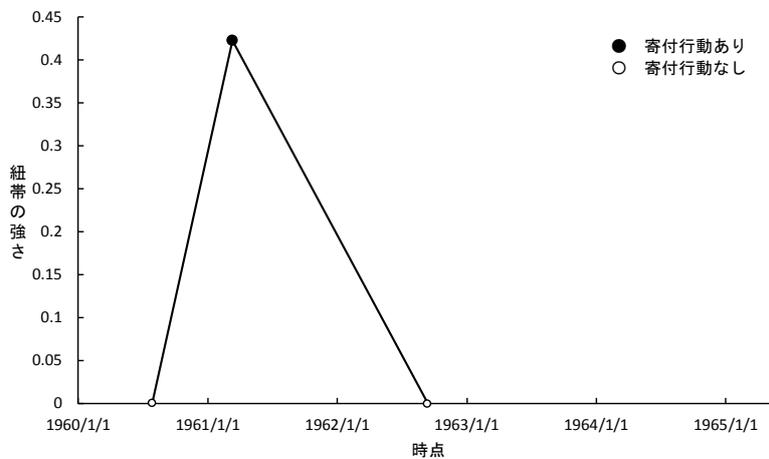


図 7-11 卒業生 E の寄付行動 (パターン 1)

(2) パターン2：直前と比べ紐帯の強さが大きくなるときに寄付行動をとる（6人）

パターン1のように紐帯の強さが寄付期間で最大の時に寄付行動を起こすのではなく、その直前の会合における紐帯の強さよりも紐帯が強くなった時に寄付行動を起こしている卒業生が6人いた（図7-12～図7-17）。

グラフを見るとわかるように、紐帯の強さが、直前よりも大きくなる箇所はいくつも存在している。この意味で寄付行動を促される機会は何度もあったといえる。それがどうして、図に示す位置で寄付行動を起こしたかは、この観察だけでは何も言えない。理由は明らかではないが、パターン2に分類した卒業生らは、直前の会合における紐帯の強さよりも大きくなっている時に寄付行動を起こしていた。

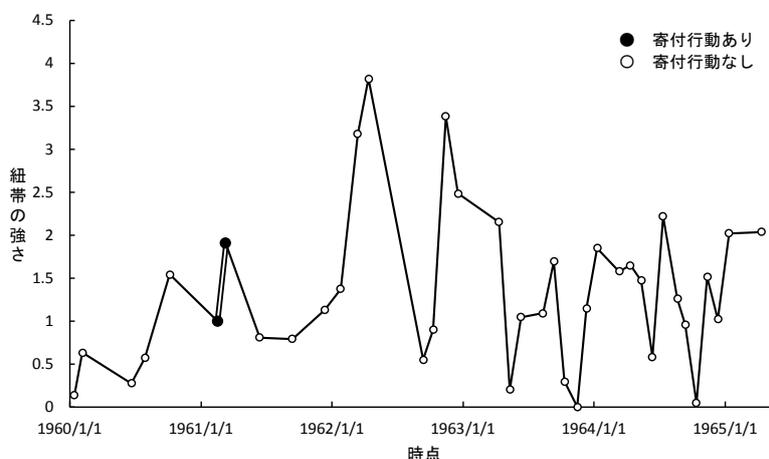


図7-12 卒業生 F の寄付行動（パターン2）

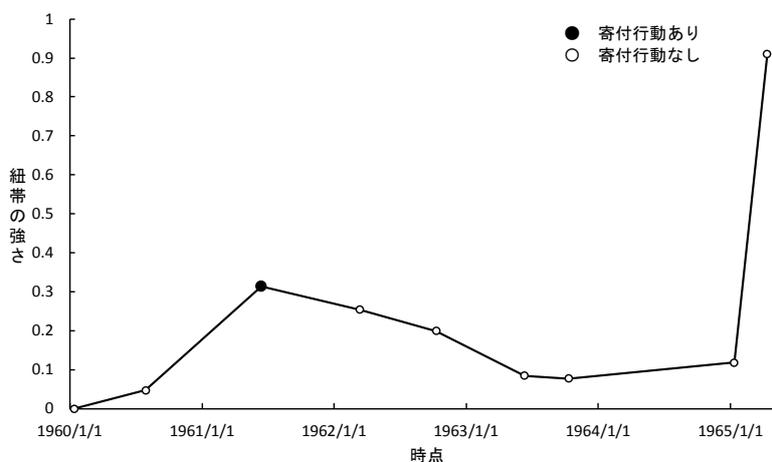


図7-13 卒業生 G の寄付行動（パターン2）

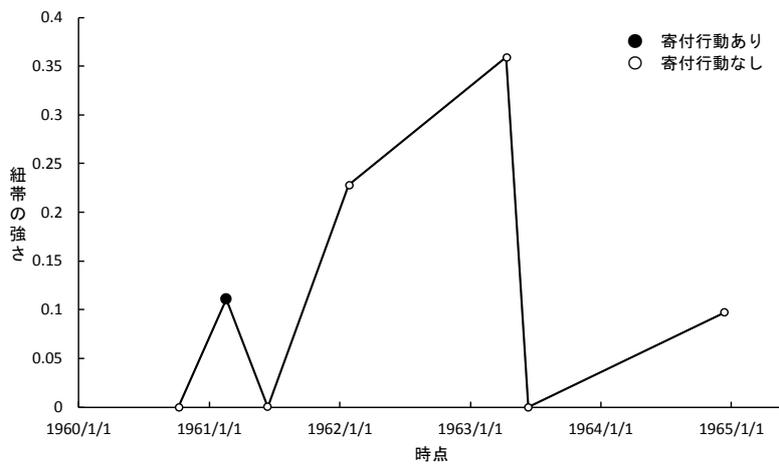


図 7-14 卒業生 H の寄付行動 (パターン 2)

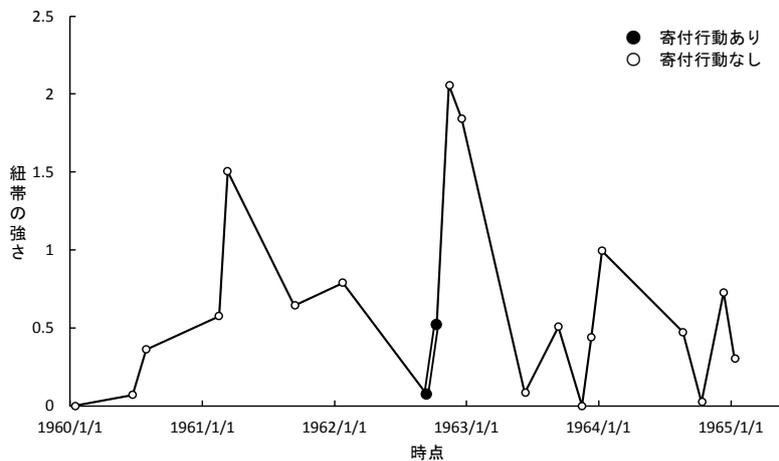


図 7-15 卒業生 I の寄付行動 (パターン 2)

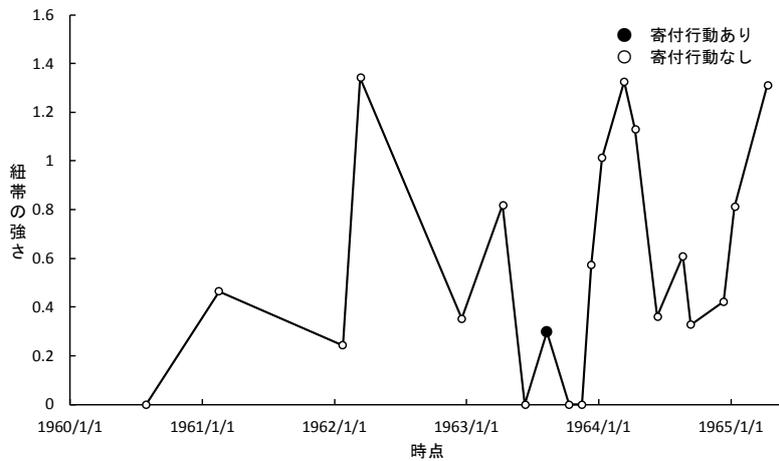


図 7-16 卒業生 J の寄付行動 (パターン 2)

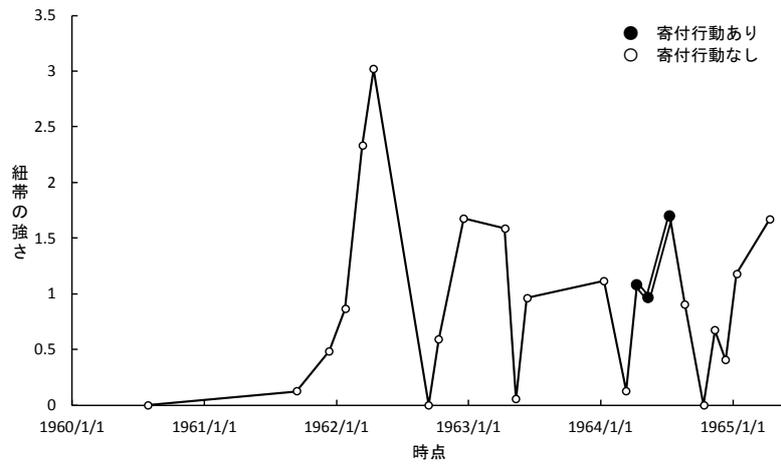


図 7-17 卒業生 K の寄付行動 (パターン 2)

(3) パターン 3 : 紐帯の強さが最も弱いときに寄付行動をとる (4 人)

このパターンに該当するのは 4 人の卒業生であった (図 7-18~図 7-21)。これらも紐帯の強さの推移の仕方に共通性はみられない。しかし、いずれも 1961 年から 1965 年 6 月にかけて大学関係者との紐帯の強さが最小であるときに寄付行動を起こしていた。紐帯の強さの値はそれぞれケース 1 から 0、0、0.11、0 であり、Granovetter が定義したもっとも弱い紐帯に位置する。大学関係者との紐帯の強さが最も弱いときに寄付行動を起こすようである。

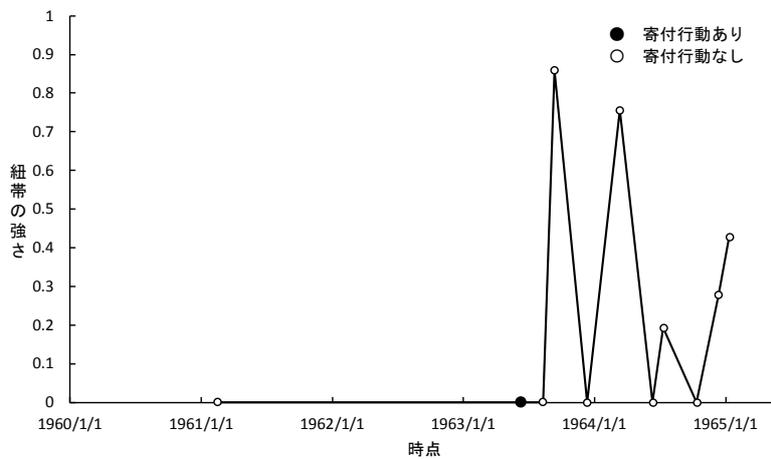


図 7-18 卒業生 L の寄付行動 (パターン 3)

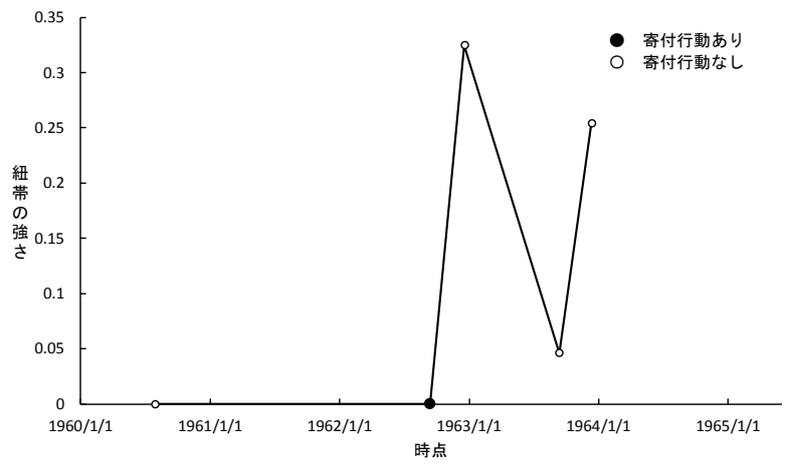


図 7-19 卒業生 M の寄付行動 (パターン 3)

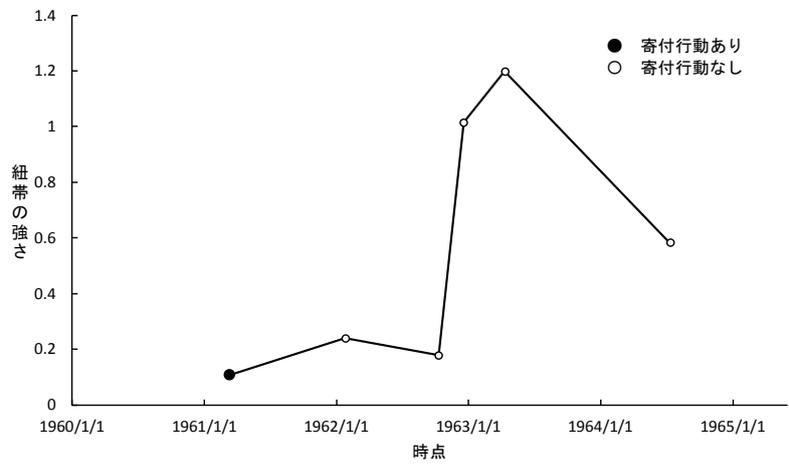


図 7-20 卒業生 N の寄付行動 (パターン 3)



図 7-21 卒業生 O の寄付行動 (パターン 3)

(4) その他(1人)

類似の規則性を持たず、上記3パターンに分類できない卒業生の紐帯の強さを図7-22に示す。例外として、以後の議論からこの卒業生は除外した。

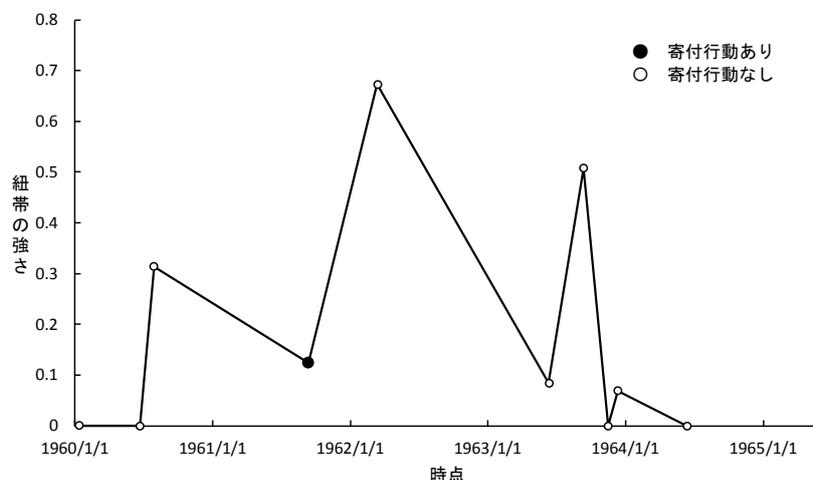


図7-22 卒業生Pの寄付行動

7.5.3.2.2 紐帯の強さと寄付金額の分布

会合開催後2ヵ月以内に寄付行動を起こした16人の卒業生の中で15人を3つのパターンに分けて観察してきた。さらに分析を進める。寄付金額についてこの3つのパターンに応じ違いがみられるだろうか。表7-6はパターン別に見た寄付金額である。ただし、寄付金額が明らかではない卒業生も存在する。2人(パターン2:1人、パターン3:1人)がそれに該当していた。このため、この2人は除外し、表7-6は13人を対象にしたものである。13人の寄付金額合計は93万5千円であった(1960年代当時の金額である)。この寄付については、企業・団体による寄付と考えられるものはなく、13人の卒業生個人による寄付であった。それぞれの平均をみると、パターン1が5.6万円、パターン2が9.5万円、パターン3が6万円であった。寄付行動は、直感的であるが、パターンに分けられる差異がみられたものの、寄付金額についてこれらのパターンによる違いはみられなかった。

表7-6 パターン別の寄付金額

パターン	寄附金総額	内訳
1 (卒業生 5人)	28 万円	1万円が3人、5万円が1人、20万円が1人
2 (卒業生 5人)	47 万 5 千円	1万5千円が1人、3万円が1人、5万円が1人、8万円が1人、30万円が1人
3 (卒業生 3人)	18 万円	2万円が1人、6万円が1人、10万円が1人

別の視点として、寄付行動を起こす時期ではなく、寄付行動を行ったときの紐帯の強さとの直接的な関係のみをみる。パターンの分類で除外したその他の1人(寄付金額:30万円)

を加え、寄付金額の明らかな 14 人の寄付行動時の紐帯の強さと寄付金額の関係をプロットしたのが図 7-22 である。横軸は紐帯の強さ、縦軸が寄付金額である。また、図 7-22 には、補助線として、表 7-5 で示した Granovetter の 3 区分でもっとも弱い紐帯に相当する上限値 (0.28) を示している。

図 7-23 はかなり特徴的な分布となっている。会合から 2 カ月以内に寄付行動を行った全員について、紐帯の強さが強い状態で寄付金額が大きいという卒業生は存在していないのである。また弱い紐帯になると、寄付金額のばらつきが大きくなっている。また、寄付金額が高くなっているときの紐帯の強さの値域は Granovetter のいう弱い紐帯の境界(0.28)付近の位置となっていることがわかる。

これらの現象は興味深いものであるが、現時点では、図 7-23 のグラフで視覚的に観察できること以上の知見は得られていない。紐帯の強さと寄付行動の関係をさらに理解していくには、こうした分析の機会を今後増やし、知見を蓄積していく必要があるだろう。本研究はそのための定量分析のための方法を開拓し、新たな同窓会研究に向けた出発点を提供している。

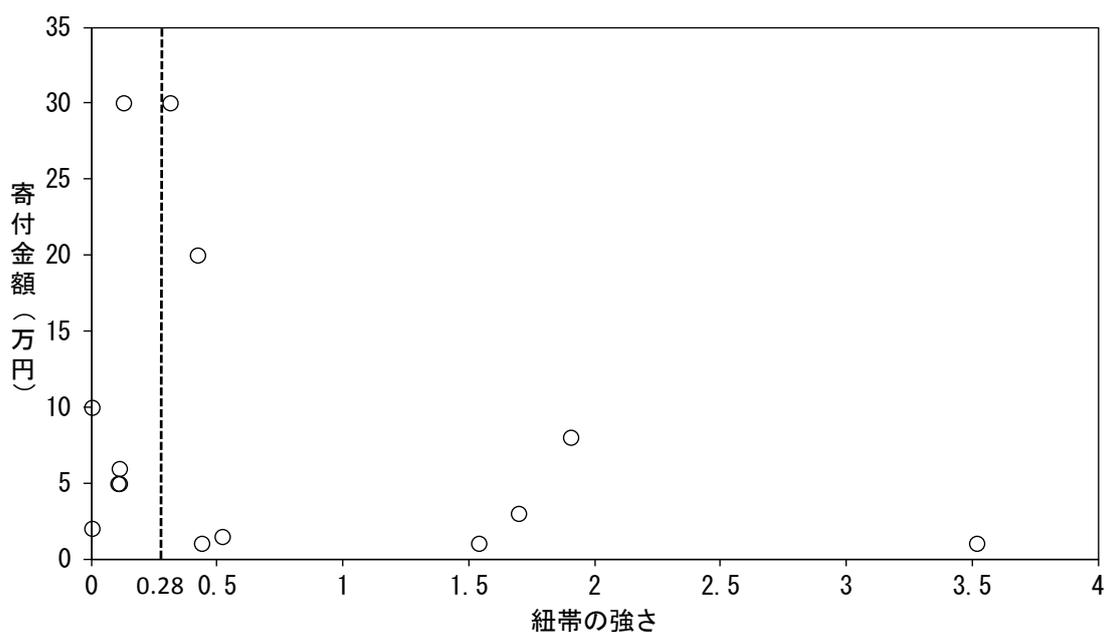


図 7-23 寄付時の紐帯の強さと寄付金額の分布図

7.6 本章のまとめ

7.6.1 大学と卒業生の紐帯の強さの推移

本章では、早稲田大学の特定の同窓会を事例に、大学同窓会を媒介とする大学と卒業生の紐帯の強さの推移を定量的に明らかにした。

大学同窓会が親睦団体の性質であった 1960 年代の大学同窓会において、参加した大学関

係者と卒業生との紐帯の強さから、大学と卒業生の紐帯の強さは極めて弱い水準であることがわかった。弱い水準であることは、関係の希薄化として従来から定性的には指摘されてきたことであったが、弱さがどの水準であったのかを本分析によって初めて定量的に明らかにすることができた。また、この分析によって、同窓会会員として参加する大学関係者は、Granovetter の定義においても最も弱い紐帯に分類される「めったに会わない」の上限値を少し超えた紐帯の強さで卒業生との関係を維持していること、そして、来賓として参加する大学関係者は 1 度きりのつながりであり、同一人物による関係の発展はみられないという事実も明らかにした。以上を踏まえて、先行研究で指摘されていたことについて、若干の考察を加えたい。

まず、大学と卒業生の紐帯の強さの推移で明らかとなったことは、大学と卒業生間のつながりは希薄ではあるものの一定の強さ（弱い紐帯）を保った関係を維持していたということである。Granovetter は、転職活動で弱い紐帯が効果的であった調査結果を受けて、弱い紐帯は異質で、重要な情報をもたらすことを示した。この点で大学と卒業生間の紐帯の強さが弱いことは情報入手の点から考えてかなりの強みがあると言える。また、注目される点として、大学と卒業生の紐帯の強さはある値付近で維持されていることである。毎回の会合で異なる卒業生、もしくは大学関係者が参加しているため、会合内の情報は均一（いつも同じ話題）にならず、大学と卒業生のお互いのある程度新鮮な情報が毎回会合入り込む構造になっていると言える。

ただし、これらのことが言えるのは同窓会会員でもある大学関係者に関してである。同窓生ではない来賓としての大学関係者は、卒業生との関係を発展させることはできていなかった。これはおそらく、同窓会会員である大学関係者が存在しているため、自分たちが関係維持のために参加する必要がないということでもあったのかもしれない。これについては、現時点は推測のレベルでしかないため、同窓会会員である大学関係者が存在しない会合を詳細に観察していく必要があるかもしれない。

7.6.2 卒業生と大学関係者の紐帯の強さと寄付行動

大学と卒業生との紐帯の強さと寄付行動の関係の分析を試みた。しかしながら、その全体についての分析は複雑で困難であったため、会合参加直後に寄付を行った卒業生に限定し、これらの卒業生全員を対象として、同窓会会合への参加が寄付行動にどのように影響したのか観察を行った。

会合開催 2 か月以内に寄付を行っていた卒業生は 16 人で、その全員を対象に紐帯の強さと寄付行動を調べ、この中の 15 人を 3 つのパターンに分けて観察した。1 つは、大学関係者との紐帯の強さが最大となっているときに寄付行動を起こしているパターン（5 人）である。次に、直前の会合における紐帯の強さよりも紐帯が強くなった時に寄付行動を起こしているパターン（6 人）、最後に、寄付期間内において大学関係者との紐帯の強さが最小であるときに、寄付行動を起こすパターン（4 人）である。最後のパターンを除いた 11 人につ

いては前回の紐帯の強さの値よりも強くなるときに寄付行動に至る傾向にあった。従来の定性的な研究から、紐帯が強い時に寄付行動が起こりやすいことが予想されたが、本稿での観察によって必ずしもそうではないことが示唆された。

上記3パターンの違いによる寄付金額についても調べた。3パターンでの差は特にみられなかった。一方、寄付行動を行ったときの紐帯の強さと寄付金額との関係をみると次の現象が観察された。寄付行動を行ったときに強い紐帯の場合、寄付金額は少ないレベルであり、金額のばらつきは少ない。一方で、弱い紐帯の時には、寄付金額のばらつきが大きくなる傾向がみられた。紐帯の強さと寄付金額についての関係を視覚的に捉えた限りのことであるが、寄付金額が高くなる紐帯の強さの値域は Granovetter のいう弱い紐帯の境界(0.28)付近であった。

寄付行動に関しては、紐帯の強さの値に関連はみられず、寄付行動を起こす時期の直前よりも、紐帯の強さが強くなっているパターンが多かった。この分析結果は、Granovetter が述べる「強い紐帯は密度の高いネットワークを形成し、弱い紐帯は密度の低いネットワークを形成する」(Granovetter 1973 大岡訳 2006:136) というネットワークの性質が関係してくるとも予想される。ただし、一方で紐帯の強さがその個人で一番弱いときに寄付行動を起こしているパターンも観察されたことから一貫性があるわけでもない。また、寄付金額については、弱い紐帯の時に寄付金額のばらつきが大きくなる傾向がみられた。これらの要因をより深く解明するためには、ネットワークのみならず、先行研究で指摘されている5つの要因(心理的要因、教育・雇用、大学参加・寄付勧誘、外部環境、人口統計)も考慮し、多角的な視点から研究を行う必要がある。現時点では定量的な観察を可能にしたところまでであり、メカニズムについては今後の課題としたい。

第8章 第2部の総括

第2部では、大学と卒業生が希薄であると指摘されていた時期である1960年代の早稲田大学同窓会を事例として、大学同窓会参加者のミクロな動きから生まれる大学同窓会ネットワークの構造を明らかにし、その構造と卒業生の寄付行動の関係についての分析を行った。これまで逸話的なレベルでしか大学同窓会ネットワークは語られてこなかったが、第1部の方法を基礎にした定量分析によって、先行研究で定性的に指摘されていた密なつながりが卒業生の寄付行動を促進するという予想を実証的に明らかにした。ただし、一部は、この予想が成立しない場合もあることも明らかにした。

第2部の各章で得られた結果を以下まとめておく。

第2部6章では、アフィリエーション・ネットワークのグラフ上の大学関係者と卒業生の位置関係に着目した。大学同窓会アフィリエーション・ネットワーク上の位置関係は、距離2、距離4、距離6、パスなしの4通り確認された。さらには会合を開催した同窓会に着目し、同じ同窓会が開催した会合を経由する距離4（同結合）、異なる同窓会が開催した会合を経由する距離4（異結合）の位置関係が存在することを発見した。卒業生は距離2の位置関係にあるものが圧倒的に多かった。位置関係と寄付行動・寄付金額について分析を行ったところ、距離4（同結合）を除いたとき、距離が近いほど、寄付行動率、1人当たりの寄付額、寄付者1人当たりの寄付額が高い結果となり、卒業生の行動は常識的なものであったことが実証的に確認された。なお、距離4（同結合）の位置関係にある卒業生は常識的な行動とは異なる振る舞いをしていた。第2部6章で得た新しい知見のひとつである。

第2部7章では、早稲田大学の特定の同窓会を事例に、Granovetterの紐帯の強さの概念を用いて、大学同窓会を媒介とする大学と卒業生の紐帯の強さに着目した。大学と卒業生の紐帯の強さは極めて弱い水準であることが明らかとなった。また、この分析から、同窓会会員として参加する大学関係者によって、Granovetterの紐帯の強さの定義で最も弱い紐帯に分類される「めったに会わない」の上限値を少し超えた紐帯の強さで卒業生との関係を維持していること、来賓として参加する大学関係者は1度きりのつながりであり、同一人物による関係の発展はみられなかった。大学と卒業生の関係が希薄であることを定量的に示すことができたが、本章では希薄ではあるものの大学と卒業生が一定の値付近で関係を維持しているという事実を明らかにした。そして、卒業生個人が寄付行動を起こしたときの紐帯の強さに着目し、該当する卒業生全員（16人）について調べた。当初の予想と異なり、大学関係者との紐帯の強さが強い時に寄付行動に至るといった知見は必ずしも妥当ではないことが示唆された。また、寄付行動を行ったときの紐帯の強さと寄付金額の関係をみると、紐帯の強さが強いときは、寄付金額は少ないレベルでかつそのばらつきは少ない一方で、弱い紐帯のときは寄付金額のばらつきが大きくなる傾向がみられた。視覚的な判断であるが、寄付金額が高くなる紐帯の強さの値域はGranovetterのいう弱い紐帯の境界(0.28)付近であった。

第2部は、これまで定性的なレベルであった大学同窓会のネットワーク構造、その構造と

卒業生の行動について定量的なレベルで示せたことが最も重要な点である。その結果、大学同窓会ネットワークについて従来から認識されていたことを定量的・実証的に示すことができたの同時に、他方で通常の認識には該当しないケースも発見することもできた。しかしながら、こうして発見したケースについては、現象の記述に留まり、メカニズム解明までには至っていない。第2部6章の大学関係者卒業生の位置関係に関する議論では、ソーシャル・キャピタルの概念を取り入れた分析を進めていくことが必要になるだろう。また、第2部7章では、紐帯の強さの性質を用いた議論も必要になるだろう。

ネットワークは卒業生の寄付行動を説明する1つの要因となる。しかし、これだけが卒業生の寄付行動を説明する要因ではないことも明らかである。第2部5章で述べたように、卒業生の寄付行動には、5つの要因（心理的要因、教育・雇用、大学参加・寄付勧誘、外部環境、人口統計）がある（Hoyt 2004）。今回の研究では卒業生の属性を均一であることを前提に分析を行った。今後は卒業生の属性を考慮し、多角的な視点から研究を行う必要があるだろう。それにより、日本の大学同窓会についての理解がより一層深まると考えられる。ただし、これらのデータは調査票では入手できないため、大学同窓会誌に掲載される情報の活用し、観察可能なデータ生成が重要となってくる。

ネットワーク以外の要因も含めて、これらについては今後の課題としていきたい。

【注】

- 1) 参考として、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動（表注-1）の関連および位置関係群による寄付行動の違いについての検定結果を示す。

表注-1 大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動のクロス表

		寄付行動		合計	
		寄付有	寄付無		
距離	距離2	度数	535	2363	2898
		距離の%	18.5%	81.5%	100.0%
	距離4	度数	42	375	417
		距離の%	10.1%	89.9%	100.0%
	距離6	度数	0	10	10
		距離の%	0.0%	100.0%	100.0%
	パスなし	度数	10	101	111
		距離の%	9.0%	91.0%	100.0%
合計	度数	587	2871	3436	
	距離の%	17.1%	83.6%	100.0%	

表注-1 において仮説を

帰無仮説 H0：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動は関連がない

対立仮説 H1：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動は関連がある

とにおいて、フィッシャーの正確確率検定で分析したところ、 $p = 6 \times 10^{-12}$ という結果となり、有意水準 1% において帰無仮説は棄却され、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動に関連があることが明らかとなった。

続いて、大学関係者と卒業生の位置関係群（距離 2、距離 4、距離 6、パスなし）間に寄付行動の違いがあるかフィッシャーの正確確率検定、Benjamini・Hochberg（1995）による方法（以下、BH 法と記す）による多重比較検定を行った（表注-2）。検定の結果、False discovery rate の基準値 0.05 において、

1. 距離 2 と距離 4
2. 距離 2 とパスなし

の寄付行動に差があることが明らかとなった。

表注-2 表注-1 の位置関係群と寄付行動に対する BH 法による多重比較

比較する群	p値	q値 (BH法により調整したp値)
距離2と距離4	0.000	0.000 *
距離2と距離6	0.224	0.449
距離2とパスなし	0.008	0.025 *
距離4と距離6	0.608	0.912
距離4とパスなし	0.858	1.000
距離6とパスなし	1.000	1.000

* $q < .05$

- 2) 参考として、距離4を距離4（同結合）と距離4（異結合）に区別した際の大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動（表注-3）の関連および位置関係群による寄付行動の違いについての検定結果を示す。

表注-3 大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動のクロス表（距離4を区別）

			寄付行動		合計
			寄付有	寄付無	
距離	距離2	度数	535	2363	2898
		距離の%	18.5%	81.5%	100.0%
	距離4 (同結合)	度数	12	10	22
		距離の%	54.5%	45.5%	100.0%
	距離4 (異結合)	度数	30	365	395
		距離の%	7.6%	92.4%	92.4%
	距離6	度数	0	10	10
		距離の%	0.0%	100.0%	100.0%
パスなし	度数	10	101	111	
	距離の%	9.0%	91.0%	100.0%	
合計	度数	587	2871	3436	
	距離の%	17.1%	83.6%	100.0%	

表注-3 において仮説を

帰無仮説 H0：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動は関連がない

対立仮説 H1：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動は関連がある

とにおいて、フィッシャーの正確確率検定で分析したところ、 $p = 0.00001226$ という結果となり、有意水準 1%において帰無仮説は棄却され、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付行動に関連があることが明らかとなった。

続いて、大学関係者と卒業生の位置関係群（距離 2、距離 4（同結合）、距離 4（異結合）、距離 6、パスなし）間に寄付行動の違いがあるかフィッシャーの正確確率検定、BH 法による多重比較検定を行った（表注-4）。検定の結果、False discovery rate の基準値 0.05 において、

1. 距離 2 と距離 4（同結合）
2. 距離 2 と距離 4（異結合）
3. 距離 2 とパスなし
4. 距離 4（同結合）と距離 4（異結合）
5. 距離 4（同結合）と距離 6
6. 距離 4（同結合）とパスなし

の寄付行動に差があることが明らかとなった。

表注-4 表注-3 の位置関係群と寄付行動に対する BH 法による多重比較

比較する群	p値	q値（BH法により調整したp値）
距離2と距離4（同結合）	0.000	0.000 *
距離2と距離4（異結合）	0.000	0.000 *
距離2と距離6	0.224	0.321
距離2とパスなし	0.008	0.014 *
距離4（同結合）と距離4（異結合）	0.000	0.000 *
距離4（同結合）と距離6	0.004	0.009 *
距離4（同結合）とパスなし	0.000	0.000 *
距離4（異結合）と距離6	1.000	1.000
距離4（異結合）とパスなし	0.690	0.863
距離6とパスなし	1.000	1.000

* $q < .05$

- 3) 参考として、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額の関連および位置関係群による寄付行動の違いについての検定結果を示す。

ここでは、企業・団体と考えられる対象を含めた場合（表注-5）である。

表注-5 大学関係者の位置関係と寄付金額（企業・団体含む）

位置関係	人数	寄付金額平均
距離2	2,850	16,359
距離4	411	3,643
距離6	10	0
パスなし	106	1,387
合計	3,377	14,293

表注-5 において仮説を

帰無仮説 H0：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額は関連がない

対立仮説 H1：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額は関連がある

とにおいて、クラスカル・ウォリス検定で分析したところ、 $p = 0.0000005$ という結果となり、有意水準 1%において帰無仮説は棄却され、大学関係者と卒業生の位置関係と 1人当たりの寄付金額に関連があることが明らかとなった。

続いて、大学関係者と卒業生の位置関係群（距離 2、距離 4、距離 6、パスなし）間に寄付金額の差があるかウィルコクソンの順位和検定、BH 法による多重比較検定を行った（表注-6）。検定の結果、False discovery rate の基準値 0.05 において、

1. 距離 2 と距離 4
2. 距離 2 とパスなし

の寄付金額に差があることが明らかとなった。

表注-6 表注-5 の位置関係群と寄付金額に対する BH 法による多重比較

比較する群	p値	q値（BH法により調整したp値）
距離2と距離4	0.000	0.000 *
距離2と距離6	0.200	0.280
距離2とパスなし	0.001	0.003 *
距離4と距離6	0.300	0.396
距離4とパスなし	0.200	0.280
距離6とパスなし	0.500	0.493

4) 参考として、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額の関連および位置関係群による寄付行動の違いについての検定結果を示す。

ここでは、企業・団体と考えられる対象を除いた場合（表注-7）である。

表注-7 大学関係者の位置関係と寄付金額（企業・団体を除く）

位置関係	人数	寄付金額平均
距離2	2,826	8,598
距離4	409	2,438
距離6	10	0
パスなし	106	1,387
合計	3,351	7,720

表注-7 において仮説を

帰無仮説 H0：大学関係者と卒業生の位置関係と 1 人当たりの寄付金額は関連がない

対立仮説 H1：大学関係者と卒業生の位置関係と 1 人当たりの寄付金額は関連がある

とにおいて、クラスカル・ウォリス検定で分析したところ、 $p = 0.000001$ という結果となり、有意水準 1% において帰無仮説は棄却され、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額に関連があることが明らかとなった。

続いて、大学関係者と卒業生の位置関係群（距離 2、距離 4、距離 6、パスなし）間に寄付金額の差があるかウィルコクソンの順位和検定、BH 法による多重比較検定を行った（表 6-18）。検定の結果、False discovery rate の基準値 0.05 において、

1. 距離 2 と距離 4
2. 距離 2 とパスなし

の寄付金額に差があることが明らかとなった。

表注-8 表注-7 の位置関係群と寄付金額に対する BH 法による多重比較

比較する群	p値	q値（BH法により調整したp値）
距離2と距離4	0.000	0.000 *
距離2と距離6	0.200	0.328
距離2とパスなし	0.001	0.004 *
距離4と距離6	0.300	0.413
距離4とパスなし	0.200	0.353
距離6とパスなし	0.500	0.493

5) 参考として、距離4を距離4（同結合）と距離4（異結合）に区別した際の大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額の関連および位置関係群による寄付行動の違いについての検定結果を示す。

ここでは、企業・団体と考えられる対象を含めた場合（表注-9）である。

表注-9 大学関係者の位置関係と寄付金額（距離4を区別／企業・団体含む）

位置関係	人数	寄付金額平均
距離2	2,850	16,359
距離4（同結合）	18	4,722
距離4（異結合）	393	3,594
距離6	10	0
パスなし	106	1,387
合計	3,351	7,720

表注-9 において仮説を

帰無仮説 H0：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額は関連がない

対立仮説 H1：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額は関連がある

とにおいて、クラスカル・ウォリス検定で分析したところ、 $p = 0.000000001$ という結果となり、有意水準1%において帰無仮説は棄却され、大学関係者と卒業生の位置関係と1人当たりの寄付金額に関連があることが明らかとなった。

続いて、大学関係者と卒業生の位置関係群（距離2、距離4（同結合）、距離4（異結合）、距離6、パスなし）間に寄付金額の差があるかウィルコクソンの順位和検定、BH法による多重比較検定を行った（表6-20）。検定の結果、False discovery rate の基準値0.05において、

1. 距離2と距離4（同結合）
2. 距離2と距離4（異結合）
3. 距離2とパスなし
4. 距離4（同結合）と距離4（異結合）
5. 距離4（同結合）と距離6
6. 距離4（同結合）とパスなし

の寄付金額に差があることが明らかとなった。

表注-10 表注-9 の位置関係群と寄付金額に対する BH 法による多重比較

比較する群	p値	q値 (BH法により調整したp値)
距離2と距離4 (同結合)	0.008	0.016 *
距離2と距離4 (異結合)	0.000	0.000 *
距離2と距離6	0.200	0.286
距離2とパスなし	0.001	0.002 *
距離4 (同結合) と距離4 (異結合)	0.000	0.000 *
距離4 (同結合) と距離6	0.020	0.033 *
距離4 (同結合) とパスなし	0.000	0.000 *
距離4 (異結合) と距離6	0.400	0.444
距離4 (異結合) とパスなし	0.400	0.444
距離6とパスなし	0.500	0.500

6) 参考として、距離4を距離4 (同結合) と距離4 (異結合) に区別した際の大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額の関連および位置関係群による寄付行動の違いについての検定結果を示す。

ここでは、企業・団体と考えられる対象を除いた場合 (表注-11) である。

表注-11 大学関係者の位置関係と寄付金額 (距離4を区別/企業・団体を除く)

位置関係	人数	寄付金額平均
距離2	2,826	8,598
距離4 (同結合)	18	4,722
距離4 (異結合)	391	2,333
距離6	10	0
パスなし	106	1,387
合計	3,351	7,720

表注-11 において仮説を

帰無仮説 H0 : 大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額は関連がない

対立仮説 H1 : 大学関係者と卒業生の位置関係と寄付金額は関連がある

とにおいて、クラスカル・ウォリス検定で分析したところ、 $p = 0.000000001$ という結果となり、有意水準 1%において帰無仮説は棄却され、大学関係者と卒業生の位置関係と 1 人当たりの寄付金額に関連があることが明らかとなった。

続いて、大学関係者と卒業生の位置関係群（距離 2、距離 4（同結合）、距離 4（異結合）、距離 6、パスなし）間に寄付金額の差があるかウィルコクソンの順位和検定、BH 法による多重比較検定を行った（表注-12）。検定の結果、False discovery rate の基準値 0.05 において、

1. 距離 2 と距離 4（同結合）
2. 距離 2 と距離 4（異結合）
3. 距離 2 とパスなし
4. 距離 4（同結合）と距離 4（異結合）
5. 距離 4（同結合）と距離 6
6. 距離 4（同結合）とパスなし

の 1 人当たりの寄付金額に差があることが明らかとなった。

表注-12 表注-11 の位置関係群と寄付金額に対する BH 法による多重比較

比較する群	p値	q値 (BH法により調整したp値)
距離2と距離4 (同結合)	0.005	0.010 *
距離2と距離4 (異結合)	0.000	0.000 *
距離2と距離6	0.200	0.286
距離2とパスなし	0.001	0.003 *
距離4 (同結合) と距離4 (異結合)	0.000	0.000 *
距離4 (同結合) と距離6	0.020	0.033 *
距離4 (同結合) とパスなし	0.000	0.000 *
距離4 (異結合) と距離6	0.400	0.500
距離4 (異結合) とパスなし	0.500	0.500
距離6とパスなし	0.500	0.500

7) 参考として、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額の関連および位置関係群による寄付行動の違いについての検定結果を示す。

ここでは、企業・団体と考えられる対象を含めた場合（表注-13）である。

表注-13 大学関係者の位置関係と寄付者の寄付金額（企業・団体含む）

位置関係	人数	寄付金額平均
距離2	487	95,734
距離4	36	41,590
パスなし	5	29,400
合計	528	91,414

表注-13 において仮説を

帰無仮説 H0：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額は関連がない
 対立仮説 H1：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額は関連がある

とにおいて、クラスカル・ウォリス検定で分析したところ、 $p = 0.03547$ という結果となり、有意水準 5%において帰無仮説は棄却され、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額に関連があることが明らかとなった。

続いて、大学関係者と卒業生の位置関係群（距離 2、距離 4、パスなし）間に寄付者の寄付金額の差があるかウィルコクソンの順位和検定、BH 法による多重比較検定を行った（表注-14）。検定の結果、False discovery rate の基準値 0.05 において、

1. 距離 2 と距離 4

の寄付者の寄付金額に差があることが明らかとなった。

表注-14 表注-13 の位置関係群と寄付者の寄付金額に対する BH 法による多重比較

比較する群	p値	q値（BH法により調整したp値）
距離2と距離4	0.010	0.030 *
距離2とパスなし	0.981	0.981
距離4とパスなし	0.282	0.423

8) 参考として、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額の関連および位置関係群による寄付行動の違いについての検定結果を示す。

ここでは、企業・団体と考えられる対象を除いた場合（表注-15）である。

表注-15 大学関係者の位置関係と寄付者の寄付金額（企業・団体を除く）

位置関係	人数	寄付金額平均
距離2	487	52,478
距離4	36	29,331
パスなし	5	29,400
合計	528	51,532

表注-15 において仮説を

帰無仮説 H0：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額は関連がない
 対立仮説 H1：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額は関連がある

とにおいて、クラスカル・ウォリス検定で分析したところ、 $p = 0.01631$ という結果となり、有意水準 5%において帰無仮説は棄却され、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額に関連があることが明らかとなった。

続いて、大学関係者と卒業生の位置関係群（距離 2、距離 4、パスなし）間に寄付者の寄付金額の差があるかウィルコクソンの順位和検定、BH 法による多重比較検定を行った（表注-16）。検定の結果、False discovery rate の基準値 0.05 において、

1. 距離 2 と距離 4

の寄付者の寄付金額に差があることが明らかとなった。

表注-16 表注-15 の位置関係群と寄付者の寄付金額に対する BH 法による多重比較

比較する群	p値	q値（BH法により調整したp値）
距離2と距離4	0.004	0.013 *
距離2とパスなし	0.834	0.834
距離4とパスなし	0.116	0.174

9) 参考として、距離 4 を距離 4（同結合）と距離 4（異結合）に区別した際の大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額の関連および位置関係群による寄付行動の違いについての検定結果を示す。

ここでは、企業・団体と考えられる対象を含めた場合（表 6-27）である。

表注-17 大学関係者の位置関係と寄付者の寄付金額（距離4を区別／企業・団体含む）

位置関係	人数	寄付金額平均
距離2	487	95,734
距離4（同結合）	8	10,625
距離4（異結合）	28	50,438
パスなし	5	29,400
合計	528	91,414

表注-17 において仮説を

帰無仮説 H0：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額は関連がない

対立仮説 H1：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額は関連がある

とにおいて、クラスカル・ウォリス検定で分析したところ、 $p = 0.0463$ という結果となり、有意水準 5%において帰無仮説は棄却され、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額に関連があることが明らかとなった。

続いて、大学関係者と卒業生の位置関係群（距離2、距離4（同結合）、距離4（異結合）、パスなし）間に寄付者の寄付金額の差があるかウィルコクソンの順位和検定、BH法による多重比較検定を行った（表注-18）。検定の結果、False discovery rateの基準値 0.05 において、差が認められるものはなかった。

表注-18 表注-17 の位置関係群と寄付者の寄付金額に対する BH法による多重比較

比較する群	p値	q値（BH法により調整したp値）
距離2と距離4（同結合）	0.025	0.148
距離2と距離4（異結合）	0.078	0.162
距離2とパスなし	0.981	0.981
距離4（同結合）と距離4（異結合）	0.282	0.423
距離4（同結合）とパスなし	0.081	0.162
距離4（異結合）とパスなし	0.354	0.425

10) 参考として、参考として、距離4を距離4（同結合）と距離4（異結合）に区別した際の大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額の関連および位置関係群による寄付行動の違いについての検定結果を示す。

ここでは、企業・団体と考えられる対象を除いた場合（表注-19）である。

表注-19 大学関係者の位置関係と寄付者の寄付金額（距離4を区別／企業・団体を除く）

位置関係	人数	寄付金額平均
距離2	487	95,734
距離4（同結合）	8	10,625
距離4（異結合）	28	50,438
パスなし	5	29,400
合計	528	91,414

表注-19 において仮説を

帰無仮説 H0：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額は関連がない
 対立仮説 H1：大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額は関連がある

とにおいて、クラスカル・ウォリス検定で分析したところ、 $p = 0.03091$ という結果となり、有意水準 5% において帰無仮説は棄却され、大学関係者と卒業生の位置関係と寄付者の寄付金額に関連があることが明らかとなった。

続いて、大学関係者と卒業生の位置関係群（距離2、距離4（同結合）、距離4（異結合）、パスなし）間に寄付者の寄付金額の差があるかウィルコクソンの順位和検定、BH法による多重比較検定を行った（表注-20）。検定の結果、False discovery rateの基準値 0.05 において、差が認められるものはなかった。

表注-20 表注-19 の位置関係群と寄付者の寄付金額に対する BH法による多重比較

比較する群	p値	q値（BH法により調整したp値）
距離2と距離4（同結合）	0.035	0.105
距離2と距離4（異結合）	0.033	0.105
距離2とパスなし	0.834	0.834
距離4（同結合）と距離4（異結合）	0.411	0.493
距離4（同結合）とパスなし	0.081	0.162
距離4（異結合）とパスなし	0.203	0.305

結論

1. 研究成果のまとめ

本研究の目的は、大学同窓会ネットワークについて、大学同窓会内のミクロな動きに着目し、大学同窓会のネットワーク構造、そしてその構造と卒業生の行動との関連について定量的に明らかにすることである。これまで大学と卒業生そして卒業生間のネットワークの重要性について従来から言及されてはきたものの、それらは定性なレベルに留まっていた。理由は、定量的にネットワークを研究する方法がなかったからである。上記目的を達成するためには、大学同窓会のネットワークを定量的に分析する方法を開発する必要がある。この方法の開発が本研究のもう1つの目的である。第1部で開発した方法について述べ、第2部でその方法を用いた定量分析事例を述べた。詳細は以下の通りである。

第1部では、記録データとしての大学同窓会誌に着目し、大学同窓会ネットワークの定量的研究を実現するため、大学同窓会誌から定量的なネットワーク・データを抽出する方法を検討した。早稲田大学校友会が発行する大学同窓会誌『早稲田学報』を対象に、雑誌編成分析と継続的に掲載されていた会合記録の内容分析を行い、「同窓会名」、「会合参加者の氏名」、「会合の日時」、「会合場所」、「会合の内容」といった5つの情報が得られることが明らかとなった。これらの大学同窓会誌に記録された情報から、アフィリエーション・ネットワーク・データとして利用できることを明らかにした。これによって、卒業生の大学同窓会への参加行動を数学的に表現することが可能になった。従来、エゴセントリック・ネットワークとしてだけ捉えられていた大学同窓会研究に新たにソシオセントリック・ネットワークの視点を提供するものとなる。

第2部では、第1部で開発した方法を利用して、大学と卒業生が希薄であると指摘されていた時期である1960年代の早稲田大学同窓会を事例として、大学同窓会参加者のミクロな動きから生まれる大学同窓会ネットワークの構造を明らかにした。そして、その構造と卒業生の寄付行動の関係について、大学同窓会アフィリエーション・ネットワーク（AN）上の2つの視点、すなわち位置関係の視点（第2部6章）、そして紐帯の強さの視点（第2部7章）から分析を行い、以下を明らかにした。

まず、大学同窓会ネットワーク構造について明らかになったことは以下の通りである。

① 大学同窓会 AN 上の位置関係の視点

大学関係者と卒業生の位置関係は距離2、距離4、距離6、パスなしの4通り存在する。さらには会合を開催した同窓会に着目し、同じ同窓会が開催した会合を経由する距離4（同結合）、異なる同窓会が開催した会合を経由する距離4（異結合）の位置関係が存在した。そして、卒業生は距離2の位置関係にあるものが圧倒的に多い。

② 大学同窓会 AN 上の紐帯の強さの視点

大学と卒業生の紐帯の強さは、同窓会会員として参加する大学関係者によって、Granovetterの紐帯の強さの定義で最も弱い紐帯に分類される「めったに会わない」の上

限値を少し超えた紐帯の強さで卒業生との関係を維持していること、来賓として参加する大学関係者は1度きりのつながりであり、同一人物による関係の発展がない。

次に、卒業生の寄付行動について明らかになったことは以下の通りである。

① 大学同窓会 AN 上の位置関係の視点

距離4（同結合）を除いたとき、距離が近いほど、寄付行動率、1人当たりの寄付額、寄付者1人当たりの寄付額が高い結果となり、卒業生の行動は常識的なものである。なお、距離4（同結合）の位置関係にある卒業生は常識的な行動とは異なる振る舞いをしている。

② 大学同窓会 AN 上の紐帯の強さの視点

大学関係者との紐帯の強さが強くなったときに、卒業生は寄付行動に至る傾向にあるケースが多い。しかしながら、当初の予想に反し、強い紐帯の時に寄付行動が起りやすいとは言えないことも示唆された。また、寄付金額については、紐帯の強さが強いときは、寄付金額は少ないレベルでかつそのばらつきは少ない一方で、弱い紐帯のときは寄付金額のばらつきが大きくなる傾向がある。

先行研究において、大学同窓会に関し、大学との密なつながりによって卒業生の寄付行動が促進されるといったことが定性的に主張されていた。それに関し、上記でまとめたように、本研究では、従来の認識の正しさを、アフィリエーション・ネットワーク上の位置関係（第2部6章）と紐帯の強さ（第2部7章）の視点で実証的に示すと共に、他方で、その予想が一部成立しない場合もあることを明らかにした。

2. 今後の課題

本研究は、アフィリエーション・ネットワーク・モデルを用いて、大学同窓会ネットワークを定量的に観察する方法を開発した。このアフィリエーション・ネットワーク・データを生成するため、必要なデータを会合記録から「切り出し・取り出し」であるが、情報が不規則に記載されているため、人手に頼らざるを得ず、情報の整理に膨大な作業量を要する。そのため、情報の切り出しについてのルールを発見していければ、会合記録を活用したネットワーク分析はさらに容易になると思われる。

大学同窓会ネットワークの構造と機能については、前項で述べたようにこれまでの大学同窓会に関した認識を実証的に明らかにしたが、この予想が成立しない場合があった。本稿ではそこに存在するメカニズムまで踏み込むには至らなかった。今後は、ソーシャル・キャピタルの概念を取り入れた分析、紐帯の強さの性質を用いた議論も必要になる。

また、本研究は、ネットワークと卒業生の寄付行動の分析において、卒業生の属性を均一であることを前提とした。卒業生の寄付行動には、5つの要因（心理的要因、教育・雇

用、大学参加・寄付勧誘、外部環境、人口統計)がある(Hoyt 2004)。今後は、大学同窓会誌に掲載される卒業生の個人動静など本研究を活用できなかった様々な情報を活用し、卒業生の属性も考慮した多角的な視点からの研究が必要である。

【参考文献】

- 天野郁夫, 2000, 「大学の同窓会—歴史と展望—」『IDE：現代の高等教育』IDE 大学協会, 419 : 5-11.
- 相澤彰子・大山敬三・高須淳宏・安達淳, 2005, 「レコード同定問題に関する研究の課題と現状」『電子情報通信学会論文誌』一般社団法人電子情報通信学会, D-I 88(3) : 576-589.
- 足立正, 1961, 「あいさつ」『早稲田学報』早稲田大学校友会, 1961年1月号, 10-11.
- Breiger R. L., 1974, “The duality of persons and groups,” *Social Forces*, 53(2): 181-190.
- Clotfelter C. T., 2001, “Who are the alumni donors? Giving by two generations of alumni from selective colleges,” *Nonprofit Management & Leadership*, 12(2) : 119-138.
- 江原昭博, 2009, 「アメリカにおける大学の同窓会—その成立過程と日本への示唆—」『国立教育政策研究所紀要』国立教育政策研究所, 138 : 125-139.
- Everett M., Broccatelli C., Borgatti S. and Koskinen J., 2018, “Measuring Knowledge and Experience in Two Mode Temporal Networks,” *Social Networks*, 55 : 63-73.
- Falzon L., Quintane E., Dunn J. and Robins G., 2018, “Embedding time in positions: Temporal measures of centrality for social network analysis,” *Social Networks*, 54 : 168-178.
- Faust K., 1997, “Centrality in affiliation networks,” *Social Networks*, 19(2) : 157-191.
- Granovetter M. S., 1973, “The Strength of Weak Ties,” *American Journal of Sociology*, 78 : 1360-1380. (=2006, 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編『リーディングス・ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 123-154.)
- 原裕美, 2016, 「戦前における私立大学校友会の役割—関西地区私立大学を中心に—」『名古屋高等教育研究』名古屋大学高等教育研究センター, 16 : 155-175.
- Harrison W. B., Mitchell S. K. and Peterson S. P., 1995, “Alumni Donations and Colleges’ Development Expenditures: Does Spending Matter?,” *The American Journal of Economics and Sociology*, 54(4) : 397-412.
- 長谷川博・雨宮邦之・吉田成男, 1995, 「明治期の攻玉社土木科同窓会誌—土木技術情報誌の一翼として—」『土木史研究』, 15 : 345-352.
- ・内山一男, 1996, 「攻玉社土木同窓会誌の測量関係記事」『土木史研究』, 16 : 369-374.
- 平松闊・鶴飼孝造・宮垣元・星敦士, 2010, 『社会ネットワークの研究・メソッド 「つながり」を調査する』ミネルヴァ書房.
- Holmes J., 2009, “Prestige, charitable deductions and other determinants of alumni giving: Evidence from a highly selective liberal arts college,” *Economics of Education Review*, 28(1) : 18-28.
- Hongmei C., Edward L. J. and Lakshmi P. G., 2012, “Enhancing Mentoring between Alumni and Students via Smart Alumni System,” *Procedia Computer Science*, 9 : 1390-1399.
- Hoyt J. E., 2004, “Understanding alumni giving: Theory and predictors of donor status”, Paper presented at the 44th Annual Forum of the Association for Institutional Research (AIR), Boston,

MA.

- 井原徹, 2006, 「早稲田大学における寄付金戦略」『IDE：現代の高等教育』IDE 大学協会, 484：27-31.
- 今村晴彦・園田紫及・金子郁容, 2010, 『コミュニティのちから—“遠慮がちな”ソーシャル・キャピタルの発見』慶應義塾大学出版会.
- 井上好人, 2008, 「明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能」—石川県立第一高女同窓会誌の「会員消息」記事の分析から—『教育社会学研究』日本教育社会学会, 83：149-168.
- 磯崎邦夫, 1990, 「慶應義塾における大学と同窓会」『大学と学生』日本学生支援機構, 297：19-24.
- Keith D. and Gary L., 2007, *Numbers behind NUMB3RS: Solving Crime with Mathematics*, Plume (=2008, 山形浩生・守岡桜訳『数学で犯罪を解決する』ダイヤモンド社.)
- 金子京子, 1990, 「実践女子学園校同窓会紹介」『大学と学生』日本学生支援機構, 297：25-29.
- 金光淳, 2003, 『社会ネットワーク分析の基礎 社会関係資本論にむけて』勁草書房.
- 川村清志, 2003, 「故郷と都市 —『同窓会誌』にみる 1910 年代から 1930 年代における故郷表象の変容—」『人文學報』, 89：97-126.
- , 2015, 「移動する身体と故郷の物語の行方 移動によって見いだされた故郷と移動のなかで変容する故郷」『国立歴史民俗博物館研究報告』, 199：143-169.
- 喜多村知之, 1990, 「同窓会 (Alumni) の意義—アメリカの場合を中心に—」『大学と学生』日本学生支援機構, 297：7-13.
- 小熊善之・永森光晴・阪口哲男・杉本重雄・田畑孝一, 2000, 「日本語漢字の異形字シソーラス」『デジタル図書館』図書館情報大学, 17: 37-45.
- 腰越滋・池田義人, 2006, 「大学における同窓会組織の今日的意義—『卒業生による大学評価アンケート調査』結果などを手がかりとして—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』東京学芸大学出版委員会, 57：19-27.
- 黄順姫, 2007, 『同窓会の社会学 学校的身体文化・信頼・ネットワーク』世界思想社.
- Latapy M., Magnien C. and Del Vecchio N., 2008, “Basic notions for the analysis of large two-mode networks,” *Social Networks*, 30(1)：31-48.
- Lertputtarak S. and Supitchayangkool S., 2013, “Factors Influencing Alumni Donations,” *International Journal of Business and Management*, 9(3)：170-178.
- McDearmon J. T. and Shirley K., 2009, “Characteristics and institutional factors related to young alumni donors and non-donors,” *International Journal of Educational Advancement*, 9(2)：83-95.
- 増田直紀, 2012, 「テンポラルネットワーク」『人工知能学会誌』人工知能学会, 27(2)：432-436.
- 松尾豊・安田雪, 2007, 「SNS における関係形成原理」『人工知能学会論文誌』人工知能学会,

- 22(5): 531-541.
- ・友部博教・橋田浩一・中島秀之・石塚満, 2005, 「Web 上の情報からの人間関係ネットワークの抽出」『人工知能学会論文誌』人工知能学会, 20(1): 46-56.
- 港真人・相澤彰子, 2010, 「名前同定のための SVM 特徴素の抽出と適用」『全国大会講演論文集』情報処理学会, 72: 659-660.
- 三隅一人, 2014, 「ソーシャル・キャピタルと市民社会」辻竜平・佐藤嘉倫編『ソーシャル・キャピタルと格差社会』東京大学出版会, 35-51.
- , 2015, 「テーマ別研究動向 (ソーシャルキャピタル)」『社会学評論』日本社会学会, 66 (1) : 134-144.
- 森岡清志, 1998, 「パーソナルネットワーク研究の方法的問題—標本調査と事例調査の検討—」『都市の社会的な世界—倉沢進先生退官記念論集—』倉沢進先生退官記念論集刊行会, 205-225.
- 盛山和夫, 1985, 「『弱い紐帯の強さ』再考」『数理社会学の現在』数理社会学研究会, 163-174.
- 中川裕美, 2015, 「雑誌研究の方法と課題」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』, 11 : 53-61.
- 永井暁子, 2009, 「同窓会調査の概要とその重要性」東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学 3 希望をつなぐ釜石からみた地域社会の未来』東京大学出版会, 150-161.
- Newman M. D., 2009, "Determinants of alumni membership in a dues-based alumni association," *Electronic Theses and Dissertations*. Paper 1052.
- and Petrosko J. M., 2011, "Predictors of Alumni Association Membership," *Research in Higher Education*, 52(7) : 738-759.
- 岡本真希子, 2013, 「東アジア地域における早稲田大学校友会 : 帝国日本のなかの〈校友共同体〉」『早稲田大学史紀要』早稲田大学大学史資料センター, 71-146.
- 大川一毅・西出順郎・山下泰弘, 2012, 「国立大学における「卒業生サービス」の現況と課題」『大学論集』広島大学, 43 : 319-336.
- ・畷田敏行・山下泰弘・西出順郎, 2015, 「日本の大学における卒業生サービスの現況と課題—全国大学アンケートとヒアリング調査の結果をふまえて—」『大学論集』広島大学, 47 : 185-200.
- , 2016, 「大学における全学同窓会組織の目的と機能—母校支援に関わる自覚的責務とその背景—」『アルテスリベラレス』岩手大学人文社会科学部, 99 : 145-164.
- 大森一宏, 2014, 「戦前期日本の大学と地域経済—早稲田大学の校友会名簿にみる人材配分機能—」『経済研究所所報』駿河台大学経済研究所, 18 : 21-26.
- 太田芳博・梶田将司・田島嘉則・田島尚徳・平野靖・内藤久資・間瀬健二, 2010, 「大学における生涯 ID のための名寄せ手法」『情報処理学会論文誌』情報処理学会, 51(3) : 965-973.

- 大谷壽一・竹田正幸・今田結城・澤田康文, 2006, 「医薬品の取り違えミスを防止するための薬名類似度の定量的指標の構築」『薬学雑誌』日本薬学会, 126 : 349-356.
- Pearson J., 1999, “Comprehensive research on alumni relationships: Four years of market research at Stanford University,” *New Directions for Institutional Research*, 101 : 5-21.
- 酒井雅子, 2011, 「一橋大学同窓会如水会について」『大学マネジメント』大学マネジメント研究会, 10(8) : 14-20.
- 佐藤量, 2016, 『戦後日中関係と同窓会』, 彩流社.
- 志垣陽, 2011, 「同窓会の組織化に向けて」『大学マネジメント』大学マネジメント研究会, 10 (8) : 26-38.
- Singer T. S. and Hughey A.W., 2003, “The role of the alumni association in student life,” *New Directions for Student Services* , 2002(100) : 51-68.
- Shaw W., 1922, “A New Power in University Affairs,” *Scriber's Magazine*, 71 : 677-684.
- 鈴木努, 2009, 『ネットワーク分析 (R で学ぶデータサイエンス/金光哲編集, 8)』共立出版.
- Stadtfeld C. and Geyer-Schulz A., 2011, “Analyzing event stream dynamics in two-mode networks: An exploratory analysis of private communication in a question and answer community,” *Social Networks*, 33(4) : 258-272.
- 高久雅生・相澤彰子・馬場康維・蔵川圭・谷藤幹子, 2009, 「研究者同定とその応用—統計分野と材料科学分野を例として—」『日本知能情報ファジィ学会ファジィシステムシンポジウム講演論文集』25: 2D3-03.
- 高木理久夫・森美由紀, 2015, 「早稲田の清国留学生—『早稲田大学中国留学生同窓録』の記録から—」『早稲田大学図書館紀要』早稲田大学図書館, 62 : 36-104.
- 高野史子, 1974, 「会議情報の参考資料」『医学図書館』, 21(3・4) : 211-218.
- 田中幾太郎, 2017, 『慶應三田会の人脈と実力』宝島社新書.
- 丹尾磯之助・大嶋正一・内田繁隆・陣内宜男・今井一郎・落合東朗, 1960, 「<座談会>早稲田学報の変遷」『早稲田学報』早稲田大学校友会, 1960年4月号, 28-34.
- 高田英一, 2012, 「国立大学の運営における同窓会の位置づけの現状について：中期計画の記述の分析を中心に」『大学探究：琉球大学大学評価センター・ジャーナル』『大学探究』編集委員会, 4 : 1-9.
- , 2014, 「国立大学における全学同窓会の設立及び活動の実態と課題—同窓会担当理事に対するアンケート調査の結果を中心に—」『非営利法人研究学会誌』非営利法人研究学会, 16 : 113-124.
- , 2015, 「国立大学における全学同窓会の運営のあり方—一部局同窓会との調整と同窓生の関心の獲得を中心に—」『非営利法人研究学会誌』非営利法人研究学会, 17 : 121-134.
- 高田洋, 2006, 「社会関係資本と自発的協力の発展：家族関係における社会統合」『第2回家

- 族についての全国調査 (NERJ03) 第2次報告書 No2: 親子、きょうだい、サポートネットワーク』日本家族社会学会 全国家族調査委員会, 151-163.
- Taylor A. L. and Martin J. C., 1995, "Characteristics of alumni donors and non-donors at a research I public university," *Research in Higher Education*, 36(3) : 283-302.
- 戸村理, 2011a, 「明治中期から大正期早稲田大学の寄附募集事業に関する基礎的考察—財務史料および寄附者名簿の分析を中心に—」『大学経営政策研究』「大学経営政策研究」編集委員会, 1 : 85-101.
- , 2011b, 「明治中期～大正期慶應義塾の寄附募集事業から見た経営実態に関する実証分析」『教育学研究』日本教育学会, 78(2) : 187-198.
- 殿崎正明, 1976, 「一次雑誌の書誌構造について」『情報管理』, 18(12) : 959-963.
- 鳥居朋子, 2013, 「同窓会活動における大学への戦略的支援—ミシガン大学同窓会の事例に着目して」『大学論集』広島大学, 44 : 131-146.
- 早稲田大学校友会編, 2010, 『早稲田大学校友会 125 年小史』早稲田大学校友会.
- 早稲田大学大学史編集所編, 1968, 「校友会」『早稲田大学百年史 別巻 II』早稲田大学, 1165-1228.
- Weaver I. S., Williams H., Cioroianu I., Williams M., Coan T. and Banducci S., 2018, "Dynamic social media affiliations among UK politicians," *Social Networks*, 54 : 132 - 144.
- Willemain T. R., Goyal A., Van D. M. and Thukral I. S., 1994, "Alumni giving: The influences of reunion, class, and year," *Research in Higher Education*, 35(5): 609-629.
- Wilson T.P., 1982, "Relational networks: An extension of sociometric concepts," *Social Networks*, 4 : 105-116.
- 山口洋, 2003, 「ネットワーク分析におけるデータ収集法の比較検討—個人間のネットワークデータを中心に—」『社会学部論集』佛教大学社会学部, 36 : 105-119.
- 矢澤西二, 1990, 「早稲田大学校友会とその活動」『大学と学生』日本学生支援機構, 297 : 35-39.
- 安田雪, 1994, 「社会ネットワーク分析：その理論的背景と尺度」『行動計量学』行動計量学会, 21(2) : 32-39.
- , 1997, 『ネットワーク分析—何が行為を決定するか』新曜社.
- 「寄付者芳名」『早稲田学報』早稲田大学校友会, 1967 年 4 月号, 29.
- 「催・会合・その他」『早稲田学報』早稲田大学校友会, 1966 年 7・8 月号, 65.
- 「稲門だより投稿のお願い」『早稲田学報』早稲田大学校友会, 2017 年 2 月号, 105.
- 「早稲田大学創立八十周年 記念事業計画」『早稲田学報』早稲田大学校友会, 1961 年 1 月号, 7-37.

資料1 大学および大学同窓会、大学同窓会誌一覧

資料1-1 国立大学同窓会、同窓会誌一覧

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
<北海道・東北地区>				
北海道大学	校友会エルム	有		
帯広畜産大学	帯広畜産大学同窓会	有	畜大同窓会便り	
岩手大学	岩手大学同窓会連合	有	岩手大学同窓会連合会報	
	七友会(人文社会科学部)	有	七友会だより	
	北桐会(教育学部)	有	北桐	
	一祐会(工学部)	有	北社	
	北水会(農学部)	有	北水会報	
山形大学	ふすま同窓会(旧制山高、文理・人文・理学部)	有	ふすま同窓会報、ふすま通信	
	地域教育文化学部同窓会、校友会	有	教友	
	蔵王会(医学部医学科同窓会)	不明		
	樹水会(医学部看護学科同窓会)	有	樹水NEWS	
	米沢工業会(工学部同窓会)	無		
	鶴窓会(農学部同窓会)	有	鶴窓会だより	
北海道教育大学	北師同窓会(札幌校同窓会)	有	純剛、北師	
	夕陽会(函館校同窓会)	有	夕陽會報、夕陽渡鳥、夕陽函館支部会報、夕陽榊山	
	六稜会(旭川校同窓会)	不明		
	鶴陵会(釧路校同窓会)	不明		
	青陵会(岩見沢校同窓会)	有	道青陵	
旭川医科大学	旭川医科大学医学部医学科同窓会	有	同窓会誌	
東北大学	東北大学校友会	有	東北大学メールマガジン(メール)	
福島大学	福島大学同窓会	無		
	同窓吾峰会(教育学部、人間発達文化学類)	有	吾峰	
	阿武隈会(行政政策学類)	有	阿武隈会報	
	信陵同窓会(経済経営学類)	有	信陵	
	きびたき会(共生システム理工学類・研究科)	有	きびたき	
室蘭工業大学	室蘭工業大学同窓会	有		
北見工業大学	北見工業大学同窓会	有	同窓会誌	
宮城教育大学	宮城教育大学同窓会	有	山にありて	
小樽商科大学	緑丘会	有	緑丘	
弘前大学	弘前大学同窓会	有	弘前大学同窓会報	
秋田大学	秋田大学全学同窓会	無		
	旭水会(教育文化学部)	有	旭水	
	本道(医学部医学科)	不明		
	本道さくらの会(医学部保健学科)	有	同窓会誌	
	北光会(工学資源学部)	有	北光	
<関東・甲信越地区>				
茨城大学	茨城大学同窓会連合会	有	茨城大学同窓会連合会会報	
群馬大学	群馬大学教育学部同窓会	有		
	刀城クラブ(医学部)	有	群馬大学医学部刀城クラブ会報	
	紫水クラブ(医学部保健学科)	有	同窓会だより	
	群馬大学工業会(理工学部・工学部)	有	群馬大学工業会報	
東京医科歯科大学	東京医科歯科大学 医科同窓会(医学部医学科)	有		
	お茶の水看護同窓会(医学部保健衛生学科看護)	有		
	お茶の水会 検査同窓会(医学部保健衛生学科)	有		
	東京医科歯科大学歯科同窓会(歯学部歯学科)	不明		
	お茶の水さつき会(歯学部口腔保健学科口腔保)	無		
	東京医科歯科大学校友会(歯学部口腔保健学)	有	校友	
東京芸術大学	杜の会(美術学部)	有	杜	
	同声会(音楽学部)	有	同声会報	2003
電気通信大学	一般社団法人目黒会	有	調布ネットワーク	
長岡技術科学大学	長岡技術科学大学同窓会	有	上富岡倶楽部	2006
政策研究大学院大学	GRIPS/GSPS 同窓会	有		
筑波大学	茗溪会	有	茗溪	
埼玉大学	埼玉大学同窓会	無		
	けやき会(教養学部)	有	埼玉大学教養学部同窓会だより けやき会	1991
	教友会(教育学部)	有	教友	
	経和会(経済学部)	有	経和会会報	1998
	理学部同窓会	有	理学部同窓会通信(メール)	
	数学科同窓会	有	矛盾	2004
	物理学科同窓会	不明		
	化学同窓会(基礎化学科)	無		
	生物・生化・分子生物同窓会	無		
	埼機(工学部機械工学科)	有	埼機会だより	
	電気電子同窓会	有	さい久流	
	情報(システム)工学科同窓会	有		
	応環同窓会(工学部応用化学)	有	応環同窓会報	
	機能材料工学科同窓会	無		
	建設工学科同窓会	無		
東京外国語大学	東京外国語会	有	外語会報	
東京工業大学	蔵前工業会	有	蔵前ジャーナル	
一橋大学	如水会	有	如水会々報	1920
上越教育大学	上越教育大学同窓会	有	JUEN 上越教育大学学園だより	
総合研究大学院大学	総研大同窓ネットワーク	有	総研大ニュースレター	
筑波技術大学	天丘会(産業技術学部・聴覚部)	不明		
	情報処理学科・情報システム学科の同窓会	不明		
千葉大学	千葉大学校友会	有	千葉大学校友会報	2007
東京学芸大学	辟雍会	有	辟雍	2004
	東京学芸大学同窓会(都の教員の同窓会)	有	学芸	
東京海洋大学	薬水会	有	薬水	
	海洋会	有	海洋	

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年	
横浜国立大学	横浜国立大学校友会	有	ALL YNU	2015	
	横浜国立大学同窓会連合	不明			
	友松会(教育系学部)	有	友松会だより		
	富丘会(社会科学系学部)	有	富丘会報		
	名教自然会(理工学系同窓会連合)	不明			
山梨大学	横浜国立大学海外同窓会	有	メールマガジン	2012	
	全学同窓会	不明			
宇都宮大学	山梨医科大学/山梨大学医学部 同窓会	有	微典会	1964	
	山梨工業會	有	山梨医科大学/山梨大学医学部同窓会誌	1996	
	宇都宮大学国際学部同窓会	有	山梨工業會会報		
東京大学	宇都宮大学教育学部同窓会	有	知求会ニュース	2002	
	宇都宮大学工学部同窓会	有	宇都宮大学教育学部同窓会会報		
	宇都宮大学工学部同窓会	有	宇都宮大学工学部同窓会会報	1994	
東京農工大学	峰ヶ丘同窓会(農学部)	有	峰ヶ丘会報		
	東京大学校友会	有	東大校友会ニュース		
お茶の水女子大学	東京農工大学同窓会	有	農工通信		
	お茶の水地理学会	有	ニューズレター		
新潟大学	桜化会(化学科)	無			
	お茶大食物学同窓会	不明			
信州大学	全学同窓会	有	雪華	2004	
	信州大学同窓会連合会	無			
	人文学部同窓会	有	會報		
	教育学部同窓会	有	信州大学教育学部同窓会報	1987	
	経済学部同窓会	有	信州大学経済学部同窓会報	2005	
	理学部同窓会	有	信州大学理学部同窓会報	1984	
	数学同窓会	有			
	物理同窓会(文理学部、理学部)	有	信州大学物理同窓会報(メール)	2001	
	松本化学会士会(文理学部化学専攻、理学部化)	有			
	生物同窓会(理学部生物科学科)	無			
	物循同窓会(理学部物質循環学科)	不明			
	文理学部同窓会	有			
	松医会(医学部)	有	松医会報	1967	
	医学部保健学科同窓会	有	保健学科同窓会報		
	工学部同窓会	有	若里		
農学部同窓会	有				
千曲会(繊維学部)	有	千曲会報			
<東海・北陸・近畿地区>					
富山大学	富山大学同窓会連合会	なし			
	人文学部同窓会	有	人文		
	富山大学教育学部同窓会(教育学部・人間発達科学)	有	会誌		
	越嶺会(経済学部同窓会)	有	越嶺会報		
	理学部同窓会	有	The Basis	1980	
静岡大学	仰岳会(工学部同窓会)	有	仰岳会会報		
	医学部同窓会	有	医学部同窓会報	1992	
	富山薬窓会(薬学部同窓会)	有	遠久栄		
	創己会(高岡短期大学・芸術文化学部同窓会)	不明			
	静岡大学全学同窓会	不明			
名古屋工業大学	岳陵会(文理・人文・人文社会科学部)	有	岳		
	教育学部同窓会	不明			
	浜松工業会(情報学部・工学部)	有	佐鳴		
	理学部同窓会	有	理学部同窓会会報	1985	
	農学部同窓会	有	静岡大学農学部同窓会報		
滋賀医科大学	名古屋工業会	有	ごきそ		
大阪大学	湖医会	有	湖都通信		
奈良教育大学	大阪大学同窓会連合会	無			
奈良先端科学技術大学院大学	奈良教育大学同窓会	有	まほろば		
金沢大学	奈良先端科学技術大学院大学同窓会	有	せんたん同窓会便り	2010	
浜松医科大学	つるま同窓会(医学部保健学科)	有	つどい、つるまだより	2004	
	十全同窓会(医学部)	有	十全同窓会会報	1950	
	法経文学部同窓会	有	金沢大学法経文学部同窓会会報	2009	
	理学部同窓会連絡会	不明			
	薬学同窓会	有	薬友会誌		
	金沢大学学友会	有	学友支援 ニュース・レター	2009	
	金沢工業会	有	金沢工業会誌		
	松門会	有			
	浜松医科大学看護学科同窓会	有			
	豊橋技術科学大学	豊橋技術科学大学同窓会	有	同窓会報	
	京都大学	京都大学同窓会	有		
	大阪教育大学	大阪教育大学校友会	無		
	奈良女子大学	天遊会	有	窓友	
	福井大学	佐保会	有	佐保会報	1915
	名古屋大学	福応会(教育地域科学部)	有		
白翁会(医学部)		有	福井大学医学部同窓会会報	2004	
工業会(工学部)		有	工業会誌		
福井大学留学生同窓会(帰国留学生)		不明			
名古屋大学全学同窓会		有	名古屋大学全学同窓会 News Letter	2002	
三重大学	人文学部同窓会	不明			
	教育学部同窓会	有	三重大学教育学部同窓会通信		
	三医会(医学部医学科)	有	三医会会報		
	三医看同窓会(医学部看護科)	有	三医看会報		
	工学部同窓会	有	あの津から—三重大学工学部同窓会誌—		
	三翠同窓会(生物資源学部)	有			
	地域イノベーション学研究科同窓会	無			

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
京都教育大学	京都教育大学同窓会	有	京都教育大学同窓会だより	
兵庫教育大学	大学院同窓会	有	兵庫教育大学大学院同窓会会報、NEWS LETTER	院生協だ
	学部同窓会	有		
和歌山大学	和歌山大学同窓会	有		
	紀学同窓会(教育学部)	有	会報	1979
	柑声会(経済学部)	有	柑声	
	@sys(システム工学部同窓会)	有	Communication Leaflet	2006
	飛耀会(観光学部)	不明		
岐阜大学	岐阜大学同窓会連合会	無		
	教育学部同窓会	有	岐阜大学教育学部同窓会報	1995
	森の会(地域科学部)	有	森の会ニュース	2001
	医学部同窓会	有	岐阜大学医学部記念会館だより	
	看護学科同窓会	有		
	工業倶楽部(工学部)	有	岐阜大学工業倶楽部会報	1978
	各務同窓会(応用生物科学部)	有	各務同窓会報	
愛知教育大学	愛知教育大学同窓会	有	同窓会広報誌	
滋賀大学	滋賀大学教育学部同窓会	有	清流	
	陵水会(経済学部・大学院、データサイエンス学)	有	陵水会年報	
京都工芸繊維大学	京都工芸繊維大学同窓会	有	KIT同窓会誌工織	
神戸大学	神戸大学学友会	有	神戸大学学友会ニュースレター	
北陸先端科学技術大学院大学	北陸先端科学技術大学院大学同窓会	不明		
<中国・四国地区>				
鳥取大学	鳥取大学学友会	無		
	尚徳同窓会	不明		
	医学部同窓会	有	米子同窓だより	
	工学部同窓会	無		
	農学部同窓会	有	鳥取大学農学部同窓会会報	
山口大学	山口大学同窓会	無		
	鴻文会(人文学部)	有	鴻文会会報	1981
	時雅会(教育学部)	不明		
	鳳陽会(経済学部)	有		
	鴻理会(理学部)	有	山口大学理学部同窓会会報	1981
	霜仁会(医学部医学科)	無		
	双樹会(医学部保健学科)	無		
	常盤工業会(工学部)	有	常盤	
	農会(農学部)	有	山口大学農学部同窓会々報	
愛媛大学	愛媛大学校友会	有	校友会報	
島根大学	島根大学同窓会連合会	有	SUAA	2007
	島根大学法文学部同窓会	有	淞春	
	島根大学教育学部同窓会	有	同窓会誌	
	島根大学医学部同窓会	有		
	島根大学総合理工学部同窓会	無		
	島根大学生物資源科学部同窓会	無		
徳島大学	徳島大学同窓会連合会	有	ニュースレター	
	渭水会(総合科学部)	有	渭水会々報	
	青藍会(医学部医学科)	有	青藍会会報	
	栄友会(医学部栄養学科・医科栄養学科)	有	栄友会会報	
	葎菌会(歯学部)	無		
	薬友会(薬学部)	有	徳島大学薬友会誌	
	工業会(工学部・理工学部・生物資源産業学部)	有	徳島大学工業会会報	
	睦眉会(医学部保健学科)	有	睦眉会会報	
	六一会(大学開放実践センター)	有	六一会会報	
高知大学	高知大学同窓会	有		
岡山大学	岡山大学Alumni	有	岡山大学Alumni(全学同窓会)会報、岡大アラムナ	2014
	教育学部同窓会	有		
	理学部同窓会	有	岡山大学理学部同窓会会報	2012
	鶴翔会(岡山医学同窓会)	有		
	鶴翔会(岡山医学同窓会)東京支部	有	鶴翔会東京支だより(メール)	
	ときわ会(医学部保健学科:看護)	有	ときわ会レター	2015
	ほおゆう(医学部保健学科:放射線)	無		
	あらたま会(医学部保健学科:検査)	有	あらたま会広報誌	
	歯学部同窓会	有	岡山大学歯学部同窓会メルマガ(メール)	
	薬学部同窓会	無		
	工学部同窓会	有	岡山大学同窓部同窓会報	
	環境理工学部同窓会	無		
	農学部同窓会	無		
	国際同窓会	有	岡山大学留学生同窓会ニュースレター	2011
	岡山大学くらしき会(資源植物科学研究所)	有	「岡山大学くらしき会」会誌	2000
鳴門教育大学	鳴門教育大学同窓会	有		
広島大学	広島大学校友会	有	広島大学校友会だより	2007
	広島大学同窓会	無		
	広島大学同窓会関東支部	不明		
	広島大学マスターズ	有	広島大学マスターズ通信	2006
	広島大学マスターズ広島	有	マスターズ広島 News Letter	2010
	広島大学関西フェニックスの会	有	メルマガ「関西フェニックス通信」(メール)	2009
	国際同窓生ネットワーク(海外校友会)	無		
香川大学	香川大学同窓会連合会	有		
	松楠会(教育学部)	有	松楠会報	
	又信会(法学部・経済学部・商業短大)	有	又信、ニュース又信	
	讃樹會(医学部医学科)	有		
	木蓮会(医学部看護学科)	有	香川大学医学部看護学科同窓会「木蓮会」会報	
	緑晴会(工学部)	不明		
	池戸会(農学部)	有	池戸会報	

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
<九州・沖縄地区> 福岡教育大学 長崎大学 鹿児島大学	城山会	有	城山会会報	2009
	全学同窓会	有	長大同窓	
	同窓会連合会	有	鹿児島大学同窓会連合会報	
	教育学部付属小学校同窓会	無		
	歯学部同窓会	有	鹿児島大学歯学部同窓会	
	あらた同窓会(農学部)	有	あらた同窓會	
	法文学部同窓会	無		
	理学部同窓会	有		
	機友会(工学部)	有	南桜風	
	魚水会(水産学部同窓会)	有	魚水	
	教育学部同窓会	不明		
	鶴陵会(医学部医学科)	有	鶴陵会會報	
	南窓舎密会(工学部応用化学工学科)	無		
	九州大学同窓会連合会	有	九大広報	
	九州大学校友会	無		
	同窓会連合会	無		
	武夫原会(文学部・法学部)	有		
	教育学部同窓会	有	会報	
	理学部同窓会	有		
	熊杏会	有	熊杏	
	医学部保健学科同窓会	有	同窓会会報	
	薬学部同窓会	有		
	工業会(工学部)	有	熊本大学工業会会報	
	東京連合同窓会	無		
	関東連合同窓会	無		
	九州連合同窓会	無		
	海外同窓会等	不明		
鹿屋体育大学同窓会	有			
九州工業大学	明専会	明専会報		
	九工大シニアアカデミー(教授会OB)	九州工大シニアアカデミー		
大分大学	大分大学同窓会連合会	大分大学同窓会連合会機関紙		
	豊友会(教育福祉科学部)	豊友会会報		
	四極会(経済学部)	四極		
	玉樹会(医学部医学科)	玉樹会会誌		
	桜樹会(医学部看護学科)	無		
琉球大学	翔工会(工学部)	有	翔工	
	琉球大学同窓会	有	琉球大学同窓会会報	
	琉球大学同窓会関東支部	有	芭蕉誌 琉球大学同窓会関東支部会報誌	
佐賀大学	佐賀大学同窓会	有	楠の葉	
	有明会(教育学部)	有	有明	
	楠葉同窓会(旧文理学部・経済学部)	有	佐賀大学楠葉同窓会 なんよう	
	佐賀医科大学・佐賀大学医学部同窓会	無		
	菱実会(理工学部)	有	菱の実 佐賀大学理工学部同窓会会報	
宮崎大学	佐賀大学農学部同窓会	有	ありあけ 佐賀大学農学部同窓会報	
	同窓会連合会	有	宮崎大学同窓会連合会だより	
	木犀会(師範学校・教育学部)	有	木犀会会報	
	篠懸会(医科大学・医学部)	有	篠懸会誌	
	医学部看護学科同窓会	有		
	宮崎大学工学部同窓会	無		
	船塚会(農学部)	有	宮崎大学農学部同窓会だより	
	留学生同窓会	不明		

資料1-2 私立大学同窓会、同窓会誌一覧

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
<北海道・東北地区>				
札幌大学	札幌大学校友会	有	札幌大学校友会会報 SU ALUMNI REPORT	
札幌保健医療大学	札幌保健医療大学同窓会	不明		
苫小牧駒澤大学	苫小牧駒澤大学同窓会	有		
藤女子大学	藤の実会	有		
北海商科大学	白亜会	有		
北海道文教大学	つるの会	有	はまなすの実	1960
青森大学	青森大学同窓会	無		
八戸工業大学	八戸工業大学同窓会	有	八戸工業大学 同窓会報	2002
	蒼峰会(機械工学科・ 産業機械工学・機械情報技術学科)	不明		
	水交会(電気工学科・電気電子工学科 ・電子知能システム学科)	無		
	土木建築同窓会(土木学科・環境建設 工学科・土木建築工学科)	不明		
	学匠会(エネルギー工学科・生物環境化学工学科)	無		
	うみねこ会(システム情報工学科)	無		
	感性デザイン同窓会(感性デザイン学部)	無		
富士大学		無		
仙台大学	仙台大学同窓会	有		
東北生活文化大学	三島学園同窓会	有	香風	
宮城学院女子大学	宮城学院同窓会	有	宮城学院同窓会だより ふんすい	
東北芸術工科大学	東北芸術工科大学校友会	有	校友会員とついに校友通信[ケー・ジー] k*g	
奥羽大学	文学部同窓会	無		
	歯学部同窓会	有		
	薬学部同窓会	不明		
札幌大谷大学	真心会	有	札幌大谷大学OTANI真心会 同窓会だより	
千歳科学技術大学	同窓会	無		
日本医療大学	なし			
北翔大学	淑華会	有	淑華会	
北海道医療大学	北医療薬(薬学部)	有	北医療薬会報	1981
	看護福祉学部臨床福祉学科同窓会	無		
	歯学部附属歯科衛生士専門学校同窓会	有	いずみ	
	歯学部同窓会	有		
	心理科学部臨床心理学科同窓会	有	医心伝人	
	札幌医療福祉専門学校同窓会	無		
	福慧会(看護福祉学部看護学科)	有		
	あいの里ST会(心理科学部言語聴覚療法学科)	無		
北海道薬科大学	北海道薬科大学同窓会	有	メール	
青森中央学院大学	青森中央学院大学同窓会	有	こぶしの花	
弘前医療福祉大学	なし			
盛岡大学	聖陵同窓会	有	聖陵	1997
仙台白百合女子大学	仙台白百合女子大学、仙台白百合短期大学同窓会	有		
	ゆりの会(健康栄養学科)	有	「ゆりの会」会報	1996
	東北福祉大学同窓会	有	東北福祉大学同窓会 会報	2000
東北福祉大学	なし			
秋田看護福祉大学	公翔会	有	公翔会会報「卒業生の窓」	
東北公益文科大学	三部同窓会	有		
郡山女子大学	文泉会	有	文泉会報	
札幌学院大学	天使大学同窓会	有	ぶらたなす	
日本赤十字北海道看護大学	日本赤十字北海道看護大学同窓会	有	日本赤十字北海道看護大学同窓会 会報誌	
北星学園大学	北星学園大学同窓会	有	大谷地だより	
北海道科学大学	雪嶺会	有		
酪農学園大学	酪農学園大学同窓会	有		
	酪農学園大学同窓会校友会	有	校友会会報	
東北女子大学	東北女子大学同窓会	無		
弘前学院大学	なし			
石巻専修大学	専修大学校友会	有	専修大学校友会誌 アドニス Adonis	
	石巻専修大学同窓会	無		
東北学院大学	東北学院同窓会	有	東北学院時報	1916
東北文化学園大学	東北文化学園大学同窓会	有	TBG同窓会報 輝KIRARI	2009
日本赤十字秋田看護大学	日本赤十字秋田短期大学 日本赤十字秋田看護大学	無		
東北文教大学	「耀」同窓会	無		
	東京支部	無		
	宮城支部	無		
	秋田支部	無		
	ソウル支部	無		
東日本国際大学	爨友会	有	爨友会報	
旭川大学	旭川大学第Ⅱ部・生涯学習同窓会	無		
	旭川大学第Ⅰ部同窓会	無		
	旭川大学短期大学部同窓会	有	桜芽	
札幌国際大学	静華会	有	札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部同窓会報誌	静花
道都大学	星槎道都大学同窓会	無		
函館大学	函館大学同窓会	無		
北海学園大学	豊平会	有	豊平會報	
北海道情報大学	北海道情報大学同窓会	有	北海道情報大学同窓会会報	2003
稚内北星学園大学	稚内北星学園同窓会	無		
八戸学院大学	八戸大学同窓会	無		
岩手医科大学	圭陵会	有	圭陵會々報、圭陵会FAXニュース	
尚綱学院大学	尚綱学院同窓会・後援会	有	むつみのつさり、尚綱誌	1907
東北工業大学	東北工業大学同窓会	有	工大人	

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
東北医科薬科大学	東北医科薬科大学同窓会	有	東北医科薬科大学同窓会報	
ノースアジア大学	ノースアジア大学校友会	不明		
いわき明星大学	いわき明星大学同窓会	有	共にいつまでも	
福島学院大学	福島学院大学同窓会	有	福島学院大学同窓会会報	
<栃木・群馬・茨城県>				
茨城キリスト教大学	茨城キリスト教大学同窓会	有		
	茨城キリスト教大学大学院同窓会	有		
	シオン会(茨城キリスト教大学短期大学部)	有	シオン会だより	
日本ウェルネススポーツ大学	なし			
国際医療福祉大学	マロニエ会	有		
白鷲大学	鷗友会	有	Voyage ～かもめたちの航海誌～	
桐生大学	桐生学園同窓会	不明		
筑波学院大学	なし			
流通経済大学	流通経済大学校友会	有	流通経済大学校友会報 松風	2010
作新学院大学	作新学院大学同窓会	有		
文星芸術大学	同窓会	有		
群馬医療福祉大学	昌賢学園同窓会	有	さくら	
高崎健康福祉大学	高崎健康福祉大学同窓会	有	Amicale-アミカルー	
つくば国際大学	つくば国際大学同窓会	無		
足利工業大学	足利工業大学教職校友会	不明		
	足利工業大学同窓会	有	わたらせ	
自治医科大学	医燈会(医学部)	有	自治医科大学同窓会会報	1978
	看護学部・看護学研究科同窓会	有		
関東学園大学	なし			
群馬パース大学	群馬パース同窓会	有	群馬パース同窓会報	2003
高崎商科大学	高崎商科大学/短期大学部同窓会	有		
常盤大学	常盤大学同窓会	有	常盤大学同窓会会報 ときわの風	2005
	みわの会(常盤短期大学)	有	みわ	
	常盤大学大学院同窓会	有	常盤大学大学院同窓会会報 思索の杜	
宇都宮共和大学	宇都宮共和大学シテイライフ学部同窓会	有		
	宇都宮短期大学人間福祉学科同窓会(子ども生活学部)	有	爽風だより	2004
獨協医科大学	獨協医科大学同窓会(医学部)	無		
	杏の会(獨協医科大学附属看護専門学校)	有	獨協医科大学附属看護専門学校同窓会 杏の会	1994
共愛学園前橋国際大学	Grape vine	有		
上武大学	同窓会	不明		
東京福祉大学	東京福祉大学同窓会	有		
<埼玉・千葉・神奈川県>				
浦和大学	緑友会	有		
埼玉学園大学	埼玉学園大学校友会	不明		
尚美学園大学	尚友会	無		
西武文理大学	なし			
獨協大学	獨協大学同窓会	有		
	桜柳会(体育会OB会連合会)	無		
日本薬科大学	日本薬科大学同窓会	不明		
武蔵野学院大学	武蔵野学院大学・武蔵野短期大学同窓会	不明		
愛国学園大学	なし			
川村学園女子大学	川村学園女子大学同窓会	有	ゆかり	
	川村学園同窓会	有	ゆかり	
三育学院大学	大同窓会	不明		
	三育学院看護部同窓会	不明		
聖徳大学	聖徳学園菊水会	有		
千葉工業大学	千葉工業大学同窓会	有	KOYU TIMES	
麗澤大学	麗澤校友会	有	麗澤会報	1946
神奈川大学	宮陵会	有	宮陵会誌、宮陵会報	
	フロンティアクラブ	有		
関東学院大学	燦葉会	有	さんよう	
湘南工科大学	松稜会	有	湘南工科大学 松稜会だより	
聖マリアンナ医科大学	聖医会	有	会報	
桐蔭横浜大学	桐蔭横浜大学同窓会	無		
フェリス女学院大学	りてら(文学部・国際交流学部)	有	フェリス女学院大学同窓会会報	2003
	Fグループ(音楽学部)	有	フェリス女学院大学同窓会会報	1972
	りべるて(旧短期大学家政科)	有	フェリス女学院大学同窓会会報	2003
横浜美術大学	クローバー・ベル会	無		
埼玉工業大学	埼玉工業大学同窓会	有	清流	1987
女子栄養大学	香友会	有	香友会通信、香窓	
東京国際大学	霞会	有	メールマガジン	
日本医療科学大学	JUN同窓会	有		
人間総合科学大学	華蓮会	有		
	稲人会(早稲田医療技術専門学校・人間総合科学大 学保健医療学部・人間科学部・健康栄養学科)	有		
明海大学	浦安キャンパス同窓会	有	MEIKAI UNIVERSITY URAYASU CAMPUS ALUMNI ASSOCIATION	1995
	歯学部同窓会	不明		
植草学園大学	さくら会	有	さくら会会報	2011
	植草学園大学同窓会	有		
	植草学園短期大学同窓会	有		
神田外語大学	神田外語大学同窓会	不明		
	神田外語いしずゑ会	無		
秀明大学	なし			
清和大学	清和大学同窓会	無		
千葉商科大学	千葉商科大学同窓会	有	きずな、ニューズレター	2009・2011
東京情報大学	東京情報大学校友会	無		
和洋女子大学	むら竹会	有	会報むら竹	
神奈川工科大学	幾徳学園同窓会	有	幾徳学園同窓会会報	
	機械工学科同窓会	無		

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
神奈川工科大学	電気電子情報工学科同窓会 応用化学科同窓会	不明 無		
相模女子大学	翠葉会	不明		
情報セキュリティ大学院大学	情報セキュリティ大学院大学同窓会	無		
洗足学園音楽大学	音楽大学同窓会 短期大学同窓会	有 有	会報	
東海大学	東海大学同窓会 東海大学・北海道東海大学 国際文化学部同窓会 北海道東海大学工学部同窓会 東海大学芸術工学部同窓会 八洲学園大学同窓会	有 有 無 無 無 無		
八洲学園大学	八洲学園大学同窓会	無		
横浜薬科大学	浜葉会	有		
共栄大学	共栄大学同窓会	有		
十文字学園女子大学	若桐会	有	若桐会会報	
駿河台大学	駿河台大学同窓会	有	駿河台大学同窓会	2002
東都医療大学	東都医療大学同窓会	有		
日本工業大学	工友会	有	工友会会報	
文教大学	藍夢会(文教大学同窓会) 芙蓉会(短期大学部同窓会)	有 有	あいたで	
開智国際大学	柏櫻会	不明		
江戸川大学	駒木会	有	駒木会報	2001
敬愛大学	敬愛大学校友会	有	Keiai University Press	
淑徳大学	淑徳大学同窓会	有		
千葉科学大学	千葉科学大学同窓会 素友会	有 無	千葉科学大学同窓会 出合いは夢のはじまり	2008
中央学院大学	学友会	有	中央学院大学 学友会会報	
麻布大学	麻布大学同窓会	有	麻布大学同窓会會報	
神奈川歯科大学	神奈川歯科大学同窓会	不明		
松蔭大学	松蔭大学同窓会	有	同窓会会報	
昭和音楽大学	同侪会	有	昭和音楽大学 同侪会会報	
鶴見大学	文学部・短期大学部同窓会 歯学部同窓会	有 有		1968
東洋英和女学院大学	東洋英和女学院同窓会 保育部会(短期大学保健科) かえで会(短期大学英文科) 楓雅会(短期大学国際教養科) 楓美会(大学同窓会) 大学院同窓会	有 有 有 有 有 有	東洋英和女学院 同窓会だより はぐくみ Kaede & FUGA FUGA 楓美 東洋英和女学院 同窓会だより	
横浜商科大学	横浜商科大学同窓会	有	横浜商大 同窓会会報	
埼玉医科大学	医学部同窓会 保健医療学部同窓会 短期大学同窓会	有 有 無	埼玉医科大学医学部 同窓会会報	
城西大学	城西大学同窓会	有	けやき	
聖学院大学	聖学院大学同窓会	有	聖学院大学同窓会会報誌	
東邦音楽大学	邦友会	不明		
日本保健医療大学	なし	なし		
平成国際大学	平成国際大学校友会	有	英知	
ものづくり大学	ものづくり大学同窓会	無		
亀田医療大学	なし	なし		
国際武道大学	同窓会(仮)	不明		
城西国際大学	城西国際大学同窓会	無		
千葉経済大学	千葉経済大学同窓会	有	千葉経済大学新聞	
東京基督教大学	TCU同窓会	不明		
了徳寺大学	よつば会	不明		
SBI大学院大学	なし	なし		
鎌倉女子大学	和敬会	有	和敬会だより	
湘南医療大学	なし	なし		
星槎大学	星槎大学校友会	不明		
田園調布学園大学	なでしこ同窓会	有	なでしこ	
日本映画大学	日本映画学校OB牧場	不明		
横浜創英大学	創緑会	無		
<東京都>				
青山学院大学	青山学院校友会	有	あなたと青山学院	2010
嘉悦大学	光風会	有	光風会報	
共立女子大学	桜友会	有	桜の友	1906
慶應義塾大学	慶應連合三田会	有	三田ジャーナル	
国際基督教大学	ICU同窓会	有	Alumni News	
駒澤大学	駒澤大学同窓会	有		
実践女子大学	実践校会	無		
昭和大学	医学部同窓会 歯学部同窓会 薬学部同窓会 保健医療学部同窓会	有 有 有 有	同窓会新聞 四季	
白梅学園大学	白梅学園大学・短期大学同窓会	有		
成城大学	成城学園同窓会	有	成城学園同窓会だより	1956
聖路加国際大学	聖路加同窓会	有	同窓会だより	
専修大学	専修大学校友会	有	専修大学校友会誌 アドニス Adonis	1888
多摩美術大学	多摩美術大学校友会	有	aIT	1996
帝京科学大学	なし	なし		
東京有明医療大学	東京有明医療大学校友会	不明		
東京音楽大学	東京音楽大学校友会	有	TCM 校友会会報	
東京工科大学	東京工科大学同窓会	有		
東京純心大学	くぬぎ	有	Kunugi	
東京女子体育大学	藤葉会	無		
東京造形大学	東京造形大学校友会	有	ZOKEI FRIENDS NEWS	

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
東京富士大学	東京富士大学校友会	有	雄峯	
東邦大学	東邦会(医学部)	有	東邦会ニュース	1958
	鶴風会(薬学部)	有	鶴風会報	1958
	鶴風会(理学部)	有	鶴風	1964
	看護同窓会	有	素敵に翔け	
二松學舎大学	二松學舎松苓会	有	二松學舎松苓会報	1987
日本歯科大学	日本歯科大学校友会	有	日本歯科大学校友会・歯学会会報	
日本女子体育大学	松徳会	有	松徳会会報誌	1953
ハリウッド大学院大学	なし			
文京学院大学	文京学院校友会	有		
	文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学同窓会	無		
	あやめ会(経営学部・経営学科)	無		
	ふじみ野会(文京保育・保母専門学校、文京女子短期大学保育科、文京女子大学人間学部、文京学院大学人間学部)	無		
	三医志会(医学技術専門学校・保健医療技術学部)	無		
武蔵野大学	むらさき会	有	むらさきたより	
明治学院大学	明治学院大学校友会	有	Do For Others	
ヤマザキ学園大学	ヤマザキ学園同窓会大学部会	有	同窓会だより	
LEC東京リーガルマインド大	LEC会計大学院同窓会	無		
亜細亜大学	青々会	有	青々会報	
桜美林大学	桜美林学園同窓会	有	同窓会だより	1955
学習院大学	桜友会	有	桜友会報	
杏林大学	医学部同窓会	無		
	外国語学部同窓会	無		
	杏里会(保健学部)	有		
	杏門会(社会科学部・総合政策学部)	有		
惠泉女学園大学	惠泉女学園同窓会	有	Lantern、つばめの巣	
国際仏教学大学院大学	なし			
駒沢女子大学	駒沢学園同窓会	無		
芝浦工業大学	芝浦工業大学校友会	有	校友会だより、芝浦工業大学校友会全国総会懇親会	
昭和女子大学	光葉同窓会	有	光葉同窓会 会報	1928
白百合女子大学	白百合女子大学同窓会	有		
創価大学	創友会	有	創友会メールマガジン(メール)	
大正大学	鴨台会	有	鴨台会報	
拓殖大学	拓殖大学校友会	有	茗荷谷たより	1909
中央大学	学員会	有	中央大学学員時報	1966
帝京平成大学	なし			
東京医科大学	東京医科大学同窓会	有	同窓会新聞	1948
東京家政大学	緑窓会	有	緑窓会報	1903
	緑窓栄養士会(栄養士・管理栄養士の資格を有する者および在学生(資格取得見込み者)ならびに栄養学科・栄養科教職員)	有	緑窓会季刊誌	2015
	緑衣会(服飾美術学科)	無		
	緑窓教育会(教員に限らず教育の関連職種に従事されている人達(休職中、ご退職あるいは求職の方を含む))	有	緑育会	2007
東京工芸大学	工学部同窓会	有	ひまわり	
	東京工芸大学同窓会(芸術学部)	有	ひろば	
	華輪会(東京工芸大学女子短期大学部)	有	かりん	1984
東京女学館大学	白菊会	有	白菊だより	1918
東京神学大学	なし			
東京電機大学	東京電機大学校友会	有	工学情報、校友会のしおり	1912
	東京電機大学同窓会	無		
	東京電機大学電機学校同窓会	有	工学情報	1912
東京未来大学	東京未来大学同窓会	有		
桐朋学園大学	桐朋学園音楽部門同窓会	有	同窓会だより	
日本大学	日本大学校友会	有	桜緑、KIZUNA(絆)	2002・1998
日本社会事業大学	日本社会事業大学同窓会	有	社大同窓会	
日本赤十字看護大学	日本赤十字看護大学同窓会	有	同窓会誌	1985
ビジネス・ブレークスルー大	なし			
法政大学	法政大学校友会	有	ORANGE JOURNAL 法政大学校友会報	
武蔵野音楽大学	武蔵野音楽大学同窓会	不明		
明治薬科大学	明薬会	有	明薬会誌	
立教大学	立教大学校友会	有	St.Paul's Alumni セントポール 立教大学校友会報	
和光大学	和光大学同窓会	有	和光大学同窓会会報	
跡見学園女子大学	跡見校友会	有	あとみネット(メール)	1900
	桃李の会(高女専攻科・短大)	有	桃李の会 会報 おとずれ	1900
	一葉会(大学)	有	一葉会だより	1900
大妻女子大学	大妻コタカ記念会	有		
学習院女子大学	桜友会	有	桜友会報	
	草上会(学習院女子短期大学)	不明		
国立音楽大学	同調会	有	同調会ニュース	
工学院大学	工学院大学校友会	有	工学院大学 校友会報 TOKYO URBAN TECH	
国士舘大学	国士舘大学同窓会	有	同窓会通信	2015
産業能率大学	産業能率大学校友会	有	産業能率大学 校友会NEWS	
順天堂大学	医学部同窓会	有	順天堂だより	
	啓友会(スポーツ健康科学部)	有	啓友誌 順天堂だより	
	看護学部同窓会	有	順天堂だより	
	順天堂大学同窓会	有	順天堂だより	
昭和薬科大学	昭和薬科大学アラムナイ	有	Shoyaku	
杉野服飾大学	すぎの会	有	会報ジャーナルすぎ	1962
聖心女子大学	宮代会	有	宮代会ニュース、夏のお便り、宮代	
大東文化大学	大東文化大学同窓会	有		
多摩大学	多摩大学同窓会	有		

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
津田塾大学	津田塾大学同窓会	有	津田塾たより	
デジタルハリウッド大学	デジタルハリウッド校友会	有	メールマガジン(メール)	
東京医療学院大学	なし			
東京家政学院大学	光塩会	有	光塩	1929
東京歯科大学	東京歯科大学同窓会	有	Tokyo Dental College Alumni Association	1895
東京女子大学	東京女子大学同窓会	有	同窓会会報	
東京聖栄大学	聖栄会	有	聖栄会だより	
東京都市大学	東京都市大学校友会	有	会報	2014
東京薬科大学	東薬会	有	とうやく会報	
東洋大学	東洋大学校友会	有	東洋大学校友会報 TOYO UNIVERSITY ALUMNI ASSOCIATION	1934
	川越キャンパス同窓連絡協議会	無		
日本医科大学	日本医科大学同窓会	有	同窓会報	
日本獣医生命科学大学	日本獣医生命科学大学同窓会	有	日本獣医生命科学大学同窓会報	1957
日本体育大学	日本体育大学同窓会	有	日體人	
文化学園大学	紫友会	有	紫友会報	
星薬科大学	星薬科大学同窓会	有	星薬会報	
武蔵野美術大学	武蔵野美術大学校友会	有	msh! magazine	1962
明星大学	明星会	有	明星会だより	
立正大学	立正大学校友会	有	立正大学校友会報 たちばな	2009
	立正大学同窓会	有	立正大学校友会報 たちばな	2009
早稲田大学	早稲田大学校友会	有	早稲田学報	1897
上野学園大学	恵声会	不明		
大原大学院大学	なし			
北里大学	北里大学同窓会	有	北里大学同窓会報	
グロービス経営大学院大学		不明		
國學院大学	院友会	有	院友会報	
こども教育宝仙大学	あかつき会	有		
事業構想大学院大学	MPD青楠クラブ	不明		
上智大学	ソフィア会	有	ソフィアズナウ	
女子美術大学	女子美術大学同窓会	不明		
成蹊大学	成蹊会	有	成蹊会誌	
清泉女子大学	麗泉会	有	麗泉会会報	
高千穂大学	高千穂学園同窓会	有	TAKACHIHO	
玉川大学	玉川学園学友会	無		
帝京大学	帝京大学医学部同窓会	有	帝京大学医学部同窓会誌	
東京医療保健大学		不明		
東京経済大学	葵友会	有	東京経済	
東京慈恵会医科大学	東京慈恵会医科大学同窓会	有	慈大新聞	1947
東京女子医科大学	至誠会(医学部)	有	女医界	1926
	東京女子医科大学看護系同窓会	有	東京女子医科大学看護系同窓会会報	
東京成徳大学	東京成徳大学子ども学部同窓会	不明		
	東京成徳大学人文学部・応用心理学部同窓会	不明		
	桐花会(東京成徳短期大学同窓会)	有	桐花	
	東京成徳大学大学院同窓会	不明		
東京農業大学	東京農大校友会	有	世田谷通信	
東京理科大学	理窓会	有	理窓	1891
東洋学園大学	東洋学園大学同窓会	有		
日本教育大学院大学				
日本女子大学	桜楓会	有	桜楓新報	
日本文化大学	柏樹会	不明		
文化ファッション大学院大学	なし			
武蔵大学	武蔵大学同窓会	有	武蔵	
明治大学	明治大学校友会	有	メールマガジン	
目白大学	目白大学同窓会	有	目白大学同窓会報	2001
ルーテル学院大学				
<甲信越地区>				
敬和学園大学	敬和学園大学同窓会	不明		
新潟国際情報大学	みずき会	無		
新潟リハビリテーション大学	心杖会	有		
山梨学院大学	山翡翠の会	不明		
長野大学				
国際大学	IUJ Alumni	不明		
新潟医療福祉大学	新潟医療福祉大学同窓会	有	伍桃. NEWS LETTER	2005
新潟産業大学	青濤会	有	青濤会会報	
健康科学大学	健康科学大学同窓会	有		
佐久大学	秋桜会	有		
長野保健医療大学	桃李会	有	桃李会報	2015
事業創造大学院大学	事業創造大学院大学同窓会	不明		
新潟経営大学	新潟経営大学同窓会	不明		
新潟青陵大学	新潟青陵大学同窓会	有		
身延山大学	身延山学園同窓会	無		
諏訪東京理科大学				
松本大学	松本大学同窓会	有	フラップ	1985
長岡大学	長岡大学同窓会	有		
新潟工科大学	新潟工科大学同窓会	有		
新潟薬科大学	薬樹会(薬学部)	不明		
	絆栄会(応用生命科学部)	有	絆栄会	2006
山梨英和大学	なし			
清泉女学院大学	愛泉会	有	清泉だより	
松本歯科大学	松本歯科大学校友会	有		
新潟食料農業大学	なし			
<東海・北陸地区>				
高岡法科大学	高岡法科大学同窓会	無		
金沢学院大学	翠会	有	翠会会報	
北陸大学	北陸大学同窓会	有	ほくりく	

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
朝日大学	朝日大学歯学部同窓会	有	同窓会報、同窓会新聞	1978
岐阜聖徳学園大学	朝日大学経営学部同窓会	有		
静岡英和学院大学	岐阜聖徳学園大学同窓会	有		
	静岡英和学院大学および静岡英和学院大学短期大学部同窓会	有	楓	
聖隷クリストファー大学	聖隷クリストファー大学同窓会	有	会報	
光産業創成大学院大学	なし			
愛知学院大学	文学部・心身科学部同窓会	有		
	商経会(商学部・経営学部・経済学部)	有		
	法学部同窓会	有	愛知学院大学法学部同窓会会報	1962
	総政会(総合政策学部、情報社会政策学部)	不明		
	薬学部同窓会	有		
	歯学部同窓会	不明		
愛知産業大学	愛知産業大学校友会	有	愛知産業大学校友会会報誌	
愛知文教大学	愛知文教大学同窓会	不明		
金城学院大学	金城学院みどり野会	有	みどり野	
	国文・日文同窓会	不明		
	英語英米文化学科同窓会	不明		
	言文外コミ同窓会	不明		
	野のはな	不明		
	現代文化学部同窓会	不明		
	芸表・芸術・音楽同窓会	不明		
	しらゆり音楽療法士会	不明		
	心理学科同窓会	不明		
	薬学部同窓会	不明		
星城大学	星城大学同窓会	有	星城大学同窓会会報	2006
東海学園大学	東海学園大学同窓会	有	東海学園大学同窓会	
名古屋音楽大学	名古屋音楽大学同窓会	不明		
名古屋経済大学	名古屋経済大学同窓会	有		
名古屋女子大学	春光会	有	春光	
日本赤十字豊田看護大学	日本赤十字豊田同窓会	無		
名城大学	名城大学校友会	有	会報	
桐朋学園大学院大学	桐朋学園音楽部門同窓会	有	同窓会だより	
金沢工業大学	こぶし会	有	会報こぶし	
北陸学院大学	北陸学院大学同窓会	有	栄光台の薫風	
岐阜医療科学大学	岐阜医療科学大学同窓会	有	群青の風	1990
中京学院大学	中京学院大学同窓会	有	安達学園同窓会会報誌	
静岡産業大学	静岡産業大学同窓会	不明		
	静岡産業大学情報学部同窓会	有	SSU&I	
常葉大学	常葉大学同窓会	無		
愛知学泉大学	愛知学泉大学豊田同窓会	有	愛知学泉大学豊田同窓会会報	
愛知淑徳大学	桜楓会	有		
愛知みずほ大学	愛知みずほ大学同窓会	無		
至学館大学	至学館大学同窓会	有	至学館大学同窓会ニュース	1978
大同大学	大同大学同窓会	有	同窓会報	
同朋大学	同朋大学同窓会	有	朋流	
名古屋外国語大学	外国語学部同窓会	有	外国語学部同窓会報	2009
	国際経営学部・現代国際学部同窓会	有	NACION	2006
名古屋芸術大学	音楽学部同窓会	有		
	一般社団法人名古屋芸術大学 美術・デザイン同窓会	有	NUA PRESS	1990
	人間発達学部同窓会	不明		
	短期大学部同窓会	無		
名古屋造形大学	名古屋造形同窓会	有	造形	
日本福祉大学	日本福祉大学同窓会	有	日本福祉大学同窓会会報	
皇學館大学	館友会	有	館友	
四日市大学	四日市大学同窓会	有	同窓会報	1993
富山国際大学	蒼昊会	不明		
金沢星稜大学	金沢星稜大学同窓会	有	Kizuna	1989
仁愛大学	世灯会	有		
岐阜経済大学	伊吹横会	有	校友会報	
中部学院大学	中部学院大学・中部学院大学短期大学部同窓会	有	中部学院同窓会報	
静岡福祉大学	福華会	有	福華会会報	2011
愛知大学	愛知大学同窓会	有	愛知大学同窓会会報	1962
愛知工科大学	愛知工科大学校友会	有		
桜花学園大学	桜花学園大学保育学部同窓会	有		
	桜花学園大学人文学部・豊田短期大学同窓会	有		
修文大学	桃苑会	有		
中京大学	中京大学同窓会	有	中京大学同窓会通信	
豊田工業大学	豊田工業大学同窓会	有		
名古屋学院大学	名古屋学院大学同窓会	有	会報	1990
名古屋産業大学	名古屋産業大学同窓会	不明		
名古屋文理大学	福友会	有	ぶんり	2007
人間環境大学	人間環境大学人間環境学部同窓会	有		
鈴鹿医療科学大学	鈴鹿医療科学大学同窓会	有	鈴鹿医療科学大学同窓会会報	
四日市看護医療大学	四日市看護医療大学同窓会	有	四日市看護医療大学同窓会会報	2013
金沢医科大学	北辰同窓会	有	金沢医科大学北辰会会報	
	看護同窓会	有		
金城大学	金城大学同窓会	有	金城大学同窓会	2007
福井工業大学	福井工業大学同窓会	有		
岐阜女子大学	なし	有		
東海学院大学	静岡理工科大学同窓会	有		
静岡理科大学	静岡理科大学同窓会	有		
浜松学院大学	浜松学院大学同窓会	有		
愛知医科大学	愛橋会	有	愛橋会会報	
	愛知医科大学看護学部同窓会	有		

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
愛知工業大学	瑞若会	有	みずわか	
愛知東邦大学	邦友会	有		
岡崎女子大学	さかみちの会	不明		
椙山女子学園大学	いとぎく会	有	希望	2011
中部大学	中部大学同窓会	有		1970
豊橋創造大学	創造同窓会	有	liaison	2013
名古屋学芸大学	名古屋学芸大学同窓会	不明		
名古屋商科大学	名古屋商科大学同窓会	有	同窓通信	
南山大学	南山大学同窓会	有	なんざん	
	南山大学留学生同窓会	不明		
藤田保健衛生大学	藤田学園同窓会	有	あけぼの杉	
	藤医会	有	藤医会	
	藤衛会	無		
	藤田保健衛生大学短期大学同窓会	無		
	鈴鹿会	有	鈴鹿大学同窓会誌	
鈴鹿大学				
<近畿地区>				
聖泉大学	いづみ会	有	いづみ会会報	
大谷大学	大谷大学同窓会	有	無盡燈	
京都華頂大学	華頂同窓会	有	華だより	
京都産業大学	京都産業大学同窓会	有	むすび	
京都造形芸術大学	瓜生山同窓会	有	蒼天	
京都文教大学	なし			
同志社大学	同志社大学校友会	有	同志社タイムス	1897
平安女学院大学	平安女学院校友会	無		
藍野大学	藍野大学校友会	不明		
大阪大谷大学	成光会	有	成光会報	
	成和会	有	成和会報	1968
大阪親光大学	大阪親光大学同窓会	不明		
大阪工業大学	常翔学園校友会	有	校友タイムス	
大阪樟蔭女子大学	樟蔭同窓会	有	みどり	1918
大阪総合保育大学	なし			
大阪物療大学	大阪物療大学同窓会	無		
関西大学	関西大学校友会	有	関大	1955
関西福祉科学大学	関西福祉科学大学同窓会	有		
四天王寺大学	四天王寺大学同窓会	有	IBU NEWS	
太成学院大学	なし			
羽衣国際大学	美羽会	有	美羽	
桃山学院大学	桃山学院大学同窓会	有		1969
大手前大学	大手前大学同窓会	有	大手前大学同窓会会報	
関西学院大学	関西学院大学同窓会	有		
甲南女子大学	清友会	有	清友	1927
神戸芸術工科大学	KDU-Net	不明		
神戸情報大学院大学	同窓会(仮)	不明		
神戸常盤大学	神戸常盤大学同窓会	有		
園田学園女子大学	けやき会	有	けやき会誌	
兵庫大学	兵鸞会	有	同窓会報	
流通科学大学	有朋会	有	YUHO	1993
天理大学	ふるさと会	有	ふるさと会報	
長浜バイオ大学	同窓会(仮)			
京都医療科学大学	学友会	有	学友だより	
京都看護大学	なし			
京都情報大学院大学	同窓会(仮)			
京都橘大学	淳芳会	有		
京都薬科大学	京薬会	有	京薬会誌	1891
同志社女子大学	Vineの会	有	Smoketree	
	同志社同窓会	有	同志社同窓会報	1956
明治国際医療大学	たにはは会(鍼灸学部)	無		
	やわらぎ会(保健医療学部)	有	やわらぎ会報	
	なごみ会(看護学部)	不明		
追手門学院大学	追手門学院大学校友会	有	mon	
大阪音楽大学	幸楽会	有	幸楽会だより	2001
大阪経済大学	大樽会	有	灘江	
大阪国際大学	大阪国際大・短大部統合同窓会	有	大阪国際大・短大部統合同窓会	
大阪商業大学	大阪商業大学校友会	有	校友	
大阪体育大学	摂泉会	有		
大阪保健医療大学	福田学園校友会	無		
関西医科大学	関西医科大学同窓会	有	おとづれ	1930
近畿大学	近畿大学校友会	有	近畿大学校友会報	
摂南大学	摂南大学校友会	無		
帝塚山学院大学	紫苑会	有		
阪南大学	阪南大学同窓会	有	Matsubara	
森ノ宮医療大学	森ノ宮医療学園校友会	有	校友会会報	2004
関西看護医療大学	同窓会(仮)			
姫路大学	姫路大学校友会	不明		
神戸医療福祉大学	神戸医療福祉大学同窓会	有		
神戸国際大学	神戸国際大学同窓会	有		
神戸女子学院大学	めぐみ会	有	めぐみ	
神戸薬科大学	神戸薬科大学同窓会	有	同窓会会報	1990
宝塚大学	宝翔会	不明		
	宝塚大学東京新宿キャンパス同窓会	不明		
兵庫医科大学	緑樹会	有	緑樹会会報	
畿央大学	畿桜会	有		
奈良大学	奈良大学校友会	不明		
びわこ学院大学	紫西会	不明		
京都外国語大学	京都外国語大学校友会	有	ALUMNI NEWS	

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
京都光華女子大学	ふかみぐさ	有		
京都女子大学	藤綾会	有	藤陵会だより	
京都ノートルダム女子大学	京都ノートルダム女子大学同窓会	有	会報マリアン	
種智院大学	種智院大学同窓会	有	種智院大学同窓会報	1987
花園大学	花園大学同窓会	有	同窓会通信	
立命館大学	立命館大学校友会	有	りつめい	
大阪青山大学	青山會(大阪青山大学短期大学部)	有	青山會だより	
	大阪青山大学同窓会	不明		
大阪学院大学	大阪学院大学校友会	有	Leap	1991
大阪経済法科大学	大阪経済法科大学校友会	有	校友会報	1999
大阪産業大学	大阪産業大学校友会	有	凡友	
大阪女学院大学	大阪女学院同窓会	有	大阪女学院同窓会報、みぎわ	
大阪電気通信大学	友電会	有	ゆうでんかい	1965
大阪薬科大学	大阪薬科大学同窓会	有	大薬会報	1900
関西医療大学	関西医療学園校友会	有	かんゆう	1973
滋慶医療科学大学院大学	滋安会	不明		
千里金蘭大学	芳友会	有	芳友会だより	
常磐学園大学	常磐会	有		
東大阪大学	翔友会	不明		
大和大学	大和大学同窓会	不明		
関西国際大学	以愛為縁同窓会	不明		
甲子園大学	紅葉会(栄養学部)	不明		
	宝友会(現代経営学部)	不明		
	紅文会(人間文化学部)	不明		
神戸海星女子学院大学	海星青谷会	有	Alumnae	
神戸女子大学	卒業生ネットワーク委員会(管理栄養士養成課程)	不明		
	青山会	有	青山会会報	
神戸山手大学	友松会	有	友松	
宝塚医療大学	同窓会(仮)	不明		
兵庫医療大学	同窓会(仮)	不明		
帝塚山大学	わかみどり会	有		
奈良学園大学	三室会	不明		
成安造形大学	京の会(短期大学同窓会)	有	学園報	
	かいつぶり	有	学園報	
びわこ成蹊スポーツ大学	蹊友会	有	KEIYU	
	びわこ成蹊スポーツ大学同窓会	有		
京都学園大学	京都学園大学同窓会	有	CHEER	1984
嵯峨芸術大学	嵯峨芸・嵯峨美 同窓会	不明		
京都精華大学	木野会	有	精華人	1993
京都美術工芸大学	同窓会(仮)	不明		
佛教大学	佛教大学同窓会	有	紫野	
龍谷大学	龍谷大学校友会	有	龍谷大学校友会報	1967
大阪医科大学	仁泉会(医学部医学科)	有	仁泉会ニュース	
	看護学部同窓会	無		
大阪河崎リハビリテーション大学	河泉会	有	河泉会広報誌	
大阪芸術大学	塚本学院校友会	有	wings39	
大阪歯科大学	大阪歯科大学同窓会	不明		
大阪成蹊大学	蹊友会	有	KEIYU	
大阪人間科学大学	大阪人間科学大学校友会	有	大阪人間科学大学校友会	
大阪行岡医療大学	なし			
関西外国語大学	関西外国語大学同窓会	有	Alumni	2012
四條畷学園大学	四條畷学園同窓会	有		
相愛大学	沙羅の木会(音楽部)	有	沙羅の木だより	
	人文学部同窓会	有	南風	2001
	人間発達学部同窓会	有	同窓会報	
梅花女子大学	梅花学園同窓会	有	この花	
声屋大学	アシヤカレッジ同窓会	無		
関西福祉大学	関西福祉大学校友会	有	校友会報	2002
甲南大学	甲南大学同窓会	有	甲窓	1959
神戸学院大学	神戸学院大学同窓会	有	SUIRYO	1976
神戸松蔭女子学院大学	千と勢会	有	大学同窓会報	1971
神戸親和女子大学	すずらん会	有	すずらん会会報	
姫路獨協大学	姫路獨協大学同窓会	有	姫路獨協大学同窓会会報	1997
武庫川女子大学	鳴松会	有	鳴松会報	
天理医療大学	天理医療大学同窓会	不明		
高野山大学	高野山大学同窓会	有		
<中国・四国地区>				
鳥取看護大学	なし			
川崎医科大学	川崎医科大学同窓会	有		
倉敷芸術科学大学	倉敷芸術科学大学同窓会	有	倉敷芸術科学大学同窓会報告	
中国学園大学	中国学園中国学園大学・中国短期大学同窓会	不明		
日本赤十字広島看護大学	日本赤十字広島看護大学同窓会	有		
広島国際大学	広島国際大学校友会	無		
広島都市学園大学	新風会(リハビリテーション学科)	不明		
	広島都市学園大学看護学科同窓会	不明		
福山平成大学	福山平成大学同窓会	不明		
東亜大学	東亜大学同窓会	不明		
高松大学	高松大学同窓会	有	春日会	
岡山学院大学	岡山学院大学・岡山短期大学同窓会	有	同窓会報	
川崎医療福祉大学	川崎医療福祉大学同窓会	有	川崎医療福祉大学同窓会会報	1995
くらしき作陽大学	鶴声会	有		
	翠会	無		
ノートルダム清心女子大学	ノートルダム清心女子大学同窓会	不明		
比治山大学	楷の樹会	有	楷の樹	

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
広島国際学院大学	広島国際学院大学同窓会	不明		
広島文化学園大学	学芸学部子ども学科同窓会	不明		
安田女子大学	安田学園唐花会	有	からはな	1985
徳山大学	徳山大学校友会	有	とくだい	
四国大学	四国大学同窓会	有	四国大学同窓会	
聖カタリナ大学	聖カタリナ大学・短期大学部同窓会	不明		
岡山商科大学	岡山商科大学同窓会	有	同窓会会報	
環太平洋大学	環太平洋大学校友会	有	Roope	2017
山陽学園大学	花水木会	有	花水木	1988
美作大学	美作大学同窓会	有	白梅	
	美作大学短期大学部同窓会	不明		
広島経済大学	広島経済大学同窓会	有	明德	1979
広島修道大学	広島修道大学同窓会	有	Almamater Gazzete	
広島文教女子大学	美樹会	有	すずらん	
宇部フロンティア大学	魁会	有		
梅光学院大学	梅光学院同窓会	有	梅光	1949
徳島文理大学	アカンサス会	無		
松山大学	温山会	有		
岡山理科大学	岡山理科大学同窓会	有		
吉備国際大学	吉備国際大学同窓会	有	吉備国際大学同窓会会報	
	吉備国際大学短期大学部・順正短期大学同窓会	無		
就実大学	就実大学同窓会	有	思い草	
エリザベト音楽大学	エリザベト音楽大学同窓会	有	Bel Suono	
広島工業大学	広島工業大学同窓会	有	広島工業大学同窓会誌	1967
	広土会(旧 土木工学科系)	有	広土会新聞	1994
	五三会(旧 建築学科系)	有	ITSUMIKAI	1974
	電友会(旧 電気・電子工学科系)	不明		
	広工大建築会(旧 建築学科系)	有		
	機友会(旧 機械工学科系)	有		2010
	経情会(旧 経営工学科・知的情報システム工学科系)	不明		
	ハワイ大学留学経験OB会	不明		
広島女学院大学	広島女学院同窓会	有	花あやめ	
	アイリス食の会	不明		
福山大学	福山大学同窓会	無		
至誠館大学	美萩会	無		
山口学芸大学	学友会	不明		
四国学院大学	四国学院同窓会	有	ロゴスだより	1999
松山東雲女子大学	松山東雲学園同窓会	有	雪びら	1913
<九州・沖縄地区>				
九州栄養福祉大学	東筑紫学園九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学同窓会	不明		
九州情報大学	麻生福岡短期大学・九州情報大学同窓会	有		
サイバー大学	なし			
西南女学院大学	西南女学院同窓会	有	しおん	
日本赤十字九州国際看護大	暹碧会	無		
福岡国際大学	福岡国際大学同窓会	不明		
保健医療経営大学	同窓会(仮)	不明		
長崎外国語大学	長崎外国語大学同窓会	不明		
九州看護福祉大学	九州看護福祉大学同窓会	有	Rink!	
尚綱大学	尚綱大学同窓会	有	花さくら	2006
	尚綱大学短期大学部同窓会	有	花さくら	1979
別府大学	別府大学・別府大学短期大学部同窓会	不明		
宮崎国際大学	宮崎国際大学同窓会	有		
志学館大学	銀杏会	有		
沖縄キリスト教学院大学	沖縄キリスト教学院同窓会	有		
九州共立大学	九州共立大学同窓会	不明		
九州女子大学	梅香会	有	しら梅	
産業医科大学	医学部同窓会	有	赤煉瓦	1984
	樺風会(産業保健学部)	有	樺風会だより	
	アリスの会	有		2003
聖マリア学院大学	聖マリア学院同窓会	有	聖マリア学院同窓会会報	
中村学園大学	中村学園大学同窓会	有	山河	
	中村学園大学短期大学部同窓会	有	同窓会たより	
福岡大学	有信会	有	有信	
福岡歯科大学	福岡歯科大学同窓会	有	背振・季節風	
西九州大学	ひのくま会	有	ひのくま	
長崎国際大学	長崎国際大学同窓会	有	長崎国際大学同窓会誌	2010
九州ルーテル学院大学	結会	有	結会会報	
崇城大学	崇城大学同窓会	有		
立命館アジア太平洋大学	立命館アジア太平洋大学校友会	無		
宮崎産業経営大学	なし			
第一工業大学	九州学院大学及び第一工業大学同窓会	不明		
沖縄国際大学	沖縄国際大学校友会	有	校友会報	
九州国際大学	橘会	有		
久留米大学	文学部同窓会	不明		
	法学部同窓会	有	久留米大学法学部同窓会会報	
	久留米大学商経同窓会(商学部・経済学部)	有	久留米大学商経同窓会会報、商経同窓会速報	
	久留米大学医学部同窓会	有		
	なし			
純真学園大学	一葉会	有	一葉会報	
第一薬科大学	美夜古会	有	同窓会報	
西日本工業大学	福岡女学院同窓会	有	ぶどう	
福岡女学院大学	活水同窓会	不明		
活水女子大学	純心同窓会	有		
長崎純心大学	純心同窓会	不明		
熊本学園大学	志文会	不明		
平成音楽大学	響和会	有	響和会	

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
九州保健福祉大学	九州保健福祉大学同窓会	有	九州保健福祉大学同窓会会報	2015
鹿児島国際大学	鹿児島国際大学同窓会	不明		
	大学同窓会奨学財団	不明		
	もくれん会(短大部同窓会)	不明		
沖縄大学	沖縄大学同窓会	有	沖縄大学同窓会報	
九州産業大学	楠風会	有	NANPU	
久留米工業大学	久留米工業大学同窓会	有	新風	
西南学院大学	西南学院大学同窓会	有		
筑紫学園大学	紫友会	有	紫友	
日本経済大学	日本経済大学同窓会	不明		
福岡工業大学	雄飛会	有	雄飛	
福岡女学院看護大学	福岡女学院同窓会	有	ぶどう	
長崎ウエスレヤン大学	同窓会(仮)	不明		
長崎総合科学大学	長崎総合科学大学同窓会	不明		
熊本保健科学大学	熊本保健科学大学同窓会連合	不明		
	医学検査学科同窓会	有	あんず	
	看護学科同窓会	不明		
	リハビリテーション学科同窓会	不明		
	助産別科同窓会	不明		
日本文理大学	文理学園校友会	有	文理学園校友会会報誌	
南九州大学	南九州大学同窓会	有	尾鈴山	
鹿児島純心女子大学	白百合会	有	しらゆり	
沖縄科学技術大学院大学	なし			

資料1-3 公立大学同窓会、同窓会誌一覧

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
<北海道・東北地区>				
釧路公立大学	釧路公立大学同窓会	有		
公立ほこだて未来大学	公立ほこだて未来大学同窓会	不明		
札幌市立大学	札幌市立大学同窓会	無		
名寄市立大学	名寄市立大学同窓会	不明		
札幌医科大学	医学部同窓会	有		1959
	保健医療学部同窓会	無		
青森県立保健大学	青森県立保健大学同窓会	有	同窓会会報	2014
	看護学科同窓会	有		
	栄養学科同窓会	不明		
青森公立大学	青森公立大学同窓会	有		
岩手県立大学	素心知困の会	無		
宮城大学	宮城大学同窓会	無		
秋田県立大学	秋田県立大学同窓会	不明		
国際教養大学	国際教養大学同窓会	無		
秋田公立美術大学	美短同窓会	有		
山形県立保健医療大学	山形県立保健医療大学同窓会	有		
山形県立米沢栄養大学	なし			
会津大学	会津大学同窓会	有	会津大学同窓会会報誌	2004
福島県立医科大学	福島県立医科大学医学部同窓会	有	光が丘	1960
関東・甲信越地区				
茨城県立医療大学	藝游會	有	藝游	
群馬県立県民健康科学大学	群馬県立県民健康科学大学同窓会	有		
群馬県立女子大学	群馬県立女子大学同窓会	有	旬花報	2002
高崎経済大学	高崎経済大学同窓会	有		
前橋工科大学	前橋工科大学同窓会	無		
千葉県立保健医療大学	桜友会(作業療法学専攻)	無		
埼玉県立大学	埼玉県立大学同窓会	無		
首都大学東京	首都大学東京同窓会	有	TMU	
産業技術大学院大学	なし			
神奈川県立保健福祉大学	神奈川県立保健福祉大学同窓会	無		
横浜市立大学	進交会	有	進交会報	
	俱進会(医学部医学科)	有	俱進会たより	
新潟県立看護大学	新潟県立看護大学同窓会	有		
新潟県立大学	かざし会	有	かざし	
長岡造形大学	長岡造形大学校友会	有	NID NEWS	
都留文科大学	都留文科大学同窓会	有	都留文科大学同窓会報	
山梨県立大学	富桜会(国際政策学部、人間福祉学部)	有	桜前線	
	白樹会(看護学部)	有	白樹だより	
長野県看護大学	鈴風会	有		
長野大学	長野大学同窓会	有	長野大学同窓会通信	
<東海・北陸・近畿地区>				
富山県立大学	富山県立大学同窓会	有	千瓢	2006
石川県立大学	石川県立大学同窓会	不明		
石川県立看護大学	さくら会	有	さくら	
金沢美術工芸大学	金沢美術工芸大学同窓会	有		
福井県立大学	福井県立大学同窓会	有		
敦賀市立看護大学	なし			
岐阜県立看護大学	岐阜県立看護大学同窓会	有	岐看の星	
岐阜県立看護大学大学院	岐阜県立看護大学大学院同窓会	不明		
岐阜薬科大学	岐阜薬科大学同窓会	有	九重	
情報科学芸術大学院大学	なし			
静岡県立大学	静薬校友会(薬学部)	有		
	創星会(食品栄養科学部)	有	創星会	
	国際関係学部・研究科同窓会	有	赤レンガ	2003
	経情会(経営情報学部)	無		
	看護学部	有		
静岡文化芸術大学	静岡文化芸術大学同窓会	有		
愛知県立大学	愛知県立大学全学同窓会	有	愛知県立大学全学同窓会会報	
愛知県立芸術大学	愛知県立芸術大学音楽学部同窓会	不明		
	愛知県立芸術大学美術学部同窓会	不明		
名古屋市立大学	名古屋市立大学交流会	有		
	瑞友会(医学部)	有		
	薬友会(薬学部)	有		
	瑞山会(経済学部)	有	瑞山会会報	1978
	瑞桜会(人文社会学部)	有		
	萱光会(芸術工学部)	有	萱光会	2005
	理学部同窓会	有	研究科同窓会通信誌	2010
三重県立看護大学	三重県立看護大学同窓会	有	かがやき	
滋賀県立大学	湖風会	有	湖風会報2500	2007
京都市立芸術大学	象の会(美術学部)	有	象	
	真声会(音楽部)	有	真声会	
京都府立大学	京都府立大学同窓会	有	Sa・Ku・Ra	
京都府立医科大学	青蓮会	有	青蓮会報	
	京都府立医科大学校友会	有	青蓮会報	
福知山公立大学	なし			
大阪府立大学	大阪府立大学校友会	無		

大学名	大学同窓会	会報の有無	大学同窓会誌名	創刊年
大阪市立大学	大阪市立大学同窓会	有	大阪市立大学同窓会報	2013
神戸市看護大学	神戸市看護大学同窓会	不明		
神戸市外国語大学	楠ヶ丘会	有	楠ヶ丘	1956
兵庫県立大学	兵庫県立大学学友会	有	学友会報	
	淡水会(兵庫県立神戸高等商業学校・兵庫県立姫路工業倶楽部(姫路工業大学)理学部同窓会)	有	淡水	
	ゆりのき会(姫路工業大学短期大学部)	有		
	けやき会	有	けやき会会報	
奈良県立医科大学	奈良県立医科大学同窓会	有	厳糧	1984
	医学部看護学科同窓会	不明		
奈良県立大学	奈良県立大学同窓会	有	ふなはし	2011
和歌山県立医科大学	和歌山県立医科大学医学部同窓会	有	医学部同窓会便り	2014
	同窓会(看護短期大学部・保健看護学部)	有		
	和歌山保健看護学会学術集会(保健看護学部)	不明		
<中国・四国地区>				
公立鳥取環境大学	鳥取環境大学同窓会	有	Re:TUES NEWS	
島根県立大学	海夕会(浜田キャンパス)	有	海夕会通信	2004
	つわぶき同窓会(出雲キャンパス)	有		
	松苑会(松江キャンパス)	有	松苑会会報	2008
岡山県立大学	岡山県立大学同窓会	有	吉備路	
新見公立大学	新見公立大学・短期大学同窓会	不明		
尾道市立大学	尾道市立大学同窓会	有	玉の浦	1952
県立広島大学	県立広島大学同窓会	有	会報	2006
広島市立大学	広島市立大学同窓会	有	同窓会だより	
福山市立大学	福山市立大学同窓会	不明		
	福山市立女子短期大学同窓会	有		
下関市立大学	下関市立大学同窓会	有		
山口県立大学	桜圃会	有	桜圃会会報	1946
山陽小野田市立山口東京理科大学	山口東京理科大学校友会	有		
	理窓会	有	理窓	
香川県立保健医療大学	香川県立保健医療大学同窓会	有	大樹	
愛媛県立医療技術大学	木蓮会	不明		
高知県立大学	しらすぎ会	有	しらすぎ	
高知工科大学	高知工科大学同窓会	不明		
<九州・沖縄地区>				
北九州市立大学	北九州市立大学同窓会	有	北友会会報	
九州歯科大学	九州歯科大学同窓会	有		
福岡県立大学	福岡県立大学同窓会	有	福岡県立大学同窓会会報	1995
福岡女子大学	筑紫海会	有	筑紫海会会報	
長崎県立大学	長崎県立大学同窓会	有	おおとり	
	県立長崎シーボルト大学同窓会	不明		
熊本県立大学	紫苑会	有	紫苑	
大分県立看護科学大学	四つ葉会	無		
宮崎公立大学	凌雲なな会	有	NaNaKai	
宮崎県立看護大学	宮崎県立看護大学同窓会	有		
沖縄県立芸術大学	沖縄芸術大学同窓会	有	綾風	
沖縄県立看護大学	沖縄県立看護大学同窓会	無		
名城大学	名城大学同窓会	不明		

資料2 雑誌編成分析の各コードの具体的な内容

第1部2章2.4では、『早稲田学報』で書かれている内容を「大学」、「卒業生」で分類された記事について、さらに読み取れる情報からコード化を行った。資料2では、本文に掲載できなかった各コードの具体的な内容についてまとめる。

1. 大学

(1) 案内

「案内」は大学による卒業生や一般向けの案内を指し、1997年1月号、2017年2月号で観察された。

【1997年1月号】

早稲田カードに関する案内が書かれている。

【2017年2月号】

大学への寄付に関する内容で早稲田 UC カード、クラウドファンディングに関する案内が記載されている。また、大学で開催予定のシンポジウムに関する記載もあった。

(2) 紹介

「紹介」は教授や学生など大学に所属する人々によってその人の活動が書かれた記事を指し、1918年2月号、1938年5月号、1997年1月号、2017年2月号で観察された。

【1918年2月号】

海外（佛國、瑞西）に留学している教授や講師から近況報告が行われ、また、「東亞俱樂部旅行記（三）」という記事で中国を訪れていた大学の関係者の中国の様子を綴る旅の記録が記載されている。

【1938年5月号】

ベルリンに在住する大学の関係者のベルリンの状況についての報告が記載されている。

【1997年1月号】

早稲田大学長江流域文化調査隊に関する記事や早稲田のまちづくりに関する記事がある。

【2017年2月号】

卒業生の寄付によって運営される奨学金を利用する大学生（2名）の学生生活の報告が記載されている。

(3) 行事

「行事」は大学で行われる式典などの定期的に行われるものを指し、この内容は1918年2月号、1938年5月号、1977年1月号、1997年1月号に掲載された。

【1918年2月号】

卒業式に関する内容（卒業式の様子）。

【1938年5月号】

学部ごとの行われた入学式の様子。

【1977年1月号】

創立記念式典の様子や大学暦。

【1997年1月号】

2月の大学の入学試験等の日程。

(4) 講義

「講義」は大学で行われる講義に関する内容を指し、1897年3月号、1918年2月号で観察された。

【1897年3月号】

講義を受講する学生数、講義に関する懸賞論文問題、科外講義について記載された。また、法学部で行われた試験問題も掲載され、試験問題は商法総則、帝国憲法についても問題で、作成した講師の氏名も付記されている。

【1918年2月号】

1918年2月号では授業再開の日時や科外講義に関して記載された。

(5) スポーツ

「スポーツ」は大学に所属する学生らのスポーツに関する内容を指し、1918年2月号、1997年1月号、2017年2月号で観察された。

【1918年2月号】

剣道部や柔道部の寒稽古や野球部の活動に関する内容。

【1997年1月号】

人間科学部スポーツ科学科特別選抜試験の合格者に関する内容。

【2017年2月号】

2016年9月から11月にかけてスポーツで輝かしい成果を収めた早稲田大学生（団体および個人）の成績について記載されている。

(6) イベント

「イベント」は行事を除いた大学が主催する活動を指し、1997年1月号、2017年2月号で観察された。

【1977年1月号】

ワセダ・ヒューマン・トークという卒業生に向けた校友会、学生部合同のイベントの様子が記載されている。

【2017年2月号】

大学で行われたホームカミングデーやチャリティーイベントである早稲田駅伝の様子に

ついて記載されている

(7) 講演会

「講演会」は早稲田大学に所属する教員の大学外で行う講演を指し、1918年2月号で観察された。

【1918年2月号】

2人の教員の栃木県および埼玉県の中学校で行われた講演会の様子が記載されている。ただし、講演内容全文は記載されていない。

(8) 人事

「人事」は教員の新任や異動に関する内容を指し、1918年2月号、1938年5月号、1977年1月号、1997年1月号で観察された。これらの記事には全て氏名が記載されており、また新しく就いた役職・学部も付記されている。

【1918年2月号】

新たに採用された教員についての記載。

【1938年5月号】

高等工学校校長や教授の嘱任・異動についての記載。

【1977年1月号】

学校長・付属機関長や体育各学部長についての記載。

【1997年1月号】

校友会役員改選。職員人事異動について。

(9) 動静

「動静」は大学に所属する個々人の現状に関する内容を指し、1918年2月号、1938年5月号、1957年1月号で観察された。

【1918年2月号】

大学教員の訃報や教員の住所変更についての記載。

【1938年5月号】

大学教員の訃報、戦争関連（出征）についての記載。

【1957年1月号】

大学教員の訃報。学術会議会員。

(10) 表彰

「表彰」は大学に所属する者の表彰受賞に関する内容を指し、1938年5月号、1977年1月号、1997年1月号、2017年2月号で観察された。

【1938年5月号】

政治経済学部表彰、小野梓賞受賞者。

【1977年1月号】

紫授褒賞。

【1997年1月号】

文化勲章受章者・文化功労者、大隈記念学術褒賞。

【2017年2月号】

石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞や秋の叙勲・褒賞の受賞者。

(11) 会合

「会合」は大学に所属する者が結成した組織・集団の集まりに関する内容を指し、1897年3月号、1918年2月号、1938年5月号で観察された。

【1897年3月号】

学生らが結成した研究のための団体（国際法学会など）について、会合の議題や会則、活動内容について記載されている。

【1918年2月号】

大学教員が参加する私立大学協議会、私立大学長協議会に加えて、学生らが結成した団体（早稲田文藝会）の活動報告が記載されている。

【1938年5月号】

教授会や教員懇談会が記載された。

(12) 会計

「会計」は大学の財務状況に関する内容を指し、1918年2月号で観察された。

【1918年2月号】

大学の収入および支出に関して詳細な報告。

(13) 図書館

「図書館」は大学の図書館に関する内容を指し、1918年2月号で観察された。

【1918年2月号】

図書館について大きく取り上げられており、分野別の本の入荷状況、11、12月の貸出数についての記載されている。

2. 卒業生

(1) 案内

「案内」は同窓会・卒業生による卒業生や一般向けの案内を指し、1938年5月号、1957年1月号、1997年1月号、2017年2月号で観察された。

【1938年5月号】

十五周年を迎えるある同窓会の周年記念会の日時や場所についての案内や、海外同窓会の会費納入方法に関するお願いが記載された。

【1957年1月号】

維持費納入に関するお願い。会員名簿の送付に関する案内が記載されている。

【1997年1月号】

地域同窓会の創立に際して、その総会の案内が記載されている。また、一部の住所不明者に対しての連絡のお願いに関して記載されている。

【2017年2月号】

いくつかの同窓会について会合開催の日時、場所や申込方法等の案内が記載されており、また2017年1月から3月にかけて開催が予定されている同窓会の一覧がまとめられている。

(2) 紹介

「紹介」は卒業生についての活動紹介が書かれた記事を指し、1977年1月号、2017年2月号で観察された。

【1977年1月号】

地域の同窓会についてその歴史的経緯や普段の活動内容についての記載がされている。

【2017年2月号】

卒業生への取材をもとにその卒業生の大学卒業後の仕事や活動について記載されている。2017年2月号では“旅”がテーマとした特集があり、旅に関する卒業生の紹介が多い。また、いくつかの同窓会を取り上げてその歴史的経緯や普段の活動内容などに関して記載されている。

(3) イベント

「イベント」は会合を除いた卒業生や同窓会から主催する活動を指し、1997年1月号、2017年2月号で観察された。

【1997年1月号】

ワセダ・ヒューマン・トークという卒業生に向けた校友会、学生部合同のイベントの様子が記載されている。

【2017年2月号】

早稲田大学校友会主催のイベントである稲門祭の様子が記載されている。

(4) 人事

「人事」は早稲田大学校友会の役員（評議員、商議員、幹事）の選出に関する記事を指し、1918年2月号、1977年1月号、1997年1月号で観察された。

【1918年2月号】

評議員の地域同窓会支部の選出結果（氏名）が記載されている。

【1977年1月号】

評議員と商議員の就任に関して記載がされている。

【1997年1月号】

校友会役員改選。

（5）表彰

「表彰」は卒業生の表彰受賞に関する内容を指し、1938年5月号、1977年1月号、1997年1月号、2017年2月号で観察された。

【1938年5月号】

卒業生竝小野梓賞受賞者。

【1977年1月号】

秋の叙勲。

【1997年1月号】

文化勲章受章者・文化功労者、野間文芸賞。

【2017年2月号】

秋の叙勲・褒賞の受賞者。

（6）動静

「動静」は卒業生の現状を伝える内容を指し、2017年2月号を除いた『早稲田学報』で観察された。

【1897年3月号】

卒業生の職業や活動（執筆、演説等）。

【1918年2月号】

卒業生の職業、住所変更、改姓名。

【1938年5月号】

消息、結婚、職業、住所移動、改姓名、訃報、そして戦争（出征）

【1957年1月号】

消息、日本学術会議会員、内閣閣僚。

【1977年1月号】

訃報。

【1997年1月号】

卒業生の芸術院会員選出。

（7）選挙

「選挙」は卒業生の当選に関する内容を指し、1977年1月号、2017年2月号で観察され

た。

【1977年1月号】

衆議院議員選挙で当選した卒業生の氏名が記載されている。

【2017年2月号】

市長・町長選で当選した卒業生の氏名が記載されている。

(8) 会合

「会合」は同窓会での卒業生の集まりに関する内容を指し、全ての同窓会誌で観察された。どの同窓会誌においても会合の活動記録が記載されている。この内容について第1部2章2.3.4で分析を行った。

(9) 寄付

「寄付」は卒業生が行う寄付に関する内容を指し、1918年2月号、1938年5月号、1957年1月号、1977年1月号で観察された。

【1918年2月号】

大学御大典記念事業資金の基金額、この事業の寄付者の氏名や寄付金額の訂正。

【1938年5月号】

商学部改築のための寄付および故矢口達氏遺族慰問金における寄付者や寄付金額。

【1957年1月号】

記念事業寄附に関する寄付者および寄付金額。

【1977年1月号】

寄付する先を定めることのできる指定寄付、教育振興協力金、そして早稲田大学債における寄付者や寄付金額について記載されている。

(10) 終身維持費

「終身維持費」は会費に関する内容を指し、1977年1月号で観察された。

【1977年1月号】

1977年1月号では、1977年1月号発行までに終身維持費を納入した卒業生の氏名、これまで終身維持費を納入した卒業生数について記載されている。

資料3 会合記録からアフィリエーション・ネットワークを抽出 (R言語)

```
#データファイルの読み込み
#会合記録情報(1.識別番号 2-4.年月日 5.同窓会名 6.氏名 7.ゲスト)
Mt_list<-
  read.csv("Mt_list.csv", header=FALSE)
#接続行列
connect_matrix<-
  read.csv("connect_matrix.csv", header=FALSE)
#同窓会同定表
Alumni_EX<-
  read.csv("Alumni_EX.csv", header=FALSE)
#人物の表現のばらつきリスト
person_HY<-
  read.csv("person_HY.csv", header=FALSE)

#異体字の漢字情報はプログラム文でなく手動で読み込む(excel, text ファイルから読み込むと異体字が?に変換される場合が多い)
# 異体字・統一体情報
#『漢字データベース』『異体字データベース』の「人名用漢字」「常用漢字表異体字」
http://kanji-database.sourceforge.net/variants/variants.html

#会合記録情報を変数ごとにまとめる
Mt_list <- as.matrix( Mt_list )
#1 識別番号
sikibetsu <- as.numeric(as.matrix(Mt_list[,1]))
#2-5 同窓会
dousoukai <- Mt_list [ ,2:5 ]
#6 氏名
simei <-as.matrix( Mt_list[ ,6 ] )
#7 ゲスト
guestZ <- as.matrix( Mt_list[ ,7 ] )

#接続行列の行列変換
connect_matrix <- as.matrix( connect_matrix )

#人物の表現ばらつきリストの行列変換
person_HY <- as.matrix( person_HY )

#同窓会同定表
Alumni_EX <- as.matrix( Alumni_EX )
#空欄は欠損値 (NA) として扱う
Alumni_EX[ Alumni_EX==" " ] <- NA

#同窓会の unique list
dlist <- unique.matrix(dousoukai)

#同窓会の表現のばらつきの同定(dlist)
#統一データ
Alumni_EX1 <- Alumni_EX[,1]
#表現のばらつきデータ
Alumni_EX2 <- Alumni_EX[,-1]
#統一データ数
Alumni_EXlength <- length(Alumni_EX1)
#修正必要数
Alumni_EX2length <- ncol(Alumni_EX2)
#表現のばらつきへの対処
for(i in 1:Alumni_EXlength){
  for(j in 1:Alumni_EX2length){
    if(is.na(Alumni_EX2[ i, j]) == 0){
#NA はデータ変換対象からは除外する
dlist<-
  gsub(Alumni_EX2[i,j],Alumni_EX1[i],dlist)
    }
  }
}
```

```

#同窓会の表現のばらつきの同定 (dousoukai)
dousoukai1 <- dousoukai
for(i in 1:Alumni_EXlength){
  for(j in 1:Alumni_EX2length){
    if(is.na(Alumni_EX2[i,j]) == 0){
#NA はデータ変換対象からは除外する
dousoukai1 <-
  gsub(Alumni_EX2[i,j],Alumni_EX1[i],dousoukai1)
    }
  }
}

#データの分類 (開催された会合回数による)
#同窓会の開催した会合が 1 回の場合
#同窓会の開催した会合が 2 回以上の場合
  同窓会ごとにデータをまとめる
dlistD <- as.matrix(dlist[,4])
dlistD1 <- unique.matrix(dlistD)
dlistD2 <- table(dlistD)
dlistD2 <- as.matrix(dlistD2)

fk <- NULL #識別番号の変数
fl <- NULL #リスト番号の変数
fn <- NULL #同窓会名リストの変数
dlistDL <- length(dlistD1)

for(i in 1:dlistDL){
  if(dlistD2[dlistD1[i],] >= 2){
    y<- which(dousoukai1 == dlistD1[i]
      ,arr.ind = TRUE)
    y1 <- c( y[,1] )
    y2 <- list( y[,1] )
    y3 <- dlistD1[i]
    fk <- c(fk,y1)
    fl <- c(fl,y2)
    fn <- c(fn,y3)
  }
}

#会合回数による同窓会の分類
flL<-length(fl)+1
for(i in 1:flL){
  if(i == 1){
    fky<-siki(betsu[-fk]
    assign(paste("Alumni",i,"m",sep="")
      ,connect_matrix[fky,])
    assign(paste("Alumni",i,"g",sep="")
      ,guestZ[fky])
    assign(paste("Alumni",i,"n",sep="")
      ,simei[fky])
  }else{
    fky<-as.matrix(fl[i-1][[1]])
    assign(paste("Alumni",i,"m",sep="")
      ,connect_matrix[fky,])
    assign(paste("Alumni",i,"g",sep="")
      ,guestZ[fky])
    assign(paste("Alumni",i,"n",sep="")
      ,simei[fky])
  }
}
#会合回数 1 回の同窓会データ:Alumni1
#会合回数 2 回以上の同窓会データ:Alumni2~
#会合回数 2 回以上の同窓会名リスト:fn

#人名の表現のばらつきの統一 (先生など)
for(I in 1:flL){
  xn <- get(paste("Alumni",I,"n",sep=""))
  xm <- get(paste("Alumni",I,"m",sep=""))
  xg <- get(paste("Alumni",I,"g",sep=""))
  r1nL<- length(Alumni1n)
  if(I == 1&&r1nL == 0){
    Alumni1N <- NULL
    Alumni1G <- NULL
  }
}

```

```

Alumni1C <- NULL
Alumni1M <- NULL
Alumni1IM <- 0
next
}
#各同窓会の氏名データ
test <- as.matrix(xn)
#氏名の出現パターン
test3 <- as.matrix(xm)
test4 <- test3%*%t(test3)
#ゲストデータの入力
guest <- as.matrix(xg)
#出現回数
test2 <- as.matrix(diag(test4))
#対象数を求める
lengthtest <- length(test)
#異体字と統一体の対応表
itaiji <- rbind( joyoiji, jinmeiiji )
itaiji <- as.matrix( itaiji )
itaijicol <- ncol( itaiji )
itaijicol2 <- itaijicol-1
for (i in 1:itaijicol2){
  i2 <- i+ 1
  for (j in i2:itaijicol){
if(itaiji[i,1]==itaiji[j,1]&&itaiji[i,2]==itaiji[j,2]){
  itaiji<-itaiji[-j,]
}
}
}
itaijiT<-joyoiji[,1]#統一文字一覧
itaijiI<-joyoiji[,-1]#異体字一覧
#異体字を統一体に変換 (itaiji)
IJIM <- NULL
IJIG <- NULL
for(i in 1:lengthtest){

```

```

L1 <- NULL
L2 <- NULL
#調べる氏名の文字数を調べる
t1 <- test[i]
mjs <- nchar(t1)
for(j in 1:mjs){
  myouso <- substr(t1, j , j)
  #t1 の要素の探索。
  l <- which( itaijiI == myouso)
#arr.ind=TRUE は行列の場合は必須
  lengthl <- length(l)
  if( lengthl > 0 ){
#どの部分が異体字なのか？(複数の場合を考慮)
    L1 <- c( l, L1)
    L2 <- c( j ,L2)
    IJIM <- c( test[ i ] , IJIM)
  }
}
#もし異体字である場合は統一文字に変換
LK <- length(L1)
if (LK > 0){
  for(k in 1:LK){
    n1 <- L1[k]
    n2 <- L2[k]
    substr(test[i] ,n2 ,n2) <- itaijiT[n1]
  }
  IJIG <- c(test[i] ,IJIG)
}
}
#表現のばらつきの統一 (先生など)
#統一データ
person_HY1 <- person_HY[,1]
#変換データ
person_HY2 <- person_HY[,-1]
person_HYlength <- length(person_HY1)
#統一データ変換のための必要数

```

```

person_HY2length <- ncol(person_HY2)
#表現のばらつきの統一
for(i in 1:person_HYlength){
  for(j in 1:person_HY2length){
    test<-gsub(person_HY2[i,j]
               ,person_HY1[i],test)
  }
}
#Alumni1 のみ別処理
if(I == 1){
  Alumni1N <- as.matrix(test)
  Alumni1G <- as.matrix(guest)
  Alumni1C <- as.matrix(test2)
  Alumni1M <- as.matrix(test3)
  Alumni1IM <- 0
  next
}
t2 <- lengthtest-1
#同姓同名を探す
samename <- NULL
for(i in 1:t2){
  i2 <- i + 1
  SI <- test[i]
  for (j in i2:lengthtest){
    SJ <- test[j]
    if(test[i] == test[j]&&test4[i,j] != 0){
      y <- test[i]
      samename <- c(y,samename)
    }}
}
#同じ氏名でマージ (このとき同じ氏名が共起
#した場合はマージしない)
E <- matrix(0,1,4)
J <- NULL
for (i in 1:t2){
  i2 <- i+1
  SI <- test[i]
  onaji <- which(SI==samename)
  onajiL <- length(onaji)
  for (j in i2:lengthtest){
    SJ <- test[j]
    #同じ氏名を探索し、もし発見されれば j 番目
    #の氏名をリストから削除する
    if (test[i] == test[j]&&onajiL == 0){
      test2[i,] <- test2[i,] + test2[j,]
      test3[i,] <- test3[i,] + test3[j,]
      guest[i] <- min(guest[i], guest[j])
      J <- c(-j ,J)
      #同じ会合かつ同じ氏名がある場合はマージ
      #しない
      }else if(onajiL != 0){
        ONIJ <- c(i ,test[i] ,j ,test[j])
        E <- rbind(ONIJ ,E)
      }
    }
  }
  test <- test[J,]
  test2 <- test2[J,]
  test3 <- test3[J,]
  guest <- guest[J,]
  #得られるデータ
  #IJIM:異体字があり統一体に変換される
  #文字一覧
  #IJIG:異体字があり統一体に変換された
  #文字一覧
  #J:マージされる氏名一覧 (識別番号)
  #E : 同姓同名
  #test:変換された氏名
  #test2 : マージされた会合参加数
  #test3:マージされた所属行列
  #guest:マージされたゲストデータ
  #ここのデータの型が
  #ベクトルやデータフレームになっている
}

```

```

#氏名のデータ test,出現回数 test2,回数パターン
test3,ゲストデータ guest (□行列ではない)
#氏名の出現パターン (調査期間全体)
test4 <- test3 %*% t(test3)
#人数を求める
lengthtest <- length(test)
lengthtest2 <- lengthtest-1
Ichiji <- matrix(0, 1, 14)
#一字違いの発見(n*n-1 通り調査する)
for (i in 1:lengthtest2){
  t1 <- test[i]
  i2 <- i+1
  for (j in i2:lengthtest){
    t2 <- test[j]
    y <- NULL
    miss <- NULL
#対応する文字が一致するかの判断
    if (nchar(t1) == nchar(t2)){
#もし文字数が一致すれば対応する文字を比較する (同じであれば score=1,異なれば score=0)
      for (x in 1:nchar(t1)){
        if (substr(t1,x,x) == substr(t2, x, x)){
          score <- 1
        }else{
          score <- 0
          miss <- x
        }
        y<-c(score ,y)
      }
    }else{
      y <- c(0)
    }
#一致する割合が一定値より大きければ表示
#するようにする(文字数5以下は60%5以上は80%)

```

```

#何番目の文字が異なるか表示する
if(length(y) < 5 && is.null(miss)!=TRUE){
  if (sum(y)/(length(y)) > 0.6){
    n <- sum(y)/(length(y)) #共起回数
    t <- test4[i,j]/(test2[i] + test2[j] - test4[i,j])
    s<- c(i, test[i], j, test[j]
      ,n,miss,substr(t1, miss, miss)
      ,substr(t2, miss, miss)
      ,test2[i], test2[j], test4[i,j],
      t, guest[i], guest[j])
    Ichiji <- rbind(Ichiji, s)
  }
}else if (sum(y)/(length(y)) >= 0.8 && is.null(miss)!=TRUE){
  n <- sum(y)/(length(y)) #共起回数
  t <- test4[i ,j]/(test2[i] + test2[j] - test4[i,j])
  s <- c(i, test[i],j,test[j]
    ,n,miss,substr(t1, miss, miss)
    ,substr(t2, miss, miss), test2[i]
    ,test2[j], test4[i, j], t, guest[i], guest[j])
  Ichiji <- rbind(Ichiji,s)
}
}
}
Ichiji<-Ichiji[c(-1),]
#一字違いの表の統一
#ゲストのデータによる別人リストの消去を行う
#Fは氏名1、氏名2、共起率、Fguestは氏名1
#がゲストかどうか、氏名2がゲストかどうか
lengthI <- length(Ichiji)
if(lengthI == 0){
  AlumniN1 <- as.matrix(test)
  AlumniG2 <- as.matrix(guest)
  AlumniC3 <- as.matrix(test2)
  AlumniM4 <- as.matrix(test3)
  AlumniIM5 <- 0

```

```

}else{
  if(lengthI == 14){
    Ichiji <- matrix(Ichiji,nrow=1, byrow=T)
  }
  F <- cbind(Ichiji[,2], Ichiji[,4], Ichiji[,11])
  Fguest <- cbind(Ichiji[,13],Ichiji[,14])
  #消去する行の特定
  Ft <- NULL
  FgN <- nrow(Fguest)
  for(i in 1:FgN){
    Fg1 <- Fguest[i,1]
    Fg2 <- Fguest[i,2]
    if(Fg1 != Fg2){
      Ft <- c(Ft,-i)
    }
  }
  FtL <- length(Ft)
  if(FtL != 0){
    F <- F[Ft,]
  }
  #一字違いの表を作成(Ichijimatome)
  F2 <- F
  FC <- nrow(F)
  FC2 <-FC-1
  Ichijimatome <- matrix(0,1,10)
  y <- NULL
  if(FC2 > 0){
    for (i in 1:FC){
      i2 <- i+ 1
      y <- i
      FI <- F[i,c(1,2)]
      FII <- sum(FI%in%Ichijimatome)
      FK <- F[i,3]
      if(FII==0&&FK==0&&i<FC){
        for(j in i2:FC){
          FI2 <- F[j,c(1,2)]

```

```

          FKK <- FI%in%FI2
          FKKsum <- sum(FKK)
          if(FKKsum != 0){
            y<-c(y ,j)
          }
        }
      }
      YT <- length(y)
      if(YT != 1){
        for (x in 1:YT){
          xy <- y[x]
          FI <- union(FI,F[xy,c(1,2)])
        }
      }
      FI <- matrix(FI, nrow=1)
      husoku <- 10-length(FI)
      husoku0 <- matrix(0,1,husoku)
      FIY <- cbind(FI,husoku0)
      Ichijimatome<-
        rbind(Ichijimatome,FIY)
    }
  }
  if(FII==0&&FK==0&&i==FC){
    FI <- matrix(FI,nrow=1)
    husoku <- 10-length(FI)
    husoku0 <- matrix(0,1,husoku)
    FIY <- cbind(FI,husoku0)
    Ichijimatome<-rbind(Ichijimatome,FIY)
  }
}else{
  FI<-F[1,c(1,2)]
  FK<-F[1,3]
  if(FK==0){
    FI <- matrix(FI,nrow=1)
    husoku0 <- matrix(0,1,8)
    FIY <- cbind(FI,husoku0)
    Ichijimatome<-rbind(Ichijimatome,FIY)
  }
}

```

```

}
LTN <- nrow(Ichijimatome)
if(LTN>=2){
  Ichijimatome <- Ichijimatome[c(-1),]
  if(is.matrix(Ichijimatome)==0){
    Ichijimatome<-
    matrix(Ichijimatome,nrow=1,byrow=T)
  }else{
    Ichijimatome<-NULL
  }
}
LT<-length(Ichijimatome)
#列合計が 0 の場合は消去する。
if(LT >= 1){
  Ichijimatome <- as.matrix(Ichijimatome)
  IchiC <- nrow(Ichijimatome)
  IchiN <- ncol(Ichijimatome)
  IchiSJ <- NULL
  for(i in 1:IchiN){
    IchiCk <- Ichijimatome[,i]
    IchiL <- length(which(IchiCk==0))
    if(IchiL == IchiC){
      IchiSJ <- c(-i,IchiSJ)
    }
  }
  Ichijimatome <- Ichijimatome[,IchiSJ]
  if(is.matrix(Ichijimatome)==0){
    Ichijimatome<-
    matrix(Ichijimatome,nrow=1,byrow=T)
  }
}
#Ichijisikibetu は文字列データとなっている可
#能性あり
Ichijisikibetu <- Ichijimatome
IchiC <- nrow(Ichijimatome)
IchiN <- ncol(Ichijimatome)
for(i in 1:IchiC){
  for(j in 1:IchiN){
    IcMN <- Ichijimatome[i,j]
    ICMS <- which(test==IcMN)
    ICLG <- length(ICMS)
    if(ICLG != 0){
      Ichijisikibetu[i,j] <- ICMS
    }
  }
}
#記載のばらつきの集合ではすべてが共起し
#ていないことを条件とする
#共起している集合はマージ解除（削除）
#記載のばらつきが 3 以上のものを対象に対処する
test4<-test3%%t(test3)
UET<-NULL
for(i in 1:IchiC){
  kySUM<-NULL
  IT<-as.numeric(Ichijisikibetu[i,])
  IT1<-IT[IT>0]
  ITL<-length(IT1)
  ITL1<-ITL-1
  if(ITL>=3){
    for(j in 1:ITL1){
      jx<-j+1
      for(x in jx:ITL){
        j1<-IT1[j]
        x1<-IT1[x]
        kyI<-test4[j1,x1]
        kySUM<-c(kyI,kySUM)
      }
    }
  }
  kySUM1<-sum(kySUM)
  if(kySUM1>=1){
    UET<-c(i,UET)
  }
}
}

```

```

UETL <- length(UET)
if(UETL>=1){
  Ichijimatome <- Ichijimatome[-UET,]
  Ichijisikibetu <- Ichijisikibetu[-UET,]
}
LIC <- length(Ichijisikibetu)
if(LIC==0){
  AlumniN1 <- as.matrix(test)
  AlumniG2 <- as.matrix(guest)
  AlumniC3 <- as.matrix(test2)
  AlumniM4 <- as.matrix(test3)
  AlumniIM5 <- 0
}else{
#出現パターンと出現回数のマージと不必要
#なデータの削除
#一字違いの不要なデータの削除
  kfmatrixS <- test3
  kfcountS <- test2
  IchiC <- nrow(Ichijisikibetu)
  IchiN <- ncol(Ichijisikibetu)
  Eraseid <- NULL
  for(i in 1:IchiC){
    mtr <- as.numeric(Ichijisikibetu[i,])
    m0 <- which(mtr==0)
    lengthm0 <- length(m0)
    if(lengthm0!=0){
      mtr <- mtr[-m0]
    }
    mtrmin <- mtr[1]
    mtrlength <- length(mtr)
    for(j in 2:mtrlength){
      j1 <- mtr[j]
      kfcountS[mtrmin]<-
        kfcountS[mtrmin]+kfcountS[j1]
      kfmatrixS[mtrmin,]<-
        kfmatrixS[mtrmin,]+kfmatrixS[j1,]

```

```

Eraseid <- c(-j1,Eraseid)
  }
}
#Eraseidにより削除すると、kfnameSなどはデ
#ータ型ではなくなる場合があるため、改めて、
#行列型などに変換する必要がある
  kfnameS <- test[Eraseid]
  AlumniN1 <- as.matrix(kfnameS)
  kfguestS <- guest[Eraseid]
  AlumniG2 <- as.matrix(kfguestS)
  kfcountS <- kfcountS[Eraseid]
  AlumniC3 <- as.matrix(kfcountS)
  kfmatrixS <- kfmatrixS[Eraseid,]
  AlumniM4 <- as.matrix(kfmatrixS)
  AlumniIM5 <- Ichijimatome
}}else{
  AlumniN1 <- as.matrix(test)
  AlumniG2 <- as.matrix(guest)
  AlumniC3 <- as.matrix(test2)
  AlumniM4 <- as.matrix(test3)
  AlumniIM5 <- 0
}}
assign(paste("Alumni",I,"N",sep=""),AlumniN1)
assign(paste("Alumni",I,"G",sep=""),AlumniG2)
assign(paste("Alumni",I,"C",sep=""),AlumniC3)
assign(paste("Alumni",I,"M",sep=""),AlumniM4)
assign(paste("Alumni",I,"IM",sep=""),AlumniIM
5)
}
#各同窓会ごとに抽出した情報をまとめる
#氏名のリスト（調査期間全体）1.同窓会名 2.氏名
simei6163 <- NULL
dousoukaiF <- dousoukai1[,4]
d2 <- which(dousoukaiF%in%fn)
dousoukaiF <- as.matrix(dousoukaiF[-d2])

```

```

dousoukaiF1 <- cbind(dousoukaiF,Alumni1N)
simei6163 <- rbind(simei6163,dousoukaiF1)
for(i in 2:fL){
  sdn <- get(paste("Alumni",i,"N",sep=""))
  sdnL <- length(sdn)
  sdf <- as.matrix(rep(fn[i-1],sdnL))
  sdC <- cbind(sdf,sdn)
  simei6163 <- rbind(simei6163,sdC)
}

#一字違い
IchiL <- NULL
for(i in 2:fL){
  ichi <- get(paste("Alumni",i,"IM",sep=""))
  ichil <- ncol(ichi)
  IchiL <- c(IchiL,ichil)
}

ichif <- max(IchiL)+1
ichiji6163 <- NULL
for(i in 2:fL){
  icn <- get(paste("Alumni",i,"IM",sep=""))
  icn <- as.matrix(icn)
  if(icn[1,1]!=0){
    icLr <- nrow(icn)
    icLc <- ncol(icn)+1
    icf <- as.matrix(rep(fn[i-1],icLr))
    icC <- cbind(icf,icn)
    if(icLc < ichif){
      ic0 <- matrix(0,icLr,ichif-icLc)
      icC <- cbind(icC,ic0)
      ichiji6163 <- rbind(ichiji6163,icC)
    }else{
      ichiji6163 <- rbind(ichiji6163,icC)
    }
  }
}

```

```

#同窓会ごとに統一した行列
ma <- get(paste("Alumni",2,"M",sep=""))
mal <- ncol(ma)
AlumniMR <- matrix(0,1,mal)
for(i in 1:fL){
  mb <- get(paste("Alumni",i,"M",sep=""))
  mb <- matrix(mb,ncol=mal)
  mbl <- length(mb)
  if(mbl != 0){
    mb <- matrix(mb,ncol=mal)
  }
  AlumniMR <- rbind(AlumniMR,mb)
}
AlumniMR <- AlumniMR[-1,]
#listij は氏名が複数存在しないように作成
simeiM <- as.matrix(simei6163)
s2 <- as.matrix(ichiji6163)
listij <- as.matrix(ichiji6163)
AlumniMR <- as.matrix(AlumniMR)
#一字氏名のあるなしで順番を入れ替える必要がある
ichi <- NULL
listC2 <- listij[,c(1,2)]
lengthlist <- nrow(listC2)
for(i in 1:lengthlist){
  ichidoco<-
    which(simeiM==listC2[i,1],arr.ind=TRUE)
  ichidoco2<-
    which(simeiM==listC2[i,2],arr.ind=TRUE)
  i1 <- length(ichidoco)
  i2 <- length(ichidoco2)
  if(i1!=0&& i2!=0){
    I1 <- ichidoco[,1]
    I2 <- ichidoco2[,1]
    ichidoco3 <- intersect(I1,I2)
    I3 <- length(ichidoco3)
  }
}

```

```

    if(I3!=0)
      ichi <- c(ichi,ichidoco3)
    }
  }
#整理
IchiNt <- simeiM[ichi,]
IchiMt <- AlumniMR[ichi,]
simeiMN <- simeiM[-ichi,]
AlumniMRN <- AlumniMR[-ichi,]
simei <- rbind(IchiNt, simeiMN)
AlumniMR <- rbind(IchiMt, AlumniMRN)
#データ整理
simeiN <- nrow(simei)
simeiN1 <- simeiN- 1
#同時刻のものはここで列を合わせておく
AlumniMM <- as.matrix(AlumniMR)
E <- matrix(0,1,4)
J <- NULL
test4 <- AlumniMM%*%t(AlumniMM)
#同姓同名リスト
#同時刻の出現リストをつくり同姓同名を見つける
simeiCL <- nrow(simei)
t2 <- simeiCL-1
samename <- NULL
for(i in 1:t2){
  i2 <- i+1
  SI <- simei[i,2]
  for (j in i2:simeiCL){
    SJ <- simei[j,2]
    if(SI==SJ&&test4[i,j]!=0){
      y <- SI
      samename <- c(y,samename)
      ONIJ <- c(i,simei[i,2],j,simei[j,2])
      E <- rbind(E,ONIJ)
    }
  }
}
E <- E[-1,]

```

```

#4 通りあり
#氏名一字違いあり・なし×氏名一字違いあり
・なし
for(i in 1:simeiN1){
  hantei <- which(samename == simei[i, 2])
  hantei1 <- length(hantei)
  if(hantei1 == 0){
    i2 <- i + 1
    l1 <- which(listij==simei[i,2], arr.ind=TRUE)
    l2 <- which(listij==simei[i,1], arr.ind=TRUE)
    #length()による数値化。欠損値ならば0になる
    length(l1)=0,しかし欠損値でも
    length(l1[1])=1 となるので注意。
    lengthl12 <- length(l1)*length(l2)
    if (is.na(l1[1])){
#is.na は欠損値の判別を行う関数
      l1r <- 0
    }else{
      l1r <- l1[1]
    }
    if(is.na(l2[1])){
      l2r <- 0
    }else{
      l2r <- l2[1]
    }
    for(j in i2:simeiN){
      hantei3<-which(samename==simei[j,2])
      hantei4<-length(hantei3)
      if(hantei4 == 0){
        l11<-
          which(listij==simei[j,2],arr.ind=TRUE)
        l12<-
          which(listij==simei[j,1],arr.ind=TRUE)
        #length()による数値化。欠損値ならば0になる
        length(l11)=0,しかし欠損値でも length(l11[1])=1
        となるので注意。

```

```

lengthl12<-length(l11)*length(l12)
if (is.na(l11[1])){
#is.na は欠損値をたずねる関数
  l1r <- 0
}else{
  l1r <- l11[1]
}
if(is.na(l12[1])){
  l2r <- 0
}else{
  l2r <- l12[1]
}
#場合分けを行う (違いありなし×違いありなしの4パターン)
#場合分けの基準は l1 と l2 について length をかけたものが 0 ではないこと。かつ l1r と l2r が同じ行を示していること
#また l11 と l12 について length をかけたものが 0 ではないこと。かつ l1r と l2r が同じ行を示していること
#場合分け 1 (一字違いあり×あり)
if(lengthl12>0 && l1r==l2r && lengthl12>0
  && l1r==l2r){
  s20 <- which(s2[l1r,] == 0)
  s21 <- which(s2[l11r,] == 0)
  if(length(s20) > 0){
    x2 <- min(s20) - 1
  }else{
    x2 <- length(s2[l1r,])
  }
  if(length(s21) > 0){
    y2 <- min(s21) - 1
  }else{
    y2 <- length(s2[l11r,])
  }
  for(x in 2:x2){

```

```

for(y in 2:y2){
  if(s2[l1r,x] == s2[l11r,y]){
    if(test4[i,j] == 0){
      AlumniMM[i,]<-
      AlumniMM[i,] + AlumniMM[j,]
      J <- c(-j ,J )
    }
  }
}
#場合分け 2 (一字違いあり×なし)
}else if (lengthl12>0 && l1r==l2r &&
  lengthl12==0){
  s20 <- which(s2[l1r,] == 0)
  if(length(s20) > 0){
    x2 <- min(s20) - 1
  }else{
    x2 <- length(s2[l1r,])
  }
  for(x in 2:x2){
    if(s2[l1r,x]==simei[j,2]){
      if(test4[i,j]==0){
        AlumniMM[i,]<-AlumniMM[i,]+AlumniMM[j,]
        J<-c(-j,J)
      }
    }
  }
#場合分け 4 (一字違いなし×なし)
}else if (lengthl12==0 &&
  lengthl12==0){
  if(simei[i,2]==simei[j,2]){
    if(test4[i,j]==0){
      AlumniMM[i,]<-AlumniMM[i,]+AlumniMM[j,]
      J<-c(-j,J)
    }
  }
#同じ会合に同じ氏名がある場合はマージしない
}
}
}
}
if(is.null(J)==1){
  simeiF <- simei
  AlumniF <- AlumniMM

```

```
}else{
  simeiF <- simei[J,]
  AlumniF <- AlumniMM[J,]
}
#結果の保存
write.table(simeiF, "semeiF.csv"
, quote=FALSE,col.names=FALSE
,append=TRUE)
write.table(AlumniF, "AlumniF.csv"
,quote=FALSE
,col.names=FALSE, append=TRUE)
write.table(E, "douseidoumei.csv"
, quote=FALSE
,col.names=FALSE, append=TRUE)
```